RECONSTRUCTION

改造

家族制度改廢問題

思想と研究

森戸辰男
小泉信三
賀川豊彦
昇曙夢
堀江歸一
大島正德
山川均

クロポトキン批判

批判と文藝

桑木嚴翼
片上伸
長與善郎
岩野泡鳴
武林夢想庵
正宗白鳥
有島武郎

參月號

改造三月號目次

クロポトキン思想批判

早稻田大學 學生募集

高等學院

文科
- 政治經濟學部
- 法學部
- 文學部
- 商學部

理科
- 理工學部

第一年（新制三年）

入學資格 中學四年修了者及同等以上ノ者

入學試驗 四月一日、二日、三日

願書受付 三月十日ヨリ同月廿日迄

◎高等學院は大學令に依り設けたる大學豫科なり

專門部

- 政治經濟科
- 法律科
- 商科
- 高等師範科

第一年

中學卒業及同等以上無試驗其他四月五日ヨリ試驗

願書受付 受驗者ハ三月廿日ヨリ試驗前日迄無試驗者ハ四月中

◎商科を新設し來四月より授業を開始す

高等豫科

- 政治經濟學科
- 法學科
- 文學科
- 商科
- 理工科

第一年（現制二年）

入學資格 中學卒業者及同程度以上

入學試驗 四月五日、六日、七日

願書受付 三月十五日ヨリ四月二日迄

◎高等豫科修了者は銓衡の上大學（新制）第一年へ入學せしむ

○詳細は郵券三錢相添入學希望學科明記の上照會せらるべし

室伏高信著（四六版 四百頁）十三版發賣（定價貳圓四拾錢 送料十錢）

社會主義批判

注文順に發送

社會主義の「怪物」は世界を襲ひつゝある。社會主義について正しき知識と判斷とをもつことは現代のあらゆる階級の人々にとつてヴァイタルのことである。本書は室伏高信氏が廣き知識と學者的研究と鋭き批判力とをもつて書き上げたる吾國唯一の社會主義研究と紹介と批評とである。

目次

（國家社會主義―修正社會主義―ギルト社會主義―サンヂカリズム―無政府主義―ボルシエヴヰキ社會主義―勞働組合主義）

吾國唯一の社會主義批評！

發行所 批評社

東京市京橋區元スキヤ町三ノ一
振替東京四五三四六番

西宮藤朝新著 菊半截 二百九十頁 布製頗美本 一定價金一圓廿錢 送料金八錢

動搖の巷を眺めて

世界は今や未曾有の不安と動搖の中にある。けれども眞理を求め思想に生きるものにとつては一路の赫々たる光明と、不拔の確信とがなければならない。思想家としては古又文明批評家としての著者の眼光が此の動搖の巷に向つて流がれた。思想問題に社會問題に文化問題に其の他改造問題にひそむ虚僞と、眞理とは、この一巻に依つて明快に解決を與へられた。

山田わか新著 菊半截 二百九十餘頁 布製頗美本 一定價金一圓廿錢 送料金八錢

愛と生活と

現代の社會問題、婦人問題の評論家――婦人評論家さへも――が稍もすれば破壊的、自暴的に陥らんとする傾向がある時、愛の上に生活を置かうとする著者の叫びは確かに論壇の一異彩である。讀者は本書に依つて眞に幸福なる世界を知り、自由なる樂園を知り、あらゆる社會の諸問題に大なる暗示を得らるゝのであろう。

發兌 東京市神田區裏神保町六番地 振替口座番號東京參參〇八壹番 三徳社書房



——（改造三月號）——

火の如き舌があるか

議會は低調にして殆んど國民と沒交渉である。議員は無智無能にして世界の思想から取り殘された輩のみである。議會を通しての政治は便利でもあるし、穩健でもあるから、議院政治を呪ひたくはないが、普選問題さへ解決の出來ぬ議員や內閣に對して、勞働問題の解決、四民平等の權利などを要求するのは、要求するもの、そのものが、迂遠で無智であると云ふに歸する。

彼の議會に於ける國務大臣の貧弱なる說明に見よ、熱情なき答辯に見よ、及第點を附せらるゝ加藤海相にしても、狡智、老猾の古狸の標本と見らるゝのみで、經綸もなく、抱負もなく、國民を思ふの熱情、熱血は何處へ逝へりや、原首相尤も然り。以下の閣僚は筆端に上すも筆の穢れである。

西伯利問題をいかにする。撤兵せんとならば、一日も早く撤兵せよ。陛下の赤子であつて、國の寶である精銳は一兵の死に至るまで理義を明かにせねばならぬ。一兵何ぞ干城たり、一兵の損失は全國民の損失である。全國民の惱みである。屍を曝す勇士には全幅の慰安と尊敬とを拂へよ。そして出征せる全兵士に出征せる理由を徹底せしめよ。全兵士の父兄に出征せしめし理由を尙よく徹底せしめよ。彼等は何の爲めに氷點下三十度の寒天に野曝しになつてゐるのか、嗚呼これ誰の罪であるか。

人道上の自覺極めて低調なる閣僚によつてその辯解が出來るか、如何にして議會の答辯を瞞過せんかと腐心せる閣僚にそを說明する、火の如き舌があるか。さうかとて、予輩はポベドノスチエフとなつて七百頭顱を呪ひ殺す迄の人惡ではない。軍國主義を標榜して生血を欲しがるビスマークにもなりたくない。

平たく云へば、モウすこし理窟の判つた、隣り交際の出來る人間同志で、よりよき國家にしたいのである。そしてその國家に肩のこらぬ生活を續けたいのである。それまでには隨分と肩のこる努力、血のにじむ努力が必要であらう。

思想と研究



メンガアの觀たるマルクス派社會主義

森戸辰男

はしがき

本稿はアントン・メンガア著『勞働全收權』の第九章マルクスの飜譯である。メンガア敎授は屢々資本家法律學に對する勞働者法律學の創唱者として、また法的社會主義の樹立者として知られて居る。彼の『勞働全收權』は僅か二百頁に足らぬ小著ではあるが社會主義理論の歷史の批判的敍述に於ては稀に見る好著である。フオクスエル敎授が之を評して、「從來嘗て之れだけに價値ある勞作が壓縮されて斯程に狹い限界内に收容されたことがあるかどうかが疑はしい」と言ふたのは決して溢美ではない。マルクス及マルクス學派に關する評論は僅か數頁を出でぬけれども、その背後に不撓の努力と細緻なる硏鑽との匿れたる廣き世界の横はつて居ることに留意しつつ之を讀むとき、讀者は之より得る所の少からざることを見出すであらう。序に注意して置きたいのはメンガアのマルクスに對する態度である　私は彼のマルクス評に多くの聞くべき所あるを認むると同時に、彼の態度にはマ

ルクスに對する個人的惡意をすら推測せしめる程に、無理解な、また苛酷な點の存することをも默するわけには行かぬ。メンガアは偉大なる社會主義の理論家である。併しマルクスは更に偉大なる社會主義の理論家である。無數の他の反對論と同じく、メンガアの批評も亦――たとへ私の認むる如く、その批評に多くの道理があるとしても――十九世紀の最大の社會科學者の價値を傷けることはないであらう。

（一）

ロードベルツスは主としてフランスの社會主義者、特にサンシモニスト及プードンの思想を祖述して居るが、マルクスは前期の英國社會主義者殊にヰリアム・タムスンの影響の下に立つて居る。マルクスが說述中に混へて居る多くの數學的公式――それは議論を釋明するよりはむしろ曖昧ならしめて居るものであるが――を除外して考ふれば、剩餘價値理論の全部、卽ち剩餘價値の概念、その名稱、その額に關する考察は、主としてタムスンの著書から獲來つたものである。(註一)唯、マルクスは彼の著書の目的に照應して、特に不勞所得の一形態（利潤）を眼中に置いて居るのみであり、且つまた剩餘價値論の必要なる補足、卽ち生產資料及用貨物に對する私有財產の法理的批判を缺いで居り、更に勞働全收權の根本的說明をも含んで居ないのである。凡て此等の傾向に於ては、タムスンは遙かにマルクスに優つて居り、從つてタムスンの著書は社會主義の基本著作と認め得るものである。

(註一) Marx Das Kapital 第一卷三版一八八三年一二五頁―一九三頁を William Thompson, Distribution of wealth 163頁以下（第二版125頁以下）と比較せよ。Engels は彼の Streitschrift gegen Dühring 1877―〇頁―一六二頁に於て及小冊子 Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft 1882 二七頁に於て、猶 Marx を以て剩餘價値の發見者として賞揚し、此の新紀元を劃する發見以來科學的社會主義が成立するに至つたとなして居るが、Kapital 第二卷の序文 1885 S. 14 に於ては、Marx はその剩餘價値に關し、既に前期の英國社會主義者中にその先驅者を持つて居たことを是認して居るやうである。私は Engels が擧げて居る本で剩餘價値論に就いては二三のぼんやりした暗示をしか含んで居ない小冊子 The Source and Remedy of National Difficulties London 1821 より Marx が此の問題に關する彼の見解を獲來つたものであると云ふことを疑はしく思ふ。餘剩價値の

値の發見者は Godwin, Hall 及特に William Thompson（前篇第三章―第五節）であつて Marx 自身は Rodbertus と同様、其他の點に就ては屢々引用の出所を明かにして居るが、彼等の見解の淵源に就いては口を緘して居る。倘 Böhm-Bawerk, Kapital- und Kapitalzins 第一卷 1884 三六一頁以下 Gustav Gross: Karl Marx 1885 五七頁以下、七九頁以下 Zukunft 1878 一九二頁に於ける Schramm の論文及 Diehl の Proudhon に關する著作の各所、殊に第二部（1890）二六九頁以下參照。

（二）

之に反し剩餘價値の廢除を目的とする實際的方策に關しては、マルクス及その友エンゲルスは獨特の見地に立つて居る。猶一八四八年の革命以前の時代に屬する『共產黨宣言』に於て、此等兩人は、殆んど例外なしに、前期の社會主義的文献より採り來つた所の一聯の考案を提唱して居る。（註二）此等の方策の數々、特に土地所有の剝奪、相續權の廢止信用機關交通機關を、續いては工業の一部を、國家の手に集中することは、少とも大體に於て、不勞所得を廢除すると言ふ目的を追求するものである。其後マルクス及エンゲルスは此等の考案の或者を繰返して居るのである。例へばマルクスが、富者の掌中に生產資料が集中してその最高度に達すると、此度は富者が民衆の革命的蜂起によつてその財產を剝奪されると豫言して居るのは其れである。（註三）エンゲルスも亦、經濟的豫備條件の充たされた後、勞働者階級が國權を奪取し、生產資料が國有財產に變はることを必然であると說明することによつて、同様の見解を云ひ表はして居る（註四）それであるから兩著作家は、最も重要なる點に關しては、猶一八四八年に於けると同様の見地に立つて居るのである。唯其の間に土地所有の剝奪が變つて、一切の生產資料の沒收となつただけである。

（註二）Das Kommunistische Manifest 第三版 1883 17頁（1818 の原本の二〇頁）參照。此處には以下の如く記してある。「進歩した國々に對しては以下の方策がかなり一般に適用することが能きる。（一）土地所有權を剝奪し地代を國費に充用すること。（二）強度の累進稅。（三）相續權の廢止。（四）凡ての移住者及反逆者の財產の沒收。（五）國家資本と排他的獨占權とを有する國立銀行を設立することにより、信用を國家の手に集中すること。（六）交通機關を國家の手に集中すること。（七）國立工場及生產器具を增加し、共

共同的計畫に基き土地を耕作及改良すること。(八)萬人に平等なる勞働義務を課し、產業隊を特に農業に於て設立すること。(九)農業及工業の經營を合併し、都鄙の區別の漸次に消滅せしむること。(十)凡ての兒童の公的無償教育、現今の形態に於ける兒童の工場勞働の廢止、物的生產と教育との結合其他、

(註三) Marx, das Kapital 第二版七九〇。

(註四) Engels, Die Entwicklung des Sozialismus 四二頁。

(三)

主要點に於て以上と同樣の見解が、上記兩社會主義者の黨派に屬せしめ得べき著作家及團體によつて主張されて居るそれであるから、一八六八年に於けるブリユセルの勞働者國際會議は決議して、原始生產の最も重要なる部門、即ち農業と鑛業とは共產主義的に經營されなければならぬ、即ち鑛山と耕地とは之を國有財產とし、勞働者組合によつて經營することにしなければならぬ(共同所有と共同使用)と言ふて居る。併し他方に於て、同會議は決議して——此の決議は後段に於てわかるやうに、先の決議としつくりと合致して居ない——勞働にはその全き權利とその全き報酬とが與へられなければならず、從つて資本の名に於て要求さるゝ一切の減除は、地代、利子、利潤の形態に於ても、或は其他如何なる他の態樣に於ても、批難すべきものであるとなして居る。(註五)

一八六九年に於けるバーゼルの國際會議に於て、再び此の問題が討論された。而して此の會議も亦、社會は土地の私有を廢止し、之を共同團體に歸屬せしめる權利を持つて居ることを宣言し、更に今日に於て斯樣に土地を共同團體に歸屬せしめることが必要事であると宣言して居る。(註六)之に反し共同の財產は亦共同的に使用さるべきであるか、或はまた社會は共有の地所を個々の私人及勞働者組合に一時的個別使用のために割當てるべきであるか、の問題に就いては、意見の合致を見ることが能きなかつた。(註七)此の問題は次期の會議迄延期されたが、ハーグの會議(一八七二年)で

は、人も知る如く、國際派に分裂が起つたので遂に決定を見なかつたのである。

(註五) Troisième Congrès de l'Association Internationale des Travailleurs. Compte rendu officiel, Bruxelles 1868 四〇頁四五・頁此の會議の決議は其他の點に就いては、Proudhon と Marx との追奉者の間の不和の結果かなり不明で且矛盾多きものである。

(註六) 此等二つの決議は Compte rendu du Ne congrès internationale, tenu à Basel, en september 1869 (Brüssel 1869) 八九頁九〇頁に從へば、次の如くである。Iº Le congrès déclare que la société à le droit d'abolir la propriété individuelle du sol et de faire entrer le sol à la communauté; IIº Il déclaré encore qu'il y à aujourd'hui nécessité de faire entrer le sol à la propriété collective, 此等の決議に對し Adolf Wagner, Die Abschaffung des privaten Grundeigentum 1870 がある。

（四）

國際會議の決議はまた各國の勞働者會議に對して權威となり模範となつた。一八六九年八月七日乃至九日（從つてバーゼルに於ける國際派の會合以前）にアイゼナハに開かれた『一般ドイツ社會民主勞働會議』は、「勞働者の資本家への經濟的隷屬は、凡ての形態に於ける隷屬の基礎をなす、それであるから、社會民主黨は今日の生産様式（賃銀制度）を廢除した上、組合的勞働により各勞働者に全勞働收益を確保することを努める」と言ふことを聲明するに留めて居る。(註八)夫れ故所謂アイゼナハ綱領は、ブリユセルの會議が現に一年前に開かれたにも拘らず、單に勞働全收權及一般に組合的勞働に贊成することを聲明したのみで、此の目的を到達する手段には、詳しく立ち入つて居ない。一八七〇年六月四日乃至七日のスットガルトに開かれた所の『社會民主勞働黨』の會議は始めて、ブリユッセル及バーゼルに於ける國際派の決議に唱和して、「近代社會の經濟的發展は、農地を共有財産に變じ、國家は此の土地を農業組合——此の組合は土地を科學的方法で使用し、勞働收益を、契約的に定めた取りきめに從つて組合員の間に分配すべき義務を負ふのである——に賃貸することを社會的必要事となした。……農地が私的經營から組合經營に至る經過階段として、同會議は、先づ國有地、帝室有地、世襲財産、寺領、町村有地、鑛山、鐵道等より始むべきことを要求し、且それ故同會議は凡て

上に掲げたる國有地及町村有地を私有地に變ずることには、凡て反對する旨を宣言した。」(註九)

社會黨の此の宣言によつてその實現せんとする社會狀態が明瞭的確に知悉されるとは何人も殆んど主張し得ないであらう。社會主義の根本問題、卽ち將來の法律秩序の基礎をなすものは勞働全收權であるか、將又生存權であるかの問題でさへも、此の決議によつては答解されて居ないやうである。やつと所謂ゴータ綱領——これは一八七五年五月二十三日乃至二十六日に開かれた會議に於て決議されたもので、エルフルト會議（一八九一年）迄は、ドイツに於ける社會運動の基礎をなして居たものである——に至つて、始めて比較的多くの科學的正確を以て作成せられたのである、此の綱領の主要なる內容を要約すれば、此の綱領に於ては生存權卽ち慾望を標準とする分配が將來の社會秩序の基礎であるとされて居るのである。

ゴータ綱領が根本命題として掲げて居る見解はこうである、勞働はあらゆる富あらゆる文化の源泉である、一般に有用な勞働は單に社會によつてのみ可能であるが故に、勞働生産物の全部は、社會に屬する。換言すれば一般勞働義務が强制されるのであるから、社會の各成員は各人の合理的慾望に準じて生産物を分與さるべき平等の權利を有するのである。であるから勞働生産物は、勞働全收權の必然の歸結のやうに勞働者に屬せずして、却つて社會に屬し、社會によつて、各個人の合理的慾望の標準に從つて、彼等に割當てられるのである。

社會問題の解決の端緒を開くために『ドイツ社會主義勞働黨』は、ゴータ綱領に於て、勞働者階級の民主的統制の下に、國費補給を伴ふ社會主義的生産組合の設立を要求した。而して工業及農業に於て此の種の生産組合を設立し、此等の組合から全勞働の社會主義的組織が生ずる程度の範圍に迄、之を擴張すべきである。夫れ故純然たる共産主義的社會秩序に到る經過方策として、ルイ・ブラン及フェルヂナンド・ラサーレの提唱した考案が推奬されたのである。(註十)

一八九〇年十月十二日乃至十八日にハレで開かれた所の社會黨鎭壓令の廢止後の最初の『ドイツ社會民主黨』の大會に於ては、上記の決議並に綱領全部の改正の必要があらゆる方面から承認されたけれども、必要なる變更の實行は次回の同黨大會迄延期せられた。（註十一）

純然たるマルクス流の理論に立脚して居るドイツ社會民主黨の現行綱領は、翌年エルフルト大會（一八九一年十月十四日乃至二十日）に於て議定されたものである。エルフルト綱領は將來の社會秩序に於ける勞働收益の分配に關する凡ての豫示は、架空なる空想であるとして一切之を避けたが、併し同時に長々しき政治的要求を掲げることによつて、廣汎なる政治的空想を提唱して居る。而して此の政治的空想たるや、ドイツ國現在の勢力關係から考へて見れば、之が實行は社會主義的社會秩序に比べてたいして容易くない所のものである。

エルフルト綱領は、社會主義の領域に於ては、今日の資本家社會の發展傾向、即ち少數の手に富の集中すること、現今の經濟秩序から中小經營が消滅し、從つてその所有者が勞働者化すること、終りに大多數の民衆が益々貧困になること、を指摘するに留まつて居る。此等の思想は特に前期のフランス社會主義の造り上げた所のもので、（註十二）之れからマルクスの著書に遷り行いた所のものである。（註十三）併しエルフルト綱領の發表以來、著名なる社會主義者は、中小經營は決して現代の國民經濟より消失するの傾向を持たず、のみならず農業の領域に於ては、却つてその數が增加し其の基礎が鞏固になりつつあることを統計的に證明して居る。（註十四）

併したとへ現代經濟生活の此の眞僞不明の發展傾向が假りに誤りなきものであると承認しても、それは單に社會運動を結局の破滅に運命付けるだけのことである。何故なれば、貧困にして蹂躪された民衆は決して、社會主義的社會秩序を招來するに缺ぐべからざる歷史的偉業を完成することは能きぬから。之と反對に、勞働者階級の教養と生活狀態とが

向上すればするだけ、それによつて彼等の勢力と感化とが增加すればするだけ、愈々確實に彼等の利益に叶ふやうな社會主義的法律秩序を强行することが能きるのである。

（註七） Compte rendu 七二頁。

（註八） Protokoll über die Verhandelung des Allgemeinen deutschen sozialdemokratischen Arbeiterkongresses in Eisenach am 7. 8. und 9. August 1869 Leipzig 1869. 二九 乃至三二頁……Ökonomische Abhängigkeit des Arbeiters von dem Kapitalisten die Grunglage der Knechtschaft in jeder Form bildet, und deshalb die sozialdemokratische Partei unter Abschaffung der jetztigen Produktionsweise (Lohnsystem), durch genossenschaftliche Arbeit den vollen Arbeiterertrag für jeden Arbeiter erstrebt.

（註九） Protokoll über die ersten Kongress der sozialdemokratischen Arbeiterpartei in Stuttgart vom 4. bis 6 Juni 1870 Leipzig 16–18 頁。

（註十） Gothaer Programm 及之に關聯する問題に就いては、Liebknecht, Die Grund- und Bodenfrage 第二版一八七六年一八三頁一八四頁 Bebel, unsere Ziele 第九版一八八六年二三頁、二九頁、三〇頁 Bebel, Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und in der Zukunft, 一八八三年、一四八頁、一四九頁。Schäffle, Die Quintessenz des Sozialismus 第七版一八七九年二頁以下四四頁以下。Hermann Bahr, die Einsichtslosigkeit des Herrn Schäffle 一八八六年、七八頁以下等參照。

（註十一） das Protokoll über die Verhandelung des Parteitags der sozialdemokratischen Partei Deutschlands 一八九〇年、一五七頁以下。

（註十二） Charles Andler, le Manifeste communiste 第二卷（一九〇一年）一〇三頁; Paul Louis, Histoire du socialisme Français（一九〇一年）一二八頁以下、一三三頁以下一五五頁。E. Fournière, Les théories socialistes au XIX siècle（一九〇四年）、二五八頁二五九頁二七四頁二七七頁等參照。

（註十三） 特に Marx, das Kapital 第三版（一八八三年）六六二頁以下を見よ

（註十四） Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie（一八九九年）五五乃至六六頁、David, Sozialismus und Landwirtschaft 第一卷（一九〇三年）四九頁、六三頁以下參照。

（闕）

フランスの勞働者運動は、ドイツの勞働者運動がゴータ綱領に於て提唱した主張を直ちに繼承した。マルセイユに於ける第三回フランス勞働者會議（一八七九年）は、土地、機械、交通機關、建物及蓄積資本を、人類の利益のために收用することを要求し、且勞働資料及生產力の此の收用は、あらゆる手段を以て追求されなければならぬことを宣言して居る。（註十五）

其後フランスの社會黨は、一部分は人的の理由から、一部分は物的の理由から、屢々分裂したけれども、彼等は終始マルセイユ會議の集產主義的綱領を固持して居る。

（註十五） Rapports et Résolutions des Congrès Ouvriers de 1876 à 1883, Paris 1883 PP. 7, 8, Le Congrès......conclut à l'expropriation collective des sol, sous-sol, machines, voies de transport, bâtiments, capitaux accumulés, au bénéfince de la collectivité humaine; Le congrès déclare que l'appropriation collective de tous les instruments de travail et forces de production doit être poursuivi par les moyens possibles. 參照。 Léon Blum は彼の著 Les Congrès ouvriers et socialistes français（一九〇一年）五二頁に於て上記と非常に違つた形で、Marseille 會議の決議を揭げて居る。Marseille の會議迄は、勞働者會議は私有財產に關しては、保守的見地に立つて居た。Lyon の會議（一八七八年）に於てすらも既に、勞働全收權の承認及生產資料の集合財產を聲明する決議を大多數を以て否決した。Mermeix, La France socialiste（一八八六年）八〇乃至八六頁及英國の勞働者運動に就いては後段第十二章註二十六以下參照。

（六）

以上の說述を綜合するに、近代社會主義に共通なる見解は略ぼ以下の如くである。現今の社會黨は、啻に不勞所得（賃料剩餘價値）のみならず、生產資料及用費物の私有財產制度をも論擊し、而して彼等は極めて一般に、勞働全收權をば此の語の消極的意味に於て、即ちそれによつて地代及利潤の正理が否定せらるる限りに於て、承認して居るのである。此等の見解の歸結する所は、近代社會主義は生產資料及用費物の私有財產を共有財產に變へることを要望すると云ふこ

とになるのである。

之に反し、現今の社會黨は將來の社會秩序の基礎をなすものが、勞働全收權であるか、或は生存權であるかと言ふ社會主義の根本原理に就いては、何等的確なる一致した確信に到達して居らぬ。同樣に將來何者が共有財産の主體となるべきであるかの問題に就いても、意見の一致がないのである。社會主義的國家に於ては、勞働者の組合が、生産資料及用費物の所有權を持ち、之を共同に使用すべきであるか（組合社會主義）或は此の職能は市町村、國家又は全人類に歸するのであるか（都市社會主義、國家社會主義、及世界社會主義）更にまた、此等各種の見地の組み合せ——例へば國家又は市町村が生産資料の所有權を持ち、之を個別使用個別經營のために、各個人又は組合に貸與すると言ふやうな方法——によるべきであるか。凡て此等の問題に關しては、最近の社會主義の著述及社會主義大會の決議は、單に不分明なる屢々相矛盾する答解を與ふるのみである。（註十六）

（註十六） Menger; Neue Staatslehre（一九〇三年）第二版、第三頁以下參照。

（七）

斯樣に明確を缺いで居るのは、たしかに一部分は此の問題の困難なことに原因して居る。何故なれば、此の問題は主として法學上の問題に關するものであるのに、法學的見地より社會主義の思想を討究することは、未だ嘗て試みられなかつた所であるから。併し近代社會主義の此の如き態度に、もつと大きな影響を及ぼしたものは、疑もなく、マルクス及エンゲルスの見解である。彼等の見解に從へば、科學的社會主義（サン・シモン、（註十七）フーリエ及オーエンの空想的社會主義に對して）の本質は、その歷史的關係に於て現在の經濟狀態を、及び之より生ずる原則的方策を、批判的に說述することに存し、之に反し、追求さるべき社會秩序の立ち入つた說述は、凡て空想として排斥せらるべきものである。

エンゲルスは云ふ、科學的社會主義の使命は、も早社會の能きるだけ完全なる理想的制度を完成することではなく、勞働者階級と資本家階級と及び兩者の抗爭とを必然的に生み出した所の歷史的經濟過程を攻究し、之によつて作出された經濟狀態の中に、鬪爭解決の手段を發見することである。……從來（マルクス以前）の社會主義は現存の資本主義的生產樣式とその結果とを批判はしたけれども、その由來その性質を鮮明することが能きず、從つて之を處分することも能きなかつた。マルクスが始めて、剩餘價値の『發見』によつて凡て之を爲し遂げたのである。（註十八）

（註十七） Engels が Saint-Simon を (Saint-Simon と Saint-Simonisten とは嚴格に分たれねばならぬ) Utopist と呼んで居るのは全然間違つて居る。die Streitschrift gegen Dühring 二一九頁二二三頁, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft 一一頁以下 Saint-Simon の著書には Marx 及 Engeles に於けると丁度同じやうに社會の改良を目的とする數々の考察は見出されるが，將來の社會狀態の立ち入つた說述は彼に於て探し宛てることは能きぬ。やつと Saint-Simonismus が Exposition de la doctrine Saint-Simonienne（第六章參照）に於て將來の社會秩序の詳細なる形象を描いたのである。Owen を Utopisten と呼ぶのも失當である。

（註十八） Die Entwicklung des Sozialismus 二七頁，二八頁 Die Aufgabe des wissenschaftlichen Sozialismus ist nicht mehr, ein möglischste vollkommenes System der Gesellschaft zu verfertigen, sondern den geschichtlichen ökonomischen Verlauf zu untersuchen, dem das Proletariat und die Bourgeoisie und ihr Widerstreit mit Notwendigkeit entsprungen, und in der dadurch geschaffenen ökonomischen Lage die Mittel zur Lösung des Konflikt zu entdecken......Der bisherige Sozialismus (vor Marx) kritisierte zwar die bestehende kapitalistische Produktionsweise und ihre Folgen, konnte sie aber nicht erklären, als nicht mit ihr fertig werden. All dies habe erst Marx durch seine „Entdeckung" des Mehrwertes geleistet. Engels は此傾向に於ては，彼の著 Système des contradiction économique 第二卷三三〇頁以下に於て同樣に凡ての從來の共產主義體系を Utopie として批難した所の „Kleinbürger" Proudhon に倣ふて居る。

（八）

然るに自分は完全なる社會狀態の說述を以て全然科學的であると考ふるのみならず、若し社會主義運動がその目的を

一部分でも到達すべきであるとするならば、それは缺くべからざることであると思ふ。非科學的空想の存するのは、唯將來の社會制度を案出するに方つて、新社會秩序の實施後は現在の狀態に於けるとは非常に違つた動機によつて人間が動かされるであらうとか、違つた因果律が行はれるであらうとか云ふ見解から出發する場合のみである。所が此の二つの根本的條件は、前期の社會主義者は勿論、近代の社會主義も――エンゲルス（註十九）自身もその例に洩れない――屢々之を閑却し來つたのである。自分は唯カベーを想ひ起す。（註二十）彼は同胞感を以て人間行爲の唯一の動機であると共に、彼の社會制度の唯一の目的であると宣言した。たとへ彼は人間の性質に就いて今日迄積まれた經驗は、共產制國家に於ても亦、同胞感の絕對的支配を期待することを許さないと言ふことに氣が付いては居たけれども。（註二十一）私は又フーリエ及ピエール・ルルーを想ひ起す。（註二十二）彼等は經驗の與へた因果の關係を誤認し、彼等の考案實施の直接の結果として、經濟的生產物が四倍になり五倍になることを豫期した。色々な理想的社會制度（例へばフーリエ及カベーのそれが）實地に試驗された場合、此等の妄想的期望が實際に充たされないことは、云ふ迄もないことである。（註二十三）

（註十九）Engels は Streitschrift gegen Dühring 二三五頁に於て，社會主義的秩序の實行の結果多分生ずるであらう結果に就いて以下の如く云ふて居る。「社會的生產の方法によつて，社會の凡ての成員に對し單に物質的に十二分で日日に益々豐富になり行く所の生存のみならず，彼等心身の素質の完全に自由なる發達と活動とを與ふる生存を保證することの可能，この可能は今日初めて存在するやうになつたのであるが，とも角存在するのである。」“Die Möglichkeit, vermittels der gesellschaftlichen Produktion allen Gesellschaftsgliedern eine Existenz zu sichern, die nicht nur materiell vollkommen ausreichend ist, und von Tag zu Tag reicher wird, sondern die ihnen auch die vollständige freie Ausbildung and Betätigung ihrer körperlichen und geistigen Anlagen garantiert, diese Möglichkeit ist jetzt zum ersten Male da, aber sie ist da.” 人間の努力の最終の目的が既に今日に於て到達し得るものとなす所の此の保證は，Fourierの浩瀚の著書の到る處に散見する，珍しい美食上の享樂，性的享樂及精神的享樂の

期望よりも遙かに妄想的であると私は信ずる。

(註二十) 嘗て世人が Cabet の「Icarie 旅行記」は社會主義の統一的學理を含んで居ないと云ふて彼を批難したことがある，そこで Cabet は自分の編輯して居る月刊雜誌 Le Populaire(一八四四年十一月の四號三頁)に於て，美しい併し空想的な答をなして居る。「若し人あつて我々に我々の科學は何であるかと問へば，我々は答へて云ふ，同胞感——汝の原理は何と問はるれば，答へて云ふ，同胞感——汝の教義は何と問はるれば，答へて云ふ，同胞感——汝の理論は何と問はるれば，答へて云ふ，　同胞感——汝の體系は何と問はるれば，答へて云ふ，同胞感。 Si l'on nous demande quelle est notre science, nous nous répondons: La fraternité!—quel est votre principe? la fraternité!—quelle est votre doctrine? la Fraternité!—quelle est votre théorie? la Fraternité—quel est votre Système? la Fraternité!

(註二十一) Menges, Neue Staatslehre I 8.

(註二十二) Fourier は Nouveau Monde Industriel et Societaire 1829 序文二頁に於て彼の發明の結果として「突然に總生産物を四倍にし，且相對的生産物即ち享樂の合計を二十倍する方法」。Moyen de quadrupler subitement le produit effectif et de vingtupler le relatif, somme de jouissence. 1853 年に表はれ，New Jersey の議會に宛てた Pierre Leroux の著作の表題は，「一國の農業生産を少くとも五倍にする方法」un Moyen de quintupler, pour ne dire pas plus, la production agricole du pays と云ふのである。

(註二十三) 北米に於ける Fourierismus の實際的試みに就いては，Noyes, History of American Socialisms 二〇〇頁以下參照。

(九)

勿論マルクス及エンゲルスは、生産資料の集中と勞働の社會化とは漸次進んで、之によりて必然的に私有財産制度が破壞される程度に迄及ぶと考へて居る。併し乍ら國民が將來の狀態の明確にして妄想に流れざる形象を目前に見るのでなければ、社會的窮狀の最も大なるものを以てしても、社會秩序の變革を齎すには極めて不充分なものであることは、衰頽期に於けるローマ帝國を一瞥すればすぐにわかることである。アフリカ所領の半分が六人の財産であつた當時程に、生産資料の集中されたことは未だ嘗てなく、殆んど凡ての生産的勞働者が奴隸であつた當時程に、勞働者階級の痛苦の

大きかつたことは未だ曾てない。更に當時に於ては——特に敎父に於て——當時の社會狀態に對する猛烈なる批判もなくはなかつたのであつて、(註二十四) 其等の論議は現在の最良なる社會主義的著作に比肩し得べきものである。然るにも拘らず、西ローマ帝國の崩壞に繼いで起つたものは、社會主義ではなくて中世的法律秩序であつた。

(註二十四) Villegar delle, Histoire des Idées sociales 一八四六年五〇頁以下參照。

(一〇)

法學的見地から社會主義的國家學を根本的に建設することが、有產者階級にとつても、勞働者階級にとつても、如何に必要なものであるかは、非常に社會的性質を帶びて居る一八四八年のフランス革命の經過が之を示して居る。此の反亂に際して勢力關係が一般に勞働者階級に不利であり、それ故に一般に徹底的社會改良が實行され難かつたことを私はよく知つて居る。併し當時實行に着手された少數の方策は、マルクス及エンゲルスの意味に於て、經濟關係に內在する歷史的必然のために實行されたものではなく、それは現に久しい以前から、叢書及雜誌に於て考察され論評され來つた所のものであつた。自分は、唯、先に誌した勞働權の歷史的發展の說述を指摘するに止める。此の勞働權の承認は長い間の非常に『空想的』な討論によつて準備され來つた所のものである。

明かに社會主義的傾向を帶ぶる第二の方策は、假政府が一八四八年二月二十八日の命令によつて、勞働者のために政府委員を任命したことである。(註二十五)

パリの人民は一八四八年二月二十八日に『勞働及進步省』即ち勞働者の利益を擁護するために實際の執行權を持つ所の官廳の設置を要望した。(註二十六) 併しルイ・ブランは假政府に於ける彼の同僚の說得に從つて、勞働及進步省の代りに、純粹なる學究的性質を持ち、勞働者の利益を討論する一種のアカデミー然たる政府委員會を承認することにしたそ

れはとも角『進歩省』は勞働權と同様にフーリエ學派の古い考案であつたのである。（註二十七）

最後に一八四八年七月五日の憲法制定會議の命令は、三百萬フランの金額をば勞働者組合の補助のために、充當することを決定した。而してその方法は、二萬五千フラン以下の信用には三分の利子で、それ以上の額の信用には五分の利子で貸付けると言ふことであつた。三百萬フランはパリ及地方の勞働者團體によつて殆んど全部要求し盡され、而して多くの組合は、一八五二年十二月二日のクーデターの結果、その組合員に共和思想を懷く者があると言ふかどで、解散せられる迄は、非常な繁榮を示したのである。（註二十八）此の方策に於ても亦、ルイ・ブランが既に以前に『勞働の組織に關する彼の著書に於て、更に此の二月革命の間にリュクサンブールの委員會に於て、提唱した所の考案を（註二十九）容易に認識し得るであらう。

（註二十五）Carrey 第一卷四二頁五八號、此の委員の議事は Louis Blanc が彼の小冊子 La Révolution de Fevrier au Luxembourg, Paris, 一八四九年の中に掲げて居る。

（註二十六）Louis Blanc, Histoire de la Révolution de 1848, 第五版第一卷一八八〇年一三三頁以下。

（註二十七）Bases de politique positive, Manifeste de l'école sociétaire, fondée par Fourier 第三版一八四七年二〇七頁以下。

（註二十八）Enquête de la commission extraparlementaire des associations ouvrières 第一卷一八八三年一〇頁第二卷三二九頁以下。

（註二十九）Louis Blanc, Organisation du travail 第一版一八四一年七六頁以下、一〇七頁一一三頁一一四頁。Louis Blanc, La Révolution de Février au Luxembourg 849 一二〇頁以下 Louis Blanc の發行する月刊雜誌 le Nouveau Monde 1849 九月十五日一二九頁 (Le socialisme en projet de loi) Louis Blanc Organisation du travail 第九版 1850 年一一九頁以下及 Questions d'aujourd'hui et de demain 四卷 1892 一五 頁に於けるその第十版。此等に掲げた考案は其他の點に於ては完全一致しては居ない。

此等周知の歷史的事實にも拘らず、社會主義運動の指導者が、追求すべき社會狀態の詳密なる科學的敍述、換言すれば、社會主義的國家學の建設を忌避したのは、一體何が故であると尋ねて見ると、恐らく以下の二點から此の不思議な**現象の解明を與へることが能きるであらう。先づ第一に著明なる社會主義の學者が一般に**亦社會黨の有力なる領袖であつたと言ふ事實である。而して政治的及經濟的黨派の間に於ては、經驗の示す所によれば、現狀の否認によつての方が積極的目的の提唱によつてよりも、遙かに容易く一致を得られるものである。

第二に、社會主義の學者の重要なる團體が斯樣な態度を採るやうになつたのには、純理の學問と實際の學問との間の區別を誤認したことが與つて力あるやうである。純理科學に於ては、たとへ研究者が猶未だ自分の排斥した誤謬に代るべき眞實の見識を得て居ないで、單に誤謬を指摘するだけに止まつて居ても、非常に重大な意味を持つて居るのである。斯樣にしてコペルニクスは自分自身の宇宙論を提唱し又は樹立しなくとも、單にプトレミーの宇宙論を論破することによつて不朽の名譽を得たのである。

併し實際的の學問の領域に於いては、之とは丸で事情が違つて居る。現存施設の如何に眞實なる批判でも、より良好なる狀態の可能が充分に論證されない限りは、之を正當とすることは能きぬ。不勞所得（賃料剩餘價値）が勞働者階級に及ぼす壓迫が如何に大きくあれ、若し之に先つて、純然たる經驗的見地によつて導かれた社會主義的國家學が建設されて居なければ、民衆は決して思ひ切つた社會的實驗をなすことを決心しないであらう。十八世紀十九世紀の政治的改良運動も亦、若し諸國民が豫めモンテスキューやルソーの著書に於て、將來の政治狀態の綱要を讀んで居なかつたら、何等永續的効果を持つことはなかつたであらう。

人口論及び賃銀學説と社會運動

―マルサス、リカルド、ラツサル、マルクス―

小泉信三

（一）

賃銀は勞働者の生活必要費額に歸着すると云ふリカルドの賃銀學説は「冷刻なる賃銀鐵則」と云ふ名の下にフエルヂナンドラツサルの手に依て社會改造運動の論據にせられ、ラツサルは勞働者をして生產組合を組織することに依て此法則の作用を免れしめようと主張した。リカルドーラツサルの賃銀法則の根柢に存するものは人口は食物量が之を許す極限まで增殖すると云ふマルサスの人口原則である。然るにマルサスは始めヰリヤムゴツトヰンの無政府共產主義的空想を破碎して社會改造の到底不可能なること、現在の社會制度の必然已むことを得ざるものなる事を論證する爲めにその人口原則を唱へ出したのである。之れ丈けの事を考へて見ると人口原則は甚だ不思議な運命に遭遇してゐると云はなければならぬ。人口原則は始め社會改造の不可能を論證する爲めに唱へられたのに、半世紀の後にはそれが社會改造運動の論據に利用されてゐるのである。人間の不幸は制度の罪ではなくて、人口增殖と云ふ自然の大法の定めるところであると云ふのがマルサスの主張であつた。今マルサスの主張を正しいものとすれば――リカルド、ラツサルは之を正しいものとして賃銀法則を立てゝ居る――社會改造論家は絶望しなければならぬ筈である。この自然の大法の作用をどうして生產組合の組織位の事で廢することが出來るか。之れは此種の問題の專攻家でなくても、誰でも氣の付く疑問である。それ故社會運動を合理的に是認する爲めには先づ勞働者階級の貧困、その生活の不安の原因を自然の法則ではなくて現

在の社會制度その者に覓めなければならぬ。マルサス及びマルサスの原則を根據とするリカルド、ラッサルを一括して排斥しなければならぬのである。此仕事を引受けたのはカアルマルクスであつた。マルクスも始めは思想上リカルドの支配下に居たのであるが。その思想は漸く複雑を加へ、遂に勞働者の窮乏と不安との説明を資本の蓄積と集中とに求める**「産業的豫備軍」の説を立てるに至つた。而して獨逸社會民主黨はマルクスに歸依して千八百九十一年エルフルトの**大會でそれまで黨の綱領に文字を留めて居つた賃銀鐵則と永久に絶縁したのである。私はこの經過に甚だ興味を感じて居るので、約言すれば之れ丈けの事をもう少し詳しく書いて見ようと思ふのである。

(二)

社會主義經濟學も要するに彼等が市民經濟學、組合經濟學又は俗惡經濟學を以て呼ぶ正統派經濟學の學説を基礎として、それから出發し成長したものに外ならぬから、十九世紀經濟學の最大の理論家たるデヰツド、リカルドの學説が幾多の方面で社會主義者の利用するところとなつて居るのは少しも異しむに足りないのである。リカルドの價値學説が継承せられ、擴充せられてマルクスの勞働價値説及び餘剩價値論となつた事は誰れも知つてゐる。同じリカルドの地代論は後に至つてヘンリイ、ジヨオジの土地國有運動の論據となり、ヘンリイ、ジヨオジの運動は更に人をして國有を必要とするものは果して土地のみであらうか。地代が私人の收得を不可とする無勤勞働所得であるならば、利子利潤も亦同じではないかと云ふ疑を起こさせるに至つた。フエビヤン社會主義は斯くして生れた。彼れ等は價値論に於てはリカルドを排してジエヴンスに就くにも拘らず、地代に關するリカルドの學説から出發して遂に社會主義(社會的に造られた價値の社會有)の結論に到達したのである。而して更にリカルドの賃銀學説はフエルヂナンド、ラッサルを俟つて獨逸勞働者運動發端の理論となつたのである。然らばリカルドの賃銀學説とは如何なるものか。彼れが始め千八百十七年に公にした「經濟學説及租税原論」に據ればその大要は左の如きものである。

一般貨物に自然價格と市場價格とがある樣に勞働にも亦自然價格と市場價格とがあつて、前者は後者を支配し、市場價格は結局自然價格に服着しやうとする傾向がある。然らば勞働の自然價格とは何ぞと云ふに、勞働者をして永久に增減なく其種族を存續せしむるに足る價格の謂である。然るに勞働者をして能く己れと並に其家族とを養ひ、以て其種族を維持することを得せしめると否とは、彼れが賃銀として受けるところの貨幣の額に依て定められるものではなくて、其金額を以て購ひ得る食物、其他生活必需品及び快適品の分量に依て定められるものである。即ち勞働の自然價格は勞働者自身及び其家族の生活の爲め習慣上必要なる食糧、必需品の價格に依て左右せられ、是等の價格が騰貴すれば勞働の自然價格も昂り、彼が低落すれば此も亦下降する。一方勞働の市場價格とは一定の時勞働に對して現實に支拂はるゝ價格の謂で、其高下を支配するものは其時々の市場に於ける勞働の需要と供給とである。ところで勞働の供給量を決定するものは人口であるが、人口は食物の存在量に依て制限せられると同時に、食物の分量が之を許す限度まで增加しやうとする傾を有つてゐる。リカルドの見るところに從へば是れが勞働の市場價格をその自然價格に一致せしめる動力なのである。即ち勞働の市場價格がその自然價格に超過するときは勞働者の生活狀態は幸福安樂となるので勞働者の結婚產兒の增加を促し、從て勞働供給の增加となつて賃銀を自然價格まで下落せしめる。反之勞働の市價がその自然價格以下に在るときは勞働者の結婚產兒を減少せしめ、以て勞働の市價をして再び舊に復せしむるの作用をなすのである。即ち「人類の增加に及ぼす人口原則の作用の爲めに、最下級の賃銀は決して勞働者の生活の爲め、自然と慣習とが要求する率以上に留まる事が出來ないのである。」

勿論勞働に對する需要が、その供給よりも速かに增加すれば賃銀は久しきに亘つてその自然率以上に留まる事の出來る筈である事はリカルドも認めて居る。勞働に對する需要を決するものは資本額である。即ち資本の蓄積が、人口の增加が之に追隨することが出來ぬ程速かに行はれさへすれば、勞働の市場價格は久しくその自然價格以上に留まることが出來る筈である。併しリカルドは資本の蓄積は無限に繼續せられるものではなくて、資本の蓄積はそれ自身將來の蓄積

を阻止する原因となるものだと認めてゐた。何故と云ふに資本の蓄積の速度は勞働の生産力の大小に依て決せられ、勞働生産力の大小は肥沃な土地の豐富なると否とに依て定まるのであるが、先づ資本の蓄積が速かに行はれて、（從て勞働に對する需要がその供給を超過して）賃銀が騰貴すれば、當然人口は増加する。人口が増加すれば農產物に對する需**要が増加する。その結果として、比較的劣等地を耕作する必要が生ずる。そこで勞働の生產**力が減退すれば資本蓄積の勢を阻止せられざるを得ない。其處で勞働の供給が之に對する需要に追及してその市場價格は究極その自然價格に歸着せざるを得ない。畢竟勞働者の境遇は（人口法則の作用の停止せられざる限り）遂に改善の途がないと云ふに歸着する。リカルドの所謂勞働の自然價格は、上述の通り、習慣上必要なる家族維持費を意味するのであつて、決して時々人の誤解する樣に生理上絶對的に必要なる生活費を意味するものではないけれども、猶ほ且つその讀者に甚だ陰鬱の感を與へる所以は玆に存するのである。

賃銀は勞働者の生活必要費額に歸着する傾向があると云ふ事は決して前人未發の新說ではない。寧ろそれは勞働者が常に餘裕のない生活を營んで居ると云ふ極めて平凡な事實を觀察する多くの人の、甚だ容易に到達する結論であるだらう。リカルト以前に同主旨の說を唱へた人は決して少なくはないのである。その中で最も屢々人の引用するのは佛蘭西人で學者としても政治家としても聞えたチュルゴオであらう。チュルゴオは一七七〇年に公にした其名著「富の形成と分配とに關する省察」の中の一節でから云つて居る。

「腕と勤勉とのみを有する單なる勞働者はその苦役を他人に賣ることと成功しなければ何物をも受けることが出來ぬ。彼れは其れを（苦役を）或は高く或は廉く賣る。併乍ら此價格は彼一人に依て定まるものではなくて、勞働を買ふものと彼れとの合意の結果として定まるのである。前者は出來る丈け少なく拂ふであらう。彼れは多數の勞働者中から撰擇をなす事が出來るから、勞働者の中最も低廉に働らく者を取る。故に勞働者は相互競爭して其價格を引下げることを餘儀せらるゝのである。各種類の仕事に於て賃銀は必ず常に勞働者の生活必要費　限らるべき筈であつて事實に於ても亦

其通りである。」チュルゴオの書より少し遲れて現はれたアダムスミスの大著の中にも之と同主旨に解釋し得べき章句を發見することは決して困難でない。併しリカルド以前に最も著しくリカルドに近似した說を唱へたのは恐らく英人トレンス大佐であらう。彼れはリカルドの「經濟學及租稅原論」の出る直ぐ前に著はした「穀物貿易論」の中で斯う云つて居るのである。「正しく勞働を觀察する法は之を市場に於ける一商品として見るに在る。從て勞働は一切の他の物と同樣に其市場價格と自然價格とを有つて居る。勞働の市場價格は一定の時、一定の場所で需要と供給との關係で定められるが、その自然價格に至ては別の法則の決するところであつて、勞働者自身を養ひ、且つ市場に勞働の增減なき供給を維持する丈けの家族を養ふ爲めに其國の氣候と慣習とが之を必要とする生活必需品及び快適品の分量に等しきものである」

併し經濟學說史的穿鑿を此以上進める必要はない。私はたゞラッサルの手に依て社會運動上に利用せられたリカルドの賃銀法則なるものも決してリカルドに始まる新奇特發の思想的産物ではないと云ふ一事丈けを記せばいゝのである。其處で次にフエルデナンド、ラッサルの運動に移る。

（十二）

獨逸では一八四八年の騷擾が鎭定せられてから反動時代が來て、官僚政府の抑壓の下に勞働者運動は十數年の間屛息して居なければならなかつた。それが一八六〇年代に入つて漸く復活する。一八六三年三月フエルヂナンド、ラッサルがライプチヒの勞働者委員會の問に答へた公開答狀はこの「新時代」に於ける勞働運動の發端となつたのである。當時普魯西では政界を擧げて所謂憲政擁護の運動に熱中して居ツた。大體に於て中産階級的自由主義を奉ずる進歩黨が民權擁護の戰士（チャンピオン）として、議會の協贊權を無視して、その不同意なる兵制改革（兵役年限延長）を斷行しやうとしたビスマルクの官僚政府に敵對し、民間の輿論は大體に於て進歩黨の後援となつてゐたのである。然し勞働者中の急進分子は進歩

實に滿足してはゐなかつた。それも其筈でその英吉利流の自由主義個人主義の立脚地に立つ進歩黨の政治家は、所謂勞働者問題に對しては正しい理解を持てゐなかつた。彼等の大部分は「立憲政治」を以て一切の病弊の萬能薬と認むる單純素朴なる自由主義者であり、稍々進歩したものも要するにシユルツエ、デリツチの徒に過ぎなかツた。この後にラツサルの爲めにバスチヤーシユルツエ・フオン・デリツチ君と嘲られた篤志の政治家は信用組合、原料組合及び消費組合等所謂シユルツエデリツチ式産業組合の普及に社會問題の解決の途を見出さうとしたのであるが、勞働者中の急進的分子が斯る微温的な解決に不滿足を感じたのは固より當然である。そこで彼等は其時既に學者文人として相當の名聲を擔ひ、「勞働者綱領」なる小冊子に依てマルクス主義の立場から勞働者階級の歷史的使命を論じたフエルヂナンド、ラツサルの許に來て、その意見を求めたのである。「公開答狀」はこれに對する答へである。而して此「答狀」の中心理論は賃銀鐵則であつた。

(四)

勞働者委員のラツサルに對する問は抑も勞働者は政治上に於て進歩黨に對して如何なる態度を取るべきか、及びシユルツエ式産業組合なるものは勞働者取てどれ程の價値のあるものかと云ふ事であツた。前の問に對しては、ラツサルは勞働者は進歩黨から絶縁して、獨立の政黨を組織しなければならぬと云ひ、後の問に對してはシユルツエ式産業組合なるものは勞働者に取て價値のないものだと答へる。何故かと云ふに信用組合原料組合は獨立の手工業者に取て役に立つ可きもので、自ら獨立して營業せず、從て資金の貸入をも、原料の購入をも必要としない賃銀勞働者に取ては、此種の産業組合はあつてもなくても同じ事である。それでは消費組合は何うだと云ふに、成程消費組合の作用は勞働者階級の全體に及ぶ事は及ぶ。併しそれでも勞働者階級の境遇を改善する力はないのである。何故かと云へば(一)抑も勞働者が蒙る不利益は生産者として受ける不利益であつて、消費者として蒙るものではない。消費者としての人間は支拂能

力をさへ持ツて居れば勞働者であつてもなくても皆平等の取扱を受ける。問題は勞働者に支拂能力がないと云ふ事である。それでは何故それを持つて居ないかと云へばそれは（一）賃銀鐵則が存在するからである。今日の狀態の下に於ては「平均賃銀は一國に於て、勞働者の生存並に繁殖の爲めに習慣上必要なりとせらるゝ生活費に歸着する。」而して現實の賃銀は此點を中心として上下に動搖し、決して久しく此點以上に止まる事は出來ないのである。何となれば其場合には勞働者の生活が安樂となり、爲めに結婚產兒の增加を來たし、勞働の供給增加して結局再び最初の水準まで實際の賃銀を引下げなければ止まないからである。その反對に又賃銀は決して久しく此點以下に停まる事は出來ない。何故と云へば、其場合には國外移住、結婚產兒の抑制に依て勞働者の數、從て勞働の供給を減退せしめ、賃銀を再び舊の水準迄引上げる作用をなすからである。而して（ラッサルの謂ふところに從へば）眞實なる勞働者問題の研究は實に此法則の承認を以て第一步とする。此法則あるが爲めに文明の進步に基づく生產力增進の恩澤は悉く企業家にのみ歸して、勞働者は少しも之れに與かる事が出來ないのである。卽ち勞働の生產力增進するも、賃銀は依然として生活必要費を離れる事が出來ず、又生產力增進の結果として物價が低落し、爲めに消費者としての勞働者の境遇が安樂になることがあるとしても夫れは決して永續しない。生活の安樂はやがて勞働供給の增加を來たし、次で賃銀の引下を齎らすからである。

（二）以上の論を念頭に置いてさて消費組合に臨むと、消費組合が勞働者の境遇の上に如何なる効果を及ぼすべきかは明白であらう。消費組合が、一部勞働者の間にのみ行はれて、一般に普及せざる限りは、其部分の勞働者は確かに或程度迄生活困難を緩和することが出來る。併乍ら組合一度び普及して勞働者階級全體を包含するに至れば、消費組合の効果は消滅する。蓋し消費組合に依て生活費が低減せられた程度に應じて（生活の安樂、人口增加と云ふ過程を經て）それ丈け賃銀は低落しなければならぬからである。それでは如何にしてこの冷刻なる賃銀鐵則を破する事が出來るか。それには唯一つの途がある。勞働者自らを己れ自身の雇主にすること、卽ち生產組合を組織する事である。併し生產組合を組織する爲めには資金を要する。勞働者には勿論この費用を支辨する力はない、其處で何うしても國家の補助を仰がな

ければならぬ。それでは如何にして國家を動かしてこの途に出でしむ可きか、之に對する答へは普通選擧である。ラッサルは斯う云ふ經路を經て生産組合及び普通選擧の結論に到着した。而して此二つを標語として所謂全獨逸勞働者同盟の運動を起したのである。

（五）

さて吾々は此のラッサルの賃銀鐵則に對して何う云ふ批評を下す事が出來るか。第一、先きに述べたところに依て此説がラッサルの獨創でない事は分かつてゐる。併しラッサル自身が始めから此法則を自分の發見だと云つて主張してない。否な之を學者間の定説として、その定説たる權威を利用して勞働者の承服を求めやうとさへしてゐるのであるから、獨創がないと云つてラッサルを責めるのは徒勞である。それでは祖述獨創の點は措いて、此賃銀法則その者の價値は何うであらうか。第一に吾々が心着くのは此法則が一方的に形成せられてゐる事である。賃銀鐵則は勞働に對する需要を左右する原因を全然閑却して、賃銀決定の原因を勞働の供給にのみ求めやうとする。然るに勞働の供給を左右するものは人口の法則で、勞働者の生活に餘裕を生ずれば忽ち人口は増加し、生活が困難となれば人口は減少する。從て賃銀は生活必要費を中心點として上下に動搖し常に之に歸着しやうとする傾きを有つてゐると云ふのである。併乍ら此法則によると勞働者の賃銀が均一でなくて、熟練勞働者と無熟練勞働者の賃銀の間に著しい相違のある事實を説明することが出來ない。何となれば此場合に高い賃銀が生活必要費と一致してゐるものならば、無熟練勞働者は生活必要費以下の賃銀を得てゐる譯であるから、人口は漸く減少して低い賃銀が高い方の賃銀と一致する迄引上げられなければならぬ。又その反對に低い方の賃銀が生活必要費と一致してゐるものならば熟練勞働者は餘裕のある生活をしてゐる譯であるから、「鐵則」に從へばこの餘裕を消滅せしめる程度迄人口は増加しなければならない筈である。然るに事實は決してさうではない。又賃銀鐵則の根本思想を承認すれば社會の諸階級を通じて、人口増殖率は所得の大小に應じて高低しなけ

ればならぬ筈である。然るに實際を見れば出生率は富裕の階級に於て特に高いと云ふ事實がない許りでなくて、却て下層階級よりも低いと云ふ事實があるのである。是等の事實を賃銀鐵則は說明する事が出來ない。併しそれ丈けでは未だ鐵則の主張者を屈せしむるに足りないかも知れぬ。何故と云ふに、ラッサルの(リカルドも亦然り)所謂生活必要費は人間の生命維持に絕對的に必要な費用ではなくて習慣上必要なる生活費の謂である。從て高級勞働者が高率の賃銀を得て居ても、それは彼等の習慣上高き生活の必要を滿たして居るので所得の金額は多くても、實は彼等の生活には餘裕がないのだと辯解する事が出來ぬことはない。成程斯う解釋すれば賃銀鐵則は言葉の上では之を救ふ事が出來る。併しさうすれば此法則の悲觀的色彩は全く之が爲めに失はれ、從て社會改造運動の論據としては價値がなくなつて仕舞ふのである、何故と云へば、同じ論法で富豪の所得も亦習慣上定められた富豪としての生活必要費以上には何等の餘裕を剩さないのだとも云へるし、又反對に勞働者はその生活の標準を上げない限りは永續的に賃銀を高める事は出來ないが、其習性を改め生活程度を高めさへすれば何處迄も賃銀を高め得ると云ふに歸着するからである。斯うして考へて見るとラッサルの賃銀鐵則なるものは兩立し難い二つの目的を同時に追求して居るものゝ樣である。之を理論上辯護し得るものとする爲めには所謂生活必要費は伸縮自在な「習慣上必要なる」生活費でなければならないし、又現在の經濟組織の繪畫を陰鬱な色彩で描く爲めには之を絕對的生存必要費の意味に解釋しなければならないのである。この二つのものゝ何れかを取る事に依て此法則は或は其理論上の缺陷を暴露し或は又その人心煽動上の價値を失ふのである。

(六)

賃銀鐵則に對する批評は右の通りであるが、生産組合は果してラッサルの主張する樣に此賃銀法則の作用を停止する力を持つてゐるのだらうか。併し此問に答へるより先きに、私は賃銀鐵則の根柢に在る人口原則を唱へ出したマルサスが所謂社會問題に對して何う云ふ考へを持て居たかを述べて置き度い。マルサスの人口論は先きにも述べた通り人間の

理性に無限の信用を置いたヰリヤムゴトヰンの、無政府共產主義的空想を攻擊する爲めに唱へられたものである。ゴドヰンの考へるところに依れば今日の凡百の弊害は悉く人爲の惡制度の所產である。有ゆる人爲の强制と財產制度とを撤廢すれば圓滿と幸福とは地上に確立せらるゝであらうと云ふのである。是に對してマルサスは謂ふのにゴドヰン氏等の幸福な夢想は實に美しい。自分もその夢を信じる事が出來たら幸福だらうと思ふ、併し自分は正當な學理的根據から演繹されない臆測の論を好まない。ゴドヰン氏等の夢想が實現せられる事は自分の切望して已まないところであるが、併し自分は「大なる予の解するところを以てすれば人力を以ては如何ともすべからざる困難があつて其實現を妨げて居るのを見る。」その困難と云ふのが即ち人口は食物よりも速かに增加すると云ふ人口原則である。而して此原則の行はれる結果は何であるかと云へば、貧窮か罪惡の何れかである。即ち人は自然の命（性慾）に盲從して貧窮に陷るか、或は自然の命に逆らつて罪惡を犯すか何れかだと云ふのである。人類の前途は暗黑だと云はなければならない。マルサスに從へばゴドヰンの根本的誤謬は一切の罪惡貧窮の原因を人爲の制度に歸する事にある。一切害惡の根本原因は實は社會の制度に在るのではなくて人口增殖と云ふ自然の大法に存するのである。私有財產はゴドヰンが人爲の惡制度として非難するところであるが、併し此の如き制度も實に故なくして生れたものではない。既に食料の增加は人口の增殖に及ばないとすれば、自己保存の大法は人間の優婉高尙な感情を壓倒して人間の醜惡性は有ゆる方面で露出して來なければならぬ。而して更に甚しきに至ては劫掠と侵奪とは到處に行はれなければならぬ。其處で何等の方法を講じてこの侵奪を防ぐにあらざれば社會は混亂に陷ることを避ける事が出來ないだらう。この重要な目的を達せんが爲めには土地を分配し、最も有力な制裁を設けて各人の分を他人の侵奪に對して防ぐ必要がある。是れが私有財產制度の已む可からざる所以である。

マルサスの人口論を信ずれば人は社會の改造に絕望し手を拱して人類の前途を悲觀するの外爲すべき事は全くない。マルサスを繼承する經濟學に dismal science の名があるのは不思議でない。尤もマルサスは後に至つて幾分か其說を改め、所謂「道德的抑制」に依て、人間が罪惡にも貧窮にも陷らずに濟む一途のある事を認める事に依て其論調の悲觀的

色彩を稀薄にしたのは事實であるが、而かも猶ほ讀者が人口論を讀んで餘り愉快な印象を受けない事も亦事實である。又道德的抑制に依て人間の境遇の改善の一途を認めたと云つても、之れは下層階級の自制（無分別なる結婚を避くる事）をすゝめる事に歸着する。即ち畢竟貧窮を貧窮者自身の責任に歸するのであるから、之を社會改造運動の論據にする譯には行かないのである。社會問題に對する態度の消極的な事に於てはリカルドもマルサスと變はるところがない。リカルドも亦た賃銀鐵則の存する以上、勞働者の境遇改善の爲めにする有ゆる社會政策的干渉は無効に終るべきものと信じてゐた。「一切の他の契約と同樣に賃銀は市場に於ける公平自由なる競爭に委せらるべきもので、決して立法上の監督を受くべきものではない」のである。リカルドも亦ビユカナンと共に社會には立法の力を以てしては救ふ事の出來ない不幸がある。それ故實行す可からざる事を志す事に依て、當然なし得可き善事をも爲損じない樣によくその（立法の）限界を知る事が肝要だと諦めてゐた。リカルドも亦勞働者の境遇をよくする方便は勞働者の數の增加を制限し、無分別な結婚を少なくするより外にないと思つてゐたのである。

然るに不思議にもラッサルはマルサス等が社會改造不可能論の論據とした人口原則を却て社會運動の論據に利用してゐるのである。今日の社會では賃銀鐵則が行はれて、勞働者の境遇は生活費の最低必要額以上に上る事が出來ないから先づ此法則の作用を停止せしむる方法を講じなければならぬと彼れは謂ふのである。而して彼れは生產組合を組織して勞働者を已れ自身の雇主にすることを提議した。併し生產組合は果して勞働者を賃銀鐵則の作用から救濟することが出來るであらうか。私は無論それを信じない。人間を動物と見ての人口原則が正しいもので、此原則の爲めに社會に貧窮の跡を絕つ事が出來ないのであるならば、吾々はマルサス、リカルドと共に一切の社會改造的運動を斷念して勞働者の境遇を已む事を得ざるものと諦めるのが至當である。ラッサルの承認して居る樣に勞働者の生活に餘裕を生ずれば必ず其餘裕をなくなす程度迄人口が增加するものならば、勞働者が生產組合を組織したところで其境遇は高めらるべき筈がない。所得が增加すれば矢張り同じ樣に人口が增加するであらう。而して其の增加した人口は、成程勞働者としてでは

ないけれども。併し今度は企業家（生産組合員）として相互競争する。而してこの競争は勞働者の所得が生活必要費以**低下するに至つて始めて息む可き筈である。さうして見ると生産組合を組織しても、しなくても勞働者の所得は常に**「一國に於て勞働者の生存並に繁殖の爲め習慣上必要なりとせらるゝ生活費に歸着」すべき筈で、若し今日の世の中に賃銀鐵則が行はれるならば生産組合普及の曉には勞働收益の鐵則（ラッサルは生産組合を組織すれば勞働者は賃銀の代りに勞働收益を受ける樣になると云ふ）が行はれなければならない筈である。

要するにラッサルは全く賃銀鐵則と緣故のない手段に依て賃銀鐵則を廢止しやうとしてゐるやうに思はれる。私の見るところではマルサスの「人口原則を承認した以上はマルサス、リカルドと同じ樣に社會問題に對して消極的の態度を取るのが必然の歸結である。勞働者の窮厄をこの自然法則で說明する以上は、結婚産兒の制限以外に勞働者の境遇を改善すべき途はない。社會主義運動の論據は立たないのである。マルクスは此處に着眼して、ラッサルの主張に對し忌憚なき批評を加へてゐるのである。一八七五年ラッサルの遺黨とベエベル、リイプクネヒトの團體とがゴオタに會して社會主義勞働黨を組織した。ベエベル等はマルクス主義の信者であつたが姑らくラッサルの遺黨と妥協するの必要上ラッサルの主張を容れて、此時可決した所謂ゴオタ綱領の中には、社會主義勞働黨は賃銀勞働の制を廢して賃銀鐵則の作用を根絕し云々、又社會問題解決の第一步として勞働に從事する人民の民主的監督の下に國家の補助を以て生産組合を設立せん事を要求す云々と云つて居るのである。當時倫敦に居たマルクスはこのベエベル、リイプクネヒトの處置に甚だ不滿であつた。彼れは同年五月五日書を人に與へてゴオタ綱領を批評したが、其中で賃銀鐵則に就ては次の如く云つてゐる。

ラッサルの賃銀法則を採用すればその法則の論據をも承認しなくてはならぬ。「然るにこの論據は何かと云ふと、ラッサルの死後間もなく既にランゲが認めた通り（而してランゲ自らも唱道した）マルサスの人口原則に外ならぬ。併乍ら若し此原則が正しいものとすれば、如何に賃銀勞働を廢しても、（賃銀）法則は廢する事が出來ぬ。何となれば此法則は獨り賃銀勞働の制度許りでなく、凡べての社會制度を支配するものだからである。實に此理由に基づいて經濟學者等は

五十年來（或は更に久しく）社會主義の遂に自然に基づく窮困を廢止すること能はずして、たゞ之を普遍化し、同時に之を社會の全表面に分配し得るに過ぎざる事を論證して來たのではないか」と。

（七）

カアル・マルクスは賃銀鐵則の主張者であるかないかと云ふ事は屢々人の疑問としたところで、專門學者の中にも此を討究の題材にしたものがある。殊にユリウス・ヴルフとエルネル・ゾムバルトとの間には激しい論爭が交ぢへられ、マルクスを以て賃銀鐵則を主張するものとする前者は、之を非とする後者の爲めに嘲罵に近い駁擊を受けた。併し此問題に就ては右に掲げたマルクス自身の言明がある以上は、資本論中「資本の發達が勞働者階級の浮沈に及ぼす影響を論ずる」第廿五章の章句を引用する迄もなく、既に疑問の餘地は殘されてゐない。マルクスは明かに賃銀鐵則の否定者である。それでは斯る明白な問題に對して猶ほ疑問を抱く人のあるのは何う云ふ訣だらうか。それには多少の理由がある。第一、資本論中、商品の價値を論じた始めの部分を讀んで、商品の價値は之を生產する爲め社會的に必要なる勞働時間に依て定まる事、商品の一種たる勞働力に對しても同じ原則が適用せられて、勞働力の價値は勞働者の生活を維持する爲め必要なる生活資料の價値（即ち之を造る爲め社會的に必要なる勞働時間）に依て定まる事を學んだものが結論を急いでマルクスも亦賃銀鐵則か或は少くも之に近い賃銀法則を主張するものだと推測するのは決して無理とは云へない。それ許りでなくマルクスが初期の述作は明かにリカルドの影響の跡を示して、其賃銀說に於ても亦大體に於てその主張するところはリカルドと同軌に出でゝ居るのである。一八四六、七年の交マルクスはプルドオンに對する論難「哲學の貧困」を書はしたが、その一節で彼れはリカルドオ式賃銀說を述べてゐる。

「一商品の價値がその製作に要する勞働量で定まるものならば、その必然の結論として勞働の價値即ち賃銀も亦同樣にその製作に必要なる勞働量に依て定まるべきである。從て賃銀、即ち勞働の相對價値若しくは價格は、勞働者がその生活

維持に必要なる一切のものを作る爲めに要する勞働時間に依て定められる。『帽子の製造費が減少すれば、假令需要は二倍三倍又は四倍しても、其價格は究極その新しい自然價格まで下落する。生活に必要な食物衣服の自然價格低減の爲めに人間の生活費が減少すれば、勞働者に對する需要が著しく增進しても猶且つ勞働者は賃銀の下落することを見るであらう』(リカルド)たしかにリカルドの言葉は刻薄を極めて居る。帽子の製造費と人間の生活費とを同列に置くは人間を化して帽子となすものである。併し乍ら刻薄なる事は事物そのものに存するので、決して事物を現はす言葉に存するのではない。佛蘭西の論客ドロオ、ブランキ、ロッシイ其他の諸君は「人道的」な言葉を使ふと云ふ禮儀を守ることに依て英吉利經濟學者に對する優越を立證する無邪氣な滿足を感じてゐる。彼等がリカルドオ及び其學徒の刻薄なる用語を非難するのは經濟關係が赤裸に其眞相を暴露し、ブルジョワジイの神祕が摘發せられるのを見るのが不快だからである。之を要するに勞働は勞働自身が商品である場合には、勞働なる商品の製作に必要なる勞働時間に依て測られる。然らば勞働なる商品の製作の爲めには何が要せらるるかと云へば、それは正に勞働の間斷なき維持、即ち勞働者をしてその生命を支へ、且其種族を蕃殖し得せしむる爲めに缺く可からさる物を製作するに必要なる勞働時間である。勞働の自然價格は賃銀最低額に外ならぬ。……賃銀最低額は、賃銀の市場價格がそれに歸着しやうとして動搖するところの中心點である」と。「哲學の貧困」に次で現はれた「共產黨宣言」の中でも同じ事が云はれてある。曰く「賃銀最低額即ち勞働者の生命を維持する爲め必要なる生活資料の分量が賃銀勞働の平均價格である。故に賃銀勞働者がその行爲に依て其手に收むるところはわづかに彼れの生命を持續するに足るのである」と。

(八)

然るに此時より資本論を著はす迄にマルクスの思想は漸次變化して複雜を加へた。その變化を一言にして盡せばマルクスが勞働力に對する需要の方面に漸く重を措くに至つた一事に在る。資本論に於けるマルクスは賃銀率が生活最低限

に引付けられる傾向を認めてゐない。即ち賃銀鐵則を認めてゐないのである。併乍らマルクスは價値論餘剩價値論に於て勞働力の價値が勞働者の生活費に等しきものなる事を述べてゐる。この說は賃銀鐵則に歸着するものではないだらうか。それは若しも勞働力の價値と賃銀とが同一物ならば確かにさうだと云はなければならぬ。然るにマルクスの場合には此二者は同一ではない。賃銀の形態で勞働者に支拂はるゝ勞働の價格は、勞働力の價値以上に上る事も以下に降ることもある。マルクスの學說に於ける商品の價値と價格とが必しも一致しないと同じ樣に、賃銀と勞働力の價値も亦需要と供給とが一致した場合にのみ一致するのである。賃銀鐵則に從へば、賃銀が生活必要費を超過すれば人口增加を促がして上にそれが再び賃銀を引下げる作用をなすべき筈であるが、マルクスの見るところに從へば、賃銀が生活必要費以昇つても猶ほ資本的餘剩價値形成は可能である。そしてマルクスはこの餘剩價値の形成に資本的生產方法の本質を認めてゐるのである。マルクスは資本の增殖慾がそれを要求する限りは賃銀の生活必要費以上に止まり得るものなる事を明かに認めてゐる「……資本の蓄積慾が勞働力若しくは勞働者數の增加を凌駕する事、即ち勞働者に對する要求がその供給を凌駕する事があり得る。從て賃銀は騰貴し得る。……併乍ら勞働者が生活し且つ繁殖する狀態の安樂なると否とは資本的生產方法の根本性質を毫も變更するものではない。勞働者階級に依て提供せられ、資本家階級に依て蓄積せられた支拂はれざる勞働が、支拂はれたる勞働の非常なる追加を俟て、始めて資本化し得る程速かに增加するときは賃銀は騰貴する。而して凡べて他の事情を等しきものとすれば支拂はれざる勞働の割合は減少する。」たゞ「賃銀の騰貴はそれがために資本制度の基礎に觸れない許りでなく、同時に一層大規模なる資本制度の再生產を保護する限界內に於て行はれなければならぬ」のである。

　マルクスは資本の蓄積に依て賃銀が增加し、賃銀の增加の爲めに人口增加が刺戟せられ、人口增加の爲めに資本が不充分となつて賃銀が下落すると云ふリカルド流の賃銀說に對しては、何と旨い方法ではないか、「賃銀增加の結果として實際に勞働に堪へ得る人口の增加が事實となつて現はれる迄には、既に產業上の戰鬪は再三戰はれ再三勝敗が決して仕

舞つて居るだらう」と冷評してゐるのである。銀賃鐵則の代りにマルクスが主張するものは産業豫備軍の說である。曰く「全體に於て賃銀の一般的昇降は専ら産業景氣の週期的變動に依て起る産業豫備軍の膨脹と收縮とに依て支配せられる。**故に賃銀の一般的昇降は勞働階級の絕對人口の增減に依て決せられるのではなくて勞働階級が現役軍と豫備軍と**に分れるその割合の**變動、即ち相對的人口過剩の程度、**その過剩人口が或は吸收せられ、**或は放出せられる度合に依て**決せられるのである。」と。

(九)

マルクスの思想が漸くラッサルを排して獨逸民主黨を支配し、千八百九十一年に至り遂に之をして賃銀鐵則を放棄するに至らしめた事は此文章の始めに述べた。既に其前年ハルレの大會に於て黨の領袖リイプクネヒトは賃銀鐵則の棄てざる可からざる所以を述べてゐる。曰く、「賃銀鐵則なるものは、これは既にゴオタで云はなければならなかったのであるが、事實存在しないのである。この所謂「法則」はブルジョワ經濟學から借用したもので、この言葉は煽動運動の爲めにラッサルが用ゐたものである。而して其目的は立派に果たされた。此法則は了解し易く捕捉し易い長所を持て居る。たゞ學問上の價値はないのである。若しも賃銀鐵則なるものが存在して、賃銀が絕對最小限迄引下げらるべきものならば、同じ國の同じ産業部門に違つた賃銀率が行はれると云ふ事はあり得ないのである」と。

現在社會の樣々の不幸が食物が人口增殖に及ばないと云ふ自然法則的事實に原因するものならば、社會制度の改變は毫もこの不幸を輕減する事が出來ない筈である。社會改造の可能を論證する前には先づ何とかして人口原則を處分しなければならぬ。私は人口原則が始め社會改造の不可能を論證する爲に唱へられながら、それが途中で正反對の目的に利用せられ、最後に再び其當に居る可き所に歸還した學說史上の經過に興味を感じて居る。人間社會の不幸の原因は自然に在るか人爲の制度に在るかと云ふ一般的の大問題が玆では賃銀鐵則是非と云ふ形ちを取つて現はれて來たのである(完)

批評的精神の誤解

文學博士　桑木嚴翼

一

研究的態度と批評的精神とは攻學上の套語として常に人の口にする所である。然もまた往々にして其の意味を誤まり若しくは其の適用を濫りにすることが少なくない。革新の企圖が說かれる場合に、之に對して裏面より制肘を加へるものは即ち研究調査の要求である。新學說新文藝の顯れる時に嘗て先進大家の之に應ずる方策は、即ち批評によつて長短を明にすると揚言することである。斯くして研究とは抑壓の義となり、批評とは貶難の意に解せられ、爲に眞の研究と批評とを阻害し妨碍する事が些少でない。私は今主として學術の場合に於ける批評の意味を闡明して、傍ら研究の眞義に及びたいと思ふ。

批評は普通には毀譽褒貶の意に解せられるが、然らば此場合其の標準となるものは何であらうか。若し自己の思想若しくは好惡であるとすれば、其批評家は先づ自己が毫末も誤謬がないものであるといふことを豫想しなければならぬ。此の如き豫想に對して何等かの理由があるとすれば、我々は進んで又其の理由を尋ねなければならぬ。斯くて我々は無限に其理由に溯ることを得るが、若し之を迂遠なりとして隨意に理由の討究を中止することになれば、其が自明であることの證據が無い限り獨斷的たるの譏を免れぬであらう。批評的精神の最も誇る所は其の獨斷を排斥する所にある。然も多くの批評は反て獨斷と趣を同くするものがあることは、我々の先づ注意せざるべからざる事である。

然るに又世の批評家中には輕々しく新事物を承認せざることを其特色として誇稱せんとするものがある。即ち文藝上の新作に對して、何等かの缺點を探ることを其任として以て己の趣味を高しとする者があるやうに、學術上の新說に對しても、徒らに若干の遺漏等を求めて直ちに全體を排斥し去り、然も亦從來の學說に對しても之を承認することを以て、之に屈從することと

なし、何れも皆取るに足らずとして自ら高くするものがあるか、是は畢竟眞理を求むる心なく、單に疑の爲に疑ふ態度を執る者と異なる所がないといはねばならぬ。此に至つて懐疑を去つて批評に入る効は全く見ることが出來ないであらう。此の如く恣に標準を定める褒貶は結局獨斷となり、容易に標準を定めざる非難は畢竟懐疑と擇ぶ所が無いとすれば、眞の批評は輙ち標準の決定と分離しては考へられぬもので、所謂批評的研究を口にするものは、先づ標準に關して豫め研究する所がなければならぬことを知るのである。

二

批評哲學を創唱したカントが理性批評を說く時には正しく此意味に理會して居たのである。彼は批評若しくは批判といふ語を書籍或は學說の評判をすることゝ異なりとして、理性の批評とは即ち理性の作用或は知識等が如何なる起原より出で如何なる性質能力を有するかを定めることであるとした。カントが特別に論究せんとした問題は、此理性が古來傳承せられた形而上學を解釋するに適するか否かを明にせんとすることにあつたが、之と同時に理性によつて認識せられ得べき學術の基礎をも確立するを得て、随て知識の標準を決定することを得たのである。

是故に批評は先づ知識等に對する基礎を確立することの意に解せらるべきものである。随て懐疑的批評の如く一切事物に對して反對するよりは、寧ろ其等を承認し得る範圍を定めるとが即ち批評の本義であると言はねばならぬ。

此の如き基礎確立に當ては自から確立し得べきものと否とを區別しなければならぬが、此事は知識の場合に於ては其要素の分析によつて決定せられる、而してカントが此分析に對して實行した方法は正によく批評的精神を發揮したものであつた。蓋し近世哲學史上に於ける理性論と經驗論との對立は敢て架說するを要せぬことであるが、今たゞ其の中心問題を擧げれば、即ち歐洲大陸の諸哲學者が多くは理性に本有なる知識觀念を認めて之によつて知識の確實性を支持せんとしたのに對して、英國の學者は概して知識を經驗に因するものとして遂に其の確實性を證する能はざるに至つた。カントが之に對する解釋は即ち知識中に經驗より來る部分と否とを分ち、然も此兩者は相分立するに非ずして相合一し、經驗的材料は論理上經驗に先行する形式によつて統一せられて組織ある知識を形成するといふのである。故に經驗論者が經驗のみを本として遂に知識學術の基礎を

說くを得なかつたのも當然であると共に、理性論者が理性の中に其基礎を求めんとしたことも謬りではない。兩說共に其の範圍內に於ては正當であるが、然も其範圍を超ゆる所に爭鬪が生じ訂正せらるべき點が生じて來る。卽ち經驗論者は經驗のみを以て學術を構成し得べしとして別に其經驗を統一する作用の存することを忘れて遂に自滅を招き、理性論者は其理性を經驗と分離することによつて確實ではあるが毫も事實と交涉せざる知識を生ずるに止まつた。知識の批評は卽ち知識が經驗の理性的統一であると說くことによつて、一部分の知識の確實を保證すると共に、他の部分に對しては知識以外の作用に須つべきを明にしたのである。換言すれば、知識批評の事業は獨斷的に或種類の知識をのみ確實なりとするのでもなく、又懷疑的に一切の知識を排斥するのでもなく、知識に基礎を與へて其の有する正當なる價値を示さんとするものである。

此の如き批評の方法を道德に應用すれば卽ち道德の經驗的實質的要素に對して先天的形式的要素の絕對性を主張するものとなつて快樂說と直覺說との他に一種の見地を開き、之を宗敎に應用すれば、卽ち宗敎の歷史的傳說的要素に對して純理的倫理的要素を說くものとなり、乃至、藝術にも、歷史にも、(カント以後の發展を加へれば)法律にも經濟にも、此の如き先天的要素を認めることによつて其の基礎を立てると共に、是等が適當に經驗的要素を加味するを得ることをも示して居る。或は批評哲學を以て先天的形式のみを說いて經驗を輕んずるものとするが、實は其先天的形式は初から經驗によつて材料を供給せらるべきことを豫期して居るのである。卽ち歸する所批評哲學の所謂批評は、對象を適宜に分析して其の各部の有する價値を確定することに存するのである。此の如く解することは又批評又は批判の語義にも一致する所である。批評の批には「打つ」とか「たゝく」とかいふ義があるが、結局或る方法で性質を鑑別吟味するの意であらう。更に批判の判には「分つ」といふ意がある、卽ち分別して吟味することである。今之を其歐洲語クリチシスムの語源に溯れば希臘語の「クリノー」卽ち分割の意を認め得るが、分割は卽ち其各部に對して適當なる意味價値を認めて、其の各を正當ならしめることであるから、批評哲學の方法は恰かも之を實現する觀があるのである。批評がかく其原義たる分割、吟味等の意を有することは、之をして速急なる審判をなすこと等と區別せしむる所以である。

批評を此の如く解する場合に、學說に對する批評的精神の有

無は如何にして決すべきであらうか。若し或學說を一も二もなく遵奉し、他と比較することもなければ又其自身の當否を研究することもないとすれば、是は勿論獨斷であるが、之に反して其學說に就て吹毛、求疵的に微瑕を求めて得々たる如きものは、不眞面目なる懷疑の域を脫せざるものである。眞の批評は其學說の眞義を明にし其中より取るべき所を示して其論理的基礎を明にすることに存するといはねばならぬ。凡そ如何なる學說も徹頭徹尾完全無缺ではないが、然し又終始一貫して誤謬のみであるといふこともない。其の極端なるものも皆時勢との關係上或點を特に力說することによるとして、之をも是認すべき場合があることを發見する。是故に學說の批評は之を可否するよりは寧ろ正當に理會することに存せねばならぬ、豫め成心を抱いて諸說に接し、これに適するもののみを擇んで所謂六經を我註脚とすることを以て眞の研究とするが如きことは、寧ろ全然批評的精神を缺如するものに他ならないのである。

三

是に於て我々は批評と研究との關係に論及しなければならぬ。或は曰ふ、他人の學說を紹介し捃摭し理會する如きことは區々たる瑣屑の業である、他人の學說に盲從し屈服するものである、眞の學者は自ら見識を定めて他說の長短を明にせねばならぬと。言い得てよし。何人も屈從や受賣りを可とするものはない、自家の見解を樹立することは其の望む所なのである。然もただ其の正當なる研究に伴はるゝ場合にのみ學究の事業に値する、といふことをも附記したい。而して此意を明にする爲に先づ研究に關する見方の相違を辯じなければならぬ。

抑も學術及び其の研究法は種々の點より區別せられるが、今其の一點を取れば、凡て學は新に事實を發見し之によつて法則を樹立することを目的とするものと根本の原理を究明し理想を設定するものとの二者に區別することが出來る。前者は記載及說明の學で卽ち一般に科學と稱するを得るが、後者は推測評價の學で之を哲學と稱する事が正當である。然も科學中にも原理に涉るものもあり、理想價値の概念と密接なる關係を有するものもあるが、其場合は學と同樣の性質を有するものと見て差支ない、或は之を哲學の中に編してもよいと思はれる。とにかく此の如き二種の學があるが、之に對しては研究の方法も一樣ではない。前者卽ち事實法則の學にあつては實驗觀察等によつて新事實を發見することが第一の義務である。故に必しも古來の

學說に通ずる必要はなく、たゞ適宜に文獻を參照すれば十分であるとせられて居る。此種の學術にあつては新進の學者も微細の方面に制限せられる研究家も皆多少の發見をなして學界に新材料を提供することが出來るから、其の結果に眩惑せられて、凡ての學術は皆此方法によらねばならぬものとし、又此の如き成績を擧げなければならぬ、と思ふ者もあるが、併し是は學術の種類によつて研究法に特色を生ずることを顧みざる弊である。所謂後者即ち原理理想の學にあつては觀察實驗すべき直接の材料がない。是等の學は、たゞ從來發見せられた事實の關係即ち法則に就て比較對照し、其の何れをも滿足せしむる如き一般原理を設定し、或は實際の事實が將來到達すべき理想を樹立することを努める。此の如き研究にあつて直接に其効果を試驗すべき手段はない。たゞ論理の確實を期すると共に之を經驗に照して間接に證明する他はないが、其他に之が補助となるものは古來の學說の比較研究である。原理や理想などの研究に於ては事實が其の材料たるものではなく、寧ろ學說の方が研究材料となるのである。例へば道德上の目的を論ずる場合には古來行はれた快樂說とか直覺說とかいふものが即ち研究材料なのである。蓋し是等の學說は人々が道德に關して懷抱する觀念の一部分を擴大して一個の學說に組織したものであるから、是等の學說の研究上是等諸觀念の特質を知ることが出來るからである。實驗科學に於て學說を參照するのはたゞ自己の實驗が或は既に他によりて行はれては居なかつたか、或は他に巧妙な方法が行はれては居なかつた、といふことを知る爲である。併し原理理想の學に於ては學說其のものが研究の材料となるのである。此場合にもし學說を毫も參照しない人があつたならば、全く實驗室に臨まないで實驗をするといふのに他ならない。若し又一二の學說のみを知つて足れりとするものがあれば是は輙ち少許の實驗觀察を以て足れりとすると言ふべきものである。或は又古來の學說を自己の解釋によつて便宜に變更するものがあれば、其は實驗の結果を豫定通りになさんが爲に隨意に器械等を動かす實驗家である。實驗科學が忠實なる實驗で始まることを要する如く、理想科學も亦忠實なる學說の研究から出發しなければならぬ。

四

既に學說の研究を學術研究の根本とすることが出來るとすれば、我々は進んで其學說研究の方法を明にせねばならぬ。先づ

學說は必ず何等かの文章に於て顯れるものであるから、學說を眞正に理會する爲には文書に關する精確なる研究がなければならぬ。古說を研究する場合には古書の眞贋等から著者自身の眞僞等を初めとして其文辭の遺漏や誤謬等を考證しなければならぬ。斯くして大體に於て其書籍を確めた後に始めて其書を忠實に閱讀して其說を理會するを得る譯であるが、併し往々にして斷片的に書き殘された古文や、不注意若しくは諸種の事情より生ずる矛盾等に對しては適宜に增補訂正して原著者の眞意を傳へることに努めなければならぬ。要するに學說研究者は、實驗科學者から見れば單に古說の信者に過ぎないやうな態度を執つて學に進むことを要するのである。新時代の學說に對しては書籍の考證にはさほどの苦心を要しない譯であるが併し著者の意見が次第に變更した場合や、たゞ斷片的偶感的にのみ其意見の發表せられた場合には、古說に對すると同樣の考證を試み組織を圖らなければならぬことは言を俟たないのである。要するに此場合に於ける研究者の事業は宛然俳優が舞臺に於て淨丑諸役に扮すると異なる所はない。昔しベーコンは學說によつて生ずる謬想を劇場の偶像と名づけたが、又當を得たる譬喩といつてよいと思ふ。

斯くして理會し得たる學說は一として多少の眞理を含まないものはない、又或る前提を假設すれば何れも皆眞理とならざるはない。是故に學說の中に研究の材料を求める者は、是等の學說中一見誣妄なるものに就ても、意を用ゐて之を齊整しなければならない。若し之によつて其學說中取るべき所あることを示すを得ば其攻究上に利便を得ることは言を俟たず、或は又其が全然不合理な前提を待つて始めて成立するものであるとすれば、斯く組織することによつて反て其の根本的缺陷を示すことを得るであらう。此場合に徒らに自己の持說から是非の判斷を加へたり、常識を根據として輕々に人の——たとい誤謬にせよ——苦心して案出したものを一蹴して快とすることは學術研究者の態度とすることは出來ない。即ち誤を誤として之を論理的に組織することは、此種の學術を研究する上に於て必ず執るべき方法である。而して凡ての事物に就て其の價値を明にすることを期する批評的精神が此實現したものといはねばならぬ。

五

然もこゝになほ辯明すべきことは、研究に名を藉つて新案を阻害することである。實行は知識に伴隨するを要するから、

る新案の實施や新說の承認に對して周密な調査や研究を經べきことは論を俟たないが、然し調査は其の周到を期すれば終に究極する所がないから、實際上必要の程度に於て一時之を切上げることが便利な場合が多い。例へば敎育制度其他に就て改革意見の出るとすれば、之は畢竟實際上に於ける種々の不便を經驗したからであるから、當局者としては其不便を除くべき政策を講ずれば足れる譯であるが、此際更に調査研究の機關を設けて根本的に問題を解決せんとする如きは、百年河淸を待つと等しい結果を生ずるものであつて、而して結局其改革を延期せしむる口實となるに過ぎなくなる。新學說に對する研究若しくは批評も之と同樣の意議を有することが少なくない。固より新說の出づる每に無思慮に雷同附和することは不可であるが、たゞ從來の所說を根柢より破壞する、といふだけで其を認容せず、然も之を駁擊すべき理由を發見せざる場合に研究を口にして之を無視せんとすることは、決して學術の進步を欲する者の業と云ふことが出來ぬであらう。研究は生出的積極的でなければならぬ、之を以て禁遏的消極的方便に使用することは研究の目的たる知識の性質に矛盾するものに他ならない。

更に考へれば、此の如き意味に於て研究や批評の用ゐられることは畢竟人々の根本に於ける氣質性情の別れる所であらう。新說に接して先づ古說を破壞することに不愉快の感を抱く者がある、其の眞僞を問はず其の新なる點に興味を覺える人もある。堅實なる知識を欲して浮華を嫌ふ者がある、知識の流動を認めて小疵を問はざる者もある。異說を聞いて毫も寛容する能はざるものがあり、反對說にも喜で耳を假す者もある。是等の性情は其の境遇等に伴ひて種々の複雜なる差異を生し、所謂批評と研究とに對しても解釋の一定せざる結果を生ずるのであるが、然し各の性情は其自身に於て皆過誤とは言へない、たゞ其が其範圍を脫する所に眞の研究に對する妨害が生ずるのである。而して此範圍を明にすることが又眞の批評的精神の發現でなければならぬ。自ら其の性情に囚はれながら然も批評的精神の假面を冠ることは、思想文化の進步に取つて寸毫も益せざる事である。然し人性の不完全なる限り、此の如き性情の偏倚缺陥を根柢より鋤去することは、恐らくは遂に望み難いであらう。即ち此に思想の衝突が生ずるのである。我々は此の如き衝突を人性の必要的結果として甘受したい。而して其の公明なる衝突の行はれる中から次第に其の批評的精神の發揮して知識の極致に達することを期せなければならぬ。隨て又此に、此思想感情の衝突をして單に思想感情の衝突たるに止まらしめんことを欲するものである。

勞働全酬權論

賀川豐彥

メンガーの勞働全酬權論

三大權利と社會主義

アントン・メンガーは、法律的に社會主義を解釋してくれた第一人者であるが、彼の有名な著述『勞働全酬權論』Recht auf den Vollen Arbeitsertrag 英譯 M. E. Tanner "Right to the whole produce of labour" の中に、社會主義が、法律的に要求す可き權利は勞働全酬權と生存權と、勞働權の三大權利であるとして居るが、彼は之を今までの法律上の物に對する權利、責任に關する權利、相續に關する權利(Sachen, Obligationen Erbrecht)の三大權利と相對照せしめて居る。その中でもメンガーは、勞働全酬權を以つて社會主義の根抵をなす權利であるとして、英佛獨の社會主義的大思想家によつてその思想の發達の過程を追ひ、自らの決論に達して居るわけである。

彼の研究した思想家はゴドウヰン William Godwin, ホール Charles Hall、トムソンWilliam Thompson サン・シモン派、Saint Simonist プルードンProudon ロベルタスRobertus マルクスKarl Marx ルイブランLouis Blanc ラサールLassalle の九人で有つて、彼等を忠實に研究して勞働全酬權の學說を提供したものは全く、英のウヰリアム・トムソンであるとして居る。

全酬權の歷史

メンガーはゴドウヰンを社會主義的思想家の父として、彼に無政府主義的思想の發芽して居ることを指摘し、ゴドウヰンは彼の名著『政治的正義に關する質疑』Enquiry Concerning to Political justice には富の政治的に及ぼす惡影響を論ずると共に、私有財產制度を全く否定せず民衆を新しき自由の世界に導かんことを要求したと云ひ、勞働全酬權はゴドウヰンに認むることが出來ると云うて居る。

チャールス・ホールに就ては、メンガーは勞働全酬權の積極的議論を見ずして不勞所得の地代及利子に關しての社會惡を、ホールが氣付いたと云ひ、然し個人の財產に關する處分は、公產主義を取らずして、公產と並行して、個人の私有財產及その相續權を認めることを主張して居ると云ひ、ウイリアム・トムソンに於て彼は初めて、勞働の自由、勞働全酬權及交換の自由の三大權が唱道されて居ることを見て、この三大權利は正統派のリカルドと何等違ふところの無い方式を以つて說かれて居るが、然しトムソンに於ては、全酬の方法を論ずるに當つて、公產主義に陷る爲めに强制勞働と、生存權の欲求により多く傾き、勞働全酬權としては成功して居らぬと云うて居る。サン・シモン及フエリエルの學派は、勞働全酬權を云うたのであらうが、その著作には充分之が鮮明に出て居らぬと云ひ、寧ろ、獨乙の弟子に全酬權を論ずるものが多いと云うて居る。そして彼はサン・シモンの關系から云へば全酬權には似つかぬ、資本に對する不勞所得を支拂つても善い樣に書いて居るとメンガーは指摘して居る。

メンガーは、プルドンは全酬權を知つて居るが、個人の私有財產と競爭を肯定する爲めに社會的ユートピアの代りに、個人主義的ユートピアを置いたと云ひ、ロバルタスは勞働全酬權には氣が付いて居たが、不勞所得の全部を取返せとは云は無かつた、卽ち、十の所得の中、三を賃銀に、一を國濟費に、六を地代と利子とに支拂へと云ふたと書いて居る。然しロバルタスは、勞働報酬に就ては貨幣を以つてするの不都合を知つて、勞働時間を基礎とした新しき切符を發行す可きを主張したと云うて居る

メンガーはマルクスの說は、根抵に於てトムソンから借り來つたと主張して、エンゲルスが餘剩價値說をマルクスの發明だとするのは眞違つて居ると云ひ、トムソンの方が寧ろ進んだ考を持つて居たとし、マルクスには、私有財產の處分に關する考へと勞働全酬權に關する思想が不足で有つて、マルクスでは色々の公式が反つて率直である可き、彼の勞働價値說を曇らせてしまつたと云うて居る。

メンガーはまたルイ・ブラン及ラサールの社會主義說を批評して之を集團社會主義(グルプ ソシアリズム)だと云ひ、之には不勞利得がどうしても解決出來ぬと云うて居る。それのみならず、ルイ・ブラン及ラサールの社會主義は、勞働全酬權を基礎とするものでは無くして、生存權を基礎とするものであると云ひ、ラサールの樹立した、獨立社會民主黨の『ゴッタ宣言』Gotta Program も要す

るに生存權中心の社會主義であるとして居る。

それでメンガーの云ふ所によると、勞働全酬權を確立さすには、私有私用の財產組織でもいか無いが、共有共用の公產主義でもいか無い、どうしても、共有私用の社會主義の時代が來ねばならぬと云ふのが、メンガーの勞働全酬權論の決論になつて居るのである。

全酬を受く可き主體

二種の社會主義

併し私から見れば、共有私用の財產組織がどんな形式で來るかと云ふことに就て大なる疑問がある。私から見れば、メンガーの研究の方法は歷史的であり獨斷的形式を避け實行方法を、よく考慮の中に入れて居るから實に立派な立論だと思ふけれども、要するに勞働全酬權が、新社會の基底にならなければならぬと云ひ、その新社會が建設される爲めには、共有私用主義の財產組織が必要であると云ふのであるけれども、その社會が、どんな形式で顯はる可きかを說か無いから、私に取つては頗る不滿足なものである。それで私は勞働全酬權を私の立場である唯心史觀の見方から批判して見たいと思ふのである。

第一に問題になるのは、勞働全酬權を論ずるに當つて、二種類の社會主義があるといふことである。それは、利己主義をその出發點とする社會主義であつて、この社會主義は必ず、勞働全酬權に終らねばならぬと云ふこと、そして、もう一つの社會主義――それは他愛主義を基脚として出發するもので有つてそれによると、勞働全酬權は必しも問題にならずして、生存權が獲得されさへすればあまりその他のことに就ては八釜敷云はぬと云ふことである。それは、生存權が獲得されさへすれば、その他の部分は犧牲的に社會奉仕をすると考へる爲めに、勞働全酬權を拋棄すると云ふ傾向に出るのである。

第一系→利己的社會主義→全酬權說→自己完成→生存權獲得
第二系→他愛的社會主義→生存權說→社會奉仕→全酬權拋棄

二系の矛盾

で、第一系の社會主義と、第二系の社會主義の間に明かに相一致せざる傾向があることは認めねばならぬ。そして第一系の社會主義が唯物的に傾き、第二系の社會主義が唯心的にまた理想主義に傾くことも認めねばならぬ。

メンガーもこの事を一寸とその著作の中に云うて居つたが、私は一層この點に就て研究の步を進めて行きたいと思ふのであ

る。

先に云ふ通りに、勞働全酬權の樣な社會主義の根本基礎ともなる可き、根本敎條が、その倫理的人生觀の立て方によつて根本的に違つてくるのであるが、私一個の立場を明瞭に云へば、社會が社會化して行く爲めに、個人のエキスプロイテーション（私人收用）を許さ無いと云ふことを主張することが、社會主義の本領でありとすれば、社會主義は、必しも全々他愛主義でも無く、又純粹の利己主義を基礎とするもので無いことは、私がカウツキーの『社會主義倫理學』の批評に於て（大正八年七月號）雜誌『改造拙文參照』指摘した所である。即ちカウツキーが見る人間なるものは、全くダアウキン的人間で有つて、今日の社會を組織する人間では無い。今日の人間は、相互扶助を基礎として成長して行くもので有つて、少なくも人間社會に於ては、相互扶助が發達するか、否かによつて、その文化の程度が違ふのである。

超個性の社會

それで、社會主義と名がつく以上はそれは、個性中心の社會を云ふのでは無くして超個性の社會性を有するもので無くてはならぬ。たとへば婚姻のやうなものにしても、自己的だと云へば云へ無いことは無いが、戀愛の場合に於ては、必しも自己的ばかりでは無く他愛的精神も多少その中に含まれて居るのである。然し實を云へば、之は自愛とか、他愛とか云ふものを超越した、人類保存の潛在目的から起つたものなのである。

それで、自由目的を有する自由結社の社會組織があるにしても、それは、戀愛のように本然的性質を有しないとしてもそれが人類目的の一部分をなす以上、必ずそこに何かの超個人的意義を持つて居るものであつて、それが個性に作用して、自由目的の樣に見えるけれども、その實は究極に於ける社會目的に添ふように決定されたものであり得る場合が多いのである。

即ちこの個性對社會の關係は昔から色々な哲學上の難問として形を變へて現れて居るものであるが、社會は有機體の樣に判然たる內在目的を持つて居らぬにしても、個性の意識を通じての――私は決して超意識とは云は無い――有機體と社會との相違は玆にある――超個性目的の社會意志の運動があることを認識せねばならぬ。

殊に、それが愛國心となり、愛民族心、世界精神の誇りとなると、他人を愛すること卽ち自己を愛することになる場合が多いのであつて、カウツキーが云ふ樣な、自己中心の論理學說が

社會主義の中心となるもので無いことは事實である。即ち私は全他愛主義にも贊同し兼ねるが、全自愛主義にも贊成が出來ない。それは、自我目的に包含されるものであるけれどもまた社會の爲めになり社會を組織するに必要なる意識運動をするものなのである。

それで私は個性の勞働價値は全部應酬されなければならぬと云ふ個性勞働全酬權論に對してはそれが、自己中心個性主義の基點から出發して居る場合にはメンガーの云ふ全酬權全部を受入れることが出來ないが、それかと云うて、他愛的社會主義說の樣に、全酬權を無視することは出來ないのである。それでは如何なる形式で、私は全酬權を新しき社會組織に組入る可きかと云ふにそれを、私はこれから答へたいと思ふのである。

不勞所得の發生する理由

不勞所得の事實

今日までの産業組織に於て最も不都合な點はサンシモン派の人々がレント Rente と呼び。トムソン及マルクスが餘剩價値 Surplus Valu; Mehrwert と呼び、メンガーが『不勞所得』Arbeitloses Einkommen と呼ぶものが發生することである。兎に角問題は遊んで居ても利子で食へる人があり、地代が一年に幾十萬圓這入る人があり、一日に一寸と電話かけただけで幾百萬圓を儲ける人があるにかゝわらず、一方には朝から晩まで一生懸命に働いて、それでもまだ食へ無い幾千萬人の勞働者があると云ふことである。

そこで、マルクスは簡易に之を資本家が餘剩價値を發生さす爲めだと云ふが、餘剩價値が社會的に何故發生するかに就ては彼は何事も書いて居ら無い。なる程、餘剩價値が發生することが無ければ、勞働者の發生させた價値量は凡て勞働者に歸つてくる筈であるが、餘剩價値として資本家が奪ふものがある爲めに勞働者の收入は實に僅かなものになるのである。併し、マルクスの資本論の方程式から見れば、餘剩價値の函數と云ふものは決定のもので有つて、それは、何等社會進化の上の意義を持つて居らぬものである。即ちマルクスは、餘剩價値が何故發生するかに就て論じて居ら無いのである。

マルクスの餘剩價値說批判

然し勞働全酬權と云ふ樣な人間價値を論ずるに當つては、數學の方程式では之が說け無いのである。マルクスの口癖として、自然科學的方式と云ふけれども之はマルクスを根本的誤謬に導いた躓きの石で有つて、人文科

學、規範科學が、どんなことをして見ても自然科學の方程式で解ける理由が無いのである。それで餘剩價値を決定的のものと見ずして、社會的に可能になつた理由を簡明し、勞働全酬權を主張したいならば、餘剩價値が發生して社會と逆倒の社會を組織しさへすれば善いのである。即ちマルクスであれば勞働價値と需用價値と否價値と價格との經濟心理的見解が徹底的で無い爲めに、資本家は始めより餘剩價値を商品に挿入して市場に賣出す樣に云うて居るけれども、之は私の見解によれば、全く資本家の心理的過程であるけれども、餘剩價値の實際發生する理由では無いのである。銀行に於ける利子の發生や、借地料や地代の場合に於て、マルクスのこの餘剩價値説の不完全なることが最もよく指摘されて居る。つまりマルクスの餘剩價値説は工業及商業的資本家の心理的經過を數學的に投影したものであつて、不勞所得の發生の全部を説明したものでは無いのである。

それで、私はマルクスのやうに餘剩價値の發生を決定なもの資本家個人の必然的要求と見無いで、もう少し大きく、社會的に發生した經濟病理的現象として見たいのである。即ち資本家の「不勞所得」の發生は資本家の動機の中にのみ發生せずして、社會組織の缺陷の中にも同時に發生して居ると私は見たいのである。たゞ資本家がこの社會的缺陷を利用して、之を自已の利欲の不劣な動機として取り入れた所にマルクスの云ふ所の餘剩利潤の發生があるのである。繰返して、私は云ふ、マルクスの餘剩利潤説は、資本主義の一局部——即ち資本家の主觀的立場を明かにはするが、之によつて、凡ての「不勞所得」が發生した理由を説明するには足りないと。

社會價値と社會的缺陷

今日の多くの不勞所得は、社會の方から資本家の方へ持つて行く樣な場合が多い。都市の地代の發生や、金利の昇騰の如き、多くは民衆の方から、資本家の不勞所得を與へるのである、即ちこの點がマルクスが資本論の第三卷の需用價格の決定に於て、主觀的に出發した彼の勞働價値説を放棄したかの如く云はれた點であつて、マルクスから云へばこの點はどうしても説け無い筈であるのだ。それはマルクスには勞力價値はあるが、勞力が客觀的に進展して行く心理的社會價値が無いのである。

そこは、私の云ふ主觀經濟學——それは主として生命とその本能的成長を基礎として社會意志の進化の上に經濟學の基礎を置かんとする企であるが、之によるとよく解説が出來るのであ

る。即ち私が繰返して云ふ通りマルクスの勞力價値說と、唯物史觀說には少しも統一が無いものであるが、私の唯心史觀であれば、社會の心理的意志發展は勞力價値が總合的に社會性として、生命進化の欲求として、延び上るものに外ならぬと見るからして、需要供給の市場を形成する心理社會も勞力價値と餘剩價値を共に發生せしめる、勞働者も、資本家も要するに人間だと云ふ點からして、一つの一致を發見するのである。

そこで、今日の資本主義の不勞所得を發生せしめたものは、經濟的に云へば勞働力ではあるが、心理的に云へば民衆の欲求にあることに氣がつくのである。即ち今日の制度では、資本家に不勞所得を增加せしめるものとは知り乍らも、工場を慕ふて『食べるだけで、善いから使ふてくれ』と申込んで行く所に、資本家の不勞所得が知らずして發生するのである。

即ち、不勞所得なるものは資本家の側から云へば、勞働の餘剩價値から發生するけれども、社會の側から云へば、民衆の要求から發生するものであるのだ。利子も地代も利潤も皆、同一理法によらぬものは無い。

即ち問題はこの需用供給的不勞所得の整理に、より大なる難點があるのである。たとへば、此處に一勞働者が正當な賃銀で全く餘剩價値無くして勞働したとしても、その製品に對する社會的需要が非常に多くなつてその市價は急に倍加したとする。たとへば、日本の綿布、絹糸の樣なものである。之の需要は世界的で有つて、世界十六億の人々の需要が高まるとすれば、此處に資本家と勞働者が全く餘剩利潤の利得無くして勞働者に賃銀を支拂つたとしても、これは勞働價値に對する代價とはならずして、他の勞働力に對する市價と殆ど相場の標準が取れ無い程のその特殊な勞働力に對しての不勞所得が發生するに違ひない。

さう云ふ風であるから、或特定な勞働力とその資本の間に起る餘剩利潤率なるものは、社會的に見るならば、マルクスが云ふやうに絕對的のものでは無くして、矢張り市場價格即ち社會心理的欲求の諸法則の支配する價値決定の外に出ることは出來ないのである。然るに今日の資本主義はこの社會的要求に全く社會化の無いことを利用して私腹を肥やさんとして居るのである。即ち之が資本主義の不勞所得の發生である。

それで或商品の總勞働價値が「A」しか無いものに對して、社會が「2A」だけの要求をした場合にはA′だけが不勞所得となるが、資本家の考では之は、勞働者が發生した價値でも無ければ

自分が發生したものでは勿論ないが、產業的にはまだ社會として、その不勞所得を受取る機關が無いから、自分が預つて置かうと云ふので、私人的に收用して居るのが今日の經濟組織である。

餘剩價値發生の心理的解剖

價値の時間的成長

之を社會全體から論ずれば、資本家の不勞所得なるものは、人類の最も大なる弱點で有つてまた强味である、勞力より欲求が常に大であると云ふ心理より發生したものである。即ち欲求が無ければ人間は進歩するもので無ければ、また時間的に生きて行けるものでは無い。即ちD(Demaud)はL(Labour)より大であるから(D>L)價値の發生に於て或種の無理が出來るのである。

この價値の差(Surplus)の發生は資本に利子が發生する根本原則と同一で有つて、社會性が常に成長して居るものである爲めに、Lが與へてくれる價値を利用して更に、前進したいと云ふ時間の上の前進的欲望が起る爲めにDは常にLより量に於て大きくなるものである。そこで、このD－L＝Sの方程式はL＋S＝D即ち勞力價値を基礎としたLの上に更に餘剩價値Sを加へて進化したいと云ふ理想(又は欲求)となるのである。

これを六ケ敷考へるとどうとも考へることは出來るが、資本主義の心理では、勞力を以つて價値を發生せしめるよりか、欲求を基礎として價値を發生せしめようと云ふ價値の上に分解作用を與へて、勞働すること無くして所謂不勞所得を得んとするのである。然し資本に利子が發生する經濟心理の理解がつくならばこの勞力によらざる所得が社會的に發生し得る理由が理解されることと思ふ。之を私は欲求價値の時間的發生と呼びたい。

價値の量的差

然しこの外に空間的に量的に發生する餘剩價値がある。之ば勞力によつて生產した商品土地又は資本は有限的で有つて空間的に量的に一定量以上に出るものでは無いが、人間の欲望から云へば無限で無いにしても、欲望するだけあつてもらひたいものである。欲望するだけと云ふ量は頗る六ケ敷いが之は人類文化の或階梯の或心理狀態の或欲望が求めるだけ有つてほしいものである。併し、空間的に量的に、商品と土地と資本がその欲求通りにあり得ることは無い。そこでプラス、マイナスの餘剩價値が發生する。即ち不用なもの、商品と土地と資本の價値は下落し、有用な商品と土地と資

本の價値は昇騰することになる。卽ちこの場合に於ては(－S)の形式が現れることになるのである。そして今日資本家が、資本に對して當然、餘剰價値を要求せねばならぬと云ふのは『損することがありますからね』と云ふ(－S)の場合と『資本が多ければ儲かることにきまつて居る』と云ふ(＋S)の兩者の場合を考へて兩者に共に餘剰價値を要求して居るのである。それでこの空間的、量的餘剰價値を方程式で現すと次の通りになる。

$D>L$なる場合　$D-L=+S$

$D<L$なる場合　$D-L=-S$

Lの中に土地、資本を含ましめることは無理の様に考へられるが、この場合Lは、私が『主觀經濟學の組織』に於て說いて居る樣に、土地及資本の生命價値と考へて必しも差支へは無い。(拙著精神運動と社會運動參照)

之を要するに、時間的差の上に成立する價値にしても、量的差の上に成立する價値にしても、人類が進化しつゝあるものであると云ふ根本概念から考へると、經濟學不勞所得が自らは勞することなくして他人の勞力を賣買し他人の欲求を多く集め得る者に最も多く流れ込むものであると云ふことは、私が以上述べた所でよくわかると思ふ。

不勞所得の處分

そこで問題になるのはこの不勞所得の處分である。今日の國民經濟に於ては、一國の生産力

有生經濟と無生經濟

は全くはその國一年の貨幣の流通量によつて表示されて居るやうなものであるが、現代に於ける社會的經濟心理が變態で有つて、勞力價値よりか、需要價格の上に、より多くの經濟組織を建築して居る爲めに、勞働全酬權などを主張する餘地が無いまでに、變なものになつて了つて居るのである。

然し之は餘剰價値の發生を社會心理的原因から見たからであるが然し、一工場の一勞働者の製品に關しては上にも論じて來た樣な、餘剰價値の附加は社會心理的原因にあるとして、何等差支へは無いが、之を世界全體の勞働力として見るならば、今日の凡ての價値の滿足は勞働と生命とによつてで無くして得られるものは一つも無いのであるから、たとひ需要の總量がどれだけ多くの餘剰價値を發生させようとも、それは當然生命と勞働そのものに與へらる可きもので有つて、無生物である土地と商品と資本に之を與ふ可き者で無いのである。

價値の社會化

殊に、社會が益々、社會化して、生命と勞働

が都會と工場に集中される場合には、このことが一層明白となり價値の社會化が眼につくのである。それで、この場合には社會的に發生した價値──即ち分業と綜合になつて成立した價値は當然社會そのものに應酬さる可きもので有つて個人の領有すべきものでは無いのである。

生命價値の問題

併しここにも一つの困難がある。それは、社會的に發生する價値そのものの中に必しも勞力のみによつて成立して居らぬものがあることである。先に私は、生命と勞力によれる價値と云ふたが、この生命價値と勞力價値が相對立することである。これは、第一の價値の對立即ち、勞力價値と需用價値の價値の對立を側面から見たもので有つて需用價値の心理性を主觀的に引き直すと、生命價値となるのである、たとへば美人の價値、これから起る頗る高價な種々の經濟行爲──化粧品、婚禮道具、藝妓、娼妓の出現に至るまで、これが、必しも勞力價値によつて支配さる可きものでは無くして、生命價値と云ふ可きものに屬するものであることは、私は私の主觀經濟學の組織で既に述べた所である。即ち一方では、需要或は欲望によつて價値が發生すると共に勞力と生命によつて凡ての價値が發生するものであるから、勞働全酬權と云ふ言葉は此處で少しばかりの修正を與へねばならぬことになるのである。もし、勞働をも生命の中に含めて了ふならば、勞働全酬權とも云へようが、美貌とか、色情に價値が發生して之に特殊な執着が起つた場合に、その價値は必しも勞働のみを以つて評價することは出來ないのである。倫理的に云へば美貌とか色情とか云ふものには交換價値を成立せしむ可きものでは無いのであるが、今日の交換價値の重ぜられる社會では、美貌と色情に價格を附して居ることは否定の出來ない事實である。更に各種の文化的價値になれば、それは益々交換價値即ち全酬權を要求する價値評價より遠ざかつて行つて、たとへそれが、勞力を標準とする代價を要求し得るものであるとしても──たとへば軍人醫師、看護婦、教育家、宗教家の如き──全酬を要求し無いと云ふ生命價値の發生する所に文化的意義があるとされたものである。それであるから、もしたゞ、商品と云ふことのみを頭において論じるなどはアダム・スミスやリカルドや、マルクスが云ふ樣に、商品の價値はその勞働量によつて決定するものであると云ふことには私は少しも不服は無い。アダムスミスは、

"Labour is the real measure of the exchangeable Value of all Commodities" Weath of Nation, P. 22

と云ふて居るし、リカルドも、

The exchange Value of these Commodities depends almost Exclusively on the Comparative quantity of labour expended on each (Ricardo: The principle of Political Economy and Taxation, Chap. I)

併し、今日社會化した經濟組織ではたゞ、商品ばかりの交換價値の問題では無くなつて何億人と云ふ人間の生命能力の交換價値が論議せられるものであるから、私は商品の外の交換價値がたゞ勞力のみによつて計量さる可きものでは無くして、心理的にまた生命的にも計量さる可きものであることを注意したいのである。

勞働全酬權の推移

自己全酬より社會全酬へ

既に私は、社會に於ける經濟組織が進步すると共に一方では社會心理的價値が凡ての方向に需要供給の法則を支配し他方に於てはたゞに、勞力價値のみならず、生命價値そのものが、勞力價値以上に、各種の經濟組織の中により多く織り込まれて行くものであることに注意した。

即ち野蠻な時代であれば、各人は自ら耕し自ら織つて、自ら遊樂して居たものであるから經濟生活は卽ち自己全酬で有つたものである。

少し、進步すると、少し計りの相互扶助と部分的分業の爲めに、或時には犧牲的に或時には征服的に、或時には交換的に、一部分の勞力價値の交換をしたであらう。從つて、この時には勞働全酬であるか、勞働無酬で有つた。この狀態は近世產業組織が發達すると共に全く失はれた。そして、產業組織に賃銀制度が組入れられると共に、勞働は嘗て無酬で有つたことは無いと共に全酬であり得ることは無くなつた。

產業革命以後は、この狀態は一層妙な形を取つて進んだ。それは、產業組織はたゞに勞働者の勞働力ばかりで無くして、その生命それ自身までも一種の型に入れてしまつたのである。卽ち昔、今日の樣に分業の甚しく無い時代には、貴人も、勞働者も生活の仕振りは殆ど同樣で有つた。烟筒と機械の無い都會に或は田園に、同じ樣に生活を樂しみ得たので有つた。然し今日では、勞働者は十二時間も十三時間も甚しい時には二十四時間も打通して、ポイント・メンならポイントに、火夫ならフアネスの前に、各々特種な環境に全く機械の如く、くゝりつけられることになつた。その爲めに、昔は大名と下郎と云へども同じ

土地を踏み、同じ樣に澄んだ空氣と、同じ樣に光る太陽を見、同じ樣な筋肉の動かし方をしてゐたものが、今日では、貧富の懸隔によつて、土地と空氣と光線と溫度と生活の危險性が全く違つたのみならず、筋肉の動かし樣までも違はねばならぬことになつたのである。

即ち今日の大産業組織はたゞ、勞力價値だけでは評價し盡すことの出來ないのみならず、その工業に從事して居る人々の、生命價値と文化價値が直に交換的に評價せられねばならなくなり、之と共に、先に述べた樣な各種の文化的專門家即ち宗教家軍人、美術家、——この中にも幾百の專門家がある——醫師、教育家、看護婦、救濟事業家、勞働運動者、辯護士、新聞記者官吏等の所謂自由職業と稱する專門家が出現することゝなつたそして勞力價値と云ふよりかそれよりも根强く大切な生命價値と云ふ可きものが、今日の凡ての價値を發生せしめて居ることがよくわかるようになつて來た。

かうなつてくると、勞働者の勞働力に對する報酬なるものは到底、物質で評價の出來ない程、勞働者の貢獻が大なるものであると云ふことが解つて來た。即ち一方では、その社會性によつて、誰々が全酬を受く可きものだとの標準がつか無くなつたと共に、報酬の基礎がより根本的になつて來たわけである。

そこで、今日の市場に行はれて居る凡ての價値の總量は全く私人に屬するものでは無くして、社會によつて社會化して行く社會そのものに屬す可きものであることは充分理解されると思ふ。即ち、今日の土地と利子と利潤が吸收して居る不勞所得なるものは、社會化さる可き産業組織に於て價値だけが先に社會化して居るが、所得と所有權が社會化されて居ら無い機會に乘じて起る一種の社會的經濟病理で有つて、之は當然近き將來に社會化す可きものである。即ち社會的に起る大きな不勞所得の絕滅は、或は市營の形式を取り、或は國有の形式で段々實行されつゝあるから、此處に論ずるまでもないことであるが、勞働者が生命を賭して作業をして居るその勞力價値に向つてはどれだけのことをすれば善いかと云ふ問題がまだ殘つて居る。

個人への報酬の量

資本主義の不勞所得は之を社會化することによつて、不勞所得の收入を得るものは無くなるから、社會全體の勞働量に對しては、社會全體としては全酬權を回復したことにはなるが、然しそれでは個人の勞働に對する全酬はどうするかと云へば、それは全く評價するに困難となるわけである。それは、アントン・メンガーが、集團社會主義に

反對すると同一の理由によつて、たとへ、都市、國家の社會化**によつて、その都市だけの全收入が、他の都市より數倍よくな**つたとしても、之は要するに個人中心の株式會社の形が少し進化したものであると云ふだけであるから、不勞所得の幾分はまだ、そこに殘ると考へられるのである。況や、個人の勞働量に對して、或は時間や質のみに顧慮して、賃銀を制定するとしても之は要するに、先にも述べた通りに、相待的の報酬であつて全酬とはなら無いのである。

そこで私は、社會的に、社會的勞働總量に對する全酬權さへ回復出來さへすれば、個人的の報酬は倫理的であるより外は仕方が無いと思ふのである。即ちどれだけ法律的に制定することがあるにしても、それは、私の云ふ生産者議會及消費者議會の力を借りるより仕方が無いものであるが、それでもこの議會の形式が代議政體の形式を取るより外に道は無いから、個人の權利は、代議政體によつて幾分拘束されるのみならず、個人の全酬即ち、經濟組織の初頭に行はれた、自己全酬と云ふものは全く拋棄せねばなら無いもので有つて、社會的相互扶助の爲めに自己の人格權さへ認められさへすれば、それで滿足すべきものであらうと私は思ふのである。

生存權と全酬權の開放

此處で、私は、此論文の初頭で述べた第一系**と第二系の社會主義の思想と、私の所論と比較**する爲めに、私が、生存權に對する態度を決定しておかねばならぬ。私は自己全酬即ち第一系の個人的全酬權は拋棄するが、社會的勞働全酬權を拋棄するもので無いことは先に述べた通りである。

私は勿論生存權の獲得は、全酬權の獲得の前提として必要なことであると思ふから、たゞ第二系の思想だけでは滿足しないのである。然し個人的自己全酬權を拋棄する爲めに、それはたゞ個人的生存權だけを主張するものと考へられ無い爲めに、生存價値の發生に伴つて、起る新しい意味での人格權を主張して善いと思ふ。この人格權とは、成長と自由と享樂の權利を含むものであつて、今日の民法などの云ふ樣な靜止した享樂權の無いものでないと斷つておかねばならぬ。

即ち生存權よりは進んで居るが自己全酬とは違つた、人格權が獲得出來さへすれば、自己全酬權はそう問題は無いと思ふ。

人格權と所有權との關係

私有權の思想的變化

そこで最後に殘る問題は、所有權と人格權の關係である。元來、全酬權の起る理由は私有財產制度のみが今日の產業組織の不勞所得の源をなして居るからである。そして私有財產の觀念が心理的に發達して來た理由は今日まで、相互扶助の觀念が社會化して居らずして、經濟的にのみ交換價値として相互扶助が與へられたからである。併しもしも、產業組織の基礎をなす、大工業、大資本、大運輸機關、大市場が公營公產となり、勞働全酬を社會が獲得し、人格權が社會的に保證され、相互扶助の精神がより多く、本能化されて來ると、所有權に對する思想は著しく變化することは、所得權に對する心理的變化を歷史的に研究してもよくわかることである。卽ち、人格權さへ充分認められさへすれば、今日の私有財產の保護によつて保たれて來た人格思想とは全く違つた意識が社會に發達することと思ふ。

私有權と私用權

さうすると、私有財產の範圍は、社會意識の發達すると共に、人格權の一部として認められ個人の人格が尊重されると共に、その人の人格意志の表示に必要なる物質的附屬品は凡てその人格の一部分として今日迄の所有權以上の權利を認められることと思ふ。卽ちこの意味での私有財產は、社會の社會化が進むと共に一層個性化するもので有つて、その基礎には社會性の確立があり、社會の保證がある故に個性化が可能になつたと云ふことがよくわかつてくると思ふ之は羅馬法によつて、私有財產制度が確立した如く、新社會の社會法規は人格權より出發した個人の私用權を充分、保證することと思ふ。然し之は社會的に保證された權利である爲めに今日までの私有權と違つて、私用權と云ふたが善いと私は思ふ。之は勞働全酬權を要求する權利の無い癈疾者、病人等凡て生存權のみを保證されるものに向つても、たゞ生存權のみで無くして、人格權から出た享樂及個性表示に必要なる或財產私用權を充分保證し得る時代が來ると思ふ。

生存權と人格權

そして此人格權の範圍は、先に述べた通り、成長、自由及享樂の三權であるが、成長と享樂は社會的に充分保證されるから個人の自由意志が充分發表出來る範圍に於て私用財產が保證されると善いのであるが、勿論之も程度の問題で有つて、我子に相續さす可き私有財產などは勿論不必要であらうし――人類の相續の問題は個人的より社會的の問題であるから社會的に取扱ふ可きである――養老、疾病災害は社會保險でやつてくれるから、貯金する必要も無い。殊

つて居るものは生活の安易の問題である。それで個人の身體に附屬して居る着物や眼鏡、のやうなものの私用權と撰擇權が充分保證されなければならぬ。それでこの衣服の私用權と云うても某々家の樣に三十七萬圓の嫁入衣裝は許可され無いが、その人が社會的に受け得る全酬では無いが、相當の應酬より自由に衣裝に消費し之を私用することは何等差支へ無きことと思ふ。

全酬權の社會化

之を要するに、社會化す可きものが、社會化せず、勞働及生命が社會經濟の價値の全部を發生して居ることがわかつてくれば、勞働全酬權そのものまでも社會化して、個人的には之は拋棄し、サンヂカリズムの如く生産者のみの全酬權（卽ち集團の全酬權獲得）を主張せず、凡て生命あるものに生命權（生存權と人格權を併せて）を認めて社會奉仕の精神を充分明かにし、その上で個人的意志表示に必要なる應酬と私用財産を認めさへすればそれで善いと思ふのである。

で、私はアントン・メンガーと同樣に、私有私用の財産制度を、共有共用卽ち共産共用の制度と共に否定すると共に、共有私用或は公有私用の財産組織が發達して行く可きものであらうと思ふ。然しこの組織も人類の進化と共に開展さる可きもので

有つて、直に凡てのものが、理想通りに行はれるものでは無いと思ふ。人類の歴史には多くの實驗と熟練が入る。その爲めに私等は、勞働全酬權を社會的に回復したいと思うても、流血的革命と暴力を避くる必要があると思ふ。凡て經濟行爲は意志行爲であるから、充分踏みしめて進む必要がある。

「河上福田問題」の總勘定

山川均

一

福田徳三氏は、余が多年尊敬を拂つて居る學者の一人であるが、其所説には遺憾ながら多くの疑點を存してゐた。然るに近年、氏が教室より論壇に躍出せられ、思想界言論界に活動せられる度合につれ、此疑惑は益々甚だしくなつて來た。それにも拘らず、吾々の間では、尚ほ福田氏に對し多くの期待が懸けられてゐた。然るに昨年の春に至つて、予は社會主義者の立場から、福田氏の所説に對して、徹底的の批判を試むるの急務を痛切に感じたので、略ぼ材料をも蒐めて見た。

ところが其後間もなく、福田氏の人格に對する疑惑が世上の問題となつて來た。そして予自身もまた、雜誌『解放』創刊當時のいきさつなどで、此人格問題の導火線となつた事件に多少の關係を有してゐた。そこで斯ような形勢のうちに福田氏の學説を批評することは、勢ひ福田氏の人身に對する批評と混雜することを恐れたので、遺憾ながら當時此批評を中止した。

其後堺君は兩三回、福田氏の所説を批評されたので、予の批評の必要は大方なくなつた、

更に予が、福田説の批評を中止した有力な理由は、福田氏は自分自身の言論によつて、餘りに無殘に自説を破壞せられて居る。福田説の大伽藍は、それ自身の重みの爲に倒壞した、そして其異常なる音響は、何人の耳にも、餘りによく聞こえて居ると思つたからである。

そこで若し、福田氏の所説に對する批評が必要であるとしたならば、それは福田説といふ伽藍を倒壞する爲ではなくて、この倒壞した廢墟のあとから、値打のある彫刻の飾や、瓦のかけらなどを拾ひ上げて、建築者の功績を適度に稱揚することでなければならぬ。

二

半は忘れかけてゐた問題に新なる興味を喚び起したものは**云ふまでもなく、福田博士に對する河上博士の反駁文であつた**『改造』の二月號は『河上對福田問題』を主題としたが予もまた其批評の分擔者と定められてゐた。けれども有體にいふと、此問題に就いて云ふべきことは、殆ど河上氏の文中に盡されて居るのと、今一つは十二月中に兩博士の立會演說が催されるといふ話であつたので、旁々、予は十二月號の批評を差控へ、福田氏の駁論の駁論を聞いた上で、此問題に對する總勘定的の批評を受持つことゝなつた。

其後遂に立會演說の聽かれないといふ事は、少からず失望させた。その上、社會政策學會に於いて、福田氏の反駁演說のある前日に予は東京を去ることゝなつた。更に改造社より送られた『勞働組合と階級戰爭、併せて河上博士に答ふ』と題する講演の速記錄を讀むに至つて、予は更に大に失望を禁じ得なかつた。當日の福田氏の講演は——改造社で態々作られた速記錄に大した誤りがないとすれば——徹頭徹尾ちやらつぽこに終始したものである。『河上對福田問題』の總勘定を知らんとする人は、何人の批評に俟つよりも、恐らく當日の福田氏の講演筆記を讀むのが捷徑であらう。鬼面を以て借金取りを追ひ返した話は、吾々は之を鼻鹿から聞いて居る。若し借金取**りを追ひ返すことを以て、負債者の勝利であるとすれば、**『河上對福田問題』は、恐らく確定的に福田氏の勝利に歸したものである。何故ならば、河上氏がこの福田氏の駁論に對して、再度の駁論を試みられようとは思はれぬからである。然しながら借金取りが再び見舞はぬといふことは、借金の皆濟を意味するものではない。福田氏は當日の講演のうちに。

『……然し其總ての論點は、河上博士よりも以前に室伏君が論じられて居る、河上博士の舉げられて居ない事までも論じられた。現に河上博士と私の論點に就て改造と云ふ雜誌に種々の方々の御意見がありましたが、室伏君は更に新しい點を加へ、又新しい說明をも加へられて居ります……河上博士の議論は殆んど悉く室伏君の既に言はれた事ばかりである。唯河上博士は非常な人氣役者であり、少し段が違うと見えまして、河上君が之を書かれたに依り有力なる御議論になつた……』

と云はれて居る福田氏が斯んなことを云はれた動機が、河上氏に對する負債を輕少に見られる爲であつたか無かつたか、之は今更左樣な忖度をする必要はない。けれども同一の負債を、二人から催促せられることは、決して負債の責任を輕くするも

のではない。番頭の催促した負債は、既に已に其れ以前に、主人の催促して居る所のものに過ぎずと云ふ申譯は、畢竟其人の拂ひ汚たなさか、乃至は支拂不能を告白するに過ぎないものである。『河上博士の議論は、殆ど室伏君の既に言はれた事ばかりである』としたならば、福田氏にして室伏氏に對する負債をきれいに皆濟せられて居つたなら、河上氏によつて問題とせられることも無く、『改造』によつて問題とせられることも無かつたらう。

ところが福田氏によれば、其れ故に『學問上の論敵は寧ろ室伏君であつて、河上博士は臀馬に乘つて騷いだ』ものである。貸借上の當事者は主人である。番頭の督促に至つては、拂ひ汚ないもの丶罪ではなくて、臀馬に乘つて騷いだ番頭の罪である福田氏によれば、河上氏は室伏氏の臀馬に乘つたものである、『改造』は河上氏の臀馬に乘つたものである。そこで予は此批評を最少限度に止どめて、『改造』の臀馬に乘ることを最少限度に止どめたいと思ふ。

三

とは云へ、予自身も滿更この問題に少しの關係も無いとは云はれない。福田氏は

『……私は社會民主主義と云ふのは實行上の唯だ一つの方法である……目的を達する所の一の手段であると屢々申して居ります。之に對して日本社會主義者の或方（慥か山川均さんだつたと思ひますが）は、社會民主主義が方法と云ふことは初めに福田から聞くと云ふようなことを書いて居られます。成る程日本では初めてかも知れないが、世界では初め所か、一般に認められて居る所であります……』

と申されて居る。卽ち此點に就ては、予は福田博士から第一に、この世界的智識によつて誨へられるの光榮を擔ふたものである。尤も之については河上氏も、『博士より初めて之を聞くを得たる者は、其他にも恐らく少くあるまい』と云はれて、この最新智識の落伍者の一人たることを告白されて居るし、室伏氏も此點については、御多分に洩れぬお仲間であるから、聊か慰めることができる。

社會民主主義者に取つて、社會民主々義は目的であるか手段であるか、若し社會民主々義が究極目的であるとしたならば、此究極目的は勞働階級の階級的支配であるか、それとも階級の撤廢であるか。此問題は室伏氏によつても河上氏によつても、

充分に論定せられて居る。そして福田氏の當日の講演は、不幸にして毫しも之に對する答とはなつて居らぬ。そこで福田氏の講演は、『河上對福田問題』の總勘定の上には、先づ一錢の加ふる所も減する所もなかつたと云つてよい。何時何日には確たる返答に及ぶと云つておいて、其期に臨んで相變らず、借りた借らぬと云つて居るようでは、先づ支拂能力の無いものと見做して差支はあるまいと思ふ。

四

然しながら、假りに福田博士に從つて、社會民主々義は一つの手段に外ならぬとしたならば、其目的は果して何であらうか福田氏は斯う云はれて居る。

『社會民主主義運動は社會主義の總てゞはなくして唯 其の方法である。而も政治上の一の方法に外ならぬ。であるから目的を達すれば社會民主主義はなくなる……其ソーシャル、デモクラシーは決して人類の爲めに全人類を支配せんとするのではなくして、先づ第四階級の手に權力を取らうとする其事を主義とするので、最後の達せんとする所は同じ事であるが、其到達するに取る方法と手段は違ふ……』

そこで云ひ換へて見れば、社會民主々義は社會主等の手段である。そして此社會民主々義――手段――の目的は第四階級の手に權力を取ることである。故に一旦第四階級の手に權力を握つて仕舞へば、此手段の目的は無くなる。然らば其跡に殘されるものは何であらうか。此手段の目的の目的として跡に殘るものは何であらうか。前文を讀み下して見ると、福田氏の答は、其跡に殘されるものは『最後の達せ んとする所は同じ事 である』といふ、種々なる社會主義の分派の共通目的たる社會主義そのものであると云はれるものであらう。

種々なる社會主義の分派の達せんとする目的を同一であるとすれば、分派の相異は之に達すべき手段又は徑路の相異であるとも見做される。此意味から云へば、サン、シモン主義乃至サンヂカリズムと社會民主主義との相異は畢竟手段又は徑路の相異であつて、社會民主々義とは要するに、特殊なる手段又は徑路を表徵したものであるとも云ふことができる。けれども其れと同時に、手段又は徑路の相異は、必然的に、其目的又は到着點との間に有機的の關係を有することをも忘れてはならぬ。

そこで『河上對福田問題』に關聯して、吾々に取つて最も興味あることは、社會民主義が或意味に於ては目的と云はれ、或

意味に於ては手段と見做され得るや否やと云ふことではなくて、假に福田氏に從つて之を手段としたならば、此手段によつて達せんとする目的に對して、福田博士は如何なる態度を取られるかと云ふことゝである。尤も福田博士が社會民主々義を以て手段であると云はれる、其手段といふ觀念には非常な混亂がある。或場合には、社會民主々義とは、第四級民の專制といふ目的を達せんとする手段の意味でもあれば、又た他の場合には、『社會主義の總てゞはなくして唯其方法』である、『最後の達せんとする所は同じ事であるが其到達するに取る方法と手段は違ふ』といふ、社會主義實現の手段といふ意味にも用ひられて居るようである。そこで精密に云へば、吾々の最も興味を感ずることは、社會民主々義なる手段の目的の、其また目的に對して、福田博士が如何なる態度を取られるかと云ふことゝである。

五

福田博士は當日の講演のうちにも、自分が『社會主義者でないと云ふ事は、昔も今日と少しも變らない、曾て社會主義者であつた事もなければ、社會主義の言論をした事もない』ことを誇りとして、社會主義を取りつゝ、藉を社會政策學會に置く人々の卑怯を冷嘲せられて居るだけに、其所說は資本主義の擁護に終始して居ることは、吾々の夙に承認してゐる所である。然しながら福田氏の言論のうちには、往々にして社會主義者の言論と、頗る相近いものがないではない。福田氏の所說のうちには、何處かに突込んだところがある、何處かに他の經濟學者の徹し得ざる所に徹したところがあると云はれて居る。そして偶々そういふ點に於いて、福田氏の觀察や批評が、社會主義者のそれに相近いといふことも爭はれぬ事實である。予は其一例として、次の數節を掲げて見る。

『……封建時代に代つて起つた新社會が此身體財產の安固なるものを以て其存在の第一義と爲したは如何にも尤も千萬なる事であつた然るに此身體財產の安固なるものは身體を維持し財產を維持するの安固であつて何等維持すべき財產なきもの は此安固の保障によつて何の得る所はない……』

『現社會に不滿あり慊らずとするもの は畢竟此根本的不安の狀態に滿足せぬことの謂である。所謂個人本位の自由主義とは、其實有てるもの、即ち所有階級財產階級の自由主義有產者の個性の尊重であつた。有たぬもの即ち無產者の個性の尊重は毫も其中に含まれて居らぬ。所謂プロレタリア階級は其身體も其產も保護せられぬ。何となれば保護せらるべきものを有して居らぬからである。此社會の

政治も必竟有産者の政治である…所謂政黨等と云ふものも若干の**取除の外は悉く是れ有産者の機關であつて、無産者の利害とは殆ど**沒交渉である。議院政治と云ふこともプロレタリアの立場から云へば必竟一の權力機關に過ぎざるものであつて、彼等の存在に是非なくてはならぬ程の重要を有するものではない…。

然らば斯くの如き現在の社會にあつて、私法とは如何なる機能を司どるものであるか。

『私法制度の下に於ては財産を有する者は、其個性を尊重せられ自己の伸張を爲し得ると雖も、其なきものは個性を認められないも同じで、從つて何等の自己伸張を爲し得ぬ。否個性は滅却せられ自己は萎縮する一方あるのみ。所謂犯罪とは斯く個性の蹂躙せられた結果として起るもの最大多數を占めて居る…。然るに今日の舊社會は這箇有産者に對する侵擊として取扱ひ、之を制裁するに其標準よりして爲すのである。…於玆乎法律は主として有産者を無産者──其或もの──に對して擁護する所の手段となり…生活の安全は却つて爲に妨げらるゝが如きことも往々にして起る…

然らば教育は如何。

『今日の教育は有産者を無産者に對して擁護するに必要なる道行を教へ込むに過ぎぬ。所謂市民教育とか自由教育とか云ふもの皆然りで殊に我邦でよく人の口にする常識教育、紳士教育と云ふものは包まず蔽さず有産者擁護の教育たることを標榜して居る…』

これは『新社會とは何ぞや』と題する文中の數節であつて、固より之を以て、福田氏を社會主義者と謬り認むべき理由の無いことは云ふ迄もない。けれども世間に若し、福田博士を以て資本主義の反對者と誤認するものがある、若くは日本の社會主義のうちに福田博士に多少の期待を有するものが曾てあつたとしたならば現代社會に對する以上の如き批評と觀察とは、確かに此誤解の因を爲したものであるに相違ない。そして當時この全文が、堺利彦氏の主宰する社會主義の機關雜誌に轉載せられたことなども、萬更ら謂はれない事とは思はれぬ。

六

然らば福田氏の求められる『新社會』とは如何なるものであるか。

『斯く舊社會の根本立場が身體財産の保障てふ社會大多數にとつては全く無意味にて風馬牛なる事柄に存して居ることが、之を不滿足とす可き理由があると分つたら、新社會に向つて要求す可き事は先第一に此處理を破壞し、新道德原則を打立つるとにある可きは多言を要すまい。即ち有名無實なる身體財産の保護を廢して、代るに名

實相具はつた生活の安固を以て根本原則とする新社會を要するのである。』

之は誠に多言を要しないところであるが、然らば如何なる社會組織が、斯くの如き『名實相具はつた生活の安固』を實現するかは、必ずしも多言を要しないことではない。

福田博士の、この新社會とは、政治的デモクラシーに對する『産業的デモクラシーの社會であるようにも思はれる。博士は『新しい意味のデモクラシー』を説明して、『此新しいデモクラシーとは人文の一切に渉りての解放と勝利とを意味するものである。下層無産の大多數に取つて人文の勝利とは先以て經濟上の安固、生活の保障即ち予の常に主張する生存權の認承が與へられるのでなければならぬ。從て先以て經濟上のデモクラシーとなつて顯はれる。英米人の所謂インダストリアル・デモクラシー是れである』と云はれて居る。

然し誤つてはならぬことは、福田氏のインダストリアル、デモクラシーとは、決して資本主義の政治的デモクラシーに對する、社會主義の産業的デモクラシーのことではないと云ふ一事である。福田博士に從へば『或は僅ではあるが』この新社會實現の『根本に觸れた又は觸れんと欲して居るもの』は實に社會政策である。玆に於てか社會主義は一個の競爭者に出會した譯である。社會主義は傲慢にも、自らこの『根本』の解決を握つて居ると信じて居る。ところが玆に謙遜なる福田博士の社會政策が顯はれて、『僅ではあるが此根本に觸れ』又は『之から縱る〳〵觸れんと欲して居る』のである。

然らば社會政策は、社會主義に代つて能くこの『根本』の或物と約束するかといふと、福田博士によればそうではない。博士は『日本に社會主義起るか』と云ふ問に答へ、『社會政策が十分に行はるれば、社會主義起らさる可し』といふ意見を排し、『社會政策は社會政策の任務を有し』『社會主義の代用物ではない。其競爭者でもない。』そして福田氏が『社會政策の完成を以て一生の研究事項として居』られるは、『其れは社會政策さへ完成すれば、社會主義は發生せぬと信じて居るからではない』のである。然らば社會政策の『任務』とは一體何であるか。斯かる疑問を起すことからしてが、餘りに實利に墮した俗人根性である。昔ボーロはアセンスに往つて、希臘人が『知らざる神へ』として供物を捧げて居るのを見て怪人だといふことであるが、吾々は、この何だか分らぬ『任務』の『完成』に一生を獻げられる福田博士の學者的良心に對して愧死すべき

である。

斯ように福田博士の社會政策は日本に社會主義の起ることゝ如何ともすることの出來ぬものである。卽ち、福田氏の社會政策は、社會主義を禦ぐことは出來ないものである。けれども幸に社會主義と『戰ふ』ことは出來るものである。社會主義と『戰ふ』べき道具とはなり得るものである。博士は斯う云はれて居る。『社會政策如何に十分に行はれても……之を禦ぎ得ないのである……唯だ社會主義が日本に起り來らば、予の學問上の所信を以つて、學問上の手段に訴へて、飽迄此れと戰ひ得ん爲めに勉强しつゝあるものである』。そして今や其時が來た。博士は今や勇敢に戰はれて居る。博士は『日本に社會主義起る可きや』と云ふ問に對しては『將來の或時期に到るときは、事物の自然に放任して置いても、我邦に社會主義は起ることゝ信ずる』と答へられて居る。卽ち博士は、究極の敗戰を覺悟せられて居る。味方の敗戰を覺悟しつゝも、尙ほ資本主義の大戰の爲に、刀折れ矢盡きて止まんとせらるる博士の心事は、卽ち楠公の心事である。博士の覺悟や悲壯である、と謂はなければならぬ。けれども社會政策は、資本主義の爲に、終に社會主義を『禦ぐ』ことは出來ないでも、能く『戰ふ』ことが出來、擊退**することは出來ないでも、幾日かを沮支することが出來、之を**『撲滅』することが出來なくとも、之と『對抗』することが出來るとせば、博士の社會政策と生存權哲學の呪言とは、斷末魔の資本主義に際して、甚大の『任務』を『完成』するものであつて、博士も亦た以て瞑すべきであらう。

七

斯ように福田氏は、日本に必然に社會主義の起ることを信ぜられ、そして社會主義が日本に起り來らば、『學問上の所信を以つて、學問上の手段に訴へて』『飽く迄之と戰』はんが爲に『勉强』せられて居るさうである。そして此戰ひを名づけて、社會主義者は階級鬪爭とは申すのである。戰はんとして居るのは、恐らく福田博士ばかりではない。或人は『武力上の所信を以つて、武力上の手段に訴へて』『飽く迄之を戰はん』が爲に『調練』をして居るかも知れぬ。又或者は『財力上の所信を以つて、財力上の手段に訴へて』『飽く迄之と戰はん』が爲に『蓄積』をして居るかも知れぬ。或ものは劍を磨き、或ものは教室に立ち、或ものは監獄を建て、或ものは社會政策の哲學を講じ又或ものは勞資協調會を設立する。其『所信』と『手段』とは

各々異なつて居る。この主觀に於ては雜多を極めた戰ひを、一樣に階級鬪爭といふ客觀的の一範疇に歸約し、そして其うちに社會進化の機制を見出したことは、福田博士說によると、並行線と雖も無限に進步すれば、何處かで切れ合ふものださうである。そして並行線の切れ合ふべき時は、今や到來した。

そこで福田博士は社會政策といふ『學問上の所信』を以て——社會政策は到底社會主義を禦ぐことは出來ぬ、從つて日本の將來には必然に社會主義が起るといふ所信——を以て、『學問上の手段』によつて『飽く迄で』社會主義と『戰』はんとして居られる。それは『撲滅』ではなくて、博士に從へば『對抗』である。尤も英國社會民主同盟のリエルチといふ人は、『社會黨の戰術は、投票函より爆彈までを含む』と放言したことがあるが、福田氏の『學問上の手段』による戰ひ——即ち對抗——なるものも、之に劣らぬほど、可成に廣い意味を含んで居るらしい。曾て福田氏は、河上博士がマルクスの『賃銀勞働と資本』を反譯せられた折、其原本が宣傳用の通俗本であつたことを指摘され、河上氏は學問研究の立場に隱れて、社會主義の宣傳をやられるものであると非難せられたことがある。若し官憲が河上氏の『社會問題研究』を以て福田氏と同じく宣傳機關と見做し、相當——乃至は不當——の處分をしたならば、福田氏は定めし我意を得たりとせられたであらう。河上氏に答へられた社會政策學會の講演のうちにも、福田氏は次の如く力說せられて居る。

『……餘程以前に私の見た宣言には「吾人は放任主義に反對す吾人は社會主義に反對す」と云ふことが書いてあります……若し之が生きて居る所の問題であるならば、社會主義に反對すると云ふ宣言の下に、社會主義を主張して居る所の會員が、晏然として入つて居られない筈である……私が論敵として不肖ながら相見えやうと云ふ同君が社會主義者であると云ふ事を言明して居ります、夫れは同君の社會問題管見と云ふ書物に依つて明かである……河上君も社會主義者であります、而して同君が社會政策學會に退會屆を出してあるかも知れませぬが、私の耳には未だ入つて居りませぬ。又學會に於きましても河上君に退會を要求すると云ふことを仰しやつた方は一人もないやうに存じて居ります……』

リエルチの戰術が『投票函から爆彈まで』を含んだやうに、つまり福田轉士の『學問上の手段』による對社會主義の戰爭には、論敵たる社會主義者に對する、行政權乃至は司法權の發動の要求より、學者仲間からの推賞を怠らざるマルクスの學理的功業ではなかつたか。

福田博士は、資本制度の社會にあつては、社會主義の起ることを以て、**「必然」と信ずる學者である。けれども資本主義の**擁護の爲には、この『必然』に對してすら『飽く迄戰はん』とする人も福田博士である。そして此戰爭の武器は社會政策である。尤も福田氏は『社會政策とは何ぞや』といふ問を掲げて、『二つの並行線は之を進歩して往くとも切れ合ふと云ふことはない。社會主義と社會政策とは決して切れ合ふといふことのない並行線で、何處までも間隔をもつて居ると云ふことは私は確信して居る』と云はれて居る。福田博士の社會政策は、社會主義に對して、並行線の態度を取るものである。或時は味方の如く、或時は敵の如く、不即不離の間隔を保つて、何處までも切れ合はずに進んできた並行線である。然しながら學者のこの黒衣をまで含んで居るかの如くに見える。福田博士は社會主義を『撲滅』せんとするものではなく、『對抗』せんとするものだと云はれて居る。たゞこの『對抗』の爲には、福田氏は警察と裁判と監獄と、言論に對する無形の壓迫とを味方とすることをも怪まれぬであらうか。福田博士は、資本家階級が有する現存の機關を以て社會主義に『對抗』して居る如く、棍棒による社會主義の『撲滅』以外の、一切の『學問上の手段』に訴へて『對抗』せられんとするのであらうか。

八

福田博士は今日のデモクラシーが、少數有產階級のクラシーであるが如く、第四階級のデモクラシーも同じく階級的のクラシーであつて、共に眞正のデモクラシーではないと主張せられて居るが、此點に於ては、レニンは恐らく、何人よりも多く、福田博士の共鳴者である。レニンは斯う云つて居る如何なる資本主義の國土に於ても、一般的のデモクラシーなるものは曾て實現せられたことはない。ブルジアの、デモクラシーは、ブルジアの獨裁政治であつて、プローレタリアのデモクラシトは、プローレタリアの獨裁政治であつて、共に階級的のデモクラシーである。階級的の獨裁政治である。そして福田博士もレニンも、共に共目標として居るものは、是等の階級的のクラシーを超越した、全人民のデモクラシーであつて、レニンは之を一般的のデモクラシーと名づけ、福田博士は之を『眞正のデモクラシー』『新しい意味のデモクラシー』と名づけられて居る。そしてレニンも福田博士も、共に斯くの如き『眞正のデモクラシー』を要求する運動の現に存して居ることを認めて居る。そし

て福田氏は之を『對抗』乃至は『戰い』と名づけられ、レニンは之を階級闘爭と呼んで居る。そして福田氏は斯くの如き『對抗』によつて『眞正のデモクラシー』の實現を企てられるし、レニンも亦た、斯くの如き『對抗』の過程が『眞正なるデモクラシー』の現實に導くと主張する。そこで福田博士とレニンとの異るところは何處にあるかと云ふと、レニンは此の『對抗』の頂點に於て、一時、プローレタリアのデモクラシー（即ちプローレタリアの獨裁政治）が出現し、之によつて初めて『眞正のデモクラシー』が實現せられると主張するに對して、福田博士は『眞正のデモクラシー』を實現する爲には、『眞正のデモクラシー』を以て手段としなければならぬと力説せられる。そこでレニンと福田博士との間の相異は、極めて大きいやうで、而かも極めて微妙なことになるのである。

レニンは最も極端に階級闘爭を主張する人であつて、福田博士は絶對に階級闘爭を否定する人である。けれども此二つの主張を比較する時に、其相異は、階級闘爭そのもの丶承認と否定との間にあるのではなくて、寧ろ戰線の何づれの側に立つて戰ふかと云ふことに存することを發見しないであらうか。

社會民主義の階級闘爭説に對する福田氏の非難に就ては、河上博士は『かくては、本當のデモクラシーが實現された後でなければ、本當のデモクラシーを實現すべき手段方法として博士の承認を經べきものは無くなるやうであるか、其はどうしたものであらうぞ』と云はれて居る。『窮極の目的に達する手段其ものも亦た常に必ず本當のデモクラシーに據らなければならぬ』と主張せられることは、事實に於ては、現在の被壓制者より一切の解放の要求を禁止することに外ならぬ。そして福田博士は其爲に『對抗』したり『戰』つたりすることを畢生の事業とせられるものとせば、博士は階級的闘爭の、何づれの側を助けられて居るものであらうか。階級闘爭とは、必ずしも暴力の爭ひを指すものではない。否な寧ろ階級闘爭の大部分は却つて思想上の『對抗』となつて現はれるものである。その如く階級闘爭とは、必ずしも階級的に意識せられたる『對抗』のみを指すものではなく、却つて其大部分は――少くとも過去にあつては――意識せざる『所信』となつて現はれたものであることを忘れてはならぬ。

九

マルクス學者なる福田博士が、マルクス學の階級闘爭といふ

思想に對して、如何なる理解を有せられるかは、當日の講演に於ける勞働組合論を拜讀しただけで明瞭である。

『……添田先生は英國は今日尙ほトレード、ユニオニズムの國であると仰せられましたが、私は夫れを否定せんと欲するのであります。若し英國がトレード、ユニオニズムの國であり、戰爭前の如くであるならば、添田先生が非常に怖るべき事として指摘せられ、吾々にも亦非常に怖るべき事と考へて居る所の、彼の三角同盟の如きものが、彼のやうな勢ひを持つ氣遣いは決してないと私は信ずるのであります。英國に於て三角同盟運動が大變た勢力となり、又其他の非トレード・ユニオニズムの運動が盛んになつて來たと云ふ事は、此度びの大戰爭に依つて、數十年間先輩が折角築上げた所の、堅實なる英國の勞働組合が殆ど破壞せられた結果に外あるまいと私は見て居るのであります……

『……勞働組合が今や正に階級戰爭化しつゝあると云ふ事は、非常に惡い事であると考てる……今日の勞働が契約關係であると云ふ事を顚覆するのではなくして、此契約關係であると云ふ事が眞正である。……今日の勞働關係が契約關係であると云ふ事を根底から覆すと云ふ事は、私の信ずる所によれば、勞働關係は惡化するのであつて、之れを良化するのではない。之を醇化する所以ではない。契約關係を神聖なる契約關係とすると云ふ事が、勞働運動を健全にし眞摯なるものであると信ずるのであります……

『……然るに此勞働組合は、形は勞働組合であるけれども、併しながら其精神たるや一度び階級戰爭といふ色彩を帶ぶるに至らば、勞働關係の醇化と云ふ事を妨け、吾々大いに害するものであると云ふのが私の信じて居る所であります……

吾々は先づ、英國に階級鬪爭てふ事實、乃至は思想を離れたトレード、ユニオニズムが戰前の英國に存在して居つたといふ、勞働組合史上の一大發見に對して、博士に感謝しなければならぬ。それは博士の恩師『ブレンタノ先生』が勞働組合の起源は中世のギルドであるといふ大發見よりも、一層大なる發見だからである。

次に日本の勞働者は、福田博士に對して、今日の契約關係——賃銀制度——の廢止は、勞働關係を惡化するものだといふ敎訓に對して感謝するだらう。博士によれば、『健全にして眞摯なる』勞働運動とは、賃銀制度の廢止を目的とするのではなくて、賃銀契約關係を神聖にすることである。そして勞働組合が一度び斯くの如き理想をもつようになれば、それは『形は勞働組合であるけれども』、實は『勞働關係の醇化』を害するものである。然りそれは明かに賃銀制度の上に立つ『勞働關係』

の融化を害し、賃銀契約關係を『神聖』にすることを妨げるものでなければならぬ。

福田氏の勞働組合、若くは勞働組合主義とは、要するに現在の賃銀制度の支柱たることに滿足するものである。そこで英國に於ける最近の組合の傾向は、福田氏には勞働組合主義の當然の發達とは映じないで、其破壞と見るのである。福田氏は『事實は愈々益々トレード、ユニオニズムの國でなくなりつゝある。少しも戰爭前の狀態は戻らない。仍で多くの學者……は勞働組合狀態の恢復を如何にすべきかと云ふ事に苦心し』て居ると歎聲を放たれて居る。ロイド、ヂョーヂ等が戰時に於ける生產高增加の必要上、戰爭の終了と同時に、精密に戰前の狀態に復せしめると云ふ公約を與へて戰爭中、組合條件（組合と傭主間の勞働條件）の停止を見たことは人の知る處であるが、戰爭による產業狀態の變化は、是等の組合條件は實際上に於ても復舊が不可能となり、政府資本家に於ても、之が復舊の意志がない爲に、組合界の問題となつたことは事實である。けれども福田博士の云はれるが如き意味に於いて、英國の勞働組合そのものも戰前狀態に引戻そうといふが如き、驚く可き大事業の企てられて居ることは初耳である。若し此種の『勞働組合狀態の恢復』が學者の問題となつて居るとしたならば、吾らは福田氏が其等の學者が階級鬪爭の戰線の、何づれの側に屬する學者であるかを言ひ落されたことを遺憾とする。

斯くて兎も角英國は、福田博士に從へば、トレードユニオニズムの國では無くなつたのであるそして『勞働組合にして、英國流のトレード、ユニオニズムの形に於て堅固に其所に存在して居るのならば、今日世界を脅かしつゝあるやうな勢ひを云ふものは、斯くの如くに增大しないものであると云ふのが』福田博士の當日の『お話の抑々の出發點』であつたと云はれて居る。此お話を承はる者は、何んと雖も、前段に引用した『今日の舊社會は這箇有產者に對する侵擊を直ちに社會共者に對する侵擊として取扱ひ、之を制裁するに共標準より爲すのである』と云ふ博士の金言を想起して、勞働組合の惡化によつて脅やかされて居る世界とは、人間の世界であるが、それとも資本家の世界であるかと反問するに違ひない。

斯ような變化は、英國に行はれて居るのであつて、英國は實に福田博士が『……新社會到來の機運は刻一刻熟しつゝある。英國は世界の最先覺國である』『……時々刻々熟し來る所の新社會——而して此機運は世界の最大文明國たる英國に於て最も

早く熟しつゝあるは疑ふ可らざる所である――』と云はれた、其英國である。福田氏は英國最近の形勢のうちで最も顯著なる勞働組合界の變化のうちに、『此機運』の成熟を見られるであらうか。英國の勞働階級は、福田博士の敎訓に從つて、永久に賃銀奴隷の契約關係を神聖にすることも『先覺』したのであるが、それとも永久に、其鐵鎖から自己を解放するの途を『先覺』したのであらうか。

十

謂ゆる『河上對福田問題』は既に過去の問題である。何故ならば、室伏、河上兩氏の駁論と批評とが決定的のものであつたばかりでなく、社會政策學會に於ける福田氏の駁論の駁論は、畢竟するに、兩氏の駁論と批評との決定的のものであつたことを裏書したに過ぎないからである。福田說を批評することは無用である。そこで予は、『改造』の『尻馬』に乘り、若くは乘せられて、改造社から送られた講演筆記と其他の極めて僅少な材料とによつて、倒壞した廢殘物のうちから、再び伽藍の面目を伺ふことのできる小模型を作るといふ、建設的事業の一端を試みた。そして其れが如何に資本主義の爲に、價値ある建築物であるかを瞥見した。

此頃吉野博士は『中央公論』の誌上に、『何某の時代とは何の故ぞ』と題して。

『近頃よく某々氏の時代去つて某々氏の時代來る、と云ふやうな事が流行る。其中でも最も我々の眼についたのは、福田時代去つて何上時代來ると云ふ事である……一時此事に拘らず、何某の時代去つて何某の時代來ると云ふやうな事は、場合によつては大いなる誤解を學界にも又實際界にも流すの虞があると思ふ……』『それよりも我々が最近の社會問題の論じ方の風潮を觀て著しく感ずることは、唯物主義的の改造論の時代が過ぎて、理想主義的の改造論の時代となつたと云ふ事である。時代の變遷は人にあらずして根柢の思想其物にある。世の中が政治上の形式問題から社會生活の實質問題に入るに及び、一部の唯物主義的社會改造論者などが我輩の時代來れりと得意氣に叫んで居る間に、時代の要求は彼等を葬つて理想主義の立場を後援して滔々たる大勢たらしめて居る。今日は果して何人の時代か、心ある者は恐らく其判斷を誤らぬであらう』

と極め付けられて居る。吉野博士は學的乃至は紳士的態度を尊まれ、何某と云はれて居るが、何人も之を讀むものは、博士が特に『改造』誌上の堺利彥氏の一文を指されて居ることに氣づくであらう。若し何某の時代と云ふことが、單に新聞雜誌の上

に於ける『流行』を意味して居るとしたならば、之れほど人心の輕薄を現はし、言論機關の間に瀰漫するコムマアシヤリズムを曝露したものはなく假りに此輕薄な態度を以て、持て囃やされる當人となつて見たなら、之れほど不快なことはあるまいと思ふ。此意味に於て予は博士の說に贊成し、此種の言表はしには注意したいと思ふ。

けれども吉野博士自ら『今日は果して何人の時代か、心ある者は恐らく其判斷を誤らぬであらう』と云はれたやうな意味ならば、何某の時代と云ふことにも大に意義がある。堺氏が『福田時代』『河上時代』と云つたのは、吉野博士は孰づれの意味に見られるであらうか。

それは兎もあれ、『政治上の形式問題』が、社會政策や溫情主義と同列に、最早や過去の問題となつた事だけは、心ある者は恐らく其判斷を誤らぬであらう。（九、一、一九、旅行先きに於て）

勞働の享樂化

慶大教授　野村兼太郎

一

近世の哲學はデカルトに始まる。彼が一切の不明瞭なるものを否定し去つて、疑つて遂に疑ひ得ざる眞理、「我思ふ故に我在り。」(Cogito, ergo sum) なる結論に到達したることは世間周知の事實である。「我あり。」と云ふ事實。吾人の議論も亦此の點を出發點とせざるを得ない。勿論こゝに自我の存在と云ふも深く哲學的檢討を試みやうと云ふのではない。唯單にこゝに我なる一個の人間の存在をさへ承認すれば、それで充分である。然し乍ら此の我の存在と云ふ事實が、直ちに我は生きざるべからずと云ふ結論の根據とはなり得ない。云ふ迄もなく現在生きて居る自分が更に生き得ると云ふことは願はしいことに違いない。されど願はしいと云ふだけを以つて、直ちに是を權利として生きざるべからずと主張することは出來ない。單なる生存と云ふ事實からしては生存權は生じて來ない。すべての生物は生きんことを希望し、且つ生きんと努力して居る。然し單なる Sein は Sollen となることは出來ない。Sein Sollen となるには、なるべき理由が其の根本に存在して居なければならない。

自己の生存に最も適應せる生活狀態を獲得せんとして努力するは、敢て人間のみに止まらない。自己を保持し自己の生存を全ふせんがためにはすべての生物は死力を盡して爭鬪する。蓋し自己保存の觀念はあらゆる生物にとつて最も强烈なる本能であるからである。自己の生命を維持するが爲めには他を排して如何なる手段を採ることをも厭はない。これあらゆる生物の衝動的生活に於ける必然的傾向である。此の點に於ては最高等動物たることを誇る人類と雖も、他の生物と何等異なる所はない同じく偉大なる運命の支配を受け、同じく其の環境（メリユー）の影響に支配され、出來得る限り生存せんとして努力する。椽の下の日光もよく當らない所にでさへ、悲しい果敢ない生を享けんとして努力する雜草を見る。運命の女神に幸薄き境涯の人と雖も、同

じく自己の生命の爲めには萬難を排して努力する。

斯の如くすべての生物は其の生に執着すること極めて激烈である。されど斯くあるのみにては未だ生存權を主張すべき何等の論據もあり得ない。所謂適者生存、强食弱肉である。且つ斯の如き自己保存のみを以つて吾人々類の生活の本體とするならば、事實吾人が單なる一動物に過ぎずして、最も生存に適せる者は恣に自己の威力を發揮することだらう。そして又他の動物植物等を有つて居ないことになる。若し己人にして他の動物と異つて生存權を主張し得るとするならば、必然生存權を主張するに足る何等かの理由が存在しなければならぬ。即ち單に自己の生命保存と云ふ本能的生活以外に更に一層意義ある何ものかゞなければならない。吾人が生存權を主張せんとする所以は自己保存の生活以外に、ある價値ある生活を認むるが故である。アントン、メンガーの云へるが如く、單に生存欲望の充足を以つて生存權の根本なりとするは、未だ充分なりと思考し得ない斯の如く欲望の充足を以つて財分配の根本原則とし生存權を樹立せんとするは、餘りに唯物的觀念に捕はれたるものと云ふべきである。勿論現在の資本主義的社會制度は此の點に就てすらすでに大なる缺陷を持つて居る。然し乍ら生存權を確認する所以は物的欲望の充足そのものに存するのではない。云ふ迄もなく生存權を實際的に施設するに當つては、先づ物的欲望の滿足を以つてすることが絕對的に必要なる條件である。けれど更に斯の如き欲望滿足を要求し得る吾人の權能は何處より得て來たのか。これ吾人の問はんと欲する所である。それは單に生きて居るが爲めではない。吾人自身が何等かの目的に向つて進む、換言すれば人類の歷史的過程が一の價値づけてゆく行程であると云ふ事實の爲めに外ならない。これを他の方面から見るならば吾人には單に自己保存のみを以つて滿足し能はざるあるものゝ存して居ると云ふ事實があるからである。即ち如何なる者と雖も、自己の生命を持續せんと欲する以外に自己自身の發展を望まない者はない。勿論高尙なものもあれば淺薄なものもある。各人各樣であつて一概に云ふことは出來ないけれども、兎に角食つて生きて行けると云ふ丈けでは滿足せずして、よりよき生活を求めて止まないことは事實である。其のよりよき生活を以つて他人に自己を認めしやうとする者もあれば、自己の有する才能力量を充分に發揮することに自己滿足を發見し、敢て他人の是を認むると否とを問はない者もあらう。美しき衣裳を着し衆目を引かんと欲するのは其の極めて淺薄な原始的なものであ

る。自己の一身を投げ出して社會の爲めに盡さんと欲するものも亦其の一つである。斯の如く積極的に自己を主張するもの丶外に更に消極的に自己を主張するものがある。即ちかの聖人の如き自ら世を避け、彼自身の享樂を事とし、他に知られざらんことを求むるも是亦一の自己主張に外ならない。獨り繪畫彫刻を眺め、音樂を聞いて享樂的生活をなし、全く世間に知られざる者と雖も、其の人自身にとつては自己を充分に發現しやうとした一方面であつて、同じく自己主張の一形態である。斯の如き自己主張の方面こそ吾人が他の動物と異なる所以であつて、食ふことゝ生むことゝの以外に吾人の生存を要求する根本である。然らば斯の如く各國個人々々が互に自己主張をなし、全然歸一すべき所は全く皆無なのか。即ち各自の才能力量の發揮は何を標準として來たるか。これ吾人の生活の前提に文化を豫想し、其の究極に文化價値の存在を假定するが故である。各人の自己主張はよく文化價値實現の過程に對して適應せるや否やに依つて、其價値が決定される。萬種萬樣の社會現象は斯の如き文化價値に依つてのみ統一され歸一される。而して各人の自己主張が各々相異なる色彩を有する所以は、勿論各個人々々の天賦の才能如何にも據るけれども、各人の完全なる自己主張が其の者自身の内に於ける一の價値完成であつて、而して其の個々の價値完成が或ひは經濟的に或ひは宗教的に或ひは藝術的に色彩づけられて居るからである。例へば藝術家は其の藝術品の完成を以つて價値完成の唯一の途であると信じ、其の藝術品の完成を以つて自己を他に誇示せんとするか、若しくは絶大の自己滿足を體驗するのである。然るに他方社會の改良を以つて畢生の事業なりとし、其の點に價値完成を認めて居る者にとつては斯の如き藝術品は殆ど一顧に價しないことがあり得る。斯く各自違つた所の價値認識を以つて自己主張の中心觀念とすることはあるが、それは文化價値に對する各自の立場の相異に外ならない。詳細の議論は暫く他の機會に讓る。こゝには上述せるが如く吾人が生存權を要求し得る所以が一に吾人が斯の如き文化價値の建設者の一人であると云ふことに存すると云ふに止めて置く。

二

吾人が社會に生活するに當つて一の認識目的として文化價値を認める。而して上述したやうに各自違つた色彩を有し、各々それ自身に依つて其の價値完成を行はふとして居る。斯くて直

接には充分なる自己主張を果たさんが爲めに、間接には文化價値の完成の爲めに各々努力し力作(エキザーション)して居る。此の努力力作を稱して勞働と云ふ。經濟學上勞働と云ふ時も、又世間で所謂勞働と云ふのも、もつと狹い意味である。勞働問題と云へば吾人は直ちに所謂筋肉勞働者を連想する。勞働組合と云へば坑夫や職工のやうな勞働者の團隊を思ひ浮べる。けれどもすでに英國に於て生じて居るやうに自由職業者(プロフエッション)の勞働組合なるものが組織さるに至れば最早や勞働と所謂筋肉勞働者にのみ限る必要がない。從つて勞働の意義も擴大されてその筋肉勞働であると精神勞働であると區別する必要はあるまい。吾人がこゝに文化に貢獻あるすべての力作を勞働と云つても必ずしも不當ではあるまい。

其の意識的に文化に貢獻ありと思惟すると否とは問ふところではない。故に車夫の車を引く努力も、學者の研究も、企業家の努力も、すべて一の勞働である。學者が研究するるのは其の研究の結果が其の努力より生ずる苦痛よりも遙かに大なるが故である。云ふ迄もなくこゝに研究の結果と云ふのは物質的報酬を指して云ふのではない。研究の結果そのものから生ずる樂しみである。故に學者の努力は此の樂しみを獲得せんとする一の享樂の途筋に外ならない。資本家が其の所謂資本主義的精神よりして、より多くの貨幣獲得を希望するのは彼等が其の貨幣獲得そのものより生ずる喜びを樂まんが爲めである。筋肉勞働者が勞働するのはそれに依つて得たる賃銀を以つて更によりよき生活を享樂せんが爲めである。故にあらゆる勞働は其の行程に於て苦痛が存するかも知れないが、其の終局する所享樂の手段たるに過ぎない。(勿論こゝに云ふ享樂は惡い意味の享樂ではない。すべて自己主張を滿足せしむること、換言すれば一の價値を幾分なりとも完成することを享樂と云ふ。)然り學者は彼自身の努力より生ずる苦痛は殆ど問ふ限りではない。資本家も彼の心痛や努力を其の資本の集積に對する喜悅の情に比較すれば殆ど物の數ではない。然るに獨り所謂勞働者のみ其の苦痛を補ふに足らぬのは如何なる譯であらうか。經濟學上苦痛なるものが所謂勞働の一要素として說かるゝ所以は何處にあるか。

學者が研究するのは研究自身が目的である。恰も藝術家が其の創作に從事すると同じく仕事それ自身がすべてゞある。換言すれば其の研究の結果は研究そのものと共に自己主張に外ならない。資本家が資本を蓄積するのは資本の蓄積そのものが目的である。而して資本家はそれに依つて自己主張を全ふせんと欲し

て居るのである。故に是等の人々にとつては勞働そのものは苦痛ではあるが厭ではない。其の苦痛は享樂的苦痛である。從つて何も八時間勞働に制限する必要は毫もない。否十時間、十二時間、若しくは身體の健康が許すならば廿四時間絶えず勞働するも一向差閊へないのである―否寧ろ其の最も希望する所である。却つて身體の續かざるを嘆じ、精力の薄弱なるを憤る位である。然し所謂勞働者の勞働は是と選を異にして居る。彼等の勞働は勞働それ自身が彼等の目的でないことは云ふ迄もない。彼等の目的は勞働に依つて得る賃銀である。而して勞働そのものは目的でないのだから、從つて彼等の意思が喜んで働くべき筈は殆どあり得ない。加ふるに其の目的である賃銀は彼等の自己主張を全ふするには餘りに少ない。僅かに彼等と其の家族の生存を維持するに足るに過ぎない、若しくは低級な娛樂を求めるに足る程度の賃銀と時間とより與へられて居ない。こゝに於て所謂勞働者の勞働は遂に其の苦痛を補ふべき何ものをも持つて居ないのである。其の勞働自體は彼等の目的でなく、其の齎す結果は自己保存を維持するに過ぎない。自己の生命を維持するだけなら牛も馬も是をなす可能性を持つて居る。勞働者が人間であるならば、何處にか人間として自己主張をなすべき餘裕を持つ必要がある。若し所謂資本家の内に貨幣の獲得を目的とせず、ある種の不得止事情から其の仕事に從事して居る者があるとしたら、其の苦痛は所謂勞働者のそれと變る所はない。

若しこゝにある者があつて勞働者は自己主張をなすの權利もなく才能も持つて居ないと斷ずるとする。斯の如き斷定は何處より來たのであるか。前述せるが如く吾人々類が生存すると云ふことは各人が各自に其の天賦の才能を發揮して文化價値の建設に努力せんが爲めである。然るに一部の人間は其の權利を持つて居るが、他の者は是を持つて居ないと云ふ差別を何處に求めんとするのか、單に無資産なる勞働者なるが故に斯の如き自己主張の權利を有せずと云ふのなら、此の議論に對して吾人は首肯することは出來ない。境遇の善惡が直ちに人の素質の善惡と同一であるとは云ひ得ない。あらゆる人類は其の有する才能力量を以つて文化に貢獻せんと努力する權利を有つて居る。從つて生存權を主張することが出來る。此の點に就て甲を棄て乙を取る權限は何人にも與へられて居ない。勞働者も亦生存權を主張し、單なる自己保存に止まらずして自己主張を全ふする權利を持つて居る譯である。すべての人は平等でなければならない。

唯文化建設の事業に對する功績は各人の天賦才能に從つて

一樣であることは出來ない。然し乍らそれを獲得する機會は出來得る限り均等に與へられなければならない。

三

然らば如何にして此の勞働より生ずる苦痛を除くべきか。否先づ果して苦痛を除き得るや否や。

如何なる勞働も苦痛を伴はぬものはない。學者藝術家の勞作にも苦痛はある。然し乍ら此の苦痛は前にも云つたやうに享樂的である。それは學者の研究、藝術家の創作には自己の意思が働くからである。そこに彼等自身の獨創があるからである。換言すればそれに依つて彼等は自己を主張し得るが故である。彼等自身の世界に於て一の價値完成を遂行しつゝあるが故である。故に所謂勞働者の勞働をして苦痛なからしむると云ふのは此の種の勞働そのものをして自己主張の手段たらしむるにある。即ち彼等自身の獨創を發揮せしむるにある。けれどもそれは果して可能性のあることだらうか。

翻つて現代の生産組織を眺める。今日の資本主義的生産組織所謂現代の企業組織が如何なる點より見るも中世以前の產業組織より劣つて居るとは思へない。企業化に伴ふ缺陷、機械化に伴ふ危險、すべてのものを貨幣化して見る弊害、强烈なる營利心より生ずる人道の無視、さうした種々樣々なる多くの缺點はあるにしても、尙ほ吾人は現代の生産組織を棄てゝ、中世紀の主從關係的な、所謂我が國識者のある者がしきりに讃美する恩惠的な組織を有する家内工業の時代に戻りたいとは思はない。假令クロポトキンが相互扶助の美點を擧げて中世紀の諸制度を力說讃美しやうとも、俄かに是に贊成することは出來ない。文化は確かに中世紀より進歩して居る。唯に物質的方面に止まらず精神的方面に於ても進歩して居ると云ひ得る。世は末世でもなければ澆季でもない。將來の文化發展を豫想する文化の絕頂にある。素より物價騰貴に伴ふ生活難より生ずる幾多の悲慘なる出來事、宗教道德の腐敗より生ずる醜惡なる事件、是等をすべて否定し去つて世界は黃金時代であるとして謳歌する者ではない。又世は必然的に進歩するものなりとして意を安んじて居る安價なる樂天家でもない。然し唯少くとも吾人は過去に於ける物質生活よりも遙かに優れたる文化に浴して居ることと信ずる。其の優れたる文化は此の現代の生産組織の所產物であることも亦疑を容れない。大企業の生産組織が齎す弊害、殊に機械の發明より生ずる弊害。勞働者其の者に對しても、社會全般に

對しても、多くの害毒を流して居ることは事實である。其の兩者に對する弊害の中で先づ勞働者に對しては其の從事する他事を無味單調ならしめ、且つ過勞の弊に陷らしむることを免れない。斯して勞働者の勞働をして何等獨創なく自由なく唯機械に從屬せしむるに至り、殆ど彼等の自己主張を絕無ならしめる。

他方社會に對する弊害としては資本の集積を補助する所謂資本主義的害毒を一層助長する弊害がある。此の資本集積の弊は云ふ迄もなく私有財産制度を其の社會生活の根底とするよりして生ずるものである、然し乍ら予は全部の私有財産を否定せんとする者ではない。所謂事業的財産は是を共有にすることは不可能なことであると信ずる。唯現在の如く物の所有權と云ふことを餘りに重大視し、唯物觀に捕はれ過ぎたる權利許りを重んずることに反對せんと欲する者である。故に單なる物の所有――資産の所有と云ふ事實のみを以つて絕大なる權利を獲得せしむることに反對するのである。從つて資本の集積より生ずる大企業の利益を單なる資本所有者に依りて獨占せしむる現今の事實を排斥せんと欲するのである。資本家は資本集積そのものが彼等自身の目的であり、且つ彼等の自己を主張する手段である。故に彼等自身は其の企業の經營に直接從事すると否とを問はず彼等はそこに事業的報酬を受けて居るのである。且つ大資本集積自體が其の目的であるから、彼等は七割の配當を受けやうが十割の分配を受けやうが敢て多しとしないのである。唯々多きを望むのである。これ自己主張を充分ならしめんと欲する人間本來の性情に適合せることであつて寧ろ當然のことである。然るに他方勞働者は其の得る所の賃銀は決して多くない。若し勞働者も資本家と同樣に資本換言すれば貨幣の獲得を以つて自己主張の手段とするならば、其の受くる所の貨幣額は殆ど物の數にも這入らないだらう。更に他の自己主張の手段を得んとするには彼等の餘裕は餘りに少ない。此の弊害――少くとも勞働者を人間と見做すなら弊害と云はなければならない此の事實は機械及び私有財産制度より生じたものに外ならない。機械及び私有財産制度は物の所有に絕大な勢力を與へた。物の所有は自己主張に至大なる便益を附與する。而して生み出される新しい物の勢力は物の所有者にのみ歸着してゆく。斯して物を所有せざる者は人格さへも剝奪される少くとも無視される。此の問題の解決は單なる分配政策に依つてのみ求め得るものでないと思ふ。

これ機械の發明に伴ふ必然の弊害である。換言すれば機械の

弊害は人間の機械化である。然らば吾人は機械を棄つべきであるか。機械を棄てゝ中世紀の手工業時代に歸らなければならないだらうか。所謂中世紀の主從的恩惠關係即ち我が邦最近に至る迄の雇傭關係を讃美して我が邦特殊の美點なりとする者がある。然り當時の主從關係は恩惠的であつた。然しこれを以つて直ちに現在の狀態に當てはめることは出來ない。中世紀に於ける主從は共に其の從事する仕事が單に自己の生命を維持する手段であつたに止まらず、自己の生命を賭しても差閊へのない自己主張の目的であつたのである。故に弟子若しくは職人或は我が國の丁稚なるものは親方若しくは主人から目的そのものゝ傳授を受けるのである。從つて彼等は其の主人から何等の物質的報酬を受ける必要はないのである。故に會々主人から頂戴するものは特別の恩惠でなければならない。主人の言は命これ從はざるを得ないのである。然るに此の狀態を直ちて移して現代の雇傭關係を律しやうとするのは愚の極である。現代產業組織の機械化は勞働者の熟練を必要としない、衣食の途を得んと欲する者は直ちに入つて勞働者となる。彼等は其の勞働に依つて自己の目的とするのではない。それに依つて敎養を受けやうと云ふのでもない。唯彼自身の生命を持續する手段として勞働に從事したのである。こゝに於てか問題は恩惠主義では解決することは出來なくなつて來る。それならば各自が望む仕事に從事する制度に改造するとしやうか、吾人は機械を棄てねばならぬ。何故ならば誰が機械を運轉するやうな單調な仕事を望むだらうか。機械の響の喧しい中で、塵埃に塗れ乍ら、何等修得する程の價値を發見し得ない仕事を選ぶ者があるだらうか。然し吾人は機械を棄てゝ不便な道具の時代に歸ることは出來ない。それでは文化の逆轉である。加ふるに現代人は假令それが驕氣であるにしても、人間としての自我の覺醒を得て居る。此のことは敢てこゝに十八世紀以降の哲學史の煩しい敍述を待つ迄もなく明かなことである。中世紀の徒弟の如く盲目的に服從するものではない。我は我であると云ふ個性尊重の觀念は次第に強くなつて居る、それは個人として人類の向上である。然しそれと共に個性を沒却した非獨創的な機械的仕事に從事することは益々大なる苦痛とならざるを得ない。

勞働の苦痛は少くとも現在の制度組織の下に於ては除き得べからざるものである。斯の如き機械化されたる勞働に從事せざるを得ない勞働者――殊に生存權の確立なき爲めに、彼等自身の才能を發揚すべき機會を全く與へられざる彼等は遂に此の苦

痛から逃れることは出來ないのだらうか。然らば機械の發明は**呪はれなければならない。吾人は機械を以つて勞働を機械化した、けれども未だ機械化され得るすべての勞働を機械化した譯**ではない。問題は此の點より惹起される。會計係は計算器の代りをして居る。坑夫は採掘器の代りである。機械と人格とは兩立し得ない。若し吾人の理想を語ることを許されるならば、是等非人格的な機械的の勞働は一切擧げて機械に委任すべきである。而して始めて斯の如き勞働より生ずる苦痛を吾人々類が負擔する必要がなくなるのである。

四

勞働の享樂化。それは吾人の最も熱望する理想である。けれども現在に於ては、文明の進歩も社會の道德も未だ此の域に到達して居ない。所謂勞働者は依然として機械的な非獨創的な仕事に從事しなければならない。而も自已の生命維持の爲めにのみである。從つて勞働は苦痛である。こゝに於て他の方面に自己を主張し得る餘裕を是等勞働者に與へてやらなければならない。一日營々として狹い工場で勞働して來た兒童が彼の貧弱なる道具を以つて飛行器の摸型を作らんと努力する。其の工場にあつては曇れる少年の眼も、こゝにあつては生き〳〵として輝くであらう。此の少年の尊ぶべき努力こそ眞の勞働である。創**造である。斯の如きものこそ眞に價値あるものである。工場に**於ける一日の勞苦の如きはこれ機械の代理に過ぎない。人間を以つて機械の代りとする。これ程人間自身を侮蔑して居るものはあるまい。宜しく人間には眞の勞働たる創造、自己主張の方面を與へなければならない。現在の制度に於ては斯の如き機械化から全然脫却することが不可能であるならば、機械代りの勞働をする人間には充分の餘裕を與ふべきである。八時間に制限すべきことは論ずる迄もないことである。

然し乍ら吾人は近頃一部の筋肉勞働者であるやうに、殊更に汗臭き粗衣を纒ふて公衆の面前に立ちて自ら誇りとするが如き態度を是認する者ではない。徒に勞働時間の短縮を怒號して自已の勞働粗雜なるも顧ず唯ゞ鬪爭を事とする奴輩に組する者ではない。吾人と語るべき者は眞に自己の革新を期待する者でなくてはならぬ。眞に自我の覺醒を痛感した者でなくてはならぬ。附和雷同の徒は卑しむべき者である。吾人は現在に於て機械的勞働の苦痛を是認する。其の苦痛ある勞働に從事せさるを得ない者のあることをも否定しない。更にかゝる勞働者に眞の自分

の仕事を――創造的な自由な Selbst Zweck な勞働をなす餘裕を與へよと力說する。けれども徒らに爭鬪を事とするを欲するものではない。避くべからざる衝突は是を厭ふべきではない。否寧ろ曖昧なる妥協を以つて折合はずして、斷乎として相爭ふことを是認する。だが避け得る鬪爭をば態々是を求むる必要はない。避くべからざる鬪爭とは卽ち各人の人格を無視して、各人が當然受くべき利益をも壟斷せるある階級が、文化の發展を阻害せる場合に惹起さるゝ衝突に外ならない。

吾人はすべての人間の勞働を享樂化すべき義務を有する。と同時に勞働を享樂する權利を把持する。而してすべての人類は無意識的なる本能的生活以外に、ある價値を目的とする自由意思的なる理性的活に――すべての生活行程が一の理想價値を嚮導觀念 leitende Idee として統一される文化生活に觸れることを許容されなければならない。そして吾人は各自の才能を出來得る限り充分に發揚し、各自の價値世界の完成に向つて、自由意思を以つて、勞働に從事すべきである。斯して始めて勞働は享樂し得る。

斯の如き世界は果して實現し得るか如何か。かのベルトランド・ラッセルが自由を高唱して社會を改造せんとしたのは、確かに一面の眞理を看破したものである。勿論今日の時代に於て自由平等と云ふは佛蘭西革命時代のそれと同一ではない。言葉は同じであるが內容は全然異なつて居る。吾人が今日自由を唱へる所以は先づあらゆる人間に自己主張をなし得る自由と餘裕とを與へよと云ふにある。換言すれば先づあらゆる人類に生存權を認め、人間らしき生活を送らしめやうとするのが第一の問題である。吾人の精神(ガイスト)の根底にはかの資本主義的精神の如き。所有本能以外にあるものが存在して居る。勿論貨幣を所有せんとし、株券を獲得せんと欲するやうな所謂所有本能は、心理學的に見ても發生學的に見ても極めて强烈なものであるには違いない。從つてこれに依つて自己を主張せんとする者も甚だ多い華美なる衣裳、高價なる寶石等の所有を誇示するが如きものも大なる邸宅庭園を建造するが如きものも、すべて此の本能の發露に外ならない。けれども是が人類のすべてゞはない。吾人の自己主張の內には是と全く異なつた精神的のあるものが存して居る。卽ち先天的なる理想價値が吾人の精神を支配して居る斯して他の動物とは異なつて、人格を形成し得る。故に先づ斯くの如き理想價値實現の爲めに、あらゆる人類は解放され自由にされなければならない。斯して改造され建設されたる世界は

享樂的なる美的社會――吾人の生活そのものがすでに藝術的なる社會であることを要求する。　然し乍らウイリヤム・モリスの**如く、現在存する機械的大經營を全然否定せんとするのではない。**一切の機械的勞働は機械を以つてなさしむる。吾人々類は唯勞働そのものがすでに目的である勞働、各自の自由意思を以つて選擇した勞働、苦痛はあるけれども決して厭はしくない勞働にのみ從事するのである。而して其の生活が藝術化され美化され且つ自由を樂しみ得る社會に於てのみ、斯くの如き勞働を享樂し得る。

斯の如き理想鄕の出現を近き將來に期待し得るとは豫想し得ない。或ひは更に幾多の改革を經たる後であるかも知れない。然し唯斯の如き理想に向つて努力せんとして、現在先づすべての人類に自由を與へるやうに要求するのは必ずしも不當ではない。理想的社會の實現期は何日のことか解らない。それだからと云つて理想的社會實現せずと斷言することは出來ない。吾人は理想的價値の世界に向ふ目標を知り得る。而してそれに向つて努力せんとするのである。(一九二〇年二月五日稿)



家族制度改廢問題

經濟上より見たる家族制度

法學博士　堀江歸一

家族制度の弊害を一言で云ふならば、家とか、家格とか云ふものを重んじて、個人を輕んずるの一事に歸着する。一家が成り立つた以上は、飽くまでも之を存續せしめなければならず、又之を維持しなければならぬ、家族の存續維持を謀る上に必要であるならば、個人の利害などは颯々と犧牲に供して、苦しくないと云ふのが、家族制度を尊重する人々の根本思想であつて、私は此位ひ個人の自由や、又は其發展を害し、社會を毒する思想は他に類があるまいと思ふのである。

封建時代の家族制度

封建時代に武家の間に於ては、一般に家に重きを置いたのは動かす可からざる事實であつて、何とか云へば、家名には替へられぬとか、家名に傷を付けてはならぬとか云ふ理由で、個人を犧牲に供し、又其生命を絕つことすら躊躇しなかつた幾多の事例がある。畢竟是れは先祖の内に一人の功勞者があれば、其功勞を表彰し、又之に酬いる爲め、君主が家に相當の祿を與へ而して其家を相續する代々の家長に其祿を相續させると云ふ制度が行はれた結果である。即ち祿は家祿と稱された通り、人に着くのでなくて、家に着いたのである。時には柳澤彌太郎のやうに、今日の言葉で云へば、所謂官界遊泳術を心得て、小身微

祿から途方もない大身に出世をした者がないではないが、斯る事は稀有の例であつて、**武士の多くは殆んど代々定まつた祿を有り難く頂戴して、詰り家祿の番人を勤める爲めに、此世に生**れ來つた譯である。隨て相續人が存外愚物であつて、到底家祿の番人を勤めるだけの能力がない、勤めさした所で、何時君主の御不興を蒙つて、家祿を捧に振るかも知れないやうな恐があれば、親子の情愛も、血緣の關係も物かは、斯る愚物は押込め隱居にして、他家から緣も繋りもない者を養子にする、夫婦の間に子供がなければ、妻を替へるなり、妾を蓄へるなり、又は養子を拉し來るなり、兎に角相續人を設けて、家祿の存續、家名の維持を謀るのが當時最も必要の手段であつた。又一方君主の方から見れば、封建制度は家祿を與へて、武士の生命を購うことを根本的基礎としたものであるから、誰れでも家名を襲ぎ、家祿を受けて、忠誠を誓う者があれば、甚だ結構で、家名が斷絕して、一名でも臣下の減ることは大禁物であつた。君主の方から見ても、臣下の方から、考へても、家名が頗る大切であつて、如何なる方法でも之を存續させやうとしたのは當然の次第である。

既に人は家祿の番人であつて、誠實に祿を守つて、次の相續人に傳へることが君主に對し、家に對し、又先祖に對する大切な義務であるとすれば、**先代や先々代の主人は勿論何代か以前の主人でも、又は家を興したとか、家を盛にしたとか云ふやう**な人の遺言遺訓が何時までも後の主人を束縛するのは勿論であつて、恰も東照神君の御遺言が二代以後歷代の將軍を惱ましたと同樣である。既に遺言すら然りとすれば、親族の長老連が親族間の申合せを笠に着たり、又は先代の言行を楯に取つて、當主に干涉し、其行動を掣肘しやうとするのも、怪むに足らない。要するに家祿あつて、主人に生活能力なく、家あつて人なしと云ふのが封建制度の特徵であつて、能くも人があゝまで個性を沒了して、家の爲めに殉じ來つたものであるかと、今日から考へて、不思議に感ずるの外はないのである。

華族の世襲財產制度

封建時代に、家族制度が行はれ、然も其根柢の鞏固であつたことは、封建制度其もの丶關係上、已むを得ざることゝ、認めもしやうが、其餘習が今日まで依然傳はつて、個人の活動に容易ならぬ障害を加へて居るのは、如何なる故であらうか。今日の社會組織に於て、家族制度を維持存續させて居るのは、實に

華族の世襲財產制度、富豪の家憲並に財產保護、一般家族に對する民法の諸規定に於て、之を見るを得るのである。

我國の如く昔から君民の關係常に圓滑を保ち、君主は絕へず四民の休戚に大御心を注がるれば、四民亦之を德として、君主を上に戴き、眞心を致して居る國柄であるに拘はらず、特に華族と云ふやうな特殊の階級を設けて、皇室の藩屛たらしめやうとするのは何が故であるか、皇室に對する藩屛が必要であれば六千萬の國民擧つて之に當る可く、華族のみをして之に當る所の特權を持たせるのは、甚だしく條理を缺くことゝ考へるが、華族存廢論は姑く措き、一旦華族制度の設けられた結果、我國が其存續を謀るのは固よりの事であるが、其爲めに經濟上に及ぼす影響の少なからぬことを看過し得ないのである。

華族制度に關聯して、經濟上に影響を及ぼすことの多きは、實に華族世襲財產法である。華族なるものを存續させる爲めには、世襲財產の制度を設け、華族の當主自身の有す可き財產の運用處分に關する權利を制限することゝするのは已むを得ないかも知れないが、要するに華族の當主を家祿の番人とする趣意に外ならない。世襲財產は第一類田畑、山林、宅地、鹽田、牧場、池沼、第二類政府發行の公債證書又は政府の保護若しくは特別の監督に屬する銀行若しくは會社の株券の二種類に分たれ、華族たる者は是等に限つて、世襲財產を運用しなければならないのみならず、第二類を第一類の財產に變更することは出來るが、此反對に第一類を第二類の財產に變更することは出來ないと云ふ制限があり、世襲財產の所有者は財產の純收益を擔當として、負債をすることは出來るが、純收益の三分の一以上の償却金を要する負債を起すことは禁ぜられて居り、債權者も亦純收益の三分の一以上を差押へることは出來ず、一方に世襲財產は賣却讓與することも、抵當に入れることも禁ぜられて居るのである。

財產權の貴重なる所以は、其所有者に運用消費の自由の存することに歸着する。人が財產を運用する場合に、自分の判斷で最も適當と信じ、又最も有利なりと考へる所に向つて、放下すればこそ、最大の利殖を收めることが出來るのであつて、運用と云ふ言葉の內には、無論財產を賣却することも、抵當に入れて、借入金をすることも包含されなければならぬ。然るに華族の世襲財產制度は華族其人から財產權に伴つて、最も重大なる運用處分の自由を奪ひ去るものである。固より世襲財產とす可き財產の最低額は今日の社會生活の程度から見れば、極めて少

額のものではあるが、多數の華族は此最低額だけの世襲財産で滿足する譯でなく、土地なり、有價證券なり、自己の自由意見で、世襲財産に充てゝ居るやうである。是れは華族自身が家の存續を大切に考へる所から來た處置であらうが、同時に人として有す可き財産權の自由を自ら制限した自殺的行爲であると言はなければならぬ。

世襲財産の制度で、人を縛つて、華族なる家を永久に存續せしめやうと云ふ見地より見れば、乃木希典氏が相續人を定めずして、自刄したとか、板垣退助氏の遺志で、其相續人が襲爵屆を出さず、自然一代華族の制度が實行されたと云ふ樣なことは華族社會の珍事であつて、要するに兩氏の如きは、今の華族社會全體の希望に裏切つたものである。兩氏のやうな老人であつて、餘り當今の新思想に接觸したと思はれない人であつても、家とか華族とか云ふものに對して、一種の思想を持つて居たとすれば、是れこそ一葉落ちて、天下の秋を知るの類ではあるまいか又眞に家名を重ずると云ふ精神から見れば、乃木氏なり板垣氏なり、後世にドンナ愚かな相續人が出て、華族として、又は一個の士人としての自分の名を汚すか測り知れないことを恐れ、前者は自分一代で、家を絕ち、後者亦自分一代で華族を辭したのは、一個の見識と云はなければならぬ。一方に如何なる手段を講じても、家を續けやう、之を續けられるならば、木に竹を接種したやうな間違つたことをし、時には人情を沒却しても構はない、實子を廢嫡にして、養子に家業を相續させても苦しくないと云ふ今日の時勢に、乃木板垣兩氏の如き、家を潰したり、華族たることを辭したりして、一世を驚かしたのは、誠に痛快の次第であつて、家あるを知つて、一方に他に人あるを知らざる輩の頂門に一針を加へたものである。

富豪の家憲は何を意味するか

華族が社會の儀表であると云ふことは、從來我々が屢々耳にした所である。華族の品性、見識、行狀の如何なる點に、我々の模範とす可きものがあるかは、私の知るに苦む所であるが、世間は隨分廣いものであつて、自ら一個の平民として、此自由の天地に濶歩し、横行す可き地位に居るに拘はらず、進んで華族と同樣な窮屈な生活を送らうとする人々が澤山ある。其適例として、私が舉げるのは、外でもない、近年富豪財産家の輩が家憲と稱するものを制定して、一家の主人たるものゝ權限に色々の束縛を加へ、結局主人一個の意思で、財産を處分する自由

を制限することである。一代の富豪鉅商として、幾萬幾億の產を成した人は固より巧に或る機會に乘じ、運命を握つたと云ふやうな關係もあらうが、機會や運命は唯空漠に世の中を送つて居る人に與へられ可きものではない。之を見出し、又之を利用するのが、一ツの天分であるから、如何なる家に就て見ても、之を起した人は相當の人物であつたに相違ないが、二代三代と時を經るに隨つて、案外低能の者が相續人と爲つて、事業に失敗し、祖先以來傳つた財產を蕩盡して、家名を亡ぼす事實は少なしとしない。富豪財產家の恐れる所は即ち此一點であつて、彼等は如何にしても自分の家を後世に傳へたいと希望するの餘り、二ツの方法を考へ出した、其一ツは自家の事業を會社組織とすることであつて、他の一ツは家憲の制定である。

富豪や財產家が或る事業を經營する場合に、其組織を會社組織にし、殊に株式會社の組織とするのは何故であるか。株式會社の組織にした所で、必ずしも多人數の資本家から、株式の形で資本金を集めるのではなく、一家一門の人々又は重なる使用人を株主とするものに過ぎない。何故に斯る形態の會社が近年頻に組織されるかと云へば、要するに個人の事業では事業主の全財產を以て、營業上の責任に當らねばならず、隨て事業に蹉跌を來した場合には、事業主は全財產を喪失する危險に臨む譯であるが、株式會社とすれば、會社の株式を引受けた財產額だけで、責任を果せば濟み、事業の成敗と家の存續とを獨立相關せざるものたらしむるを得るからであつて、此事は我國の富豪が家を重んずるの結果、社會に對する事業上の道德を輕んずるものであると云ふ非難を生ずる次第である。

家憲の制定は近年富豪社會に於て、一の流行と爲り、家憲でも制定しなければ、富豪の仲間入りをすることが出來ないやうな趣であるが、家憲制定の目的とする所は要するに今後自分の家にドンナ亂暴者や、馬鹿者が出て、家長と爲つても、其家長の財產上に爲さんとする所を家憲で束縛し、一家の財產を永久に傳へて、家門の存續繁昌を謀らうとするものに外ならない。亂暴者や馬鹿者の家を潰すやうな所業を未發に防ぐのには、多少の効能もあるであらうが、其代りに當代の主人が如何なる英物で、財產を活用しやう、事業を新方面に開拓しやうとしても其自由手腕を働かすことは不可能である、詰り家憲の制定は一家の主人から財產權の自由を奪つて、彼を一個の準禁治產者とするものである。是れ亦家族を主として、人を從とする封建時代の餘習であつて、思ふに株式會社に依る事業の經營と家憲れ

依る財産權の自由に對する束縛とは相重なつて、富豪の家を永久に存續せしめるであらうが、同時に富豪の主人たる者は單に**富豪の主人たる地位を占めるだけの話で、生涯家産を守つて、之を次の相續人に傳へるの外に、何等の用のない人間と爲り了するに過ぎない、**家族制度が人を殺すの弊も亦甚だしいと言はなければならぬ。

戸主專制の家族制度

故に私は我國に華族制度があり、又華族でもない者が華族を眞似て、家憲を制定して、家に重きを置き、其結果として人の自由殊に財産上に關係を有する自由を束縛する狀況を目撃し」常に非常の不愉快を感じて已まないものである。何故日本で華族制度を廢止して、人々の間に自由競爭で、知能を練磨することは出來ないものであらうか、何故人を主として、家を從とし家を興すのも、又之を亡すのも、人の自由としないのであらうか。私の不思議に堪へない所であるが、日本では古來の傳習として、家を重要視し、家族制度を社會の基礎に充てやうと云ふ考へから、現行の法制に於ても、家族の存續を謀る爲めに、種々の規定を設けて居り、而して其規定が往々にして個人の自由を束縛するに至ることは、私の遺憾とする所である。

家族制度を尊重し、人工的の力で、此制度を維持して行かうと云ふ我國では、一家の戸主なるものに重大なる權力を與へるのである。**一家の家長は戸主であつて、一方に戸主の親族として、其家に在る者や其配偶者は家族であるが、家族は戸主に對して、從屬的關係に居らなければならぬ。**即ち家族は戸主の意に反して、其居所を定めることが出來ない。若しも自分勝手に居所を定めた場合には、戸主は相當の期間を定め、其指定した場所に、居所を轉ず可き旨を催告するを得ると云ふが如きは、」戸主を中心として、家族なるものを維持して行かうとするものである。家族に屬する者が互に志を一にして、戸主を助けやうと云ふ精神から見れば、當然の規定のやうではあるが、實は今日の經濟思想を無視するの甚だしきものである。

今日の經濟生活に於て、我々の最も重きを置く所は職業選擇の自由若しくは勞働移動の自由であつて、又是等の自由に依つて、人をして其最も適當なりと信ずる職業に就かせ、又同樣の方面に勞働力を用ひさせるので、其人も生活上に發展を遂げるし、社會亦其人の能率增進に依つて、利益する譯であるのに、戸主が全家族を率ひて、自分の意思で、自分の家に同居すること

を強ひ、他に居所を定めることを掣肘するものとしたならば、是れこそ人の職業選擇若しくは勞働移動に對して、束縛を加へることの甚だしいものである。都會では教育の普及、人智の進歩に依つて、個人の自由が餘程認められ來つたが、夫れでも頑冥な家長が居主權を振廻して家族を私有物視し、家族は此暴戻なる家長の專制に苦しめらるゝ例は澤山ある。更に地方に行つたならば、幾組もの家族が一軒の家に同居し、專制君主たる家長の命を奉じて、一家の勞役に服して居る事實を目撃することは、頗る多い。家長の方から云へば、家族中の男には野良仕事をさせ、女には養蠶炊事裁縫は勿論野良仕事の手傳ひをさせ、是れで家の爲めに、當然の義務を盡すものである、幼年の時に此家に養はれた恩を返すものであると云ふやうな考で、世間並みの勞働賃を拂はずして、彼等の勞働力を奪うのは好都合の事には違ひなからうが、實は家族制度なる名の下に、奴隷制度を存續するものと異なるものはない。或は斯く一家に多數の家族が同居し、家長たる戸主を中心として、家の爲めに奉仕するのを見て、一部の人々は是れぞ我國社會の美風であり、國體の精華も亦此處に發するものゝ如くに、考ふるやうであるが、家族制度の名の下に、人の自由意思を拘束するのは勿論、廣い天地に自由に翺翔し得べき人を狹い所に跼蹐させる結果は如何であらうか、骨肉相食み、血で血を洗ふやうな慘憺たる悲劇の地方の家庭に生ずることの多いのは、家族制度の齎す弊害の一ッであることは論を俟たない。

日本が一個の國として、國民的生活の充實を謀らうとする以上は、對外的に經濟上の關係を發展させることは急務中の急務である。一月下旬頃の衆議院で原總理大臣は日本人は當分滿洲朝鮮の方面に移住すれば、充分の餘地があるから、何も米國や濠洲に移住先を求める必要はないと云ふやうな意見を發表したが、是れは人種差別の撤廢に失敗したり、米國の排日熱を抑へることの出來ない苦し紛れの言譯であつて、日本の立國から云へば、將來益々對外的發展を必要とする。其際に家族制度が從來のやうな狀態で行はれて居り、家長が居主權の下に家族の住所を制限し、同居の義務を強要するやうなことは、日本の對外的發展に大なる妨害を加へるものである。昨今地方の農村は非常に繁昌し、何處でも手不足を感ずる所から、勞働賃の如き、非常に騰貴した。一方に工業も繁昌して、男女工を必要とする狀態であるが、農村の子弟が工業地に赴かうとしても、農家の家長は他に勞働者を雇入れる費用の大なることを恐れ

て、仲々彼等の工業地に赴くことを許さず、依然農村に引き止めて置かうとするが如きは、要するに家族制度の下に、勞働の移動する自由を妨碍する一ツの適例である。

扶養の權利と義務

右に論ずる如く、家長なる戸主は其權利として、家族をして自分の指定する場所に居住せしめ得るので、事實に於ては戸主自身と同居させて、低廉なる費用で、彼等の勞働力を搾取することゝ爲るのであるが、一方に戸主は家族に對して、扶養の義務を負はなければならず、若しも家族が戸主の指定した場所に居らなければ、扶養の義務はないことゝ爲るのである。戸主の家族に對して、同居を求める權利、同居の結果として家族に或る勞役を命ずる權利と家族が戸主から扶養を受ける權利と相對して、我國の家族制度は一ツの系統を成して居る次第であるが、私をして忌憚なく批評を下さしめたならば、此種の規定たる、我國民の經濟生活をして貨幣經濟から、實物經濟の昔に復歸せしむる弊害のあるものであると云ふことを斷言するに躊躇しない。第一家長が家族を扶養する義務を負うて居るのは、即ち家族の生活權を保障する所以であらうが、如何なる程度の生活が實際に保障されるのであるか、其程度は一に居主の資力に依るものである以上は、被保障者は必ずしも之に依て、生活に安んずるを得ない。第二家族は居主に依て、扶養される代りに居主の爲めに住居の自由を束縛され、隨て職業の種類にも制限を受ける以上は、自分の能力を充分に發揮するを得るや否や、疑なきを得ない、第三家族は家の爲めに、家長に奉仕し、其報酬として何を受けるかと云へば、扶養の一事であつて、住居被服食物等專ら現物の形態で給與せられるのは、經濟生活の隅から隅まで、貨幣經濟の行はれて居る今日、特に之に孤立して、實物經濟を行はんとするものであつて、斯る實物經濟に支配される家族こそ、家族の名に縛られて、經濟上の自由を失うと云ふ憐む可き地位に立つものである。

封建時代に、武家の次男以下に生れた者は生活上に於て、隨分詰らない地位に居つた者で、俗に「次男坊の冷飯」と云ふ諺さへ行はれて居つた。即ち彼等は家祿は總て長男に依て相續され、自然部屋住みの境遇に安んじなければならず、之を脱するには、他家に養子の口を求めなければならなかつた次第であるが、今日の家族制度に尙ほ依然として此趣の存するのは、社會の風潮を淸新ならしめる所以と認め難いのである。

我國が一ツの制度として、家族の關係を維持存續しやうとする以上は、直系血族や兄弟姉妹間に扶養の義務を認めたことは當然のやうではあるが、若しも國家が一歩を進めて國民の生存權を承認し、勞働權を尊重し、今日と聊か趣の違つた社會組織を設けたとしたならば、扶養の義務の如きは、特に之を法律で規定し、扶養の權利者は誰々であつて、其義務者は誰々であると云ふやうな規定を設けることは、全然無用の業に屬する。人が完全に四肢を具へ、又勞働の意思を有する以上は、彼に適當な職業を與へて、之に勵ませるのが國家の義務であり、又既に或る職業に就いて、働く以上は、文明國民として相當の生活を送らせるだけの所得の獲得を保護するのが國家の義務であり、更に少年時代から幾十年の久しきを通じて、社會に奉仕し來つた者が老齢と爲つた場合には、其生活を安んじさせるだけの給與をすることが國家の義務であるとしたならば、狹い家族の間に扶養の權利とか、又扶養の義務とか云ふやうなことを認める必要があらうか、私は其必要の全然存在せざることを信ずるものである。

我國に於て將來社會生活の完成を求めやうとする以上は、今日以上に社會政策の步を進め、結局國民の生存權を承認する所まで行かねばならぬ。然るに社會政策の進み方が殆ど緩々たる牛步に類するもの丶あるのは、何故であるかと云へば、要するに家族制度と稱するが如き姑息極まる制度の下に、親族間に制限せられたる範圍の扶助を行つて、之を社會政策に代らせやうとするが、我國に於て社會政策の實行を妨害する有力なる原因と爲ることを知らなければならぬ。人が社會に依て扶助されること丶、親族に依て扶助されること丶、孰れが正しく、又孰れが理に適へるかと云へば、或は親族中の强者たり、富者たる者が同じく親族中の弱者たり、貧者たる者を助けることに於て、多くの道理を存すると考へる人々もあるやうであるが、私は斯く信じない。蓋し今日の社會に於て人が自活するに困難を感ずる程、有形的物資の獲得に乏しいとしたならば、其れは其人ばかりの罪でなくて、寧ろ社會組織の缺陷に基く所少なしとしない。然らば社會は其人に對して、現に荷はせつ丶ある困難を除き、辛勞を慰めるに就て、責任のある可きは勿論社會が或る種類又は或る階級の人々を扶助する場合には、眞に扶助を必要とする程度に於て、之を與へることも出來るし、又扶助を必要とするに至つた原因を除却せることも出來るのである。

然るに家族制度の下に、親族が他の親族を扶養する義務を具

うと云ふのは如何なる關係から生ずるものであらうか。我國の法律では、六等親内の血族、配偶者、三等親内の姻族を以て、親族として居る。配偶者は兎に角として、六等親内の血族や、三等親内の姻族に、親子兄弟の間に於けると同樣の親しみが認められるであらうか。封建時代のやうに、一門一族は多く同藩の下に起臥し、同じ教養を受け、又同じ思想に支配され、平生から一門一族たるの故を以て、社交音信の頗る密接なるものがあり、更に遡つて一門一族の出來た所以は何處に在るかと云へば、一門一族に屬する者だけが力を合せて、他の從黨に當る考に基く歷史の殘つて居た場合には、斯く家族制度の下に、親族間の扶養義務を認めることも當然であつたらうし、又社會の感情に適合して居つたに相違ないが、今日の如く時勢が一變し、親族の中如何に等親の近いものであつても、一方は内地に居れば、他方は外國に住ひ、其外國も東西到る所に散在して居る狀態であるとすれば、單に親族たるの故を以て、扶養の義務ありとするが如きは、少しも事實に調和する制度とは認められない。

日本の家族制度に於て、扶養を爲すの義務も、扶養を受くるの權利も共に正當のものと認められない、私は根本的に此關係を一變し、社會自ら扶養を爲すの義務を負ふ可、扶養を受ける者も亦社會に對する權利として、之を要求することを至當なりと認めるものである。而して日本現行の制度に於て、扶養の程度は如何なる標準に依て、定められるかと云へば、扶養權利者の需要と扶養義務者の身分並に資力とに依るのである。然らば扶養權利者は文明國民として、此位の程度の生活を營みたいと希望しても、自分に扶養を爲す可き義務者が盡く貧乏人斗りである場合には、到底充分な扶養を受けることを望まれないが此反對に三菱三井を親族の端呉れに持つた者はドンナ怠け者であつても、又常習的貧乏人であつても、親族に資力の豐なる人がある故を以て、滿足なる扶養を受けることが出來る譯である。而して之を社會の全體から着目して、前者の方が從來社會に於て多く富の生産增殖に貢獻したのに對して、後者の方は此點に寄與する所少なかつたとしたならば、右に述べるやうな結果を生ずることは甚だ不公平であつて、之を法律で公認するのは、殊更に社會的不公正を現出させる所以であると考へられるのである。

家族制度は社會の根柢に非ず

我國一部の人士は口を開けば、日本の家族制度を以て、社會の根柢であると誇るもの〻如くである。即ち彼等の考を以てすれば、日本國民の道德殊に親に仕へて孝であるとか、兄弟相和し、姉妹相親しむと云ふやうな篤行は總て家族制度の賜であるやに解釋するもの〻如くに、見受けられるが、私は決して然ることを信じない。親子兄弟姉妹と云ふやうな血緣は切つても切れない關係であつて、此關係を持つた者が互に相扶助するのは人情の自然である。必ずしも法律を以て、家族の間柄を定めたり、權利義務の標準を立てたりする必要の存せぬことは勿論であると同時に、此以上に所謂親族の範圍を廣めて、人爲的關係を結ばせたり、又一家の家長に大なる權利を與へて、家族全體を一家長に隷屬させるやうなことは、百弊あつて、一利の認む可きものあることを知らない。人が家族とか親族とか、自分以外の或るもの〻利害に掣肘されて、自分の利益を犧牲に供するのは勿論自分の德操生命すら時に傷けられて、顧みない、寧ろ斯る犧牲に甘んずると云ふやうな事實は人生の悲慘事と云はなければならぬ。今日こそ流石に人智が進步し、人の權利や自由が認められた爲めに、親の納む可き稅金を調達する爲めに、娘が苦界に身賣りをするとか、一門の名譽を擧げる爲めに、壯年が人柱に爲るとか云ふやうな愚な事は無くなつたが、尙ほ今日の家族制度が厲行されて居れば、大なり、小なり、人が家族の利益に殉じて、自由を奪はれ、利益を傷けられることは、決して少なしとしない。人と家族との關係は前者が主であつて、後者が從であり、家族は人の至情から生れ出した至純の關係に外ならない。血は水よりも濃いと云ひ、親は泣き寄りと云ひ、何れも此關係を現はしたものに外ならないのに、法律や制度で家族の關係を律し、然も人情に外れた事までして、却て人の自由を妨げたり、感情を傷けたりするのは、私の甚だ感服せざる所である。

今や我國が改造の時代に居ることは、爭ふ可からざる事實である。歐洲諸國は數年間の戰爭に依て、社會上の關係に龜裂を生じ、之を補修するか、又は根本から改造するかの破目に立つて居るが、日本も亦同樣の狀態に居るのである。然らば日本は何を以て改造の目標とするかと云へば、私は多年我國に跋扈して已まなかつた保守的思想の下に成立して居る色々の法律や制度の羈絆から、國民を解放するのが急務であると考へる。此點から見れば、人を從として、家を主とするやうな家族制度の如きは、第一に改廢を要するものであつて、從來此制度の下に國

家族道徳の改造

（社會問題と家族的利己心）

帝大助教授　大島正徳

一

人間は家族をなして生活すること、家族生活は社會の一單位であることは、どこの民族も國民も變りないことである。其の意味では家族生活は事實である。從つて家族主義などといふは意味をなさぬ。西洋人も家族生活をしてをれば、我々日本人も家族生活をして居る。其の間に區別のあり得やうはない。然るに、普通、我々の生活と歐米人の生活振りとを區別して、彼等は個人主義的の生活をしてをるが、我々は家族主義の生活をなしてをる。此の點は兩者生活主義の相違とせられてをる。けれども、之を以て彼等歐米人は家族生活をなしてゐないとか、孝も悌もなく、全く個人勝手の生活をなし、其を正當の如く考へてをるものと見做したならば、勿論大なる誤解である。――是は斷るまでもないことであるが、中には、所謂個人主義的の生活といへば、直ちにさういふ風に解するものもあるから、一應言を挿んだまでである。――然らば、同樣に家族生活をなしてをりながら、何故に彼等を殊に個人主義的といひ、我々を特に家族主義といふかといへば、其は家族生活の組立て方乃至意味が違ふからである。即ち、歐米人の家族とは、夫婦といふ横の關係を主として、而かも其の成立を出來るだけ男女の平等關係自由意志關係に認め、且つ子供は勿論家族の一員であるが、長じて一人前となると、家族をはなれて、獨立人と認められる習慣乃至制度になつてをる。然るに我國に於ては、親子といふ縦の上下關係が主になつてをる。勿論夫婦は必然に存在するが、

其の横の關係を縱の關係の下に含ましめるから、從つて家族の構成要素は多數になつて來る。一家の中に親子孫の三夫婦もあることもあれば、兄弟夫婦もあり、伯叔父母さへをることもある。是等を皆家族といふ風習になつてをる。從つて家長とか家憲とかいふものがあり、家族を監督し家風を維持するといふことになつてをる。西洋で家といへば、夫婦といふことであるが我國では、上下に長い關係をもつた、從つて横にも廣いものと解せられる。少くも夫婦生活の有無に關係しない、もつと廣義のものであるが、歷史的のものである。是れ西洋の家の觀念と我々の家の觀念と異なる所であり、又家族の組立て方の違ふ所であつて、彼等は小家族制といはれ、我々のは大家族制と名けられる。是の風習に添ふために、法律上には、戸主制度といふものが認められ、又家督相續とか、養子とか、本家、分家といふことも認められてをる。

これは、家又は家族の觀念乃至組立て方に就て、我國の歐米諸國と異なる要點を述べたのであるが、夫れ夫れの家族生活に長所短所あることは、いふまでもない。併し、其の比較論はさておき概していふと、人間の家族生活は、所謂大家族制より小家族に變移しつゝあることは、疑ふことの出來ぬ事實である。西洋に於ても、封建制度の當時に於ては、我國のやうな一種の家族制度が行はれたといはれてをる。又我國に於ても、明治維新以來、西洋文明の移植とともに、大家族生活が實際上に段々と減少し、西洋流の小家族的生活が益多く行はれるやうになつてをることは、動かすべからざる事實であり大勢である。交通の不便な、從つて生活にも動搖の少い片田舍に於ては、親子兄弟も實際上同居して同じ家業に從事してをるやうな所謂大家族生活をなしてをる所も現にあるが、少しでも交通の便がつき、且つ生活の方針を變へねばならぬやうな場所に於ては、段々同居同業主義が破れて、別居異業法が行はれるやうになりつゝある。又役人生活、敎員生活、軍人生活等をして段々に轉勤すること常ならざるものは、多く別居主義の小家族生活である、社會生活が複雜になり變化が甚しく、又交通が頻繁になり、新業續々現はれるやうな時勢に於ては、到底、同じ所に同じ家に住み同じ業に就くなどの千變一律的の生活は出來なくなるのは、寧ろ當然の趨勢といはなければならぬ。戸籍面に於てこそ、大家族は澤山にあるが、是は戸籍届が面倒であるから一所に書きこまれてあるまゝにしてあるだけで、實際上には、段々所謂大家族生活は行はれなくなつてゐる。是れが、新日本人の生活事

實である。

恰も、現行の民法に於ても、之を裏書きするやうな制度になつてゐる。**即ち現民法は大體に於て個人生活を主義として組**織されてをるといはれてをる。大家族生活の實行と至大の關係をもつべき財産事項に於ても、夫婦親子兄弟別々の財産を所有し得ることになつてをる。家督相續などといふこともあるが、遺産相續とは別になつてをつて、祭具や系圖や墳墓の外は何にもないこともある。又戸主權謂はゞ家長權が、該權の外に認められてをるが、只家族の居住の定め方につき不承知を言ひ、又は家族の結婚問題に就て彼是れいふ權利がある位で、而かも該權と重複するもので、實際問題としては、親としての外に、所謂戸主又は家長として、其の權利を行使するやうな場合は殆んどない。故に先きに述べた如く、戸籍制度は、從來の家族制度の慣習にも添ふために設けられてをるのであるが、事實生活が既に行はれなくなつてをるやうに、法制上にも、謂はゞほんの形を存してをる位のものであつて、實際上の用は極めて少い。要するに、我が法制の大體の精神は、個人本位の生活の上に立ちながら、家族に關する事項については普流の家族制度を認めんとした所から、色々と調子折合のつかぬ所があるとは既に專門家の論じてをる所であるし、又現代の事實生活を見ても、所謂大家族生活は行はれがたくなつてをる。

かやうに、大家族制が事實上行はれがたくなつてをるといふことは、よいことか悪いことか、に就ては、多少人々によつて見解を異にするものがあるので、或人は、之を以て國民生活上殊に道徳的見地から、段々悪風を成長しつゝあるものであると見るものもあらうが、又或は之を以て時代の進運に伴ひ當然の變化として觀察し、むしろ此の際家族道徳を改造して將來の國家社會生活を現實にするに若かずと見るものもあらう。而して予は、後者の見解を取るものである。政府當局者も亦、此の邊の問題に感ずる所あると見えて、昨年來法制審議會なるものを創設して、所謂我國古來の醇風美俗なるものを保護するために法制上の改革を行はんと欲して、目下協議中と聞いてをるが、傳ふる所によれば、其の醇風美俗を保存しやうといふのは、舊來の大家族生活の主義を法律上にも、もつと明瞭に認めて、漸く小家族生活に傾かんとする所謂惡風を喰止めんとするのであるといふことである。何故に、醇風美俗を保つには、舊來の家族制度を復舊することにあり、何故に新しき家族生活の間に或は古き美俗を生かし、或は新しき醇風を作ることは出來ぬか

は、大に考へてみねばならぬ問題であるが、假りに、所謂醇風美俗は、舊來の制度を維持乃至復興するにありとしても、法制だけを時代の大勢に逆行して改むことに依つて、事實上果して豫期の結果を得ることが出來るか否かに就ては、大なる疑問がなくてはならぬ。いかに、古來の醇風美俗だといはれるものでも、今日の社會生活の實際に行はれることの出來ぬものならば致方はない。たとへ法律できめて、餘儀なく昔の通りに生活しなければならぬとしても、其は餘儀なくすることであつて、眞に道德的ではない。又凡そ醇風美俗などは、其の時代に相應して能く行はれるから、美俗醇風なのであつて、必ずしも變つた時代のそれではあり得ない。故に現代の實際生活に即して維持出來るならば、因より古來の美俗を保存せねばならぬが、それが出來ぬならば、其は過去の時代に相應したことと見做して、我々は新たに我々の時代に行はれ得る醇風を養成しなければならぬ。例へば、古の人は親の膝下にあつて、筍を掘つたり、養老の瀧を汲んで、孝養をつくして、人情が美しかつたとしても今頃さういふ孝行のみがつとまるものではない。親の膝下をはなれて學問をして職に就くなどは今日の孝行法である。昔は兄弟相仲良く同居して老親に仕へたとしても、今日男一人前となつて兄弟揃つて、同じ家に同じ事をやつてをつたのでは、到底發展することは出來ぬ。進んで家を出て、新しい職業に從事した方が、却つて親に奉ずることも出來る譯である。要するに孝養とか一家和合とかいつた所が、何も昔通りに、同じ家に居て同じ事をなしてをるには限らぬ。汽車も汽船も自働車もある世の中には、おのづから昔と異なつた孝養の法があり和合の道が立つ。必ずしも昔流の家族生活をする必要はない。又法律上さういふ生活をなすべしときめた所で、能く行はれるものでなく又さういふ强制法で、昔流の醇風美俗が成り立つものでもない。畢竟、法律の上で、所謂戸主權なるものを擴大し、家族の居住婚姻財産職業等について監督干渉するの權を與へ、昔風の大家族生活をさせやうとした所で、今日到底行はれるものではない。若し强いて之を行へば、其の生活を萎縮困難ならしめ、且つ家族間の不平を釀成せしむるやうなものである。既に現在に於ても、舊慣を追つて、親達が、相當に了見のある子供の職業や結婚にあまり多く干渉することが、一弊害とも思はれる位であるから、此の上法制上で、戸主權を擴めるなどは、時代逆行の方法である。

二

昔は、大家族生活が行はれた、併し今は益々行はれがたくなつてゐる。是は何故かといへば、時勢の變化といふ外はない。昔は封建制度であつた。然るに今は立憲政治である。昔は士農工商の階級が嚴存し、武士は上位にあつて、生活の標型を示してをつた。今は其の階級なく、官武一途庶民に至るまで其の志を遂げしむべしといふ時代である。昔は世の中が靜的であつた卽ち變化がなかつた。今は世の中が動的である、社會關係の變化に窮しない。昔は外國との交際はなく其の影響は絶無であつた然るに今は外國との交通頻繁で、世界の影響を蒙ることは萬事について顯著である。故に、昔に行はれた大家族生活が今日行はれぬのは、當り前のことである。既に時代の變化を已むを得ぬとすれば、家族生活の變化も亦已むを得ない。況んや時代の變化は卽ち進化發達だとすれば、家族生活の變化についても亦進化發展を見出し得べきである。故に從來の大家族生活は、昔の封建時代の國民生活に適應してをつたのである。我々日本國民の生活として、決して是れが唯一のものではない。今も田舍の富家に見られるやうに、馬鹿に大きい而かも頑丈一點張りの、三夫婦も四夫婦も代々住みこめるやうな家を建て丶、皆同じ家業に働くことの出來るやうにしたのも、時代は靜的であつて、動かぬものと見たからである。事實又容易に動けぬのであつた。交通は不便であるし、職業に又變つたものもなし、且つ諸藩割據で、今日のやうな居住移轉の自由も十分ではなかつた要するに無事長久をいのり、家族共に稼いで、家財を溜める外はなかつた。孝養和親の方法又是の外に出でられない。又武士としては家祿を主君より受けて代々其の君に仕へるのであるから、家の主人は、家族を擧げて、君に忠誠を抽んでるのであつた。此に命令服從の道德觀念は強く鍛錬されて、孝行をつくすとは、親の遺志に從ふことが第一義であつて、少しでも創意を加ふることではなかつた。是れが又家名を辱しめざる所以であつた。かうみれば、動きの取れぬやう御互に封じ合つてゐる封建時代の國民生活は、又動きの取れぬものであつたから、一大家族生活が行はれるのも無理はない、否むしろ共れが自然であつた。從つて共れに相應した家族道德の發揮されたことも、無論の次第である。そこに又今日とは變つた人情の美しさもあるのは當然のことである。然し、さればといつて、共れを其のまゝ今日に實現させようとするのは、年月の經過と時代の變化

とを知らざるものであつて、其の行はれがたきは勿論、抑も進化の何たるかを知らず、改造の試みられ得べきことを覺らざるものと言つてよい。尤も或意味に於ては、親子兄弟共々に一所に居たいと思ふことは、人情の自然ではあるけれども。昔の變りなく又動き得ない時代とは違つて、劇甚なる社會生活の競爭壓迫と、教育性向の相違より生ずる職業選擇の方針とが、同居同業生活を破つて、多趣多方面に夫れ夫れ家族を驅り出す有樣に現代はなつてをる。されば、親子兄弟の間の人倫道德の守るべきことは。今も昔も變りはないが、昔のまゝで所謂孝をつくし所謂友悌をつくすことは出來ぬ。現代には現代に相應して行はれ得べき方法を以て、此の人倫道德を守らねばならぬのである。から考へれば、昔の大家族生活に美點長所があつたからとて、其の通りに今日實行しかねることは、分り切つた次第である。若し強いて之を行はしめんとしたならば、昔の時代に我々の生活を引き戻す外はない。併し是は出來ない相談である。我々は徒らに、過去の美を憧憬するよりも將來に向つて新なる美を創り出す方がよい。

三

以上の如く、今日に於て昔流の家族生活の行はれがたきことは、明白の次第であるが、尙此の種の家族生活又は制度を追懷して忘れがたなく、其の美を讃歎して、此の制度生活を實際に復活維持して行かうとする者の、世間相當に多いのは何故であらうか。殊に國民道德に就て論ずるものなどは、大概之を主張するやうであるが、其の意趣は果して那邊に存するであらうか了解に苦む所が多い。

いかに家族主義論者が、昔流の家族生活に心醉すればとて、まさかに、現代の社會の社會組織經濟組織政治組織を改廢して、昔流の生活樣式に引き戻さうとしやうとするものではあるまい。然らば、昔の家族訓に書いてあるやうな例を其のまゝ今日に實行させやうとするものでないことは、無論であらう。又然らば昔流の家族生活を尊ぶ所以は、いづこにあるかといへば、其の外形的實例を尊ぶのではなく、其處に現はれた精神卽ち家族道德の精神を尊ぶのであるといふことにならざるを得ない。是に於て然らば昔の家族制度の美點となすべき道德の要旨は、何であるかといふことが、最後に詮議の問題となつて來る譯である。

普通に、我が家族生活の道德的美點といはれる所のものは、

（一）孝養心が深いといふこと、（二）祖先崇敬の念が盛なること（三）家族又親戚の和親あること、（四）家族道徳と國家道徳と連絡あること、等である。今、是等の諸點に就て考察して、此の美點となすべきものは、獨り所謂大家族制度に必然の關係を存して、所謂小家族生活には行はれ得ぬものであるか否やを略論してみやう。

（一）、孝養の念は、家族道徳の中最も大切なるものであることは、いふまでもない。從つて其の心が深いといふことは家族生活の美點であることは勿論である。而して我國民に孝養の念の強いといふことも事實である。敢て西洋人には孝の觀念がないなどとはいふべきでなく、又孝養の念の內容方法とする所が違ふから、我を以て彼を輕々しく批判することは出來ないけれども、とにかく道徳といへば、孝を以て百行の本となすと古來より教へられてあるが如く、何かの教訓につけて、親孝行といふ點に結果をもつて行くことになつてをり、其の例話も澤山にあることであるから、一般に孝の觀念が深く扶殖されてあることは、否むことは出來ない。而して親子日常一所に暮らしてをるのであるから、其の關係及び其の教訓について細かく意識するに至ることも當然である。そこで、親の居ます時は遠く遊ば

やといふやうな致になつてをり、又平常家業につとめ、親の身體に關する注意及び親に對する禮儀作法などは、やかましく訓へられてをる。是はいかにも美しいことである。然し翻つて考へると、今日はかくの如き直接教養法を昔通りに實行出來るかといへば、何人も異議を申立てさるものはあるまい。然らば親孝行は廢止にするかといへば、何人も之を不都合となさゞるものはあるまい。然らば、いかにするかといへば、今日は今日の方法を以てする、たとひ色々の都合で親と別居して獨立の仕事をしてをつても、親の心の安きを得しむるやうに行爲するを以て、親孝行の道とすると答へるであらう。今日、親と別居の生活をしてをるものは、生活の必要上であると同時に、これを以て孝養の心を棄てゝをるものであるとなすものはあるまい。實に親子の情は自然の情である。其の生活の形式に必然の關係をもつものではない。時代に應じて住めるやうな生活をして、夫れ夫れの方法で其の人情の自然に本く孝養の心を滿足すればよい。今日、大家族生活が段々なくなるを以て、孝養心が淺くなるやうにみるのは、孝養の心は、より深き人情の自然にあることを忘れてをるものである。乃至孝養の方法とは、目の上、口の上、耳の上とのみ思つてゐるからである。既に此の心あり

況んや教育の進步して一般に孝の重んずべきことが自覺されるならば、今日は今日の孝養法を立てればよい。別段、昔のさまをあこがれる必要はない。

（二）、祖先崇敬の念が我國民に厚いといふことも事實である。是は孝の觀念と共に、家族の縱の關係を重んずる所以の表徵であつて、家名を重んじ之を汚損せぬといふ念とも直接に關係がある。我は勿論家族的歷史をもつてゐるのであるから、親の又親なる祖先を尊崇するといふことは美しい心に相違ない。併し此の點については、やゝ考慮を要するものがある。祖先を崇拜するあまり、理想を過去におくやうな尙古主義となり、消極主義となり、退嬰主義となることは、注意すべきである。むしろ眞に祖先を思ふならば、祖先以上に我の能力を發揮する覺悟がなくてはならぬ。又祖先を崇拜せよといふても、昔の人は皆偉いといふことにせぬ以上は、中には崇拜すべき祖先をもたぬと思ふものもあらう。然らば所謂祖先崇拜などゝいふは、偉いからとか偉くないからとかいふ意味でなく、只自分等に血の通ふ過去の人として、其の靈を想ふといふやうな意味にとらねばならぬ。然る時は、必ずしも我國に限つた事實でなく、外國の歷史にも澤山あることである。併し我國に於てさういふ心が長く重んぜられて今日に至つてをることは、一特色といひ得る。是は歷史上社會生活の單純であつたことにも歸し得ようと思ふがとにかく我國民に血統關係を重視する念の强いことは明白である。血統家柄が結婚問題で非常に重視せられるのは之を示してをる。又此の血統存續といふことは非常に大切にせられるから蓄妾制度なども公に認められてをつたのであるが、子孫愛重といふことは、我國民の意識に極めて深いものである。其れがために、西洋人からみれば、日本は小供の樂園とも見られ、又日本人は子供の愛に溺れるとも稱せられる。或は建國以來の國民生活の內實をみると、所謂祖先崇拜よりは、この子孫愛重の念の方が遙に强く働いてをるやうにも思はれる。天祖の神勅も子孫愛重の詔と言へる。祖先崇拜は、むしろ多く支那の懷古道德から受けつがれたものが多いやうに思はれる。從つて孝行にも支那式の方法がよほど加味せられてあるやうに思ふ。かやうに解釋して來ると、所謂祖先崇拜の美風についても、よほど割引をして考へてみねばならぬ次第である。而して祖先を尊敬するとか記念するとかいふことは、必ずしも大家族生活でなくては行はれ得ぬといふやうなものでなく、又法制上の戶主がなくては出來ぬといふやうなことでもなく、兄弟相離れてをつても、

命日に御互に相寄ることにすれば、法事も墓參りも出來る譯である。多少の便不便こそあれ、家族の生活法には必然の關係はないものである。

(三)、家族又は親類が互に和親するといふことは一美風であることはいふまでもない、而して我國に於ては、親孝行の教訓とつれて此の點が力說されたことも事實である。實に封建時代の如き社會生活の簡單なる場合に於ては、社交は今日の如き所謂社交でなく、家族つき合ひ、親族姻族本家分家のつき合ひ等が其の重なる社交生活であつたに相違ない。然らば、此の點の和親に多く心が用ゐられたことも亦當然である。然るに今日は昔と時代が違ひ社會關係が廣く密になつてをるから、昔ほどに親類間の和親などが重大視されないのも無理はない。併し血族親類互に和親することの道なるは、道理に於て今も昔も變る所はない。只昔ほどに其の交際即社交と思はれるほどに社會的重要味をもつてゐないといふまでゞある。併し之も家族道德の美風である以上は、我々も亦必ず守らねばならぬ所であるが、今日は今日の生活法に相應してなすべきであつて、必ずしも昔風の家族生活法でなくてはならぬといふ理由は毫もない。

(四)、我が家族觀と我が國家觀と密接不離の關係あることは國民道德論に於て常に力說高調せられる所であつて、此に多言を須ゐぬことであるが、洵に、我國民生活に於ては、建國以來の史實に顧みて、國家を一家の擴大したものと解し得て、君民關係を家族親愛の情義に解し、西洋の如く獨り權力服從の關係に置いて見ぬことは、我國體觀の特質とせられる。即ち又一家に於て血統を尊重することと縱の關係を重んずることは、皇統連綿の史實及國民的信念とも、密接不離の關係があつて、孝の心と忠の心とを一列一體にすることの出來るやうに、家族道德と國家道德と相和合して考へられることは、慥に、我國民生活の美點といへる。併し、國家を家族的に見るといふことは、大にしても小にしても家族生活をなしてをるものには心得られることであつて、必ずしも戶主があり數夫婦同居するやうな生活法でなくては理解出來ぬとかいふことではない。天皇は卽父、人民は卽子とみるのであるから、親であり子であるものには誰にでもわかる筈のことである。從つて日本人にわかると同樣、西洋人にも此の心は理解出來る譯である。併し只彼等の國家は成立組織が異なるから、かやうに觀ないといふまでのことである故に我々の家族生活は、所謂大家族的生活をしなければ、綜合大家族觀としての國家觀が出來ぬといふ理由はない。封建時代

の諸藩割據を打破して統一的新日本を建設した如く、割據的な昔風の所謂大家族制をなくしても、綜合的に一大家族觀を以て我國を解することは出來るのである。況んや大家族生活をしなければ愛國忠君の念が起らぬといふやうな理由も決してないのである。然らば諸外國の愛國心忠義心はどうしてあるかの譯も分らなくなつて來る。只封建時代に行はれたやうな家族生活が段々亡びることに由つて、當時にあつたやうな、私的意味の強い忠義觀はなくなるであらうか、其の代り公的意味の明になつた國家觀愛國觀忠義觀は養はれる筈である。要するに、國家家族觀は、昔流の所謂家族制度の生活をなすこととは、必然の關係はない。過去に於て、歷史的關係はあつたが、今日に於ては必須的關係はない。只此に聊か、注意を要することは、臺灣朝鮮の如き新附の民を加へたについて、如何に考ふべきかは大切であるが、當面の問題でないから、言及しまい。

四

以上は、我國古來の家族道德の美點といはるゝものが、必ずしも昔流の大家族制度によらずとも、現代式の家族生活に於て尙維持し得べきことを述べたのであるが、更に進んで、舊來の家族制度に伴うて生じたる家族道德の弊風を指摘して、現代生活に於て大に改造を要すべき諸點を述べよう。

其の一は、親が子供に對する態度に就てであるが、子供の自由活動を束縛干渉し過ぎることである。固より、これは親が無慈悲冷酷であるからといふ譯ではない。むしろ子供をあまり可愛がり過ぎるからである。可愛がるはよいとしても、これが盲目的であつて、且つ自分の大事の私有品を取扱ふが如くにするからである。子寶といふは、公寶の意味でなく獨り私寶の意味であるからである。乃至寶の如く大事がりて之を人格者とみる眼がないからである。前きに我國民は祖先崇拜よりは、むしろ子孫愛重であるといふたが、此に其の餘弊を現はしてをる。愛重は勿論結構であるが、愛重の仕方が、昔の家族主義的觀念に本く仕方であつて、今日に適合する公的人格的意味に本づく愛重の仕方でない。故に可愛がるにしても全く親の占有に屬し、飽くまで親の意志の下に從ふものとしての可愛がりの仕方である。子供は勿論親の子であり其の家の子であることはいふまでもないが、同時に社會國家の一員であり、獨立的人格者として活動すべき任務を負うてをるものなることに氣がつかない。前者の意味に於て、親權なるものが認められるのであるが、後者の

意味に於て義務教育が施される。されば、自分の子であるからとて、人格者として國家社會の一員として存在を無視することは、許されぬことである。然るに自の如き國家心や社會的精神の乏しき封建時代の所謂家族主義的生活に於ては、家の子としてより外に、其の意味を廣く深く考へることがなかつた。是の時に可愛がることは同時に親權家長權を絕對に振ふことであつた。かくて代々子供の自由活動を束縛干渉して、人格的獨立心を失はしめ、延いては國民の自發性創意性を害した結果になつてゐる。

固より、子供は養育しなければならぬ、教育しなければならぬ。或種の束縛、或種の制止もしなければならぬが、右の如き考方に依つて其れが度を過ぎてをる。從來の家族道德の觀念に本いて、親の否學校までもの、子供に對して望む所は、其の大人しきことであるが、之は、人形然として、大人の意を向へて行儀よく作法を作つてをるといふことである。中にはしつけのやかましきために、只をぢけてゐる子供もある。かくて子供は其の天眞自然の性を早くためられて、常に大人の意に合ふ人形式の子供となつてをる。子供が子供としての性情を自然に横溢に現はすことを嘉みせずして、大人の都合のよいやうな仕振りに於て之を賞するのは、子供をやがて立つべき人格的獨立人としてみずして、親の意志に服從すべきものとしてのみ見るからである。現に、子供の時、其の本能的自由性をつまゝれては、一大人としての野心志望の旺盛なり得ざるも、當然といはなければならぬ。我國民は、此の點に大なる缺損はないか。又中には子供を甘へさせる親もあるが、之も可愛がるあまりに、意を用ゐ過ぎるからである。一種の消極的干渉である。子供の自發的自由活動を育てるやうに留意せずして、子供の言ふ事毎に其意を迎へるのであるから、それがために子供は萬事親の意を引き親の意に依るに傾き、自らの意志に依つて活動する習性を失つてしまふ。積極的干渉ではないが、一種の消極的干渉であつて子供を私有品的翫弄品的取扱ひをなすものである。

幼少者に對する取扱ひが斯の如くなるのみならず、長じて我といふ自覺の出來る年頃になつても、親は尙幼少者に對するが如き態度を失はぬ傾きが強い。其の自覺心其の自由意見を尊重しない。皆親の意に從ふべきものといふ前提の下に之を取扱はんとする、是に親子の間に意志の疏通を缺き感情の不和を生ずるに至る。是れ世間に實例の多いことである。例へば職業選擇の如き、從つて其れに關する學校選擇志望の如き、親は家のた

めと稱じて、子供の性向趣味をも考へず、一圖に自分の思ふ通りにしようと欲し、子供は出來るだけ自己の自由意志に從つて選擇しやうとする。此に兩者に理解がない、不和不平を生ずる。固より互に相談してきめるべきは勿論であるけれど、從來の家族道德の觀念によると、子供の自由意志や創意を認めることを大事のことゝ考へず、只親の意志に從ふべきものと高壓的に取扱ふのは、現代に於ける親の道といふことは出來ぬ。たとへ自分の意ふ通りにならぬとしても、子供の性向特徵と其の意志が專ら動く所に其の旺なる活動發展を見て私に喜びとすべきである。子供を家族的所有物と考へぬ以上は、當然、かやうに寛大に善意的に取扱ふべきである。又結婚問題について、子供の自由意志を無視する傾向の强いことも、顯著なる事實で、之がために往々悲慘の事件をかもすことがある。親が嫁や婿の問題に口を容れるといふことは當然であり自然であるが、これも程度問題であつて、子供の意志よりは親自身の意志を第一位として處理することは、やはり子供を人格的に取扱ふものでなく、家長に從ふべきものとしてのみ取扱ふのである。とにかく從來の慣習によると子供が妻を迎ふるのでなく、家が嫁を貰ふのである。意志的には子供が結婚したのでなく、親が結婚したのである。昔は、それでよかつたであらうが、漸く人格的に目覺め來つた時代には、誤つた取扱法といはねばならぬ。又總じて、子供の自由活動を束縛干渉するに傾くといふのも、從來の家族道德なるものは、子の親に從ふべきを說く道德であつて、親の子に對して心得べき道德ではないからである。親は子より孝養を要求すべきであつて、親たるものは子たるものにいかにつくすのが道であるかなどは、殆んど無視されてをる。所謂家族道德は服從道德の一點張りである。是は東洋道德の通弊であるが將に大に改造を要すべき點である。されば、從來樂隱居をするのは親の特權のやうに心得られてあつたが、それも自分の腕に基きての樂隱居ならば勝手であるけれども、子供の自由活動を束縛し制肘し、之を酒肴として、まだ働ける身でありながら、敢て樂隱居をきめこみて、子供の孝恩の足らざるを叱咤するなどは、あまりに得手勝手の道德觀といはねばならぬ。子の親につくすべきはいふまでもないが、親は只子供を育てたといふ以上に、其の子供が人格的獨立性の强固に伸びるやう、其の意志を尊重しなければならぬ。親が其の子を私有物の如く考へ、子道はあつても、親道はないやうに思はれてをるのは、從來の家族道德の一弊といふべきである。

其の二は、子の親に對する側に就て見ると、子が親の財産や威光にたより過ぎることである。親が子供を私有品視した態度と相應するものであつて、是れ又所謂家族制度の一弊である。自由活動性の伸びなかつた子供は、親にたよりがちになるのも自然のことである。富豪の子、華族の子、顯友の子、然らざるも相當の財産あり名望ある人の子が、親の財産威光にたよりがちなる結果、其の獨立的精神を失ひ、無能無爲の人間と化しつつある例は、世上決して尠しとしない。今日の社會問題も、一つはかゝる無爲無能者が、親譲りの財産や名譽や地位を受けて其の實力に似合はぬ生活振りを發揮してをるがため、起ることも、決して見逃してはならぬ事實である。とにかく、從來の家族制度は、子たるものをして其の人格的實質價値を尊重して、自己の生計は自己の腕に由るといふやうな獨立的氣象を養はしめなかつたことは、慥に一缺點である。

其の三は、夫婦關係に就て、婦人の意志人格があまりに無視されてをるといふことである、是は一般に女が男に對してあまりに屈服的位置にあるといふことである。所謂男女平等は文字通り行ひがたきは勿論、大體に於て能力は男の方が女より優れるものと考へられるが、それにしても其の女の意志や人格を尊重するといふことは正當のことである。從つて其の敎育を向上し其の意志を發揚せしめて、婦人の位置の向上をはかるは、今日の社會改造の一急務である。而してかくの如く婦人が蔑視されたことは、從來の家族制度が生んだ產物であることは、いふまでもない。是等のことは、特に婦人問題として今後大に論究せらるべきであつて、今此には、家族道德の一疑問として指摘するに止める。

其の四は、親族關係に就てゞあつて、御互に依頼心がある所から起る不利や共倒れ、又は血族關係を重んずる所から結果する一種の閥族觀念である。親子の間に眞の孝眞の愛よりは、依頼心が强過ぎる弊があるやうに、又家族間にも依頼心の多く、其のために御互に依頼し合つて思ふ通りになれず、遂に不和を生ずる例は、世間に澤山にあることである。又只賴まれるまゝに借證文に輕々しく捺印して、共倒れになる例も多い。是れ皆依頼心の强過ぎる結果である。又所謂閥族觀念は、種々の意味に於て用ゐられてをるが、其れが血統關係を土臺として成れる觀念なることは明白である。昔の政治問題は、常に之が利用せられた。今日も尙權門富豪の間に、此の策を用ゐ一種の親族閥を作つて、政治上經濟上に其の努力を張らんとするものは中々

多い。親族となれるが故に自然の結果として結合的勢力をなせるものも勿論あらうが、意識的に此の閥族作成の觀念が働ける場合の少からざることは、爭ふべからざる事實である。此の現象は政治的經濟的上流社會に於てのみならず、田舍の所謂物持ち仲間の間に於ても此の觀念は中々に強い。中には知らぬ家同志の結婚は、損になることもあるからとて、御互の懐勘定で重々の緣組みをするものもある。かくの如きは、一種の人情ともいふべきであらうが、私の關係を以て天下の公事を捌かうとするが如きは、其の餘弊なることは、いふまでもない。顧みれば我國の歷史は、あまりに閥族と閥族との權力爭奪の跡に富む。今日の如き、人格の實質的價値を尊重しなければならぬ時に於て、又萬事を公明に機會均等的に處理しなければならぬ時代に於て、私的關係を主とする閥族觀念は一掃しなければならぬことである。

其の五は、家族對社會の關係から見出されることであつて、我國民に家族的利己心の強いことである。利己心といはゞ、所謂個人主義專賣の如く心得てをるものもある樣だが決してさうではない。家族といふものを單位としても夫れがある。即ち此の社會生活をなすに當つて、獨り家族關係の事柄をのみ尊重して、社會關係の事項を忘れ、獨り我が家を肥さんことをはかれば、是れ卽ち家族的利己主義である。而して我國民には此の種の利己主義の觀念が強い。是れ所謂家族制度所謂家族主義のもたらせる一弊風である。昔の世の中ならばこれでもよいといへよう。所謂御家大事は生活上の第一義であつたからである。德川氏の如きは其の最も標本的なるものであつて、御家大事のために、無事長久のために、遂には日本國を鎖國にまでした。而して諸國諸大名夫れ夫れ皆御家を大事にし、武家も町人も百姓も、皆御家大事であつて、所謂子孫繁榮のために計をめぐらすに怠りなかつた。子々孫々一家の繁昌をはかることは實に所謂家族主義の根本要諦である。かの子孫のために美田を買はずなどは、能く能く考へて諦めた末のことである。皆美田を買はんことを欲せざるものはなかつたのである。昔の變りなく動けぬ世の中では、それでもよいが、今日のやうに、所謂社會關係が複雜になり、人々相互間の交涉影響劇甚なる時代に於ては、かゝる家族的利己心には、一大痛棒を加へて大修正をなし、社會的公共心をもつやうに導かねばならぬ。

想ふに、今日の囂々たる社會問題の中核をなせるものは何處にあるかといへば、いふまでもなく、其は所謂經濟問題、所謂

生活問題にある。昨今、かの政治上のデモクラシー論が、急變して産業上のデモクラシー論となり、引いては社會主義の研究となり、共産主義無政府主義などの討究となり、社會問題は、**資本と勞働との關係に就て急調亂調を打ちつゝあるは、我々の**齊しく知る所である。此の問題はいかやうに解決せられるかは容易に逆睹することを許さゞるものがあるが、何人も思ひ及べることは、土地資本の個人的所有を制限して、段々之を公有化するに導くといふことである。從つて個人的所有を無制限に增大せしむる原因となる、遺産相續については、其の大なれば大なるほど重税を課し、乃至は其の相續額を制限するやうな方針に向はぬとも限らぬ。既に世論もあるが如く、今日の經濟觀は個人主義的經濟觀より社會本位の經濟觀に向つてゐる。所謂個人の富なるものも、實に個人一個の勞力の結果と見るべきでなく、社會關係の賜になることが多いのであるから、之を以て自己一個の絶對的特有物と思ふのは不都合であり、よろしく社會的公共的意味を加へて之を取扱ひ、社會公共を利するやうに使用しなければならぬといふ觀念は漸く強くなつて來てをる。されば、其の財産なるものを、何等社會公共のために用ゐず、其の儘ソツクリ子孫に讓渡すにおいては、天下の公財を私するものであるといふ譏を免るゝことが出來ない次第である。故に、自己の勞力の結果になるものは其の人の所有財産となすべきものとするも、之を無條件に其の子孫のためにのみ遺すといふことは、其の點に於て社會生活の經濟的不衡平を持ち來すものとみねばならぬ。實に今日の社會問題は、此の點に重大關係をもつてをる。

然るに翻つて、我國民の心理を解剖すれば、先きに述べた如く、家族的利己心が強い。營々勞苦するも子孫のためで、かくて溜めたものを殘らず子々孫々に遺して、一家安泰子孫繁昌をはかるとするは、我々日本人の心深く欲する所である。然らば今日の急調子の社會問題には、火に注ぐに油を以てするやうなものである。危しとも殆しと言はねばならぬ。所謂個人主義の場合に於ては、いかに多く財貨を蓄積するとも、自分の一生を限りとみて、必ずしも子々孫々に自分の財産を延長するといふ考もないから、之を社會公共のために散ずるのも、思ひ切りのよいことであるが、所謂家族主義では、其の思ひ切りが惜しくて出來ない。社會に廣く與へるよりは、殘らず之を子孫に與へんことを欲する。此の點から考へれば、所謂家族主義より一個人主義の方が、土地資本の固定化私有化を妨ぐに都合よいとい

はなければならぬ。かの個人主義である利己主義であると惡評せられる歐米人の方に、其の遺產を社會公共のために献ずるもの多く、自ら家族主義であり非利己主義であると稱する我々日本人の間に、死後其の富を社會國家に献ずるもの罕なるは、右の理を證明するものといつてよい。我々は所謂個人主義ではない、親子親類のためを深く思ふ。併し其の思ふ所が家族といふ版圖に限り、社會公共關係を眼中におかず、而かも自分の引き續く子々孫々永劫の際まで、其の遺產を蓄積せしめて、御家繁昌子孫幸福をはからうとすることは、却つて所謂個人主義よりは社會的不衡平を生じ、社會問題を紛糾せしむるものといつてよい。社會問題解釋の見地からいへば、家族的利己主義は、個人的利己主義よりは、更に難障であるといつてよい。カーネギーが、生存中、其の私財の多額を社會公共の精神事業慈善事業に投じつゝあつたことは、知れ渡つたことであるが、先年死去の際も、遺產十二億の半を、社會公共の事業のために寄附したと傳へられる。我國從來の富豪のやり口を見ると、かゝる場合は凡てを家族に分配しても、社會事業のために投ずるなどの念は起ることはあるまい。今日時間の影響を受けて、他動的に遇然的に所謂成金になつたものは非常に多い。然し彼等は幾千の金額を社會公共のために投じたか、果してかゝる社會奉仕の念が金を得た時に、心に思ひ浮んだか。そんなことは殆んどなかつたであらうと思ふ。尤も近頃は社會の教訓を受けて、乃至多くは脅威を受けて、ボツ〳〵相當の金額を公共事業に用ゐるものあるに至つたのは、喜ぶべき現象であるが、歐米人の社會奉仕の念慮よりは遙に薄いと評せねばならぬ。是れ皆家族的利己主義のために、家族のためは慮つても、社會のためにつくすべき義務あることに思ひ及ばぬからである。我々日本人は利己主義個人主義ではないといはれる。併しながら同時に我々には公德心がない公共心が缺けてゐるといはれる。是れ皆家族主義といふ、子供等に對しては利他主義愛他主義であり、社會公衆に對しては根深き利家主義である道德敎に、一切のものが吸收されてしまつたからである。故に予の觀察する所によると、所謂高利貸といはれ、社會的に非道の奴、守錢奴などゝ罵られる人ほど、子煩惱である。子供の可愛いばかりに、うんと溜められるだけ溜め、絞れるだけ他人より絞り取つて、子々孫々永劫の末まで、其の安泰繁昌をはからんと欲する。是れ家族的利己主義の標本的なるものといつてよい。かくの如き程度に至らぬとも少くとも我々の心裡に、社會公共關係に良心的活動が十分に動

かず、獨り、御家大事子孫大事と思ふ、家族的利己心の顯著に働くことは、決して否定することは出來ぬ。今日の如く社會問題のやかましき時代に於ては、先づ我々は此の心より改造を加**へて行かなければならぬ。是れ實に道徳的改造に本づく社會生**活の改造である。幸に從來は我々國民は一體に貧乏であつたから、此の點からさして難問題も起らなかつたが、段々富むに從つて、此に一大警戒を加へねば、實に不祥の事變を起さぬとも限らぬ。天下の富者の宜しく猛省すべき所である。

子孫愛重は、我々古來の心的風習なるとともに、固より是れ人情の自然に基くものといはなければならぬ。夫故に子孫愛重はいかに深く愛重しても、之を道徳的に不可とすべき所以はない。只其れがために社會公共の關係の大切なることを忘れるから不都合となるのであつて、其れも所謂愛に溺れるからである。愛重する方法について聰明を缺くからである。只多額の財産をのみ積上げて其れを子孫にのこせば、其れで愛重の道がつくせると思ふからである。此に先きに述べた如き家族的利己主義といふ弊を産する。實は、これ社會公共の利害に背くのみならず、又眞に子孫を愛重する所以にならざることを悟らざるからである。悟れば、即ち必ずしも子孫のために美田を買はずといふことになるのであるが、悟らざるために、單に物質的にのみ官能的にのみ子孫を擁護せんと欲する。是れが大なる間違ひで、かくて子孫は、無爲無能の生活に安んじ得る處より、其の健全なる獨立的氣象を失ひ、延いては其の身體を虚弱にし、錄でもなき子孫を多くし、側ら社會的不衡平を生ぜしめつゝ遂に倒産し滅亡するに至るものである。勿論、自己死して、家族を窮地に陥れざるやう相當の財産を遺すことは至當であるけれども、子孫をして只無爲無能に安んぜしむるやうな物質的愛重法をのみ取るは、社會を害すると共に却つて子孫を賊するの結果となる。宜しく眞に子孫のために思はんとすれば、其の教養を第一義となし、其の身體を強健ならしめ其の精神を堅固ならしめ、一人立ちにて樂々と世の中に立つて行けるやうになすべきである。徒に美田を多く遺さんよりは、其の美心健康を養ふべきである。

無政府主義か個人主義か

法學博士　田中萃一郎

自分は家族制度維持論であるが併し一體家族制度は何ぞやと云ふに是れ程正體の不明なものは無い。世界のうちで一番家族制度が能く保存せらるゝと云ふ支那でも實は何のことやら判然せぬので隨て家族制度を是非する人の議論も甚だ理解に苦むことが多い。一體歐羅巴に於ける佛蘭革命以前の國家は先づ之を僧侶貴族市民の三階級又は之に農民を加へた四階級に分ち更に市民は夫れ〳〵ギルドとかインニングに分れ一個人は先づその一員として立ち次に市民として立ち而して國家は階級から構成せられて居つたのである。然るに佛國革命と共に個人は相集て國家を組織することになつた、各個人殊に市民は從來の慣例に反して直接國家と交渉を有することゝなつた。是は所謂原子的國家觀として學說としては今日三文の價値も無いのに事變は今日の國家はすべてこの學說通りになつて居るのである。それで國家主義と個人主義とが常に理論に於て將た實際に於て相爭はれて居る。自分の如きは元來個人主義を立脚地として居るのでその當然の歸結たる無政府主義の弊害は疾くの昔に悟了して居る積であるが、從來極端な國家主義の思想のうちに養成せられた學者先生達の間にはその弊害を矯正せんが爲にや昨今流りに無政府主義の研究に沒頭してその長所を世間に鼓吹してゐるやうである。成程從來我國の思想界は極端な國家主義を謳歌して居つたのでかゝる反動の起るのも無理では無いかも知らぬが皇室中心無政府主義が理想として宣傳せらるるが如きは少しく常識を失つて居りはせぬであらうか。自分は政府當局者がかくの如き輕佻浮薄にして而も昨今の如く思想の動搖せる青年を過つの惧ある言議を何故に不問に附して置くか頗る奇怪に思ふのである。或は呂運亨に對すると同じくかゝる學者に對して昨今何等かの懷柔政策でも施して居らるゝにや。

繰返して言ふが自分は個人主義を立脚地として居つて極端な國家主義に反對である。であるから戰後國家主義の益々強めら

れんことを思ふて曾てゲデス教授の意見に従ひシヴィズム並にリージョナリズムを説いたこともあつた。シヴィズムとは都市主義、リージョナリズムは地方主義であつて共に自分の居住する**郷里を愛してその改善に努力するの主義である、或は自治主義**とも云ふてよからう。何人たりとも國家の一員たると共に市町村の公民であつて國家の富强に盡すと共に市町村の繁榮を希望せぬものは無いであらう。果して然らば市町村に於ける敎育衛生交通その他百般のことに於て初中終改善に努力せねばならぬ。而して市町村たるものは獨立自治の精神を以て萬事の施設を爲す可きで水道の敷地ヤレ國庫の補助學校の設立ヤレ國庫支辨と一から十まで依賴心を發揮する今日の狀態は贊成出來ぬ。社會改善事業の如きも市町村各々出來る限の設備を爲す可きで、隨て是に最も適當な財源たる土地增價税の如きは市町村の賦課の權を與ふ可きである、國家の政務は益す增加するの一方で無政府主義を理想とするが如きことは思ひもよらぬことであるから之と相併行して市町村の權限も擴張して往かねばならぬ。而して市町村の住民たるものはその鄕里の爲に大に盡す所がなくてはならぬ。是れ自分がシヴィズムとリージョナリズムとを主張する所以である。

さりながら個人は先づ第一に一家族の一員である。一家の經濟上の獨立と云ふことに第一に力を注がねばならぬ。勿論某々氏の如き抱負のみ大きく國葬を以て自任する人に至ては一家の**經濟などは如何でもよろしいので、又廣い日本國澤山な日本人**の間にはかゝる抱負を持つて居る人が二大政黨對立して少くも二十人はあつて苦しく無いがそれ以上出て來ては他に迷惑を受ける人が多く所謂一將功成萬骨枯で先づ普通の人としては一家の經濟上の獨立に力を盡さねばならぬ。勿論社會主義の世の中になれば又考へ方も異なれることになるであらう。社會主義は云ふ如く個人主義の對立ですべての責任を社會に課して個人を無責任の地位に置からうとするのである。個人の人格を主張しつつ而も個人の人格を無視せんとするものである。例へば子女の養育は全然之を社會に於て負擔す可しと云ふが如きその一例で子女は生みつ放しで兩親にはそれ以上何等の責任はなくなるのである。古來胎敎と云ふとを云ふが哺敎と云ふことも云はれ得るので同じ兩親の子女でも哺母の如何によりてその性質甚しきは賢愚の上にまで著るしき相違を來すことがあるが社會が子女を養育する場合には如何にする積であるか。社會主義の主張はプラトーンのレパブリカの理想に似て居るから社會主義は希

瞞思想であると云ふが如き斷定は畢竟するにロマンチシズムの義を解せざるものの獨斷である。元來社會主義は生の現世的保存と永世的保存とを社會的に行はんとするに對して個人主義は之を個人的に行はんとするので而して社會主義者に現世的保存に必要な財産を共有にし永世的保存に必要な夫婦關係をフライエリーベに代へんとするのであるから社會主義共鳴者の間には家族制度の撤廢を叫ぶものもあらう。併し自分は個人主義者として飽く迄も私有財産制度を維持し而して家族制度をも保有して往からとするので隨て一家の經濟上の獨立を力說するものである。

さりながら家族制度とは何であるか。單に一夫婦並にその子女のみを指すのであるか。一家の經濟上の獨立と云ふ點に於てはそれでも十分で又この單式家族に於ては個人主義と頗る接近して居るが爲、今日世人は口に個人主義を排斥しつつ事實に於ては之を實行して居るものも少く無い。併し自分はも少し之を擴張し度い。家族制度は生の永世的保存の爲に起つたので、維新以來西洋の個人主義を鵜呑みにした人々は數々從來の家族制度の思想を攻撃したが而もその實際に於て行ふ所は舊思想の範疇を脫して居らぬ。否昨今漸く個人主義の歐洲法典を日本に直輸入した弊害を痛切に感じて來た人もあるやうである。否親族編相續編の規定の直譯的であつたのみでなく稅制の上に於ても個人主義を基調とした外國の制度をその儘に輸入したが爲に現に家族制度の維持を困難ならしめて居る。自分は個人主義の立脚地に立つては居るが是は國家主義に對した場合のみで否國家主義が個人主義を不當に壓逼せんとする場合のみで、先づ家族の經濟上の獨立を圖り次で市町村の自治を完成しかくて國家の富强を致し廣く人道の爲に盡すのが、所謂今日の格物致知修身齊家治國平天下であると信じて居る。隨て個人と國家との中間に存する段階を無視せんとするの思想は贊成することが出來ぬ。この意味に於て而して家族制度の發達した社會は最も能く輕佻浮薄な過激思想に抵抗し得ると信じて居るので自分は家族制度の研究に就ては特別に興味を有つて居る。勿論支那の如く家族制度の上に立てる社會の基礎は鞏固であるが國家は萎靡不振であると云ふのも殷鑑とせねばならぬので自分は國家主義の許す範圍内に於て現行の家族制度に對して一一改革を要する點があると信ずるが遺憾ながら之を評論する餘裕が無い。

民に加へて居つた束縛を解き、國民をして一個の人として自由の行動に出でしめるが如きは、即ち社會改造の第一歩に外ならない。數年前議會で相續税の税率を輕減する改正案の討議せられる際、或る議員は相續財産に對して、重い相續税が賦課されると、家族の存立を危うし、爲めに日本の特色たる家族制度を脅かすに至る恐があると公言したことがある。當時私は相續税あるが爲めに、破壞されるやうな薄弱な家族制度ならば、社會の根柢とも樞軸とも爲る可き譯はないから、ドシ／＼破壞して差支ないと云ふ意見を公にして、右の議論を駁撃したことがある。事實社會の根柢と爲るは、強い意思、固い信念を持つた個人であつて、更に大なる社會的見地に於て個人の力を統轄するを得たならば、社會は如何樣とも繁昌するのである。愚にも付かぬ家族制度を法律の力で作り上げた處で、社會の發達に貢献する所のなきは、私の論を俟たないだらうと思ふ。

家族間に於ける階級利益の衝突

法學博士　神戸正雄

（一）

今日世界改造の時代に於て、家族制度が我邦にて問題とせられるのは、我邦民法の定むる戸の制度、詳しくいへば戸主と家族員との關係、並びに之を關聯する家督相續の制度が實際と異り又は實際の必要に適合せざるの故に、之をも序に改革したしとの考が行はるるからである。そして若も近時一部の人々の夢想するやうな我邦社會組織の大變革が行はるることが出來るならば、右家族制度の如きも必然之に伴ふて改革せらるることとならうが、其は私の考えて居る所ではなく、又茲に論じやうといふのでもない。私は茲に唯だ經濟上の變遷よりして現實の家族が實際變化しつゝありて、最早大勢上之が制度をも改革するの外なく、又最早強ゐて舊制度に拘泥するに及ばないと考ふるもので、其の利害得喪を主として經濟上より併し社會上道德上よりしても論じて見やうと思ふ。

（二）

偖て我民法に於ては、戸といふものが規定せられ、戸主といふ家長があつて家族に對して或力を及ぼして居る。即ち戸主は家族の居所を指定し、家族の婚姻等に同意を與へ、其他若干の勢力を家族に向つて振ふことが出來る。但し反面に扶養の義務を負ふては居る。加之、家督相續制度の認められたる結果として、戸に屬する財産の分配所有に於て戸主又は戸主たるべきものが特段なる有利の地位に立ち、家族員は之と比較して全く憐れむべき地位に置かれてある。家族員の此不利なる地位、其に對して戸主又は戸主たるべき運命にある者の有利なる地位の對象は、實に現代人の間に一の分配の不公平を法律が强制するものと感ぜしむる所であつて、今日、資本家と勞働者との間に於ける分配の不公平につき苦情が起り、其の爲め社會組織に變革を生ぜしめんとしつゝあると同樣なる苦情の種が玆に宿つて居る。そして此分配の不公平を生ずる所以の基礎が戸の制度にあることゝなると、人々は乃ち戸の制度を咀はなければならなくなる。而かも其戸の制度たるや、實際には段々と有名無實となりつゝあるに於て、目覺めたる人々は此法制を虛僞とし、之より解放せらんことを望むこととならなければならぬ。

（三）

實際に於て一戸の中に屬する數多の家族員が共同の家屋の中に住居することもあるが、併し別の家屋に於て生活することが少くない。夫の農業及手工業本位の經濟時代に於ては、數多の家族員が共同して一家屋内に生活し、共同生産に從事し、共同消費を行ひ、併せて共濟扶養をも行ひ、更らに此にて教育訓戒をも行ふことが最自然的であり、又洵に便利でもあつた。此によりて彼等の間に適當に分業も行はれ、節約も行はれて、經濟上の發達が遂げられ、且つ又精神的訓練も積まれて、今日の人々から見れば或は奴隷的狀態といふかも知らぬが、兎も角其れで平和なる生活は營まれた。然るに今日の如く經濟社會が變遷して大機械に依る工場工業が起り、交通の利便も進むことになると、人々には其能力に應じ機會を捉えて有利に生活し得る所に於て生業を求めることゝなる。戸主と獨立生活能力なる家族員との干係は玆に於てか解かれなければならぬ。一戸に屬する幾多の者が各異りたる處に生活する外なきこととなり、玆に自ら同一戸に屬しながら、利害休戚を異にするものを生ずる。場合によりては戸主と家族員とが新時代に於ける經濟上の階級利益を異にする爲めに、相爭鬪することも起らなければならぬ。

其れに今一つ、今日各人が其職業を選む前に受くる所の教育もが、必ずしも其戸主の家屋の所在地にては受くることが出來ず、彼等が自然、夫の家を去りて別箇の生活を遂ぐることとなつたのも、既に夫の家族の解體を兆すこととなつて居る。

（四）

斯くて今日各家族員が戸主と離れて經濟生活を爲さんとして居ることは、右いふ如く經濟界變遷の結果、避くべからざるのみならず、此が不利なる結果をもつものともいへない。成程一戸に屬する數多の家族員、其は結局多くは親族であり、特に同一の祖先より出でたるものであらう。其が戸の下に强固なる共同を保ち、父祖の名の爲めに益々奮勵協力して行くといふことは、國家の基礎を鞏固にすることにも貢獻しやう。而して今之を解體して行くに任かすといへば、同族でありながら分裂抗爭することとなり、國家團體の基礎を鞏固にする所以でないことになる。特に日本の國體が同族相依りて出來たる一大家族といふことを本とするのに、家族制度の解體を放任するのは、即ち我國體を破壞するの第一步なりとも見らるる。

（五）

併し茲に考えなければならぬのは、夫と戸といふ大家族を解體するといふことが必ずしも、各人を全く箇人的にするものではないといふことである。此場合にも尙ほ夫婦子供より成る所の小家族は存立し得る。此だけは是非とも維持しなければならぬし、又此だけは人情としても多くの人に維持さることとなるであらう。そして此は男女の愛情といふ人類最自然なる本能に基きて最强國たる團結たり得る資格あるのみならず、一夫一婦制を嚴守する家族は社會の秩序を保持するにも最良好のものであるから、之により自ら國家の團結の基礎分子は强固なることが出來る。若し夫れ共同の祖先の名の爲めにといふが如きことは、必ずしも一戸の中に多數人が共同して生活せずとも、即ち各地に分散して生活しても各員別々に之を考えて活動することが出來る。却つて各員別々に發展した方が共間に競爭が一層盛に行はれて、一層盛んに發展することも出來る。且つ又一緒に生活して居ると却つて他人の缺點が見え過ぎて不和となるが、別れて居れば不和を生ぜずに濟むといふこともある。又日本の國家の同族的國家といふことは、今日朝鮮臺灣を併せたる大日本としては聊か不適當なるのみならず、之を舊日本に就きてのみ見るも、斯かる考は必ずしも大家族制によつて養ふには及ばぬ。其は國民史の敎育によつて出來ることで、小家族制となつ

ても良く養はれ得る。特に我日本の國民が共力一致して外に當らなければならぬといふことは、幸か不幸か日本の民族が世界の支配者國民と人種の異るによりて、彼等が必然考え及ばなければならぬことである。此點からいへば從來の如く國體との干係を云々して、時世に適合せざる壓迫的な戶の制度を維持し、隨つては又不公平なる家督相續を維持して、爲めに人々をして不滿不平を懷かしめ、其結果、我が大切なる國體をも咀はしむるよりは、むしろ自然的にして合理的なる小家族制に移つた方が餘程、國體擁護の爲めに安全である。

(六)

其れで今日では戶の制度を改めて、獨立別個の經濟を立つる箇人又は其集團と爲すべく、其は多くの場合に夫婦と其子女にして其扶養を受くるものとより成るべく、斯かる家族は自然的の愛情より成る所の最强固にして離るべからざるものである。斯かるものの間に於ても不和とか嫌惡とかがあり得るが、併し夫の兄弟や叔伯父母等の如きものに比すれば、到底比較にならぬ程、親密なる情愛が存する。斯かるものを以て家を構成せしめ、國家構成の單位とすることは洵に國家の平和の爲めにも良きことである。今日の如く一戶の中に愛情の薄きものがあつて互に不和の間に生活することは決して國家の基礎を圖らする所以でない。今日戶主が家族員に或勢力を及ぼし得るが爲めに、而かも其家族員の夫婦親子關係以外のものを包含する爲めに、戶主の夫の勢力が家族員には氣に入らぬことが少くない。家內不和の本である。勿論、夫婦親子の間にも同樣のことがあり得ても、此は少からず自然的の强き愛情によりて緩和せらるる。又斯かるものの間に於て、妻たり子たるものが夫又は父たる人に對して反抗してかゝるが如きなどは道德上許すべからざることである。然るに今日の戶主と家族員との間に於ては、家族員の方が戶主よりも年上のこともあり得るし、智能の優れたることも少からずあり得る。其にも拘らず家族員たる故に戶主の意に從ふなどいふことは、餘りに無理である。夫たり父たるものの曰ふ無理なことならば辛棒も出來るが、然らざる者のいふ無理に從ふといふことは、忍ぶべからずである。

(七)

それから此に家族制度の行はるる結果として生ずる利益の他のものは、各人に倚頼心を棄てさせて獨立心を助成し、之を以て獨立の經濟を立つべく努力せしむることである。兄弟の世話になつて生活を立てやうといふやうな意氣地なしもなくなり、

子供の力により老後の計を立てやうといふやうな意氣地なしもなくなる。勿論父母を失ひたる未成年の弟に對して能力ある兄なる者が父に代つて扶養するが如きなどは必要であらうし、父母の無產無爲にして經濟上獨立生活の能力なき場合、子たる者にして能力あるものが、此父母を扶養することも當然である。そして同地位にある者數人ある場合には、此扶養の義務は平等に負擔すべきものである。

八

右の制度の結果として一つ遺憾に思はるるのは、父母老ゐたる後に於て其子の家に在て扶養せられ、子たる人が父母に孝養の出來ざることとである。此は併し子たる人に於て厚く孝養したいといふ考のある場合には、事實問題としては如何樣手厚くも孝養が出來る。父母が經濟上獨立生活能力なしといふ程の貧困でなくとも、子の經濟上の地位の遙かに上にありて子の處に引取らるるを一層有利とする場合に、子が父母を引取ることも事實として出來る。勿論此等は國民道德として斯くあるのが良いことではある。たゞ法制としては最小限度の扶養義務を定むべく、子が相當に生活しつゝ父母が餓に泣くの不都合だけは是非とも法制によりて排除しなければならぬが、其以上を子に求めるのは、父母たる人をして依賴心を起さしむる所以で、宜しくない。たゞ之に依りて子が法定の最小義務のみ主張して、自ら相當高き生活を爲しつゝ、父母の低き生活を顧みざることゝなるの傾はある。其方は多少遺憾なること勿論であるが、其代り反面に於て親の方にては、濫りに子の力に依賴せざるの風を助成して、國民全體の經濟上の發達を助長することの利がある。此大なる利益は前の不利を償ふて、優に餘ありと思ふ。

九

其から右と關聯して相續につきては私は家督相續を止めて財產相續のみとし、財產相續は諸子均分と爲すことをすゝむるものであるが、此は詳しく色々の方面から說かなければならぬことで、今其暇を持たぬから、暫らく他日に讓り、茲には右戶又は家族制度の問題のみを述べた。が凡そ此等のものの改廢には、捉はれたる舊思想の人々の頑强なる反對があつて、容易には行はれないことと思ふ。其等の人々は多分、新しい制度を採らうといふものを國賊のやうにいふであらうが、併しあまり古い不合理な不自然なものを墨守するに於ては、却つて新しい人々の不平不滿が烈しくなつて、社會の擾亂を起す。であまり甚しく弊害のなき以上は、時勢の變遷によりて自然に進み來つたものは成るたけ之を採用して、之に伴ふ多少の弊害は道德教育によりて之を緩和しては何うかと思ふ。

家族制度の過去及將來

文學博士　三浦周行

すべて事の是非得失について議論をするには先づ其議論の對象たる問題の性質を明かにしてかゝらねばならぬ。家族制度の内容性質について果して論者の間に充分の理解があるであらうか。私は少くとも此問題について最も多く論議する法律家と教育家等との間には肝腎な家族制度といふものに對する見解が一致して居ない爲め、お互に見當外れの議論をして居ると思ふ。即ち法律家の所謂家族制度は家族を一つの權力關係と見て彼等が戸主に依つて統括さるゝ戸主制度であると申して居るが、教育家等の所謂家族制度は家族を社會の單位と見てこれを組織してゐる親子を始め夫婦兄弟間の道徳的法律的關係をいふのである。前者は純法律的見地に立つものであつて、後者は道徳的社會的見地位に立つものといへる。法律家にいはせると、親子や夫婦兄弟などは親族關係で家族制度とはいへぬと一蹴して仕舞ふし、教育家はこれこそ家族の要素であると主張する結局法律問題としては議論の的が違つて居るのである。いつ迄議論を繰返しても水掛論に終るの外はない。

私共歴史家の立場としては常に論より證據を唯一の信條と致して居るものである。過去に於ては斯うであつた、現在は斯うである、といふことはいへもあるが、將來如何にすべきやといふことは其本領でない。此點に於ては法律家も同様であつて、社會の現狀に適應するを基礎として法律を作るが作つたものが實際と迂遠になれば又修正する丈の事である。家族制度の將來に見込を立て全廢しやうなどゝは法律萬能を夢みる人で自惚の甚しいものと謂つてよろしい。然らば此家族制度の將來については教育家倫理學者社會學者等の間に風教道徳上より論議さるるが相當の事である。さうしてそれには法律家の解釋を離れてあらゆる方面に彼等の本領を發揮すべきである。法律家は世襲の官職も家孫もなき家族制度は崩壞運命を有するといふも、

我國民發達の歷史について考へても物質編定ばかりで此問題は解決されまい。若し法律規定の中にこれと牴觸する不都合の定があれば其改廢を圖るも一手段であらうが、法律にはおのづから、其範圍があつて、昔の法律ならばいざ知らず、現代の法律に道德律を強制する規定は載せられないのであるから、餘り多くを望むはよくあるまい。

法律家に言はせたなら成程家族制度は戸主制度であつて、親と子との如きは親族關係に過ぎなからうが、歐洲でも昔の戸主權が父權と同じであつた如く、我國に於ても主なる家族の親であつたところに家長としての權威があつた。上古は父が終生戸主たるを原則としたのであつて、戸主の死後家督を相續する子を令に重きを承くると あるを令義解に謂繼父承祭、祭事尤重故云承重と申して居るのは此關係に依つたものである。武家時代にも子が親を訴へることは前代の如く絶對に許さなかつたけれども兄弟間の訴には先づ和解を勸めそれでも肯かなければこれを受理して居た。此一事を以て見ても親が戸主たる場合と兄弟が戸主たる場合とに依つては戸主權に消長があつたと謂ふべきである。戸主權を非常に尊重した江戸時代でさへ家族たる隱居の父が子の戸主を勘當し廢除することを認めて居たのでも父の前に戸主の頭の上らなかつたことが知れやう。

法制史上から戸主權と親權との關係を見ると、家族制度の盛へる時代には戸主權が強くて、後世にいふ親權といふものが少く、家族制度が衰ふるに從つて、戸主權が弱くなると共に、親權ばかりになる。ところが我國では道德上からいつても親子夫婦兄弟等の親族間の規範はあつても戸主と家族との間には殆んど何物もない。法律上からいへば戸主家長惣領と其家族との間に多少の規定がないではないが、大部分親子關係で持切つて居ると申して宜しい。此點確かに教育家の立論の強みである。

そこで社會組織の單位を家族に置くか個人に置くかといふことが根本問題であるが、將來とも家の觀念は容易に我多數國民の腦裡より取り去ることの出來ぬことは推測を誤らぬと思はれる上に教育家としては此家を重んじ孝道を貴ぶ道德思想や慣習は飽迄もこれを支持し助長して行かんとするに傾くことであらう。今所謂家族制度維持の必要は教育家の說明に讓つて既に家を認むる以上、一人の家督相續人を置いて前戸主に代り家督を。相續させる祖先以來の家を存續させる必要がある。我國では昔から未だ嘗て此家督相續の行はれなかつた時代はない。併し家督は一人に限つて相續させたけれども、財產は男女の諸子

に適宜分配するを原則としたもので、其中家督相續人が比較的多くの分前に預ったのは當然とはいへ、決して全部を獨占することはなかつた。それが主なる家族の親である場合は親權で宜しからうが、兄弟などでもあると戸主權の作用となる譯である。戸主權については中古では前にも述べた通り、一家に於ける祖先の祭祀を主宰し、家族の財産を管理し、家族の戸籍の屆出の脫漏やそれに伴ふ不正行爲等について責を負はされたもので、武家時代になると、總領として家族を統括し、これを扶養し、彼等の所領の高に應じて租税課役を配當し、戰時にはこれを率ゐて戰場に出づべきものであつた。而かも家や戸主に屬する世襲財産を新戸主に讓與する場合を除いては戸主として其遺産を分配したのではない。法律家の中には諸子から寡婦に迄財産を分配することは我國本來の家族制度であつたのを、武家時代によつて惣領法が出來て、一子相續の風となつたといふけれども、それは誤つて居る。貞永式目五十一箇條の條文を逐一吟味して見てもさういふ意味の總領といふ言葉は一つも見えて居らず、遺産の分配は專ら親として夫として行つて居るばかりであり、而かもそれが分配制に依つて居たことが解るのである。一體一子相續の事實は前からも間々ありはしたものゝ其一般に廣く行はるゝやうになつたのは所謂戰國時代に家と家との間にも弱肉强食の風の激しかつた頃、一家の結束を强くする爲めに出來たことで、其戰國時代の一大名であつた德川氏の幕府にも其儘踏襲した迄である。戸主權も亦これに伴つて頗る旺盛であつた。今も尙ほ其舊慣の惰力で一子相續の風があるけれどもそれは疑もなく時代錯誤であつて、戰國傳來の必要の疾くに消滅した今日に於ては宜しくこれを撤廢して、本來の精神に、少くとも武家時代初期位迄に引戻すべきである。

併し又眼を轉じて現代の思潮殊に社會改造の方面から觀察したらばどうであらう。歐米の個人主義から見て家族主義を古いといふものもある。家族制度から出發した歐洲の文明が頹れて個人主義になつたのには夫々經緯のあることであるが、我國にはそれがなく、事實として家族主義が儼存して居る。且つ此家族主義は家族の人格を認め男子は勿論女子迄も特有の財産を認めて居た點に於て、家族專制に陷つて居らず、或程度迄は個人主義をも抱擁する寛容を備へて居た中古の令は唐制を摸倣採用した物であるけれども、家督相續人に比較的多くの分前を與へい女子の財産所有を認めた點など我舊慣を參酌して居る。武家時代から戰國時代迄夫々時代の要求に伴ふ立法を見るに至つて居

る。將來も亦時代に適應すべき施設を要するは當然である。

これを法制本來の精神から考へ、又教育家の要求に聞くとして親と共家にある子との關係を家族制度の中心としたならば戶主は主なる家族の親であり、若しくは親に代つて家族の世話をするといふ點に於て特殊の地位を認むべきである。而かも昔と違つて今の戶主には公法上の意義が極めて薄い。家族の戶籍の屆出や所得の申告など行政上多少の義務を負はされて居るとはいへ、それは一種の便宜から來て居るに止まる。それ丈遺產相續の場合等に於て多少有利な規定のあるはもとより當然であるけれども、現行法の如く戶主權と親權とを全く分離して仕舞つて前者を後者よりも強くするといふことは前述の見地からいへば徹底せぬ。それ故戶主權の多くはこれを親權に移すか然らざるも親權にも共通のものとすべきである。例へば婚姻養子緣組の同意扶養の義務の如きがそれである。現に親權として子の居所の指定監護教育など全く戶主の家族に對すると略同樣の權を認めて居るではないか。家族としての親子の戶主の指揮を受けさせるは我舊慣に背戾するの甚しきものである。其代りに親は同時に終生戶主として隱居などゝいふことを滅多に許さぬ樣にしたい。これは親の利益の爲といふよりも寧ろ子の利益の爲である。家族制度沿革の共通の軌道にも當箝れば又教育家を滿足させる事が出來る。恐らく法律家としても大して異議はあるまい。

親子の關係は別として家族の間には大に自由平等の空氣をたゞよはす必要があらう。現行民法には一體に男尊女卑の痕が見える。同じ親權を行ふにしても、父と母との間では差別を置いて、母の或行爲に向つては親族會の同意を要する事になつて居る。又推定家督相續人がある上に女子の養子を許すけれども、男子の養子は許さぬ事にしてある。夫等は追々改めねばなるまい。家督相續人の撰定の如きも之を自由にして、戶主たるに適當のものを舉げる事にしたい。家の尊重維持は一般に望ましい事であるとしても、特殊の場合には絕家を許すの餘地を存するもよからう。家族の戶主から獨立すべき場合にも戶主の離籍を制裁としないで、合意から成り立たせる事があつてほしいと思ふ。

以上は簡單に歷史上から家族制度の改良觀を述べたのであるが、書き終つて意を盡くさぬ點が頗る多いことを自覺する私は異日の議論を期すると共に、讀者に向つて拙著『法制史の研究』の大部分を占めた我家族制度の歷史的研究及び本年一月發行の法學論叢に掲載した『家族制度存すべきか廢すべきか』といふ論文を參考せられんことを希望する。（大正九——七）

クロポトキン思想研究

クロポトキンの社會理想說

昇曙夢

クロポトキンの思想學說の全體系に就いての批判は暫らく他日に讓り、茲では單に彼の社會經濟思想の一面に就いて、専ら彼自身の所說を紹介するだけに止めておく。それに就いて豫め誤解の無いやうに辭つておくが、私が彼の說を紹介するのは決して私自身が彼の思想に共鳴して居るからではなく、たゞ例の森戸氏問題から延いて昨今、クロポトキンの思想が頻りに論議されて居る際、その說の是非を問ふ前に先づ少くとも彼の社會經濟思想の根柢ぐらゐは世人も一應理解しておく必要があらうと思つたからである。

クロポトキンは自己の學說を稱して「アナーキズム」と云ひ、世人亦彼等一派の人々を「アナーキスト」と呼んで居るが、是れは最初から彼等自身が好んで然う名けた譯ではない。從來社會的若くは政府的集團の名目はその集團自身が選んだものではなく、寧ろ反對派が攻擊的に呼んだ名をその儘襲用したものが多い。例へばフランスの「サンキュロット」の如き、ロシヤの「ニヒリスト」の如きそれである。「アナーキスト」なる名稱の起りも是れと同じである。嘗て「インターナショナル」の中に、一切の權力を否定し、一切の權威を斥けた一派が起つて、最初彼等は自から稱して「フエデラリスト」と云ひ、後には反國家黨(anti- étatistes)又は反權力派(anti. autoritaires)と稱してゐた。當時彼等はアナーキヤ風の名稱を避けてゐたのである。それは

この名稱が、當時「インターナショナル」の敵であつたプルドン一派の者と混同される嫌ひがあつたからである。然るに反權力派の反對者等は故意に兩者を混同しやうとして彼等を呼ぶに「アナーキスト」なる名稱を用ゐ、且つ彼等が到る所に不秩序と混亂とを來すものであるといふことを頻りに吹聽した。それでもアナーキスト等はこの名稱を採用することを敢て躊躇しなかつた。たゞ彼等は最初この名稱を「アン・アーキヤ」と分けて呼ぶことを主張した。それは「アン・アーキヤ」なる希獵語が不秩序若くは混亂を意味する語でなく、單に權力の否定を意味する語であつたからである。けれども後には彼等もこの名目論に深い注意を拂はなくなり、自から「アナーキスト」と呼ぶやうになつた。また實際この語は、現存制度を否定し光明なる未來を建設せんとする一派の名稱としては適當である。

以上「アナーキスト」の名目に就いて先づ述べたのは、彼等が決して世間の一部に於て誤解されて居るやうに、一切の秩序を否定するものでもなければ、無秩序と混亂とを目的とするものでもないといふことを言いたいためである。彼等も矢張り人類生活の光明善美なる未來に於て、ヨリ以上の秩序と調和とを夢想して居るものである。唯彼等は現代の社會によつて認められて居る一切の秩序を○○するのである。然らば何故に現存の秩序を○○するかといふに、それは幸福なる生活を理想とする人類發展の法則と正義の要求とに戻るからである。この事に就いてクロポトキンは今日所謂秩序なる名目の下に呼ばれて居る多くの制度を指摘して斯う言つて居る。

『今日人類の十分の九は或選ばれたる少數者に對して奢侈と歡樂とを供し、或は一部の徒食者の低級なる慾望を充たすために勞して居る勞働者である。この人類の十分の九を占むる勞働者は、正當なる生活の要件と智的發達の必要條件とを缺いで居る。彼等は恰も駱駝の如く日夕勞働に從事して、曾て歡樂を思ふ暇すらない。まして科學、藝術、文學よりする慰安などは彼等の思ひも寄らない所である。彼等は唯營々としてその日の糧に追はれつゝ灰色の生活を存續して行くだけである。世人の所謂秩序なるものは則ち斯くの如き狀態を指して言ふのである。彼等の秩序なるものは要するに現代社會の認めて正當なる生活要件として居る饑饉、窮乏、其他の災厄に外ならない。かの饑饉の爲に死亡しつゝあるアイルランドの農民の如き、チフテリヤ、チブス、不作等の爲に亡び行くロシヤの細民の如き、又は

子女を養はんが爲に身を賣る娼婦の如き、或は精力消費の爲に滅びつゝある少年職工の如き、機械と同一視せらるゝ工場勞働者の如き、この制度の結果でなくて何であらう。

　世人の秩序なるものは多數を支配する少數者の謂である。この少數特權階級は、自己の子弟が他日種々の猾手段や壓制や放蕩又は殺戮等の手段によつて政權と特權とを掌握するやうにその教育を仕向けて居る。

　世人の秩序なるものは人間相互の間斷なき爭鬪、又は職業上の爭ひ、或は階級戰鬪、民族戰鬪等を指すものである。而も是等は永久の破壞、掠奪、殺戮等を意味し、又は幾世紀の間苦しい勞働によつて獲得した富を一時に破滅することを意味する。

　世人の秩序なるものは思想の奴隷、人間の隷屬をいふのである。かの食糧不足の爲に亡びつゝある幾千の勞働者の如き、或はダイナマイトの犧牲となれる幾千の坑夫の如き、或は雪のシベリヤに於て苦役に從ひ、薄暗き獄窓の下に呻吟して遂に刑手の手に無慘の最期を遂ぐるロシヤ青年の運命の如き、凡て是れ世人の稱して秩序となす所のものである……』

　クロポトキンの秩序論は大半斯ういふ見解に充たされて居る。斯くの如き見解が果して正當であるか何うかは別として、兎に角「アナーキズム」なるものは是等の現存制度を〇〇して、彼等の所謂〇〇〇秩序を一日も早く實現せんとする主張である。そして之を實現する手段としてクロポトキンは社會：〇〇を說いて居る。彼の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇の基調となつて居る思想は『萬人のための滿足』といふことである。萬人のための滿足とは各人の欲求に應じて分配するといふことで、言ひ換へれば各人の生存權を認めることである。この意味に於て彼の無政府主義の特徴は生存權に立脚して、萬人のための滿足を高調する所にあると言つていい。

　クロポトキンは先づ萬人のための滿足が決して空想でないといふことを述べる。

『萬人のための滿足は空想でない。我々の祖先が我々の勞働をヨリ多く生產的にしやうとして苦心經營した結果、この萬人のための滿足は實現し得る可能を有するに至つた。今日各文明國に於て人口の三分の一を占むる勞働者は、各家族に或種の滿足を保障するだけの充分なる品物を生產しつゝある。若し今日他人の勞働を徒らに濫費して居る凡ての人々が、自から何等かの有益な勞働に從事したなら、我々の富は必ず今より幾倍も增加

するに違ひない。我々はマルサスの學說に反して、人類の生產力がその蕃殖率よりも增加しつゝある事實を知つて居る。それ故に或一國に於て住民が稀薄なればなるだけ、彼等の生產力の發達は迅速である。』

斯う言つて、クロポトキンは更に必需品の生產制限に就いて大にその不法を責め立てゝ居る。

『今日資本を手にする人々は、生產品の價格を騰貴させようとして、絕えず生產を故意に減殺しつゝある。例へば鱒や小魚が國民一般の食用に供せられないやうに、そしてそれが富豪の食膳に上ることを妨げないやうに、是等の鱒や小魚を箱詰にして海中に投入するやうなことがある。その他の贅澤品も多くはこの鱒と同じ運命に陷つて居る。斯ういふことはつまり萬人に必要なる品物の生產を故意に制限するものではないか。恐らく多數の石炭坑夫は、嚴寒に慄えて居る凡ての人のために喜んで每日石炭を發掘し、また之を喜んで配布するであらう。然るに斯かる勞働者の三分の二乃至三分の一は一週間中三日は勞働に從事することの出來ない狀況にある。何故なればこの休業が彼等の主人に取つて石炭の高値を持續するために必要であるからである。また同じく數千人の機械職工は彼等の妻子がたとへ襤褸を纏ふてゐても、空しく工場主の利慾の犧牲となつて織物の高値を持續するために、絕えず機織に從事することが出來ない。その結果歐羅巴人の四分の三は衣服らしい衣服を持つてゐないのである。その他數百の鎔鑛爐と數千の製造場とは常に無活動の狀態にあるか、でなければ勞働時間の過半を空費して居るが是れも矢張り價格を騰貴させるための猾手段に外ならぬ。それがため各文明國民の中には、仕事がなくて空しく日を送りつゝある百萬乃至貳百萬の人々のあるのを見受ける。而も彼等は常に勞働を求めて止まないのである。何といふ矛盾であらう。

幾百萬の人は、荒地を變じて收穫に適する沃土を得んが爲には、喜んで耕作に從事するであらう。そして今日僅少の收穫を與へつゝある土地の生產力を五倍も增加するためには、一年間の勞働で充分である。然るに偶々斯ういふ事に當らんとする勇敢なる事業家が出ると、却つて世の嘲笑の的となつて折角の事業も失敗に終るやうな有樣である。』

以上は生產に對する直接の制限即ち意識的制限に就いて述べたのであるが、クロポトキンは更に進んで間接の制限即ち無意識的制限に就いて說いて居る。無意識的制限とは、人間の勞力

を全く無益な事物の生産に浪費しつゝあることを言ふので、例へば富豪の無意義な虛榮心を滿足させるための生産品の如きそれである。クロポトキンは言ふ。

『この間接的制限が如何なる程度まで達して居るかは容易に量り知ることが出來ない。けれども我々は人間の勞力が如何に多く空費されつゝあるかの事實を知つて居る。元來是等の勞力は必需品の生産に向つて、特に將來の生産改良に必要な機關の製造に向つて使用せらるべきものであるのに、之が全く無意義に空費されて居るのである。例へば歐羅巴に於ては、單に新しい市場を征服するが爲に、若くは隣國を經濟的に支配して內國の營利に便ずるが爲に、たゞそれ丈の目的のために、軍備に費す所の金額はその幾億兆なるを知らないのである。また年々多數の官吏に仕拂ふ金額、裁判官、監獄、憲兵及び其他の機關に向つて支出する金額は果して幾百萬に上るであらう。最後に或黨派や政治家若くは商會の利益のために、有害なる思想と虛僞の報道とを弘布すべく、其等の印刷に要する金額も亦決して尠くない。その外毎日空費されて居る手近の勞力を數へても莫大なものである。例へば厩、犬小舍、又は富豪の家僕室に要する勞力、或は虛榮を好む貴婦人の我儘と放蕩なる上流社會の奢侈とを滿足させる爲に要する所の勞力。また廣告文によつて無用の品物を押賣りしたり、若くは不良の物品を無理に押付けたりするため、或は單に企業家にのみ利があつて他の者には全く有害なる事物の生産に向つて費さるゝ勞力――數へ來れば殆んど無限である。斯樣にして空しく浪費せらるゝ勞力を有益な生産に向けたら、その生産額を二倍も增加することが出來る。若しまた之を多くの製造場や工場に向けたならば、是等の製造工場は今日全人口の三分の二が必要とする所の品を迅速に生産するに至るであらう。

之を要するに、或一國に於て生産に從事しつゝある勞働者の內少くとも四分の一は一年の三四ケ月間は餘儀なく失業狀態にある。そして次の四分の一は單に富者の娛樂若くは公衆の營利の爲に勞しつゝあるに過ぎない。若し我々にして一方よりは文明國民が自己の生産力を增加しつゝあるその速度に注意し、他方よりは今日生産界の蒙りつゝある直接及び間接の制限に注意するならば、我々は容易に次の事實を判斷することが出來やう。若し今日の經濟組織が幾分にても合理的のものであつたら文明國民に對して數年の間に幾多の有益なる製品を貯藏するの可能を與へるであらう。そしてその時始めて人々は總ての要求

に對する滿足を得て、更に自己の力を適當の事業に注ぎ、且つ之を適宜に使用することを考ふるに至るであらう。

萬人のための滿足なるものは決して空想でない。或は嘗て空想と思はれたこともあるが、今日既に人類が發動機を發明して、僅少の鐵と若干斤の石炭の助けによつて最も複雜なる機械を容易に運動せしめ得る時代となつては、最早空想ではない。』

斯く論じて來て、クロポトキンは『萬人のための滿足』を速かに實現すべき手段として、更に私有財產〇〇と生產機關〇〇〇とを力說して居る。

『この萬人のための滿足が然し圓滿に實現されんがためには、都市、家屋、耕地、工場、汽車、汽船、教育等の如き大資本が個人の私有財產とならずに、社會の〇〇となることが必要である。凡て是等の豐富なる生產機關、即ち我々の祖先の勞力によつて獲得され、建設され、且つ發明された所の生產機關が、社會の公有となるが爲には、社會がその協同の能力を以て是等の機關から萬人のために最も大なる利益を持ち來さなければならぬ。之が爲には私有財產の〇收が必要である。それ故に『萬人のための滿足』は我々の目的であつて、私有財產の〇收は我々の手段である。』

徵收とはクロポトキンに從へば、當然社會に屬すべき一切の事物を社會に返すことであつて、是こそ人類の歷史が我々に委ねた問題であるといふのである。然るにこの問題は何によつて解決するかといふに、社會的〇〇による外はないと、クロポトキンは說く。

『この問題は之を法律によつて解決することが出來ない。それは貧者も富者も斯かる解決には信を置かないからである。また一つには今日の政府も、政治的革命の結果として現はれ得る政府も共に適當の活路を見出し得るとは思はれないからである、それ故に凡ての人は社會的改革の必要を感じて居り、貧者も富者も共に斯かる變化が近きにあることを公然表明して居る。斯くして最近五十年の間に社會的改革の準備は既に人々の腦裡に熟してゐたのだが、少數資產階級の壓迫の下に遂に實現することが出來なかつたのである。それ故に我々は〇〇〇〇〇〇この障碍を取除き、〇〇〇〇〇之を實現しなければならぬ。』

然るに社會的改革を招致するには如何なる方法手段に訴ふべきであるか。クロポトキンは之に答へて言ふ。

『それには唯一つの答がある。即ち凡ての人はその地位の如何問はず、能力の多少、力の强弱に論なく、先づ第一に生存權をを有すること、次に社會はその管理する所の生活資料を萬人の間に分配すべき義務を有することを承認し、且つ之を公然表明することとである。そして之を實行するには、〇〇第一日に於て國民が新時代の到來したことを理解するやうにしなければならぬ。即ちこの日から國民は最早橋の下に夜を過したり、饑寒のために苦しんだりするやうなことがあつてはならぬ。理論から言つても、凡ての物は凡ての人に屬すべきである。一切の改革は、國民の義務を說く前に先づ國民の要求を配慮する所がなければならぬ。』

けれども法令によつて之を實行することは不可能であるとして、クロポトキンは徹頭徹尾國民の直接支配を要求する。この點に於ては今のボリシエウイズムなどゝ殆んど變りはない。即ち彼は言ふ。

『それは唯國民が生活上必要なる一切の事物を直接〇〇する時に於て始めて出來得ることとである。是こそ唯一の實際的科學的方法であつて、また國民に取つて最も了解り易く最も望ましい方法である。即ち反抗せる國民の名に於て穀類倉庫、呉服店、住宅等を〇〇し、且つ消費する後から直ちに補充が出來るやうに施設しなければならぬ。一口で言へば、一切の要求を滿足せしむると同時に、直ちに生産に着手しなければならぬ。けれどもそれは最早貴婦人の虛榮心を充たすためではなくして、生活を保障し、社會の發達に資するがためである。今日は最早微溫なる『勞働の權利』（勞働權）などを主張すべき時代ではない。我々は更に勇敢に且つ直接に『萬人のための滿足』を高唱し、且つ之を〇〇〇〇〇〇〇〇實現しなければならぬ。

勞働者にして若し一旦『滿足の權利』（生存權）を要求せんか、彼等は一切の社會的財産〇〇〇〇、住宅〇〇〇〇、各家族の要求に應じて之を配給し、且つ貯藏食品を手に入れて永年の慾望を滿足せしめ、また之を自由に〇〇得る結果に到達するであらう。斯樣にして勞働者は〇〇富〇〇〇に對する自己の權利を主張すると同時に、仕舞には是迄單に有産階級の所有に止まつてゐた科學藝術上の高尙なる享樂に與かるべく、是等の財産を〇〇〇〇するに至るであらう。

勞働者は『滿足の權利』を表明しながら、それと同時にまた此の滿足を提供すべき事物の何であるか、滿足を保障するには如何なる製品を生産すべきであるか、また何物を無用の廢物とし

て來つべきであるか——是等を決定する權利をも〇〇〇〇に至るであらう。』

『滿足の權利』とはクロポトキンに從へば人間らしく生きるといふことである。自己の子女をして今日よりも遙かに高い地位に於て社會の平等なる一員たらしむべく、彼等を敎育することである。然るに『勞働の權利』とは之に反して永久有產階級の奴隷となることである。語を換へて言へば、『滿足の權利』とはつまり社會的〇〇であつて、『勞働の權利』とは產業的懲役である。言ふまでもなく、後者を棄てゝ前者を取るのがクロポトキンの眼目である。

之を要するに幸福なる生活に對する人類の進步と共に將來期待せらるべき變革、即ち國家の變遷、法律及び私有財產の改造新制度(〇〇〇〇〇〇〇〇〇)の到來は、クロポトキンの考へに據れば、〇〇〇〇〇(舊制度の覆滅)によつて行はれるといふのである。隨つてこの改革の機運を助成して、その實現の期を早めるのが先覺者の義務であると說くのである。

斯ういふ思想が現存制度に對する一種の脅威であることは言ふまでもないが、單に理想として觀てもまだ大に論ずべき點が多々あるやうに思ふ。況んやその實現の能不能、實現した結果の可否等に至つては更に大なる疑問に屬する。然るに是等の點に就いて卑見を述べる餘裕を有たなかつたのは自分ながら物足りない感じもするが、最初に斷つておいた通り、今回は單にクロポトキンの思想を一個の學說として紹介するだけの目的であつたから、その點に於ては聊か約束の任務を果したことゝ信ずる。(完)

クロポートキンに就いて

片上　伸

最近偶然のことから世間の興味を牽くやうになつたクロポートキンが、日本の文壇に知られてゐるのは、今までのところ、

『パンの略取』(ロシヤ版でのは『パンと自由』)や、『革命家の思ひ出』などによつてよりも、寧ろ多く彼の『ロシヤ文學に於ける理想と現實』によるであらう。ロシヤ文學の變遷發達を敍述論評した恰好の著述が、――殊にあまり大嵩なものでなくて、小じんまりと纏まつたロシヤ文學史の良書が、ロシヤ本國に於いても、また英佛獨米などの諸外國に於いても、甚だ乏しい今日までの實情からも、またその著者が他ならぬクロポートキンであるといふところからも、彼の『ロシヤ文學の理想と現實』が弘く行はれるのは自然である。今までのところでも、イギリス文で書かれたロシヤ文學史風のものは隨分いろ〱あるにはあるが、とにかく一と通り筋も通つてをり、また殊に讀んでおもしろいものといふ方から見ては、彼の著述の如きはその主要なものの一つであらねばならぬ。

しかし、彼の文學史を讀むものが、第一に考慮のうちに入れて置くべきことは、いふまでもなく彼の批評が『社會のための文學』を主張する立場にあるといふことである。殊にまた、彼が千八百六十年代のナイヒリスト――思想の自由と、婦人の解放と、合理的の事業どを三標的としたチェルヌイシェーフスキー(小說『何を爲すべきか』の作者)の思想に共鳴する側のナイヒリストの目を以て人生を觀てゐるといふことである。彼の文學史を開いて、そのチェルヌィシェーフスキー論を見よ、ツルゲーニェフ論を見よ、ニェクラーソフやフヲシュチンスカヤなどの點で推稱してゐるかを見よ。また殊に彼が如何なる批評を――案外に冷淡な、案外な思ひやりのない、理解の足りない批評をドスタイェフスキーに加へてゐるかを見よ、これをクロポートキンの批評として見ればこそ興味がある。しかしドスタイェーフスキーに對する批評の如きは、到底情理を盡くした批評とは言へない。

ロシヤのナイヒリズムと婦人解放の運動とは密接な關係を有する。ステプニャック・クラフチンスキーも言つてゐる如く、ロシヤのナイヒリズムの重大な一功績は、實に婦人問題の解決に在つたともいへるであらう。ロシヤのナイヒリズムは、その本來の意義に於て、社會、家庭乃至宗教の因襲的壓制に對する、個人の自由の主張であつたのであるから、それがその當時のさま〱の社會事情――たとへば地主貴族たちが漸く貧しくなつて來たといふやうなことなどから、婦人の覺醒を促すに至つたのは自然である。而してまた、ナイヒリズムの意義乃至價値を隨所に說いてゐるクロポートキンが、文學に描かれた婦人問題を

特に重大視してゐるのも自然である。ドスタイェーフスキーの描いた生活——殊にその苦痛の福音の心理に至つては、クロポートキンの人間らしい善良さを以てしても、十分に正解し得なかつたらしく見えるが、これもまた彼等が實證論者であるの故とすれば、マサリツク教授の言ふ如く解釋はつく。

クロポートキンをおもへば、彼が遂に相見ざりし思想上の師バクーニンのことが聯想せられる。バクーニンはマルクスを尊敬してをり、人にもまたそれを說きすすめたと傳へられてゐるが、クロポートキンはかなり感情的にマルクスぎらひであるらしく傳へられてゐる。ロシヤ風の發音ではレフ・デイチ（ドイチュ）といふ有名な革命家が千九百十三年七月號の雜誌『ウェーストニク・エウロープイ』に書いた、千八百七十年代のロシヤの亡命の士に關する追憶の中で、ジュネヴに於ける彼等の毎週の集會に於けるクロポートキンのことを記してゐるが、その中にも、クロポートキンがマルクス及びその『資本論』に『狂熱的な敵意を以て』對したと書いてゐる。ステプニヤック・クラフチンスキーが『地下室のロシヤ』でクロポートキンの演說や議論のしぶりを批評してゐるところを見ても、いかにも感情の烈しい人らしく想はれる。直情徑行の人らしく見える。そこが彼の相見ざりし師バークニンを十分に聯想させる。（ステフニヤック・クラフチンスキーの『地下室のロシヤ』は千八百九十三年ロンドンで、イギリス文で出た。ロシヤ文の完全なものは、千九百十七年にペトログラード文科大學教授ウェンゲロフの監輯で初めて出版せられた）

『バクーニンの若き日、ロシヤのロマンティシズムの歴史』といふコルニーロフの精細な研究は、バクーニンに對する興味を養ふ。クロポートキンを言ふものはバクーニンへ遡らねばならぬ。メレジュコーフスキーの戲曲『ロマンティキ』(Romanticists)は、バクーニンの青年時代を題材としたもので、私がモスクワにゐた間に書かれ且つ上演せられた。四幕もので、劇としての出來ばえよりは題材が時節柄興味を呼んだ。尤も作中の人物の氏名などは大抵變へてある。バクーニンは、クパーニンといふ姓にしてある。姓といへば、クロポートキンの姓も、多分とはクローポトキーといふ言葉から出たのであらうと思ふが、クロポートキンといふ風に言はれてゐるやうである。しかし、クリチーツキーの著述などには、少くともその本文には、悉くクラポートキン（Крапоткинъ）と書いてゐる。

クロポートキンが、千八百七十六年の七月三十日（ロシヤ舊

暦、十三日おくれ）にペトログラードのニコラーエフスキー衛成院から逃走したときの事情は、彼の一生中の重要なまた興味あるアドヴェンチアであるが、それは彼の『一革命家の思ひ出』の中にも、ステプニャック・クラフチンスキーの『地下室のロシヤ』にも、またその逃走を助けたイワンチン・ピーサレフの雑誌『プイロエ』に掲げた文にも詳しく記されてゐる。千九百十七年七月十五日の雑誌『ニーワ』は、それ等を取り集めて書いたものが出てゐる。實際、この話の如きは、その『ニーワ』の記者の言つてゐる如く、ロシヤの新時代にとつては、革命運動のお伽噺でもあるやうな感じがするものであらう。

　クロポートキンに就いて、差し支へのなささうな断片的な記憶を書いて來たが、最近の偶發事件がなかつたら、クロポートキンもこれほど世間の興味をあつめなかつたらうし、改造社も私にこんな文章を求めなかつたであらう。革命後四十年目でイギリスから彼が母國へ歸つたときは、眞に涙ぐましいやうな感動をロシヤの心ある人々に與へたが、彼も今年は已に七十八翁で、歸國後はあまり世間へ出て働くこともなく、ケーレンスキー時代幾度か政府に入ることを勸められても、辭してゐた。たゞ、千九百十七年六月十日、彼が歸國後あまり間もなく、陸軍大學卒業生八十名に向つてなした士氣激勵の演説は、その當時評判であつた。『もしそれ必要あらば、諸君は勿論骨となつて横はることを敢てするであらう』と、いふやうな激語を以て、彼の演説は終つてゐた。クロポートキンはいふまでもなく戰爭繼續論者であつた。暴力を以てする敵はまた暴力を以て打つべしといふのが彼の平生の主張であつた。

　私がモスクワを去る一二日前、お別れにトルストイ博物館へ行つたときに、もとのトルストイ秘書で博物館の管理者ブルガーコフ君が、紀念のために何か書けと言つて出したアルバムには、クロポートキンの書いたペーヂもあつた。私はそれだけをたま〳〵寫して來た。その文句は、

　自然と人類の歴史とは吾等に教へて曰く、いかなる社會も先づ外界の敵より自己を保障せんことを力むと。而してこれを爲す能はざる社會は、また内部の崩壊より自己を保障する力なきものなり。

千九百十八年一月一日

ペー・クロポートキン

といふのであつた。勿論リェーニン派の戰爭否定に反對する意味に取るべきであつたらう。

クロポトキンの自叙傳に現はれたる
ロシアの婦人運動

伊藤野枝

『一革命家の思出』と題する、ピイタア、クロポトキンの自叙傳は、私にいろんな深い感激を與へたが、其の中でも殊に私を感激させ、限りない羨ましさを感じさせたのは、一九六〇年代に起つた、ロシアの婦人達が高等教育を受けた爲めにした大運動である。

當時ロシアは、アレキサンダア二世の後世で恐ゆる人民はその暴政の下にあらゆる苦しみをしてゐた。そして、或る虚無黨の一青年の爲めにアレキサンダア二世が狙撃されて以來は、少しでも急進的な思想を持つてゐるとか、進歩的な意見を口走つたものとか云ふ事が國事警察に分つたが最後、其の長官は容赦なくそれ等の危險な人物を、彼の有名な冬宮の向側にあるセント・ペテル・ポオルの要塞の中に、何時までとも知れず投げ込んでしまふのであつた。ロシアの思想界には恐ろしい沈默が來た。前には盛んに、急進運動に携はり、火のやうな議論をした人達が、今はすべて鳴をしづめて、只管に、その暴虐の手をのがれるに腐心してゐたのである。

アレキサンダア二世は、たゞもう恐れ慄いてゐるばかりであつた。そして彼を取り巻く執政官は、彼のその恐怖の的である、若い知識階級の人達の上にあらゆる嫌疑をかけては拘引した。彼等には物を正しく觀、正しく批評する事の出來る知識階級の人々の凡てが油斷のならない敵に見えたのである。

そんな際であるから、婦人達の心からなる『大學を婦人に解放せよ』と云ふ要求も、政府は勿論退けた。彼等はたゞ、一人でも餘計に人間らしい考へを持つたのは危險で堪へられなかつたのであらう。然し婦人達の要求は、そんな些細な事で折れてしまふやうな不徹底なものではなかつた。私は彼女達が、其の

頑迷不靈な政府と戰つて、立派に勝利を得た彼女達の働きには幾多の敎へられた事があるのを認める。

セント・ペテルスブルグは、其の當時此の婦人運動の中心地になつてゐた。全國の若い婦人達は、皆んな其の運動に加はる爲めに其處に集まつて來た。彼女達は、どうかして、大學の講義を聽き度いと願つた。が、『女學校を卒業した位では、大學の講義を聽く資格がない』と政府ははねつけた。すると彼女等は直ぐに大學豫備校を開く事の許可を願ひ出した。

『たゞ許可を與へてさへ下さればいゝのです。私達は政府の補助は受けなくともいゝのです。許可を與へて下されば何んでもいたします。』

彼女達は熱心に斯う願ひ出た。しかし政府はどうしても其の許可を與へる事を拒んだのであつた。其處で、彼女達はセントペテルスブルグの彼方此方で、講習會や客間講義を始めた。多くの大學敎授達は、此の運動に同情して喜んで其の講義を受持つた。そして其の敎授達は、自分達もずゐぶん貧乏をしてゐながら、報酬の話などには耳を傾ける事もなかつた。彼等は豫め發起人達に、『若し報酬の事などを話せば、それは自分に對する侮辱として受ける』と云つた位であつた。

斯うして勉強しながら、女醫學校や女子大學を開かうと云ふ計畫の爲めに、いろいろな學校や敎育法に就いての討論會を開いて、幾百の婦人が熱心に繰り返し繰り返しそれらの問題を論じあつてゐました。そして、會員中の貧乏な人達に職業を與へる爲めに、飜譯者協會とか、出版者協會とか、印刷人協會製本人協會など云ふものか設けられた。他日高等敎育を受ける仲間にはいりたいと云ふ希望から、何んでもいゝから仕事にありついて生活して行きたいと云ふ貧乏な會員は續々セント・ペテルスブルグに集まつて來た。

そして彼女等は先づ、セント・ペテルスブルグの到る處の客間講義や講習會で勉強した。しかもなほ、彼女等を嚴重に隔つる學問上の鐵壁の隙間をねらつては其處に押しよせて行つた。産婆學の講習會では、皆んなは敎授に迫つて、定められたよりはずつと詳細に各課目を講じさせたり、或は又特別に講義を開いたりしました。彼女等の熱心によつて老博士クウルベルが其の解剖學研究室にはいる事を許すと、彼女等は其處で一生懸命に勉強しました。そして、その立派な成績によつて、此の解剖學者は直ぐに彼女達の味方になりました。その他、誰か或る

教授か、日曜とか、其の他の日の夜は彼女等を其の研究室で勉強させてもいゝと云へば、彼女達は直ぐに其處に押しよせて行つて夜遲くまでも熱心に勉強したのであります。

大學の豫備學校を開くと云ふ事は、文部省のあらゆる反對がありましたが、彼女達はとう〳〵それに成功しました。彼女等は、教育學講習會と云ふ名儀でそれをつくつたのであります。如何に頑迷な政府も、將來の母たるものが教育法を勉強すると云ふ申出を許さない譯にはゆきませんでした。しかし、名儀は講習會でしたが、抽象的方法では教へる事の出來ない植物學や數學や其他の學科が立派にその課目の中にはいつてゐるので、それは純然たる大學豫備門となり得たのであります。斯うして彼女達は確實に一歩一歩其權利を擴張して行きました。そしてドイツの或る大學で、或る教授が、少數の婦人に其の講義を開放する事が出來ると云ふ事が知れると、直ぐに其の教授の門を叩いて、其の講堂に入れて貰ひました。彼女等はハイデルベルヒで法律や歷史を、ベルリンでは數學を勉強しました。ツウリツヒでは百人餘りの婦人が大學や百科工藝學校に通ひました。そして彼女達は最も學識の深い教授達の尊敬を得ました。其の教授達は屢々其の事を公言したのであります。

『私は一八七二年にツウリツヒへ行つて或る學生と知合になつて驚いた事がある。百科工藝學校に通つてゐた極く若い婦人達が、長年の數學の素養があるかのやうに、造作もなく微分法を使つて熱學の複雜な問題を解いてゐた。』

とクロポトキンは書いてゐます。ベルリン大學のワイエルストラス教授の下に數學を勉強してゐたロシア婦人の一人のソフイア・コグレフスキイは非常な評判の數學家となつて、ストツクホルムの大學の教授に聘せられて行きました。これは男子の大學の教授となつた十九世紀に於ける最初の婦人でありました。

斯くして、彼女達は、アレキサンダア二世からは公然の憎しみを受け――アレキサンダア二世は、途上で眼鏡をかけて圓いガリバルディ帽をかぶつた女に會ふと、それはきつと自分を擊ち殺さうとしてゐるニヒリストだと思つて慄え出したと云ひます――又、あらゆる女學生を革命家として扱つた國事警察の苛酷な反對や、政府の內命を受けた新聞の毒々しい讒誣や罵倒が每號つゞいたのにもかゝはらず、其の政府の面のあたりに幾つかの教育機關を設ける事に成功したのです。そして彼女達の幾人かゞ、外國で醫學博士の學位を得た時に、彼女達は政府に迫つて、一八七二年に、彼女等自身の私立醫科大學を開きま

した。それから又、彼女達と革命黨の亡命客との交際を禁ずる爲めに、政府が彼女等をツウリツヒから呼び返した時、彼女等は再び政府に迫つて、彼女等自身の四個の大學をロシアの國内に設けました。そして直ぐに一千人あまりの學生を得たのであります。

『これは實に驚くべき成功の、且つ極めて教へるところの多い大運動であつた。そして彼女等が此の成功をかち得たのは、何によりも先づ、有らゆる事柄に於ける女の群の限りのない獻身に基くものであつた。彼女等は既にクリミア戰爭の際には看護婦として働いた。後には學校の設立者として働いた。農村の最も獻身的な小學校教師として働いた。農民の間の教育ある産婆として、醫者の助手として働いた。其後は又、一八七八年のトルコ戰爭に際し、熱病に襲はれた病院へ或は看護婦となり或は醫者となりて出掛けて、軍司令官やアレキサンダア二世の稱讃を受けた。私は此の戰爭の際に、何れも國事警察から極く熱心に睨まれてゐながら、僞旅行免狀と僞名とを使つて、看護婦として働いてゐた二人の婦人を知つてゐる。此の二人の中の私の脫獄の際に大役をしてくれた、より大きな『犯罪人である一人は、負傷兵を收容した一大病院の看護婦長にまで任命された。そしてもう一人の方の其の友人はチブスで死にかけた。要するに彼女等は、社會的にどんな低い地位でも構はず、又それがどんな艱難に陷いれるものでも構はずに、たゞ自分等がどうにかして民衆に役立つ事が出來れば、どんな地位にでも就いた。しかもそれは彼女等の中の少數ではない。幾百人、幾千人であつたのだ、そして彼女等は彼女等の權利を言葉通りの本當の意味で獲得したのであつた。

此の運動のもう一つの特徴は、そこに姉と妹との二つの世代の間に裂目がなかつた事だ。或は少くとも其の裂目が大部分埋められてゐた事だ。最初から此の運動の指導者であつた人々は若い女達が年老つた女達よりも其の理想に於いて遙かに進んでゐたのにも拘はらず、遂に此の若い女達と自分等とを結びつける緣を切つた事がなかつた。

此の指導者等は其の目的を極く高處に求めてゐた。彼女等は一切の政治運動とは嚴重に沒交涉でゐた。しかし彼女等は、其の運動の本當の力が後に其の大部分は急進的或は革命的團體に結びついた若い女達の群にあるのだと云ふ事を忘れるような過ちは決して侵さなかつた。彼女等は几帳面共者であつた。私は

彼女等をあまり几帳面すぎると思つた位だ。しかし彼女等は、若い女學生等が髮を短かく刈り、袴を張り擴げる謂はゆる下袴の張りを嫌ひ、又其のあらゆる態度に民主的精神を現はして、全くのナイヒリストとして行動してゐるのと緣を切る事はなかつた。しかし彼女等は此の若い女達とはまじらなかつた。又時には分裂もあつた。しかし彼女等は決して此の若い女達を振り棄てる事はしなかつた。これは此の狂氣のやうに荒れまはつた迫害の時代には非常にえらい事だと思ふ。』

『彼女等は此の若い、より民主的な女達に斯う云つてゐるように見えた。「私達は天鵞絨の着物も着ればかもじも入れます。私達は天鵞絨の着物や髢を『政治的信頼』のしるしとして見てゐる馬鹿共を相手にしなければならないからです。しかしあなた方娘さんは自由にあなた方の趣味嗜好のまゝでゐらつしやい。」ツウリツヒで勉強してゐた女達がロシア政府から歸國を命ぜられた時にも、此の几帳面な女達はそれに反抗した若い女達には反對しなかつた。彼女等はたゞ政府に斯う云つた。「あなた方はそれがお氣に召さないのですか。よろしう御座います。それではロシアに女子大學をおつくりなさい。さうしなければ、娘達は益々多く外國に行くようになります。そして亡命客と交際をするようになるのも勿論の事です。」又、彼女等が革命家を養成すると云ふ批難を受けて、其の大學の閉鎖を迫られた時、彼女等はそれに答へて云つた。「さうです、多くの學生は革命黨になります。しかしそれがどうして一切の大學を閉鎖する理由になりますか。」政黨の首領で自分の黨派内の急進派に敵意を持たない道德的勇氣のあるものがどれ丈けあらう。』

私は此の聰明な、如何にも立派な態度を持する事の出來る指導者を持つた、此のロシアの婦人運動は、たゞそれのみでも、充分に勝利を得たのだと思ひます。それにくらべますと、現在日本の女子敎育家とか、または婦人界の全權を振つてゐるやうな顏をしておさまつてゐる多くの某々夫人や、某々女史などのお歷々の淺薄さ加減はどうでせう。某々夫人や某々女史に限らず、すべての中年以上の女達の醜い態度はどうでせう。彼女達は自分自身の確りとした識見を、何んにも持たないものですから内容の如何に拘りなく、多少世評の惡い仕事と見るとまるで振り向きもしません。多くの人間と一緒に仕事をする時に、若し自分が指導者の地位に立てば、まづ自分をまつり上げさせる事ばかり苦心をします。若い女達の意見などは耳にもかけません。まして其の思想を理解したり尊敬する事はまるで知りませ

ん。變つた服裝をするとか、他眼にたちやすい髮でもすると卽座にとがめる。若し政府に反抗するなどゝ云ふ事があれば、たちまちにして他人になる處ではなく前生からの仇敵位の憎しみは必ず持ちます。若しそれが引いて彼女等の名前でも公けにされさうになると、出來るだけ自分の名譽を保持する爲めに極力見苦しい辯解に努めるでせう。より急進的な、燃ゆるやうな情熱の所有者である若い娘達と、『一緒に仕事をする』などゝと云ふやうな事は日本の貧弱な知識階級の女達には、とても思ひも及ばない事だと云はなければなりません。ロシアの彼の婦人達は、立派な彼女自身の識見を持つてゐました。彼女は正しい事に向つては何處までも眞直ぐに歩いて行く勇氣を持つてゐました。そしてその正しい勇氣の前には、權力者も俗衆も、眼中にはなかつたのです。彼女達は立派な獨立した人格を持つてゐました。彼女達は大抵の國の女達がそれに禍されて容易に脫し得ない性の區別などは全るで念頭においてゐなかつた。彼女は何んの躊躇もなしに、人間としての同一目的の爲めに、悉この不正不義に向つて、男子と肩をすれ合はして戰ふ事を知つてゐた。

『彼〻等がどうして此の賢明なそして立派に好結果を得られる態度をとる事が出來たかと云ふ本當の秘訣は、此の運動の中心であつた女達の誰一人として、自分等も社會上及び國家上の特權的地位に與らうと云ふ唯のフエミニストでなかつた事だ。』

彼女達は、そんな狹い見地にこゞみ込んではゐませんでした彼女達はもつと、大きな廣い、人類の生活の正しい意義を見つめてゐました。彼女達が高等敎育を受けたい、と云ふ切な望みも、たゞいゝ加減な自分一個の知識慾を滿たす爲めばかりではなかつたのです。もつと他にそれを役立てる爲めだつたのであります。此の點では、ロシアの婦人達は他のどの國の女達よりも進んだ立派な人格と、確つかりした正しい考へを持つてゐた。

彼女達の大多數の同情は世の中の不合理を一身に集めた下層の民衆に集まつてゐたのです。彼女達は其のまのあたりに、暴虐な政治の下に呻吟してゐる農民や、其の他の勞働者の慘狀を見てゐました。彼女等はどうかして彼等を其の悲慘な狀態から救ひ出さうとしたのです。一八六二年に、此の婦人運動の首領であつたスタソワ孃は日曜學校を興して同志等と一緒に女工達と親しく交つて、其の女工達の苦しい生活に同情して、苛酷な其の雇主達と戰つて熱心に、其の女工達の爲めに働きました。其の他、彼方此方で、彼女達は民衆の爲めにつくしたのである。

ツウリツヒにゐた若い女學生達は、其の身近に、多くの革命

家達があつたせいもあるのであらうが、殊に民衆に對する同情は深まつたのであります。一八七二年にスキッツルに行つた。クロポトキンは親しく彼女達の生活を見て斯う書いてゐます。

『當時ツウリッヒはロシアの男女の學生で充ち滿ちてゐた。百科工藝學校の近くの有名なオオベルシュトラアスは、ロシア町となつて、そこでは主にロシア語が使はれてゐた。學生等は多くのロシアの學生がやつてゐるやうに、極く僅かのもので生活してゐた。殊に女はさうだつた。社會主義運動の最近の出來事や、最近に讀んだ書物に就いての盛んな討論をしながら、茶とパンと、牛乳と、それにアルコオルランプの上で煮た薄い肉片。これがかれ等のおきまりの食物であつた。そして此の生活方法に要する以上の金を持つてゐるものは、それを圖書費だとか、創刊されるロシアの雜誌だとか、又はスキッツルの勞働新聞の維持費だとかの、『共同目的』の爲めに寄附した。そして其の着物はと云へば實にひどい儉約のものだつた。プウシキンは其の有名な詩の中に、『どんな帽子でも十六の娘に似合はないと云ふ事があらうか』と云つた。ツウリッヒのロシア少女等も、宗教改革家ツインイィの出た此の舊都の人々に傲然として次ぎのやうな問ひを投げつけるやうな風だつた。『どんな質素な着物でも、それを着る女が若くて利口で、そして元氣に充ちてゐる時、其の女を娘らしく見せないと云ふ事があらうか。』

斯う云つた生活をしながら、此の忙しさうな小團體は、大學と云ふものゝあつて以來他のどんな學生等が勉强したよりも以上に、刻苦勉勵した。そしてツウリッヒの大學教授等の男學生の模範として大學での女子の進歩を稱揚して止まなかつた。』

彼女達は、他の國の女達が全く知らない偉大な目標で結びついてゐたのである。そして、愼しみ深い几帳面な年老つた女達もよく其の目標を理解してゐた。その價値を知つてゐた。ですから、些細な事位では、彼女達は見棄たり分離したりする事がなかつたのである。

しかし、それにしても、私は其の年老つた指導者達の立派な態度にはあらん限りの敬意を拂はずにはゐられない。

此の婦人の運動は、其の頃、ロシアの青年の間に激しい勢ひで廣まつた虚無黨の運動と同樣に。國中の若い女達を誘ひ込んだ。しかし、丁度、ツルゲエネフの『父と子』に描かれたやうな青年とその父との間の爭ひのやうな、魂をかきむしるやうな娘と兩親の爭ひが矢張り、多くの家庭に繰り返されたのである。それは、最も保守的な空氣で厳重に世間から隔離されたモスコ

オの舊貴族の家にさへ防ぐ事が出來ないのであつた。

『曾つては私の父の母のものであり、其後ミル、スキ公爵夫人の手に移り、今は此の舊い屋敷町の舊い住人であるル將軍に買はれた家では、其の一人娘が數年の間人のいゝしかし頑固な兩親と苦鬪した。此の兩親は其の娘を非常に愛してゐた。しかし當時モスコオで婦人の爲めに開かれた大學の講義を聽きに行く事はどうしても許さなかつた。とう〱彼女は其の講義に加はる事を許された。が彼女は立派な馬車に乘せられて、其の母親の嚴重な監督の下に學校へ連れて行くのであつた。そして其の母親は、けなげにも學生等とベンチを並べて、其の愛する娘の傍に、毎日幾時間も座つてゐた。しかも、これ程までに注意してゐたのにも拘はらず、其後一二年して此の娘は革命黨に投じて拘引され、一ケ年間セント・ペテルボオルの城塞に暮した。

其の向ひの家では、專制的な家長のZ伯爵とZ伯爵夫人とは其の二人の娘ともつと辛い鬪ひをした。其娘等は兩親に强ひられた怠惰な何んの役にも立たない生活に飽きて、大學に群がり集まる自由なそして幸福な他の娘等と一緒にならうとした。此の鬪爭は幾年も續いた。が、こんどは兩親の方で讓歩しなかつた。そして其の結果、姉娘が毒を飲んで自殺したので、漸く妹娘は其の思ひを許された。』

斯うした爭ひが彼方の家庭でも此方の家族にもあつたのである。そして、此の戰ひは、それらの青年男女の多くが、『人民の力へ』と呼んで一切をなげうつて農民の力や勞働者の群れへ入り込んで行くやうになると共に益々多くなつたのである。

新舊思想の衝突は、何の國でも、何處の家庭でも同じやうな形式のものです。そしてそれは、或る一つの團體や黨派中に於いてもやはり同じなのである。此の點でも私は同一團體の中に於いて、嚴重に、急進的な若い人達と自分達の間に區別をしながら、しかも其の若い人達を中心にしてそれを庇護し其の爲めに確實な勝利を得る事に努めたロシア婦人の先覺者達のえらさを、此處に繰り返さずにはゐられないのである。本當にクロポトキンの言葉どほりに彼女達は、何んな黨派の首領達よりも、眞に道德的勇氣を持つてゐたのである。

今やロシアは、革命的の混亂狀態にあります。しかし、やがて、其の混亂が一とかたづきした曉には、新しいロシアは悉ゆる方面に渡つて世界人類の先覺者として働き出すに違いないと思ふ。ロシア人は、充分に其の地位に立つ事の出來る眞實を持つてゐる。勇氣を持つてゐる。自信を持つてゐる。また熱情を持つてゐるのである。そして、長い間民衆の味方になつてあらゆる暴虐、あらゆる不正不義と戰つて來た婦人達は、今も等しく其の眞實と熱心と勇氣をもつて民衆の爲めに、其の敵と戰つてゐるに違いない。

クロポトキンの國家觀について

室伏高信

哲學上に實驗主義者であるクロポトキンは社會學的にはソリダリテの主張者である。このソリダリテの立場から彼れの一切の社會思想が發生してゐるといふことができるであらう。彼れの國家觀もまたこの立場から出發してゐるものである。彼れに從へば『同一性』の觀念、即ち人々が彼れの同種族に對するソリダリテの思想は、社會を創造する第一の道德である。若しこのソリダリテが行はれなかつたとしたら、今日の高等動物も恐らく『水中に潛む小さいスペックの類であつたらう』とはクロポトキンの『無政府主義の哲學と理想』のうちに記されてゐる言葉である。

『相互扶助は共產主義へ傾く』。彼れは次にこういふ立場をとる。(『相互扶助論』)即ち社會は少數者の產物または他から壓迫されたものの產物であつてはならない。大衆の建設的才能の產物でなくてはならないとするのである。こゝに彼れの共產主義が存在するとともにまた、彼れの無政府主義が存在する。スチルネルにおいては個人主義と無政府主義とが切り離すべからざるものであつたがごとくに、クロポトキンにおいては共產主義は無政府主義と切り離すことはできないのである。アナーキスト・コムミュニズムがこれである。彼れに從へば共產主義は中央統制から自由でなくてはならないとともに、最小單位においての地方生活を創造することによつてのみ行はるべきものであるからである。(『無政府主義の哲學理想』)從つて彼れは國家生活に反對する。國家生活は共產主義の理想を妨げ、ソリダリテを妨げ、個人的自發力を傷け、從つて社會の破滅へと導くものであるからである。非國家的基礎のうへに社會を建設することはソリダリテと萬人平等のために必要な基礎であるとするのが彼れの國家に對する態度である。(『革命的研究』)

從つて彼れの國家觀は、國家をもつて單なる權力の行使者

――政府と同一視するものではない。彼れは政府と國家とを區別する。政府と國家とは全く別個の思想のうへに立つてゐるとするのが彼れの主張である。即ち彼れに從へば國家とは領土的集中を意味する。他の言葉をもつていへば『地方的生活』を破壞するものである。(『無政府共産主義』)

彼れの國家觀は今日までの國家に對する批評、就中資本主義の國家または官僚國に對する批評としては傾聽に價ひするものである。今日のごとき壓迫の機關としての國家、官僚的中央集權の國家、全能の國家、imperium in imperio を拒絶する國家地方的生活を破壞して一切を國家的統制のもとに置き、個人的自發力に道を與へずしてたゞ有力なる經濟階級を保護し、そして『資本家の行政委員』にまで墮落した今日の國家は、クロポトキンの無政府主義に對して何等の抗辯もできないであらう。從つて今日のごとき墮落した國家が無政府主義の前に戰々悔々の態度を示すのほかなきことは當然である。何となればその國家が無政府主義を恐れざるをえざるほどに墮落し、從つて外部的權力の强大にもかゝわらず、その基礎が薄弱となつてゐるからである。

しかしわれ〳〵の問題とするところは今日の國家に對する批評ではない。今日の國家が『資本家の行政委員』にまで墮落してゐることは獨り無政府主義者がそう信じてゐるばかりではない。一切の新思想、一切のプロレタリアンの立場が、みな等しく承認してゐるところである。servile state の創造者としての國家社會主義者でさへも、この點においては素より同一の見解をとつてゐる。この見解に同意することのできないものは資本主義的精神のうちに嬌慢資本家になり、或は奴隷役人となつてゐる人々であるに過ぎない。しかし今日の國家に對する批評は特定の國家に對する批評である。われ〳〵は特定國家に對する批評を一般的命題に誇張してはならない。私は無政府主義の誤謬の一つはこの點にあると信じてゐる。『科學的無政府主義者』としてのクロポトキンもまたこの例に漏れることはできない。彼れは經濟組織の變化とともに政治組織が變化すべきものであることを主張する。政治的變化なくしては經濟上の變化はありえないとするのである。(『無政府共産主義』)私もまたこの點には贊成である。『經濟力が政治力に先だつことの命題はわれ〳〵の等しく承認するところである。從つて經濟力の變化とともに政治組織も變化しなくてはならない筈である。しかしその政治組織においての變化は無政治組織―― No-governmental,

system への必然を意味するものではない。

次に國家に對する無政府主義者の誤謬は、國家をもつて最高の權力者であると獨斷することである。われ〳〵は職分的の國家の存在を承認する。ギルド社會主義においての國家がこれである。

國家の要素は權力ではない。國家の要素は地理的といふことである。從つてクロポトキンの主張するとほり『領土的集中』を要素とする。しかしこれをもつて直に地方生活の壓迫であると解することは大なる誤りである。汽車、汽船、電信、郵便のごとき制度は、地方生活を破壞せずして、當然に地理的集中を必要とするものである。われ等の社會生活の創造はかくのごとき集中的制度を破壞することではない。われ等の社會生活には地方的のものとして存在し、從つて地方的組織に入ることに自由の存在するもののあるとともに、國家的生活において自由の存在するものがある。そこに國家の必要が存在するこの國家の必要を、必要以下に破壞することは決して自由への道ではない。

われ〳〵の要求するところは無政府主義ではなくして新國家の創造である。

吉野博士は『中央公論』二月號で『アナーキズムに對する新解釋』を說いた。しかしあの論文のうちにわれ等は一點たりともアナーキズムに對する『新解釋』を見ることができなかつた。われ〳〵の要求するものはアナーキズムの新解釋ではなくして國家に對する新解釋である。世界はマルクスの時代ではないであらう。しかし世界は『マルクスからクロポトキンへ、クロポトキンからトルストイへ』歸るのではなくして、マルクスからギルド・マンの社會へとゆくのである。（十六日朝病床にて）

無政府公産國の搖籃

井箆節三

（一）

無政府主義者トルストイは『社會主義論』の中で言つた。『社會が（經濟其他の方面に於て）最も適當に整頓せられたならば、人間は各自が社會全體の利益を重んじ、全體の幸福を增進せしめるために自己を犧牲にすることを少しも惜まないであらう。しかるに之に反して社會が混亂して居る場合には、各自は唯だ自分だけのために働き、自分だけの利害をしか考へない。けれども、若し斯ういふ冷酷なことが社會の隅々まで行はれるもので、少くとも家族の間柄でだけなりとも、人間がお互に相扶け相互に犧牲になるといふことがなかつたら、私は人間が一日でも生きて行かれうとは思はない。』

無政府共産主義などといふものは、到底行はれるものでないとか、或は行はれるにしても、遠い未來のことであつて、果たして何千年後のことか分らないなぞと考へる者もあらうが、『神の國は此處に視よ彼處に視よといふものにあらず、それ神の國は汝のに衷あり』で、無政府共産主義は古往今來（少くとも家庭には）常住不斷に實現せられて居る。しからざれば人間は一日でも生存することが出來ない。人々が不愉快な勤め先から家庭に歸ると、ホツと息をつく、やがてノンビリした氣分になる。これは今日の社會では家庭が最も理想的な無政府公産國だからである。

今日の社會では、宗教でも道德でも、資本主義の寄生の爲に完膚なきまで糜爛して居るが、唯だ家庭の道德だけは、蝸牛(かたつむり)の殼のやうに、雌雞(めんどり)の翼のやうに、暴風の中の茅屋のやうに、砂漠の中の綠地(オアシス)のやうに、浮世の荒浪から人間を庇護して居る。家庭には資本主義よりも共産主義が行はれて居る。マルクスの集産主義(コレクチヴイズム)よりも、クロポトキンの共産主義(コンミユニズム)が行はれて居る。社會主義者は生産の結果を勞働の分量に比例して分配しやう

か、或は勞働の分量に拘泥せず平等に分配しやうかなぞと、しきりに相談して居るが、家庭は此様な厭らしい下等な問題から超越して居る。多く働き多く稼ぐ者が老人や小兒を扶養するために喜んで犧牲を拂ふ。これが家庭の道德である、『家族制度の美風』である。吾々は今日の社會や國家に無政府共產主義を擬することを排斥するが、しかし吾々自身の家庭に無政府共產主義を實行するのは、吾々自身の自由である。

東洋で『國家』といふ言葉は誰が造つたものか知らないが、國家も亦た一種の家庭であつて、國民も亦た一種の家族だといふのであらう。西洋でも、『國家（ステエト）』は『家敷（エステエト）』から來た言葉である。しからば今日の社會では、何故家族には無政府共產主義を許しながら、國家には之を許さないかといふに、それは下に叙べる如く、家族と國家とは發達の事情を異にするからである。

（二）

原始時代の人類は主として漁獵に生活する。魚や鳥や獸や果物なぞを自然のまゝで取つて食ふ。國家もなく政府もなく、共有財產も無く私有財產もない。之等の人類の觀念は、無政府共產主義よりは、寧ろ無政府公產主義である。テキサスの農業蟻の如きは農業も牧畜も奴隷も財產も知つて居るが、今日でもボルネオやセイロンや濠洲やアフリカの未開人種には、農業も牧畜も知らず。奴隷も財產も持たず、原始時代そのまゝに、漁獵に生活して居るものがある。之等の未開人種に限らず、原始時代の人類は世界の何處でもさうであつた。原始人類の私有財產といへば、まづ第一が武器と裝飾とである。婦人と小兒とは部族の共有であつて箇人の私有ではない。水草を逐つて移住する習慣が改まつて、多少とも一定の土地に土著するやうになると、漁場又は獵場が部族共有の勢力範圍と觀念せられるやうになるが、獲物は一切共有である。クロポオトキンが『相互扶助論』に記す如く、ホツテントツトの土人が途中で果物なぞを發見すると、必ず三度まで聲を限りに呼ぶ、それでも何等の反響がないと、土人は始めて果物を取つて食ふ。若し聲に應ずる者があれば、聲の持主を招いて共に果物を分つのである。またルトルナウが『財產制度史』に記す如く、濠洲の土人が曾々巨大な魚でも捕へると、當人は頗る迷惑する。それは自分が折角骨を折つて引上げた獲物も、自分で獨占することが出來ないのみならず、部族の者共が忽ち寄り集つて來て、遠慮なく魚の肉を切つて取る習慣であるから、大漁の當人には美肉を切取られた殘物しか與へられないからである。またダアウインが『航海

記」に記す如く、此種の土人は一切の布片を貰つても、ズタズタに裂いて平等に分配する。鯨が捕れても之を保存するといふ觀念がないから、二日でも三日でも蟻が孚蟲にたかつたやうに、胃腸が食傷するまで鯨に噛りついて居る。即ち武器及び裝飾以外のものは一切共有、いな寧ろ公有である。

何故武器と裝飾とが私有を許されるかといふに、武器は未開人が暇に乘じて之に種々な加工を施したもの、即ち天然物ではなくて人爲物だからである。また裝飾は贅澤品であつて必要品でないから、必要品だけは私有を禁じ、贅澤品は私有を許るすのである。故に未開社會では故人の使用した武器及び裝飾は、屍骸と共に埋葬するか又は屍骸の面前で破棄するかである。

武器及び裝飾に次いで私有財産に加へられるのは農産と家畜とである。漁獵が男子の主業で、農業は女子の副業たるに過ぎない時代には、農産物は副産物として婦人に私有を許す。野獸を馴育して家畜にすることも、やはり最初は副業である。しかるに農業及び牧畜が發達すると、主業と副業との關係が轉倒する。さうして野獸を馴育するのは男子の仕事であつたから、牧畜は男子のものであるが、農業は婦人の副業であつたから、農業は婦人のものである。

（三）

遊牧時代までは婦人及び小兒は部族の共有であるから、母性中心の母權主義が行はれるが、農業及び牧畜が發達し、農耕に牛馬が使用せられるやうになると、父權か母權を凌駕するやうになり、次いで婦人及び家畜の代りに捕虜を利用して奴隸となし、奴隸に農耕を强制するやうになると、玆に父權主義が確立する。農産及び家畜に次いで私有財産となるものは婦人及び奴隸である。

農牧時代にも土地及び牧場は部族の共有であるが、父權主義の發達に伴ひ氏族制度が成立する。故に土地は氏族の共有として時々分配をやり直す。支那では周公時代に行はれた井田法、日本では大化改新で行はれた班田法など、いづれも氏族土地共有制度を復活させやうと試みたものである。しかし部族が血族の關係で氏族に分化したと同じやうな理由で、氏族は更に家族に分化し始める。さうして既墾地こそ氏族の共有であるが、未墾地を開墾すると、その新田は開墾者の私有に屬する。日本では之を墾田と呼んだが、それが後には莊園となつた。西洋では之を『マノア』といふ。

莊園の發達は氏族制度を崩壊させ、封建制度を發達せしめ

る。さうして家族制度は實に封建制度の翼の下に育まれて成長するものである。近代の社會に於ては、封建制度の瓦解と共に個人主義が確立せられ、家族制度は寢頽したが、日本では封建の遺習が尚ほ强烈であるため、また支那では特殊の事情のため、個人財産と家族財産との區別が未だ判然せず、今日では家族財産制度なるものが日本及び支那に獨得なものと考へられて居るが、しかし個人主義の西洋でも、家族財産制度が全滅して、個人財産制度のみが存在するのではない。

個人主義の發達に於ては、支那は寧ろ西洋の先輩である。西洋の個人主義はフランス革命以後に於て漸く發達したのであるが、支那では夙に宋代から個人主義が勃興した。それにも拘はらず私有財産は今日でも家族の共有で、支那人は世界第一の個人主義者であり、商業主義者であるに拘はらず、家族といふ觀念が濃厚で、商人や職人に至るまで、血族關係を中心にした組合(ギルド)を一般に組織して居る。蓋し個人主義と共同主義とは、必ずしも背馳するものではなく、寧ろ相待つて發達するもので、如何に個人主義が發達すればとて、家族共産主義は全滅しない。シモン氏の『支那の都會』に依れば、支那では今日でも古代の如き土地均分制度が幾分か維持せられ、大抵の家族は『神聖な』世襲財産として多少の土地を一家の確定財産に編入して居る。支那の領土は八億千六百萬エカアであるが、其內一億七千二百萬乃至一億八千四百萬エカアは、殆ど確定世襲家産として、絕對的に賣買せられない。支那の戶數は九千萬戶に上るが、一家で宏大な土地を私有するものは稀で、普通には一戶平均八エカア以內、四十九エカアを超へるものは少く、二百四十七エカアに上るものは極めて稀である。故に支那の家族の多數は小資産家であるといふことが出來る。

(四)

西洋で個人財産の觀念が發達したのは、近代の個人主義のみならず、ローマの法律に負ふ所が多い。ローマでも十二銅表制定以前には、極端な家族財産制度が發達して、財産は家長の專斷で賣買することが出來なかつたのであるが、紀元前五世紀にギリシアからソロンの憲法を輸入し、ギリシア個人主義の法制を摸倣した結果、個人財産が發達するやうになり、殊にローマの盛時には、富者が愛娘の婚嫁に際して財産の一部を分與したり、男子も持參金附の女房を漁るといふやうなことが流行したので、次第に夫婦や親子の財産を區別するやうな習慣を生じたのである。

勿論、家族制度といふものは、一度は個人主義の洗禮を受けなくては、眞に健全なものとはならない。元來、家族財產制度なるものは、氏族共產制度から家族共產制度に進化したものであつて、即ち原始漁獵時代の無政府主義と氏族共產時代の共產主義とが結晶したものであるから、家族はクロポオトキンの理想する無政府共產主義的社會の一小模型と見るべきであるが、しかし由來共產制度は專制主義を附隨するものであつて、氏族共產制度が族長專制の弊害に陷つた如く、家族共產制度は家長專制の弊害を伴ふものである。今日の日本で家族制度の改廢が必要とせらるるのは之が爲であつて、今日經濟社會には經濟上の自由放任主義、即ち個人主義及び自由主義に立脚する資本主義（キャピタリズム）乃至營利主義（カムマシアリズム）が公認せらるるに拘はらず、家庭には個人主義乃至自由主義の風潮を排斥せんとする矛盾から、幾多の家庭悲劇や家庭喜劇が演出せらるるのである。けれども家族制度と個人主義とは必ずしも背反するものではない、寧ろ個人主義の洗禮を受け、家長專制を排除してこそ、家族制度は徹底的な無政府公產國を實現するのである。家長專制を排除しなくては、家族は家長專制の共產團體であつて、無政府公產國ではない。

個人主義の著しく發達したイギリスにこそ、徹底した家庭（ホオム）が發達した。蓋しダアルキンの生存競爭說とクロポオトキンの相互扶助論とは、兩々相俟つて眞理である。即ち如何なる生物でも、同類相扶け、異族相爭ふ。社會に於ける生存競爭が激烈になれば、家庭に於ける相互扶助も緊密を加へる。殊に今日の如く權力主義と資本主義との跳梁跋扈する時代に於ては、封建時代の村落共助生活が頽廢した今日に於ては、家庭こそ唯一無二の無政府公產國であつて、權力を厭ひ資本を憎む者の唯一の道場であり、また理想生活を憧憬する者の唯一の搖籃である。

（五）

何故社會には無政府公產主義が容易に實現せられないのに、家庭には實現せられるかといふに、それには大體二つの理由がある。第一に家庭の道德は、社會や國家の道德よりも、多年多くの修養と試錬とを積んで居る。第二に社會や國家が發達するに連れて、制裁とか強權とかいふものは、社會や國家が個人から引取ることになるから、家庭には制裁や強權の必要が漸次減少する。即ち家庭に於ては大抵の罪惡が寬恕せられる。家庭に於て寬恕せられないやうな罪惡には、社會や國家が制裁を加へる。『目にて目を償ひ、齒にて齒を償へ。』昔は刑罰も人民の私讐であつたが、後には刑罰は政府の公讐になつた。復讐が美德と

せられた時代もあつたが、私鬪は遂に禁止せられ、國家の公戰のみが承認せられるやうになつた。さる代り宗教とか藝術とかいふ高尚なものは、曾ては政府や貴族のものであつたが、之等のものは次第に人民のものになつた。經濟も封建時代までは政府や貴族の專制に苦しんだが、資本主義の勃興により、自由放任主義が公認せられ、經濟も人民のものになつた。斯樣に權力を必要とするものは次第に國營に移された結果、家庭に於ける權力の必要は減少したのである。これは國際聯盟の發達に伴ひ、各國の軍備が多少とも減少すると同じことである。唯だ今日の社會では、經濟組織が亂雜であつて、國營に移すべき部分と民營に殘すべき範圍との、分野の明確でないために、家庭は經濟の方面に於て平和を脅かされつゝある。マルクスの國家社會主義は、生産も分配も交換も消費も、悉く國營に移さうとするのであるが、これは餘りに國家の權力を絶大ならしめる所以であるから、サンヂカリズムでもギルドソシアリズムでも、組合主義の社會主義では、少くとも生産だけは民營に殘さうとするのである。コオル氏は『勞働組合主義概論』の結末に於て、『今度の戰爭で國家は前代未聞の最大商人(グレエテストマアチャント)になつた』ことを指摘したが、組合社會主義では大體に於て、生産卽ち産業(インダストリ)は民營とし、交換卽ち商業(コンマース)は國營に移さうとするやうである。『經濟』の中の卑しい分子卽ち『營利』が國家のものになれば、卽ち、軍事と刑罰との外に、商業をも國家に一任することが出來たら、家庭も始めて絶對的に强權の發動を無用とするに至るであらう。さうして社會改造の氣運は漸次吾々の理想を實現すべき方向に步武を進めつゝある。ペンテ氏は『ギルドと社會の危機』に於て言つた、『國家は如何なる理由で是認せらるべきものかといふに、それは歷史に徵して明かであつて、卽ち國家の作用とは社會に保護を與へるにある、第一には軍事上の保護、第二には內政上の保護、第三には經濟上の保護。』

家庭に無政府公産主義が是認せられ、國家に無政府公産主義が否認せられるのは、大體叙上の事情に由る。近頃組合主義の勃興した結果、從來國家の權力が過大に失したことが發見せられ、國家の權限を適當に制限し、國家にも無政府公産主義を部分的に適用せんとする傾向の勃興したことは、吾々の看過する能はざる現象であるが、しかし國家が權力を全然無用とする時代は之を豫想するに難い。吾々は吾々の家庭を以て唯一の無政府公産國としなければならない。

(本論は家族制度改廢論に加ふべきものなるも、編輯上の都合にて、本欄に加へてクロポトキン思想研究に資せり。記者)

四月一週年紀念號文藝欄豫告

文藝評論

文壇色々の事（五十枚の長編）　片上伸

（筆者自ら文壇に向つて責任ある評論と謂ひ四月より三ヶ月繼續掲載）　谷崎潤一郎

感想　武者小路實篤

創作

平將門（長編二百枚）　幸田露伴

題未定（長編七十枚）　德田秋聲

鼠小僧次郎吉（第二）　芥川龍之介

題未定　菊池寛

題未定　志賀直哉

四月號豫告

！新人努力の結晶學界稀有の偉論！

■思想問題と哲學精神（七十枚の長論）……文學博士 朝永三十郎

哲學界の泰斗たる博士が、幾年目かに發表せられたる長篇の思索探元にして、現代の社會問題と哲學精神の根元を究明し、歸結する所を知らざらんとする現代思想界に、一脈の生氣を與へ、思想の根源の那邊に歸すべきかの羅針盤たらしめんとす。

■社會改造論と人性樂觀（五十枚の長論）……小泉信三

新人中の新人として其學識の深奥にして、其批判の嚴正なるは、本號所載の論文を一讀せる人の何人も否む能はざる所なるべし、氏は更に筆硯を磨して此新問題の釋明を試みんとす。蓋し其獨創的見解と、眞摯なる研究とは稀に見る所也。

■佛國勞働總同盟（C・G・T）の研究（百枚の長論）……山川均

C・G・Tの研究は、露國のボルセイズム及び米國のI・W・Wの研究と共に、最も興味あるものとして、學者實際家の注視し居る所なり、今や山川氏は其豐富なる材料と、明晰なる断定とを以て本研究を遂げたり、苟も社會問題に志ある士に推す。

■ナショナルギルドの建設（七十枚の長論）……室伏高信

社會主義よりギルドへ、ギルドよりクロポトキンへ、クロポトキンよりトルストイへとは、近時頻りに唱へらるゝ所なるが、氏は獨特の立場より其誤れるを切論せり、クロポトキンへか、ギルドマンへか、乞ふ來つて本論に見よ。

■文化に浴するエラン・ヰタアル（長論）……三高教授 林久男

新らしき村は已に武者小路氏等に依りて設立せられたり、然れども更に進んで新らしき町の建設を爲さゞるべからず、而して其新らしき町は個性の革命に因つて成就せらるると論ず、新人の新研究なり。

■題未定……堺利彦

我が國に於けるソシアリストの頭目たる氏が、透徹せる主義の立場よりの評論。

■題未定……生田長江

ニイチエの哲學に依りて洗錬せられたる氏の思想は、更にソシアリズムに對しても亦徹底せる批判を試み、今や斯界の寵兒たり、一句一言、骨を刺し肉を碎んで成るの感あり。

大正八年下半期 決算公告

貸借對照表

負債	
株金	一二、000、000・00
社債	一、五00、000・00
準備積立金	一、0九四、000・00
別途積立金	三、000、000・00
配當平均準備金	四、五00、000・00
職員退職手當資金	六00、000・00
職工扶助救濟資金	四00、000・00
所得税及戰時利得税引當金	三二0、000・00
範多氏職工奬勵基金	五0、000・00
預り金	三二一、四六九・九五
假受金	一五、二七0、七二一・九五
掛買品代金	二九五、六二二・0四
未拂配當金	八、四三五・九0
未拂社債利子	二七、六八八・七一
未拂職工賃金	五0、三四八・六五
前期繰越金	四一八、二七0・二五
當期利益金	三、六五二、七四七・六二
合計	四三、五0九、三0四・九0

資產	
未拂込株金	一、五00、000・00
地所	一、九七六、六六二・八0
建物	一、六八五、八三七・三0
船渠	六[illegible]、五六四・二六
機械器具及專賣權	五、三一二、四三二・八七
船舶	三0四、一00・四四
什器	四六、三一八・七二
設備費未決算勘定	四四四、一三一・二三
半製品	一0、四六四、0九0・五九
貯藏品	六、一六六、二五五・一四
有價證券	四五0、二0二・六五
假出金	一五九、六一四・五五
貸金並受取手形	二、0九八、三九九・四一
未收入金	一、九六七、八八六・八五
預金及現金	一0、三0五、八0九・0七
合計	四三、五0九、三0四・九0

損益計算

金七百四拾四萬四千百八拾七圓五拾九錢　總收入金
金貳百七拾貳萬壹千四百三拾九圓九拾七錢　諸經費
差引
金四百七拾貳萬貳千七百四拾七圓六拾貳錢　利益金
金四拾壹萬八千貳百七拾圓貳拾五錢　前期繰越金
計金五百拾四萬壹千拾七圓八拾七錢

内

金七拾五萬圓　建物機械器具船舶什器償却金
金參拾貳萬圓　所得税及戰時利得税引當金
金貳拾萬圓　準備積立金
金五萬圓　別途積立金
金壹百萬圓　配當平均準備金
金拾萬圓　職員退職手當資金
金拾萬圓　職工扶助救濟資金
金拾八萬圓　役員賞與金
金五拾貳萬五千圓（年壹割）　株主普通配當金
金壹百五萬圓（年貳割）　株主特別配當金
金四拾壹萬六千拾七圓八拾七錢　後期繰越金

大正九年一月

株式會社大阪鐵工所

取締役會長　山岡順太郎
專務取締役　中山說太郎
取締役　村木正憲
取締役　下村耕次郎
取締役　江村義三郎
監査役　甲賀卯吉
監査役　西村秀造

株式會社 浪速銀行 第四十四期 營業報告

貸借對照表（大正八年十二月卅一日）

負債之部

科目	金額
一諸預り金	一八五、九五一、二九六・三四八
內譯　公金預金	三、八六四、八〇五・四七八
定期預金	八四、四〇七、三七七・三二〇
當座預金	四八、二四一、五八七・五三〇
特別當座預金	三五、六〇六、四一七・三七〇
通知預金	五、七一六、六〇一・一二〇
別段預金	八、一一四、五〇七・五三〇
一賣渡外國爲替	一、五一八・三七〇
一他店ヨリ借	七、一〇三、一五四・一九〇
一仕拂承諾	一九、七四八、八七四・九六〇
一借入金コールマネー及再割引手形	一七、一四三、八九二・六六〇
一資本金	一五、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一法定準備金及諸積立金	四、〇四〇、〇〇〇・〇〇〇
一未拂配當金	四、五六九・二八〇
一未拂利息及未經過割引料	一、七六八、五四五・九〇〇
一前期繰越及當期利益金	一、五六四、二九一・〇三〇
合計	二五二、三二六、一四二・七三八

資產之部

科目	金額
一諸貸出金	一五八、六九七、八八六・九九〇
內譯　證書貸付及手形貸付	七五、〇四五、六九〇・七〇〇
當座預金貸越	一九、六七三、四四一・四一〇
割引手形及荷付爲替手形	六三、九七八、七五四・八八〇
一コールローン	三、七〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一買入外國爲替及利付爲替手形	二、一〇〇、四九八・五七〇
一他店へ貸	五、一〇四、七八四・八一〇
一本支店間未達勘定	四九、四三二・四一〇
一仕拂承諾見返	一九、七四八、八七四・九六〇
一所有有價證券	三三、六三四、五七四・五〇〇
內譯　諸公債證書	一八、四三三、九七六・五〇〇
外國債證券	六、一五六、九二〇・〇〇〇
社債券	八、五一五、七七四・〇〇〇
株券	四七一、八六九・〇〇〇
貸付有價證券	五六、〇三五・〇〇〇
一地金銀	六三、九〇八・五七〇
一營業用土地建物什器	一、七四七、〇〇〇・〇〇〇
一所有動產不動產	三八六、四〇〇・〇〇〇
一新築費	二四八、〇四五・一〇〇
一預ケ金	一、二八五、九八二・七三〇
一現金在高	二七、五四八、七五四・〇九八
合計	二五二、三二六、一四二・七三八

損益計算

科目	金額
一總益金	一〇、二一九、七八〇・七六〇
一配當平均準備金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一前期繰越金	二八三、八〇二・一四〇
計	一〇、七〇三、五八二、九〇〇
內　仕拂利息並諸經費	九、〇四四、三一三・〇一〇
重役弔慰金	五〇、〇〇〇・〇〇〇
株式會社富國銀行買收費	四四、九七八・八六〇
差引純益金	一、五六四、二九一・〇三〇

此配當計算左ノ如シ

科目	金額
法定準備金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
家屋建築積立金	六〇、〇〇〇・〇〇〇
配當平均準備金	二五〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人恩給積立金	二〇、〇〇〇・〇〇〇
賞與及交際費	一一七、五〇〇・〇〇〇
配當金（年一割）	六三三、六六一・六八〇
後期繰越金	二八三、一二九・三五〇

右之通候也

大正九年一月

大阪市東區淡路町貳丁目
株式會社 浪速銀行

取締役頭取　松方正雄
常務取締役　愛甲兼達
取締役　平田正之
取締役　高崎親章
取締役　山本辰六郎
取締役　前田時三
監査役　宅徳平
監査役　浅見又藏
監査役　德永安兵衛

當銀行ノ帳簿證憑書及財產ヲ精査シ前記ノ通リ相違無之ト確認候也

大學院精神科專攻醫學士 高峰博著

（再版モ忽ニ賣盡シ新裝シテ三版出ヅ）

勞働心理

菊判大本上質紙三百頁

寫眞銅口繪卷尾に記事索引を附す

定價壹圓八十錢（送料二十錢）

『勞働心理學』は今や産ぶ聲を擧げた、あらゆる勞働の最根基を得て、茲に始めて徹底的解決の緒を見出すに至つたのである。嗚呼記念すべき此の出版よ！ 著者は新進の精神科學專攻學者として其の論議は常に世人の注目を惹きつゝあり、今や自ら奮つて此の根本的の勞働心理學を建設すべく本書を著した、學者實驗家は勿論苟も少なくとも新思想を解し國家乃至社會を想ふの士は勞資を擇ばず倶に速に此の著述を得て時代の進化に處しはた此の鍵鑰を握り解決に資せよ！

＝改裝せる高峰先生の二名著＝

九版

學窓[illegible]第一編 新[illegible]

腦味噌

三百六十頁 定價八十五錢 送料八錢

三版

[illegible]

なましひ

三百七十頁 定價八十五錢 送料八錢

東京市小石川區小日向臺町一の十四 振替口座東京六四四九番

良書普及會



社會小説

死線を越えて（第三巻）

賀川豊彦

十三

父に叱られまた毆られてからと云ふものは一層父と自分の間に蟠りのある事を感じた。それのみならずお梅は勿論弟の益則までが自分を馬鹿の様に見下げてくる不愉快さ。事情も何も知らずに雷同する馬鹿者と思へばそれつ切りだが、自分の勢力範圍が家族のうちにさへ此様に狹ばまつたと思ふと少々悲觀せずには居られぬ。が榮一は却つてこれで反抗心が起つて讀書の時も默想の時も多く、鶴子に對する夢と神秘とが增進すると考へて居た。

此二三日は機械的宇宙觀と、目的論的宇宙觀に關する默想を主にやつて居るが、之れに關して榮一は決して書物を開かぬ。書物は何等の權威が無いと云つて居る。實際有つたにした處で生死を賭して研究して居る事だから書物に相談する暇も勿論無い。それに一方には家族と健康の方から壓迫があるから榮一の胸は推察するにあまりある。

榮一は唯生きて居ると云ふだけではあるが矢張り動いて居る。勿論系統ある動きかたはせぬ。然し、暇があれば鶴子の顔を見に行くのと、田舍の妹に會ひに歸るのと日曜日に教會に出席するのとは他の凡ての盲目的活動と少し違つて、稍筋道があると云つて善い。

彼が日曜日に教會へ行くに就ては別に理由もない。鶴子樣がオルガンを奏く爲めかと云ふに、それ計りでは無い。或時は鶴子を胸の思ひから消して終ふ事がある。それでは何かと云ふ

に、榮一は何か牧師が基督に關して說敎する中に自分を刺激して基督の樣な熱烈な血を遡らす處が無いかと考へて居るのと、今一つは、榮一には妙な癖があつて大勢集つた所が好きなので、ステーションとか芝居とか學校とか敎會とか云ふものを非常に樂しんで人々の服裝とか骨相とかを研究するのである。それから最後の理由は家に居つても面白くなし、と云つて、遊びに行くところは無し、時間潰しに敎會へ出席するのである。

が榮一は自分計りに敎會行きを勸め無い。弟の益則にも敎會行を勸める。小供と女には基督敎が非常に樂になると云ふのは彼の持論だから。然し益則を引張つて行くと云ふとお梅が不服を云ふ。父も怒る。益則も閉口して居る。それで父と自分の中が益々割れる。そこへ田舍の本妻の處へ榮一が屢々歸ると云ふので父もお梅も苦い顏をして居る。事が此斯進行すると事は愈々面倒になつて來るものである。榮一は此頃父と共に膳に座つた事は無い。

榮一は今しも學校の敎授を終へて自分の宅の門へ入らうとする所であつた。

門の側には遍路車が据ゑてあつて中には面付きの惡い七二にはなるまいと思ふ子が足が立たぬ樣な態度をして榮一の這入つて行くのを見守つて居る。玄關の側の中門から內へ這入らうとする所でバタリと出會したのが四十五六から五十二三迄の女乞食。腰を前に曲めて頭は垂れ、椀と澁紙を持つて出て來た。

『お茶が欲しいと思ふんで御座りますが——奧樣……』

新見は此野郎少しずゞしい奴だと思つたが、兎に角物が欲しいのに違いない。欲しければ遣る事にしようと、

『あの……君は。お茶がいるのですか？お茶がいるならば僕に從いて來給へ。』

『若旦那樣でいらしやいますか？どうも有難たう御座ります。どうも有難たう御座ります。奧樣に先程お願ひ申しましたが……中門から來るとはけしからんとのお叱り——それに若旦那樣の御親切。目から淚がこぼれます。』頭に中古の手拭を置いて居るが顏は黑くて痘痕面。中門から臺所の裏口まで腰を折つて爪足で步いて薄い唇をペラ〱動して居る。口は動かす爲めに作つてあるがこれだけまでに動かしても善いものかと、いやになる程の能辯。榮一先生、全くクラシカルの乞食もあつた者じやなと閉口した。

榮一は臺所へ這入つて湯が沸いて居るかと思つて、見廻つたが、沸いて居ない。奧へ行つて鐵瓶を提げて來た。長火鉢には

何時も火があつて湯が沸いて居る。臺所に來ると女乞食は裏口の框の前に土下坐して居る。針仕事してゐる廂髪の下女が吃驚してゐる。進んで行つて、

『此處へいらツしやい。さ。湯を上げましよう。』と竈の前の踏み上の上に立つて云ふたが、

『どうも勿體のう御座ります。どうも勿體のう御座ります。』と云うてどうしても這入つてこない。

『それじや。』と云つて、榮一は下駄をはいて乞食の所まで行つて鐵瓶を傾けると、乞食は澁紙を椀に乘せて受けようとする。

『變なことをするね。』

『勿體のう御座ります。此様な醉陶敷い椀でお湯を戴かして乞ひましては。勿體のう御座ります。』と云つて、どうしても椀のまゝ。湯を受けようとはせぬ。眞にクラシカルな乞食もあつた者だと思つて、馬鹿にせられた様な氣で澁紙の上に湯を注ぎ入れて、鐵瓶持つて這入つた。乞食も出て行つた。

が「あの乞食、金が欲しいのかも知れねえ、多分湯は方便だらうと思つたから、金が欲しければ遣る。いらぬと云ふまでやる。」と思ひ立つて急にまた裏口から廻つて中門に出た。所が驚いた。彼女、四角い竹で編んだ籠の上に

此者歸國セント思ヘドモ旅金乏キ者ナレバ
大方ノ御惠與ヲ乞フ。

と書いた一尺五寸四角計りの板を乘せ中門の側に土下坐して居る。

『勿體のう御座います。有難たうて眼から涙がこぼれました。』

『君金がいるかい。……いるならこれを上げよう。』と懐の中から一圓紙幣。

『若旦那様とやら、此那旅乞食に一圓遣らうとのお仰せ。有難い事で御座りますれど。有難い事で御座りますれど。若旦那様とやら、鐵瓶持つて湯まで貰はして頂きまして、お金一圓遣らうとは。勿體のう御座います。』

とつうと立つて乞食の店を終つて車まで歸つて行つた。その訴ふる様な聲、その疑ふ様な聲、驚いた様な聲、輕蔑せられたと云ふ様な聲は全く此女はクラシカルの乞食だと云ふ事を思はした。人相が悪い。然し人相が悪いからと捨てゝ終うのは本意では無い。

『それでは之れ取り給へ。』と門まで追いて行つて二十錢銀貨を差し出した。

『勿體のう御座ります。有難たうて眼から涙が……一圓もやら

うと仰つては私の様な乞食でも、どうしても貰へませぬ。』と竹籠を車に収めて車の轅に手をかけてひき出した。然し車の中の子供は憎い憎い面をして車の屋根を支へている隅の一本の柱を掴へて貰へ貰へと云ふ意味であらう揺すつて揺すりまくつて大騒を始めた。

『君はいらんのかね、乞ひに來て。遣ると云ふなら貰つて置けばいゝじゃ無いかね。』ところ駄目をつめた。女は二三間行つて車を止めた。引返して來て、

『勿體のう御座ります。』と云ひながら榮一の前に土下坐して籠を差出す。榮一は此乞食の變な動作と驚いて居たが

『それでは僅かだけれども取つて置き給へ。』と一寸と微笑んで銀貨を籠に入れた。そして直に門に這入つた。心の中では自己の慈善を罵つた。知らぬ顔して自分の室に這入つて机の前に坐つた。何をしようかと考へたが別に之れと云うて讀む本も無い。横にある小さい鏡を取つて見入つた。この顔に鶴子が惚れるかと云ふのが問題であつた。然し自分手に「美しい顔だ。此那女が居れば僕は戀する。」など云つてみた。口を大きく張つてみたり、笑つてみたり、睨む眞似をして見たりして長い間鏡に見入つて居ると、門の戸に吉三郎の聲と乞食の聲が相混つて聞える。「まだ乞食は居るのか」と耳を澄ましてきいて居た。

遍路は一圓の金に思ひ切りが悪いのであらう、榮一が門へ這入ると入れ變つて、お梅の命令で乞食の行衛を見に出た小僧の吉三郎に、

『勿體ない事で御座りまするが、唯今の若旦那様にも一度會はして下されたら御座りますが……も一度お目にかゝつて御禮を申し上げとう御座りまする。此那な旅乞食にあれまでの御心……。』腰をかゞめて左手を土にすれ〳〵にして述べたてるところが如何にも哀れに憎い。小僧の吉三郎は乞食を眼の下に見て、

『何んじゃ知らんがな。おまはん、もう貰うたら往んだら善いでないでかだ。若旦那はもう奥へお這りになつたでは。』とやつて居る。

『一圓のお金を遣らうと仰つるのであまり勿體ないので一度は御辭退申したものゝ——』

『若旦那が一圓遣ると云つた？此那乞食に——馬鹿らしい。うちの若旦那はどうかしとるのかいな』と胸の中で吉三郎は吃驚した。そして

『どうすると云ふので、それで、またその一圓を貰つて呉れと云ふのでかだ。おまはん使ひやようせんがな。おまはんもうお

金は貰うたんだらうな。』

『一圓のお金は御辭退申しました處がそれでは二十錢やると仰つて二十錢は戴かせて頂きましたが、わたしの小供が申しますには自分の宅へ歸らうと云ふのに、金がなうて困つて居るから一軒々々乞ひ歩ひて居るに何故あの一圓を貰はぬか、一軒の内で貰うのも百軒の内で貰ふのも貰ふのは同じでないか？遣らうと云ふ所で貰つて置かな先で困つて終ふで無いかとこう申すので御座ります。何ならも一度若旦那様に此處まで出ておもらひ申す譯には參りますまいか？』とうつぶき入つての賴み。

『然し若旦那はもう奥へお這入りになつたがな。』小僧は左の手を腰の上に置いて乞食にはあまり頓着せぬと云ふ樣子で首を左右に回して、通りの東西を見て、その目で一寸と見降ろして頗る應揚な態度で云ふ。

『勿體ない事で御座りますが、何卒も一度お目に懸る事が出來ますれば……此那遍路に一圓もやろと仰る若旦那に。どうぞ丁稚さん若旦那樣にも一度お取次ぎをお頼み申します。』

吉三郎はまた通りの東西を見て居たが西の方を見るとフロックコートを着てステッキついた紳士がやつて來る。旦那のお歸りと見て取つた吉三郎は一層强更な外交手段を取り初めた。

『おまはん、國へ往ぬ、國へ往ぬと云ふて幾日此の德島で愚圖々々して居るで、うちが知つてから、もう、一月にもなるでないで、……それにおまはんは此間、寺島の鐵工場の横で何やら物を竊んだと云はれて職工に蹴られよつたでないで。おまはんあまり欲が深いでよ。二十錢も貰ふたら結構でないで……それだけ貰ふたらもうお歸りなはれ一圓も貰ひたいつて何で。お通り。お通り。』

と云ひ終らぬうちに乞食はペタリと土下坐して、うつぶき入つた。市長の旦那は增々近づいた。吉三郎は少々當惑の顏色で眼尻に皺よせ、出齒をむき出して笑つて居る。玄關の障子を少し開けて見て居たお梅はも少し開けて顏だけ出す事にした。市長の大旦那は愈々現場に立ち臨んだ。吉三郎は丁寧に『お歸り』と迎へる。

『吉三郎。どしたんな？』

『若旦那がお金二十錢もおやりになつたら、付け上りくさつて一圓呉れと云ひ腐つて往なんですわ……此奴その癖に性が惡いで御座りましてない。此間も寺島の鐵工場の處で何やら盜みよつて、職工に打撲上られよつたのでつせ。』

『泣きよるのかい？』

『泣きよるのか何か知りませんが、こうしたらお金でもくれると思つて居るんでしょう。』

臺所から女中も出て來た。中門から頸だけ出して見物して居る。隣りの洗濯屋から亭主が出て來た。向への角田の妻君が障子を一寸計り開けて居る。車の中の小供は

『お母往のう――お母――お母――』と叫んで居る。

『お前此處は何處と思つて居るので、寢る處で無いでよ。さつさとお歸りなはれよ。愚圖々々して居つたら巡査を呼んで來るでよ。』と小僧は市長を横に置いて大に威張つて居る。然し乞食は身動きもせぬ。小僧の惡口を待つて居る。

『吉三郎。奥からもう二錢貰つて來て遣れ!』と市長は云ひ殘して玄關へ歩を移した。吉三郎は隣りの洗濯屋の亭主を見て、

『此那者に二錢もやる者があるでかな。な。此那者に。』と云うて居る。隣りの洗濯屋は變な顔をして、

『一體。どうしたの?』

『いや内の若旦那があんな善いお方だろな。それで此奴が付け上り腐つて、なんでないで、若旦那が此奴に一圓見せたんだらうな。そしたらそれを呉れそれを呉れと云ふとるんじやがな。欲な奴じやな。そして貰ふとらんかと云ふと貰ふとるのでよ二十錢も。』

『オホー、二拾錢も!?』

市長が這入ると、這入つた女中が二錢銅貨を持つて來た。そして吉三郎に手渡しながら、

『之れを遣つて返れつて、それでも返らんのなら巡査を呼んで來る樣にと。』特別に巡査の言葉に力を入れて云ふた。下女は洗濯屋を見て、

『今日は』と挨拶する。

『や、今日は――この人は一體どうしたので。』

『さ、どうしたのかない。先きにも澁紙と椀とを持つて中門を開けて默つて裏へ廻つて、裏口の處で土下坐してお茶を呉れと云ふでないで、私も吃驚してな。そしたら、奥樣が出て行かせと仰つたので、出て行つて貰ふたのですは。そしたら若旦那があんな善いお方でしような……』

『フム、』

下女は續けて喋らうと思つて居ると玄關で、『よし、よ』とお梅の呼ぶ聲がしたので洗濯屋に挨拶もせず、默つて這入つた。

吉三郎は下女に變つて喋り出す。

『此奴、此間もあの寺島の鐵工所の横で職工に突かれたので

よ。何やら盗んだのだつて。狡滑奴じやな。』
『ウム、此乞食は、長いこと、徳島に居るで無いで。此間つて……それでもゝう十五日も廿日にもなるな……西船場に居つたがな。』と洗濯屋も應じる。
女乞食は何を思つたか、洗濯屋が云ひ終るか終らぬにつうと立つて、
『此奴丁稚めが。覺えていやがれよ。こら、よくまア大勢の前で耻を晒しやがつたな。覺えていやがれよ。』と荒々しく立つて車の所に近寄つた。近寄ると小供はワアと泣き叫ぶ。
吉三郎は乞食の正面攻撃に飽氣に取られて物も云はず耻し相な赤い顔に變な笑を漏して、洗濯屋の亭主を見た。洗濯屋も淋しく笑つた。然し吉三郎はハツと氣が付いたと云ふ樣な調子で慌てゝ車の脇に走つて行つて、
『ホレ、二錢上げるは。』と車の中に抛り込んで門へ立ち戻つた。
が乞食は車が三廻りか四廻りかすると思ふ頃、車の中の二錢銅貨を取り上げて、一寸後ろ向いて、
『此那金は乞はぬわ』と土の上に投げ付けた。此小氣味の惡い投げ方に吉三郎は、
『アレ、遣ると云ふのに貰はぬと云ふ遍路じやどうで。まアあきれるは。ホホ……』と指の先に棘を立てた樣な笑ひ方をする。
『非道い奴じやな！』と洗濯屋も云ふ。

榮一は先きから事の成り行きを八分通り知つて居たが、何だか矛盾して居る樣な慟悸のうちかたがするので鏡を捨てゝ忙然考へて居た。すると、下に女中が
『若旦那が一圓も乞食にお見せになるのがお惡いのですは』と云ふのを聞く。すると何か自分を辨解せねばならぬ樣な氣もするし、自分の親切氣に自分ながら感謝して呆れる樣な氣もする。また、徹底せぬ慈善主義は味噌にも糞にもならぬとも考へる。が、乞食の身の上が可哀相だと唯直覺的に泣きたい氣もする。そして自分も父の家を捨てゝ氣狂ひの樣な乞食生活を送るなら、あの樣な運に出會すのだ、などと取つても付かぬ空想に身の立場を置いて考へて見ると、何とはなしに涙が落ちる。
半分泣きながら、玄關の二階まで出て、
『吉三郎。まう遍路は行つて終うたか？』と尋ねた。
『へえ、今向ふの角を廻つて居ります。』

『まだ向ふの角までか？』と答へて置いて急いで二階から驅け降りて玄關に出た。然し玄關に自分の下駄が無いから急いで裏へ廻つた。急ぎ樣が何か意味あり氣であるから、お梅が奥から出て來て、

『兄樣、お父樣が一圓も遍路に遣つてはいかんと仰りましたよ。』と傳へて來た。

が聞かぬ振して門の方へ出て、『アヽ殘酷だ。資本家は殘酷だ。トルストイが第三の劍だと云つて慈善を罵つても僕は持つて居るものを皆遣る。遣ればまう遣るものが無くなる。無くなれば慈善もしなくても善い。罪は社會にあるのだ。噓の乞食でも僕はかまわぬ。金をやる。』と胸の中を掻き亂して遍路の跡を追つかけた。

調度福島上の上で追ひ付いて、籠の中に一圓紙幣を投げ込んで置いて飛んで歸つた。

然し自分の宅の門の前には洗濯屋と吉三郎が未だ立つて居るので、宅へ歸らうとはせずに一町手前で折れて鶴子の家のある町へ足を運んだ。そして普通の人の量る事の出來ぬ悲痛の涙にくれた。その涙は新見自身には甘いものであつた。

十四

鶴子の家を訪れると鶴子は居た。鶴子は榮一に二階の勉強室に行つて居れと云つて、自分は臺所で一寸と用を澄まして二階へ昇つて來た。

『今日は、お婆樣は？』

『阿爺樣もお婆樣も皆留守なのですよ。獨りお留守番でしたの。よく來て下したのね。然し、かうして會えるのも暫くですよ。私はもう六月の末には廣島へ行く都合になりましたのですよ。』と何だか憂ひを帶びた樣なまた得意である樣な句調で始めた。

『そうですか？六月の末に、それじやもふ一月ですね。』

『そうね。』と云ひ乍ら自分の机の脇に坐蒲團を据ゑて、

『どうぞお坐りなして。』

『何しに廣島へいらしやるの？』

『幼稚園の方へ』

『そう？』

『勉强に？』

『はア、保姆養成所へ』

『そうですか、それは善いですね。小供は可愛いものですね。』

鶴子は急ち、變な目付をして榮一の顔をつくづく見て居たが、
『ちよいと、あなた、泣いたの？どうしたの？』と尋ねる。
悟られてうれしいやら辛らいやらの新見は、唯、
『はア』と答へた。
『どうなしたの、一體どうしたの妾に云つて下さらない？』
『そうね。云つても善いけれど――』
『妾に云つて頂戴な。妾に云へない様なこと？』と一寸前の障子を開いて庭に足音がした様に思つたので見てみた。然し人の影もないから、また閉じて、涼しい目を輝かし乍ら。
『妾に云つて下さらないの‥‥妾を愛して下さるなら云つて頂戴な――』と鶴子には精々の勇氣で云つて終つた。『愛してくれるなら』の一言葉で油の様に解かされた榮一は、
『鶴子様。あなた私を愛して下さるの？』と鶴子の手を取らうと立ち寄つた。
『鶴子様。私の心をほんとにうち開けましようか？』
『うち開けて頂戴。』
『云ひましようか？』
『云つて頂戴。』
『ホホ‥‥ほんとに聞いてくれる？』
『聞きますとも。聞かずにどうしましよう。』と云ひ終らぬ中に鶴子は榮一の手に接吻した。榮一も返した。
『それじやね。鶴子様。云ひましようよ。‥‥それでも云ふのが耻しいわ。オ耻し。』と榮一は頭を一寸と縮めた。
『ね。先き、私がね‥‥云ふか止めようか？』
『お云ひなさいな。どうしたの？今日はいつにない元氣のないのね。どうしたの、先き？』
『先きね、乞食に一圓呉れて遣つたの。その乞食の事思つて泣いているの。』
『そう。善いことしたのね』と鶴子は別に驚きもせぬ。が、その涼しい眼で榮一の眼を見詰めて握つた手をグツと占める。片手を差出して榮一の左を呉れと求めた。
榮一は美しい鶴子の眼付に耻しくて一寸と顔を背けたが、鶴子があまり見詰めるので、自分も鶴子の面を見入つた。見詰めれば見詰める程鶴子は奇麗だ。絹の様な滑かな頬に薔薇色の色合ひ、何故此様に美しいかと疑つた。視線と視線は永く合つて沈默のうれしさに二人は醉つた。
が元氣な鶴子は『それだけ？まだあるのでしよう。すつかり云つて頂戴な』と沈默を破つて促した。

『私ね鶴子さん。私もお父様の家に居るのは暫時だと思ひます
は？』
『何故？』
『でも……』
『何故？』
榮一は女の様に子供の様に妙に逡巡して同情を引から引から
として居る。それに鶴子は男らしく同情をしようと務めて居る。
『あなたも御存知でしよう、お梅の事など——』
『知つて居りますよ。あのお父様の……それがどうしたの？』
『私ね、父がね、あの様な汚れた女を相手にして田舍のお母様
を泣かして居られるのを見るに忍びないでしよう。』
『そうね。然しあなたはそれをどうなさるお積りなの？』
『私、それで困つて居るのですよ。』
『まア、お坐りなさい。』
『いや私は立つて居るのが好き。』
『そうそれじや立つて居りましよう。』
『私、お父様にあの女を出して貰ひたいの——あなたどう思ふ
て？』
私は寧ろそう思ひませぬわ——』

『どうして？』
『あの、アウガスチンがね悔改めて信者になつたのは、妾に勵
まされたのだそうですね？なんでしようアウガスチンが妾を——
若い妻を娶らうと思つて皆と相談して居ると前から連れて居た
妾が、アウガスチンに捨てられても自分はアウガスチンを捨て
ぬと云つてアラビヤへ隠れて終つたのでしよう。それが動機と
なつてアウガスチンは清い聖徒になつたんだそうですね。妾は
それを思つて居るのですよ。愛するものがあるのでどれだけ人
間は柔和になつて居るか、知れませぬよ。妾だからつて排斥す
るとまた反つて、お父様のお氣に觸つてどんな事が起るかも知
れませぬよ——』鶴子は如何にも知慧者らしく語り出た。榮一
は戀しい人から此様な言葉を聞くのがうれしくて堪らぬ。が、
『然しね……』と云つて見た。
『私はクリスチャンだから嚴格に、一夫一婦主義を守りたいの
ですよ。でも妾は私の愛した人なら、その人が、たとへ道の
様な女と罪を犯しても決して捨てませぬわ、その罪を許して地
獄までども追つ掛けて行つて基督の處へ救つて來ますわ。アウ
ガスチンもその様な事を云ひましたね。また私は思ふのですよ
——眞に愛し愛しあつた者なら一生どころか二生も三生も一夫

一緒で送りもするし送りたくて堪らぬだらうと思ふのですよ。あなたのお父様だつて決してすいて好んで女遊びはなさらぬと思ひますわ……』

『そうか知らん？プラトニック・ラブの實現する事があるでしようか？ そら勿論世界が算盤の珠の様に思つた様に動くなら一夫一婦主義は理想でもあり實現もせられましようがね――』と低い聲で榮一は呼いた。

『だから、お梅様を、今の所獨り愛していらしやるのならそれで善いでしよう』と別に榮一の理屈ぽい疑問に頓着せずに云つた。

榮一もその大膽な判決と寛容の廣さに驚いた。美くしい鶴子が何故か光る様に思はれる。鶴子の目は全く斯う云つて終つた時に大きく見張つて輝いたのだ。それで、『鶴子様、あなたは實に大きい心を持つて居らしやるのね。』と賞めなくてはならぬ様になつた。

賞められて鶴子は下に向いたがまた新見の鼻筋のあたりを見ながら、

『然しわたしは、あなたのお心は充分察して居りますよ。』

『そう、あなた。察してくださつて？』早や涙ぐんで居る。

『ね、鶴子様、私はもう世の中がいやになつたわ。』

『なぜ？』

『父もあの様だが、自分も謎の様な人間に成つて終つたのよ。』

『あなた、此世が嫌ひ、私が居ても』と云つて置いて可愛らしい鶴子は新見の冷い青白い頬に接吻した。愛に堪え兼ねて榮一は鶴子を固く抱きしめた。そして少さい聲で、

『斯うして地獄へ落ちても私は神様に不平は言はぬわ』と呼く。

『私も……』と鶴子は答へたが、その聲は歔り泣きであつた。泣く泣く鶴子は呼いた。

『あなたもお辛ひが、私もほんとに不仕合せですよ。あなたは私のことを思つて御覧なさひどれ丈幸か知れませんよ。』

『ほんとにね。私は鶴子様に同情して居るのですよ。鶴子様の爲めなら死んでも善いと思ふ位い同情して居ゐのですよ。』

『オホ……うれしいこと……私の爲めなら死んで下さる？それじや、二人ともかうして死にましようか？そしたらすぐ天國へ行けますよ。』

『ほんとに？』と戀に醉つた人々が先から先へと世界を創造して居る。

『…… 死ぬと鶴子様に會へないと云ふのなら私は苦しくて

も悲しくても善い、此浮世に居りたいわ。』

『私も』と榮一の美しい目をつく〴〵と見詰めて居る。榮一も瞳から鶴子の胸へ這入つて行く位い見詰めて、『鶴子樣は何故、こんなに美しいの？』繰返して、段々と沈默のよろこびに沈んで行く。

が鶴子はまた問ふた。

『それであなたはどうなさるお積りなの？』

『どうつて、革命を起すのです』と榮一は笑つて云ふ。

『革命？恐ろしいこと仰しやるのね。オホ……。まア何でも善いわ。然し最後の勝利は愛と沈默だと云ふ事をお忘れなさるな。』榮一は說敎を聞いて居る樣な氣がした。が默つて鶴子の唇に接吻した。そして靜に口を開いて

『そうかも知れませんね。然し白紙の樣な人間の眞似は僕は嫌ひですよ。僕は色を白紙に塗りたいのですよ。』

『そうですね。それでも自己の主張を他人に無理矢理に强迫するのは眞理の敵ですよ。神で無い以上は。自分を自分に支配する者は他人を支配する者ですわ。妾此頃つら〳〵斯那ことを考へて居るのですの。私がね敎會の皆樣や內の爺樣や婆樣に同情して貰ふ慰めて貰ふと思つたらいつも慰めが得られないて、苦しくて苦しくて堪らぬのですよ。そうでしよう此度廣島へ行くときめるに付きましてもね、色々と自分に心配がありましよう。そら學資の方はミセス・テーラーが御心配してくださるのだけれども、その外に色々な心配がありますわね。それが他人に心配して頂かうと思つたらいつも失望計りなのですよ。あなたが此の一週間計りいらしやら無かつたでしよう。その間にね、私は三日程學校を休んだのですよ。』

『何故？』

『何故つて、病氣で、』

『どんな御病氣？』

『いへ一寸と頭痛がしただけでしたが――』

『どしたの？』

『どうもしないのですがね、心配で心配で堪ら無くつてね、とう〳〵寢込んだのですの……親類ではもう年だから外へ遣りたいと云ふし叔父の方では高等師範へ行けと云ひますしね、私は神戶の女學院か東京の女子學院へでも這入つてみたいのでしよう。ほんとに苦しくてね。あなたでもいらしたら枕元へ來てか面白いお話でも聞かして貰はふと思つて居たのですけれど。あれからどうしていらしやら無かつたの？』

『ね、あまり毎晩出るものですからね、内では不審に思つて居るし、お父樣も怒つて居らしやるしね。それ、時行さんがお歸りにならなくつて遲くまで話した晩などはね、私、父に叩かれた位いですからね。あまり夜出るのは惡いと思つたから扣て居ましたの。』

『まア——あの初めていらした晩？　非道いのね！あなたをお叩きなしたの？榮一樣を？私の可愛人を？何故？私が變りに叩かれゝば善かつたに。遲くなつたからお叱りなしたの？』

『はア』

『それじや、何故私の宅へ泊りにいらしやら無かつたの？内は年寄計りだから喜んでお宿め申すのに。今度から遲くなつたら私の宅へ泊りにいらしやいよ。內の爺さんや婆さんは善い人だからね。あなたが每晩泊りにいらしても喜んで居りますわ。……そうあなたお父樣にお叩かれなしたの、今度叩かれるなら必度私が變りに叩かれますわね。』と鬆の髮を搔き上げながら首を左に傾けて云ふ。

『鶴子樣。あなたは三日もお休みになつて居らしたの？三日も？』

『ア、恰度床の中に居ましたのは三日ですよ。頭が病めましてね。ほんとに苦しかつたわ。』

『それじや來れば善かつたにね。三日も寢たの？今度御病氣になつたら必度看護に來ますわね。』

『來て下さいね。お約束して置きますよ。あなたが來て看護して下さるなら、すぐと回復りますよ……あなたそらそうと肺はどうなの？』

『私の肺？もう善いのでしよう。然し無理が出來ないのですと。』

『あなた自分の病氣を他所の人の事の樣に仰るのね。』

『それでも此病氣だけは解ら無いのですもの、自分には。』

『ね、あなたが、私の病氣の時に看護に來て下さると仰るからあなたが今度もしも、肺でも惡くお成りになつたら廣島からでも飛んで歸つて來て看護致しますよ。電報打つて下さいすぐ歸つてきますから。』

『必度？うれしいことね。鶴子樣の看護？ラザロの樣に死んでいても、鶴子樣が「起てよ」と云つたら、その一聲で甦りますよ。』

『甦る？それじや、あなたがお死になさる前に私が死んで居ましても、私は生き返つて來ねばなりませんね。』

『そうね。』

『そうすると、誰が私を甦らしてくださるの？』

『そら、私。』

『それじや私とあなたとは一緒に甦るのね。それからもう死なないの？』

『死んでもまた甦るの？』

『お可笑いこと仰るの。もう、それからは天國へ行くのでしよう。一緒に天國へ行きましようね？』

『あなた道案內してくださる？』

『案內して上げますとも、オホ……』

『The Woman-Soul leadeth us upward and on! ですか？』

二人は戀から戀に、幻から幻に迷つて、甦る時の相談までして時間を潰した。それで、日の暮れるのも知ら無かつた。日暮れにお婆樣が歸つて來て榮一を喜んで歡迎した。夕飯も一緒に食へと勸めたので夕飯も一緒に食つてまた九時頃まで話した。別れると云ふ時になつて、鶴子に溫いキッスを與へて、自分の宅へ飛んで歸つた。

十五

議場は混亂に陷つて何が何やら薩張りわから無かつた。議長は聲を嗄らして『御靜粛に願ひます』と連發した。然しそれは無効で有つた。議長席の下で公民派の榎本厚吉と土曜會の增田尊德が罵倒し合つて居る。榎本は三等郵便局を請合つて居る公民派の顏役である。

中央では土木課長の本田時彦と『活辨』事楠本春次が寺島派の井上、結城、中立の三谷の三人と格闘をやつて居る。楠本は富田遊廓第一級選出の議員で、公民派のあばれ者であるが、『活辨』と云ふあだ名を取つたのは彼の演說が活辨の句調とそつくりだと云ふ評判があるためである。

議長席の右側でも市助役の畠山が、土曜會の北田と衝突して居る。今日は近頃新聞で問題になつて居る臨港輕便鐵道問題と例の富田川浚渫事件が市會で討議せられて居るのである。國民系の土曜會ではその機關新聞で隨分手非道く新見市長をこき卸しその惡棘な遣り方を攻擊して居たので、今日は傍聽席も一ぱいである。

榮一も父の議員操從振りを見るためと田舍の生活の單調を消すために傍聽席の隅に隱れて居た。

今日の議場が混亂すると云ふことは始めから見えすいて居

た。それは去年の三級補缺選擧の時に公民派が寺島派との口約を破つて、寺島派の市會議員細田保氏の補缺だから必ず寺島派の或者を推すことに贊成すると云うてをいて、本年二月の選擧間際になつて、突然三級候補に、富田遊廓の撿番取締花田眞誠を選出することに運動し、美事、政友系の勢力を持つて勝利を得たのである。それ以來、寺島派はことごとに公民系の新見市長をいぢめることを畫策して、善にも非にも兎に角一度は必ず反對してみると云ふ有樣で、議場に於ても『之は公民派の主張でありますから我等は之に反對します』と一も二もなく反對するのである。その最も極端な一例は今度の臨港輕便鐵道問題がそれである。政友系は例の積極政策からいつでも事業を起して議員も儲け、選擧民にも悅ばれる爲めに事業のあることを喜ぶのであるが、臨港鐵道問題だけは喜ば無かつた。それはこの問題が最初辯護士仲間——卽ち寺島派から、市會に持ち出されたからである。最初の提案は市の繁榮の爲めに臨港鐵道が必要である。で、之は當然德島市直營の事業として政府の補助を仰いでやるが善いと云ふので有つたが、政友系の之に反對した理由は、政友系は新見を初め市の有力者を含んで居るが、寺島派の提案に贊成することによつて、利益の多くは提案者に奪はれると思ふたからである。然し更に研究してみると地主は多く政友系の人々なので遂にそれに贊成することになつた。市會での議論の中心點は、市の當局が何故富田川の浚渫を怠るかと云ふ問題である。そして寺島派は一種の收賄行爲がそこにあると云ひ觸らして居るのである。そして、十四萬圓かけた浚渫船が、僅か二三年しか使用しない中に、もう廢物の樣になつて、船大工島に繫いであるのは市長の無能の爲めであるのみならず、新しい浚渫船の注文の事についても何かそこに不正な行爲がある樣に云ひ觸らされて居るのである。それで、最初富田川浚渫問題が日程に上つた時に、土曜會の增田尊德は先づ質問した。

『議長、二十三番、私は浚渫問題に就て市長自らに質問したいのであります。それで、市長に是非とも議場へ出席を希望します。』

そうすると議長は市長が別室で、代議士連と浚渫問題で相談中である爲めに、一寸と顏が出せ無いと答へた。

『然らば土木課長でも善いです。』と云つて、『最近大阪から修繕して歸つて來た浚渫船が每日船大工島で遊んで居るのはどう云ふわけであるか說明を願ひます。』と質問した。

それに對して、土木課長は、『遊んで居るのでは無い、一日

に五百噸乃至六百噸の土は浚渫して居るけれども、あんな舊式な機械では、とてもこの大きな川底を浚渫することは出來ないが、一日雨が降つて、土砂が上流から流れて來ると、約三萬噸から五萬噸の砂が浚渫した後を埋めるので、何の役にもたゝぬから、自然に對する不可抗力には打勝つことは出來ないとしてあきらめて居るのであります。』と答へたが、あきらめて居ると云ふ言句が、如何にも悲しそうであるので、議員は皆笑つた。

それで、増田は、あきらめる樣なものなら、何故修繕にやつたかと問ふたが、土木課長の土井は、議員の無智を笑ふかの如く、

『それは、私共が御請求申したのではありません、市參事會も市當局も、徳島港には全くあきらめをつけて居るのでありまして、富田川の浚渫は、全く無効であると申上げて居るのでありますが、皆樣は御自分に多數決で御決議になつて、私等におしつけられたのであります。今頃になつて、その責任を私達に轉嫁しやうと云ふのは無理であります。』

その時、増田はグツと癪に觸つたが、

『責任を轉嫁しやうと云ふのでは無い。そんなことがわかつて居るならなぜもう少し早くから、市會に注告しないかと問ひたいのである。私は今日まで徳島港が駄目であると云ふことを聞か無かつた。』増田は運送業者である爲めに、特別に浚渫問題に八釜敷いのである。

『然し皆樣は、御說明を申上げても御用ひにならないのです。こんなことは、專門家にまかせて下されば善いのです。』

『では、土木課長、君は市會は無用だと云ふのかね。』と辯護士の井上が座つたまゝ議長の許可も受けずに叫んだ。

『何吐してるんだい、摑み上つて。』と結城が怒鳴る。

『市長を出せ、市長を出せ。』と三谷が叫ぶ。

助役の畠山が市長室へ飛んで行く。給仕が何か議長の耳に囁いて居る。

『市會を馬鹿にして居る。』と結城が獨言のやうに云ふ。

『謝罪させろ。』と議席から井上が叫ぶ。

傍聽席に居た榮一はこんな聲が議場の所々で起るので、もう吃驚してしまつた。新聞記者連は何か八釜敷く笑ひ合つて居る。それを議長が睨みつける。然しそんなことを新聞記者は何とも思つて居無い。議場には、三十八人しか出席者が無いが、まるで何處かのクラブへ行つた樣に八釜敷しい。

井上は立ち上つた。そして、

『議長、我等は、本田氏の唯今の言論は市會を侮辱したものとして、謝罪を要求します』との動議を出した。

『贊成、贊成』の聲が、多數の口からもれる。政友系のものまでが、課長いぢめに贊成を叫んで居る。

そうすると、活辯事楠本春次が、土木課長を救ふてやるのは今だと立ち上つて、

『何の謝罪だか薩張わからんじや無いか？』と叫ぶ。

『默れ、活辯、』

『引込め、女郎屋の亭主！』

議員の口から楠本に對する罵倒の聲が漏れる。

楠本は罵倒の聲を聞くや、

『君らの云ふことは少しもわからぬじや無いか』と井上に云ふと、

『貴樣に用事は無いわ、』と井上が返す。

『貴樣てなんだ』と楠本が議席をはづして、井上の處へつめよる。結城は大きな聲で、

『議長、謝罪、謝罪』と叫んで居る。そうすると、土木課長は、

『馬鹿臭い、何だそんなことに』と口籠つた。すると結城は赤い顔して怒り出した。

『馬鹿つて何だ、貴樣こそ、馬鹿だ——摑みやがつて』から聞くと、先きから沈靜を裝ふて居た本田は青筋を立て丶、

『摑んだと云ふのは、何處に證據があるんだ、そんな無禮なことを云ふと、許さんぞ』

『貴樣が摑んだから摑んだと云ふのぢや、よく良心に聞け』

『馬鹿！』

本田は泣いて居る。

『馬鹿つて何だ、貴樣こそ馬鹿だ。』

助役の畠山が這入つて來た。土曜會の北田が席をはづして、畠山の所へ走つて行つた。

『市長を早く出さ無くちや駄目だ、新見君はどうしたんだい、』

『いや、すぐ來る、話も大分進行して居たようだつた。』

『然し、本田には謝罪させ無くちやいかぬよ、畠山君』

『謝罪の必要なんかあるものか、』

『そんなこと云ふから吾等は官僚式と云はれるのだ。』

井上は楠本に胸を摑まれて、今にも喧嘩せんとして居る。今楠本は井上を擲つた。三谷と結城が驅けつけた。外のものは忙然見て居る。政友系のものは小さくなつて居る。殊に無智の近

眼の花田眞誠は顔を眞靑にして震へて居る。

増田尊德は、議長を連呼して居る。議長は給仕を連呼して居る。市長を呼びにやる積であるらしい。

増田は議長席へ近づいて行つた。そして議長席の下から、

『議長、楠本を懲罰委員に渡して下さい』と早や懲罰問題を出して居る。さうすると、議長の味方だと自任して居る三等郵便局長の榎本厚吉は、

『懲罰無用、懲罰無用、』を叫んで居る。

然し、政友系の口からは、

『最初は井上が惡いのだ』

『井上、謝罪、井上謝罪。』と叫ぶものがある。

そこへ市長が這入つて來た。そして番外席についた。その態度が如何にも應揚で、權威があるらしく見える。

榮一は、父の議場を何とも思つて居らぬ態度にすつかり感心してしまつた。

そして市長が這入つてくると、議席はまた馬鹿に靜かになつた。そして懲罰問題も、謝罪問題も忘れたようになつて、凡てのものが議席に返つた。井上は、自席の机にもたれかゝつたまま顔を見せ無い。本田は番外席に座り直つてハンカチで涙を拭いて居る。

西村議長は『唯今市長より、浚渫問題に就て御說明があります』と云ふと、

新見市長は極く簡單にこんなことを云ふた。

『富田川が全く駄目であることは既に諸君も御存知だと思ひます。それで此度内務省とも、縣當局とも話して、研究の結果どうしても駄目だと云ふことがわかれば、小松島港か古川港に臨港鐵道を以つて、德島市との聯絡を取り、殘念乍ら、德島港を放棄すると云ふことに決定したのであります。從つて、富田川浚渫問題も一年十數萬圓と云ふ多額な費用を浪費するに忍びませんから、現今の浚渫船は賣拂つて、「ハシケ」の出入の爲めには別に現今も持續して居りますような人力で浚渫いたすことにいたします。各派の代議士諸君とも御相談の上その方針を取ることに決定致しましたから、諸君におかれましても、左樣御了解あらんことを希望します』

これに對しては、議席から質問の一言葉も出すものは無かつた。それは、先きの井上と楠本の喧嘩で、議席は反動的に安靜を要求したからである。

議長は『それでは本日は之れで散會いたします』と宣告し

た。そして、議員は各自、喋り乍ら休憩室の方へ流れて行つた。

栄一は、狐に憑れた様な氣になつて、傍聽席を出た。そしてその足ですぐ鋤子を訪問して議會政治のつまらぬこと、四十人足らずの市會に二人まで女郎屋の亭主が居ること、議場に於ける父の偉大なことを讃美して居た。

翌朝、食事の席に、栄一は一寸、父を賞めた。之は栄一が父を賞めた初めてゞ有つた。それに對して、父は『さうかおまへも來て居たのか』と答へたのみで有つた。

十六

小學校と云ふ處は妙な處である。

栄一は尋常三年生の乙組五十三人を受持たされたが、低能兒の多い組であつた。栄一が黒板に何か書いて居るとすぐ生徒がわいく〜騒ぐ。車輓の子供だと云ふ石井常次は年齢も十一になる小僧であるが最もよく騒ぐ。狂暴性と云ふものか注意力は少しも還ら無くて、机の上に平蜘蛛の様に擴がつて――机がこの兒には低く過ぎるのである――硯を出してみたり、鉛筆を嚙ぢつてみたり、雜記帳に樂書してみたりして居るかと思ふとすぐ隣の石板を取り上げる。隣の兒が泣く。全級の生徒が騒ぐ。栄一はほと〜閉口した。

組で矢張りよく出來るのは中流以上の子供であつた。辯護士で市會議員をして居る增田鼎徳の次男や、同じく辯護士で市會議員の河井の子供がよく出來る。勿論貧乏人の子供でよく出來るおとなしい谷本と云ふ子供などもあるが、衣服の穢い子供は矢張り出來が惡い。それで栄一は此處にも社會改革が必要だと思ふた。栄一は自己の案出した學習心理(サイコロヂイオブラーニング)を應用して、注意力の集中と趣味と「繰返し」と、言語中樞と視覺に訴へる爲めに隨分注意した。然し教室の喧躁は取れなかつた。それは教室の狹いためと、心理的能力の違つて居る各種の子供を一教室に追ひ込んで教へる爲めであつた。

栄一は自分の教室を「豚の教室」だと呼んだ。石井常次は休憩時間十分間に十一人の子供を泣かすことは稀で無かつた。それで栄一は石井常次が自分の教室に居る間は完全に授業が出來ぬと思ふた。然し首席訓導にも又は校長にも話す勇氣は無かつた。あまり栄一の教室が八釜敷いので、隣の四年の教室を受持つて居る師範出身の澤村と云ふ男が覗きにくる。『君靜にさしてくれな困るよ』と云ふ。

毎週月曜に開かれる教員會議で首席訓導と校長はたゞ『訓練訓練』と云ふことだけを繰返す。榮一はそれが自分を指して云ふのだと思ふと頭が上ら無かつた。それで首席訓導はどんな風に教へて居るかと覗いてみると女生徒の四年生が、靜かに授業を受けて居る。感心する。然し榮一は女生徒であればあれ位の靜肅は保たしめ得るとも思ふた。

教室は毎日八釜敷かつた。それで校長が臨席する様になつた。然し校長の臨席位で石井常次は沈默しなかつた。それで榮一は石井常次を變態心理の兒童だとしてあきらめて居た。澤村と首席訓導の林が榮一を侮辱するようなことを云ふ。然し榮一は澤村や林に變態心理がどんなものだかわからないものだと考へたから敢て反抗もしなかつた。

教員生活は愉快なものぢやなかつた。殊に教授細目の作成に至つては沙汰の限りであつた。馬鹿氣で阿呆らしくて書く勇氣だに無かつた。榮一は日本の小學校は人間を殺す處だと考へた。

教員室の氣分は殊にいやであつた。月給一圓や五十錢の差で二十六人の教員が皆階級を異にして居る、榮一は尻から五番目であつた。榮一よりつまらないものは準教員養成所をこの間出て來たまだ年の若い何にも知らぬ男教師二人と女教師一人と、福島小學校々長の長男で今年の四月に中學を卒業した十九になる青年の四人であつた。

然し實際の學力では全先生中榮一に肩を並べ得るものとては無い。榮一は英語と獨逸語は自由に讀むし、科學でも宗教でも社會問題でも文學でも藝術でも讀めない本とては無かつた。それで榮一は授業の休憩時間にも獨逸文の哲學書などを讀んで居た。

それで首席訓導も澤村もあまりいぢめなかつた。同じ教員室に居ても女教員と男教員の話をすることは稀であつた。それをすることは罪を犯すことのように皆のものが考へて居るらしい。然し去年この小學校の男女教員の間に出來た戀愛問題は教員間には面白く傳へられて居た。その二人は今は夫婦になつて美馬郡の山奥へ教員になつて行つて居るそうであるが、教員仲間ではまるで死刑囚のように惡口を云うてゐた。

兵式體操と修身だけは八釜敷かつた。榮一はその形式的の軍國主義教育の中毒に驚いてしまつた。

榮一は小學校は彼が長く奉職すべき所でないと思ふた。然し生徒は可哀相であつた。世界的に偉大になり得る國民が今日む

さ〳〵とその芽生え時に殺戮されて居ると考へれば殘念で堪らなかつた。

榮一は日本の教育は人間を人形に造り上げるのが目的であると斷定した。そして彼はルソーの「エミール」や「ソフヰア」の教育——それは戀愛教育までも含んだものであらねばならぬ——のことを思うて日本の教育を呪ふた。

そしてソフヰアとエミールの戀愛教育を思ふと、自分と鶴子の戀愛が幸福なものであることを自ら祝福して毎晩會ひに行つた。

榮一は自分の戀の成功を喜んだがまた云ふ可らざる苦痛を感じて來た。然し戀人と語る一分は二十四時間の苦痛を贖ひ得ると信じて絶えず鶴子を訪問した。もう一月すればまた別れねばならぬと思ふと何だか小説じみた悲哀な情が湧くので戀の趣味が一層增した樣に思はれた。

然し宅では頻りに榮一が夜遊びする樣になつた事を非常に怪んで居る。

吉三郎も未だ秘密を知らぬし奥も榮一が鶴子に通つて居ると云ふことは知らない。だから奥の方では下女の「なほ」が毎晩伯母の宅へ行くと云つて出て行く事などから或は榮一が常々から女中にあまり親切な素振をすると云ふ所から、此邊に神秘があるのではあるまいかと推察して居た。

處が五月の月も今日一日と云ふ日の夕方下女のなほ本名大山こまんはお梅から暇を貰つて歸ることになつた。その理由は此度看護婦になると云ふのであつた。

奥では朝から晩まで榮一とこまんの關係の噂で持ち切つて居る。吉三郎はこまんが或時榮一のスタデーに泣いて居るのを見たと高い黄な聲で云つて、お梅の好奇心を買つて居た。

大山こまんは五月一ぱいを切りとして去つた。それでお梅は吉三郎を口入屋へ遣つて、ちよつと美しい小間使を探して呉れと賴んだ。然し直にと云ふ工合にも行かず二日立ち三日經つて早や一週間も下女無しに送つたが、一日下女の來るのが延びると一日榮一が怨まれる日が長く延る、お梅は陰になり陽になつて榮一が下女に暇取らしたのだ、内が憎いから内の困る樣にと思うて下女を往なしたのだと出來るだけの悪口を云つて居た。

處が、六月七日の夕景であつた、榮一がもの思ひに沈んで散歩から歸つて來る途中寺島の劍先でヒヨツカリこまんと行き會つた。こまんはもう立派な女學生で下女の樣な面影は少しも無い。そして憎くも無い眼付きをして榮一にお詫びをすることが

あると云ひ出すのである。

『お詫び？』と榮一は問ふた。

處が『奧様が此度私がお內からお暇戴ひたのを何か私と貴君と關係があつて、私が出たと云ふ様にお思ひなしていらしやるのですから』と悲しそうに呼いた。

それで榮一は、

『實際關係があるでしよう。私が貴女に看護婦になれと勸めたのだから全く關係が無いと云はれますまい。‥‥一寸、然し一體誰れから奧様がそんな事思つて居ると聞いたのだらう？』

と、聞かれてこまんは赤い顔して、

『此間一寸吉三郎と道で會つて聞きましたのですが、唯今お宅へ一寸お禮に參りましたら奧様が「榮一様とお前は此頃思ふた様に遊べるだらうな」と仰（おつしや）つたので吃驚したので御座りますわ——』と答へる。

『君は卑怯だね。はい每晩狂つて遊んで居ります。へイ、それがどう致しました。そしてお手前は？　と云へば善いに。さう云へばお梅は閉口して終つたゞらうにね。』と榮一は強い言葉を並べ立てた。するとこまんは手に持つて居た更紗の風呂敷で顔を蔽ふて、

『オホヽヽ。そんな嘘が云へますものか？オホヽヽ』と笑つた。

『然し言葉は假物だからね。逆に云つたら合點することがあるものですよ。』

『それでも‥‥オホヽヽ』

『それでもつて？僕は君と關係があると云はれたら嬉しいよ。』

『若旦那。御冗談じやありませんよ。ホヽヽ』

『君の嫁入に差支へますか？　それじや關係あるとは云ひますまい。が僕は他人の誤解位は何とも思つて居無いから其積りで心配し給ふな。なにお梅の野郎がどう云つたとてそんな事は氣にかけ給ふな。それはそうともう入學が出來たの？』

『お蔭様で。』

『そら都合が善かつたね。勉強し給へよ。凡ての女の人は僕が君によく云つた様にフランシス・ウイラードやナイチンゲールの様な人間になれるのだからね。たとひなれなくとも立派な子供のお母様にはなれるのだからね。』

『精々勉強はして居ります。今度の入學試驗にも高等女學校の卒業生計り應じましたがね。その中で二人しか入學の許可をして與れませんでしたの。』と云つて人が通りかゝるかと思つて通りを見て居る。

『そうですか？それは善かつたね。實際此頃の高等女學校の生徒など云つても宛にならぬからね。何しろ自分手に勉強して滿足する人が一番豪いのですよ。僕などもと云ふとおかしいが、僕など學校で眞に教へられたことと云ふとは少しだね。君など看護婦養成所に居つても自分手に勉強をせなければ駄目だよ。』と兄の様に友の様に云ひ聞かすのでこまんも滿足して、

『はい。有難う御座ります。若旦那とは少しか御付き合ひ致しませぬが色々と受けました御恩は眞に忘れません。必度御恩返しいたします。』

『御恩返しとか何とか、えらい歌舞伎めいて來たね。御恩も何も有つたものぢやないぢやないか。君、今五十年して見給へ、下女とか云ふ事は昔噺になるよ。今の中に看護婦にでもなつて人に笑はれ無い様になつて居らな。年食つて耻かくよ、ね。』

往來の人々は變な目付をして二人を見て通るが榮一は反つて覩線を浴せかけて沈默させて通る。

『それでも、あなた様が居らしやらなかつたら妾は看護婦などには夢にもなれませぬわ』

『そんなに拜まなくてもいゝじや無いかね。』

『ほんとに、若旦那は善いお人ですね。それに何故あんなにお父様が可愛がりなさらぬでしよう ね？』

『善い人だ？　人を馬鹿にしてるね。僕はもう失敬しますよ。歸つて少し勉強しなくちやならぬ。』

『それじやまたお目に懸ります。』と二人は立ち別れた。が、こまんは別れて一町計り行くと吉三郎が風呂敷包を持つて向ふから遣つて來るのを見た。吉三郎はこまんが誰れと話して居たかを聞いた。若旦邦とだと少し顔を赧らめ答へると、吉三郎は苦々しく笑つて通り過ぎる。そして二三歩進むと、

『おかしいな！　誰やら。』と振り顧つて叫んで置いて道を急いだ。

翌日の朝榮一は平常の様に、父やお梅に遅れて食事しようと八時十五分程前に二階のスタデーから下の臺所へ降りて來た。榮一は朝の五時頃から大抵三時間讀書する習慣がある。二階から降りて來ると、お梅は變な顔をして「流し」の前から、

『お早う、今日はいつもより遅いのですな』と云ふ。

『いえ、平生の通りで御座りますよ。八時前で御座りましよう。』

『八時ですか、もう。私なぞはもうちやんと六時半頃に朝の御飯をすましてそれからお雜司にかゝつて居りますのですよ……

雜司が急しうて困る。はや、二時間も御雜司計りして居つて。』

吉三郎も恰度板の間に飯を食つて居たが、お梅は吉三郎の方にむいて、

『吉三郎。眞に朝は急しいな。若旦那の様に朝が遲いと困るな此那にまで遲く本讀まれると困るな。精々七時までに切り上げて貰はな、な。』その云ひ方が面憎い。吉三郎は然し笑つて計り居た。

『これでも下女が二人も居つて、若旦那に一人だけ、附けて置いて、若旦那お獨りのお雜司から何からすつかりさせたらな善いのじやけんど。女中が居らん上に八時頃まで雜司を待たされると一寸困るな。な。これ吉三郎。』

『へエ、へエ、…………』と吉三郎は唯榮一の顏を見て笑つて居る

『榮一様、昨日こ滿んさんが來ましてな。若旦那によろしくつて云うて居りましたでよ。』

『そうですか？　それはどうも有難たう御座ります』と輕く答へて、お梅を相手に爲しなかつた榮一が怒るであらうと思つて嘩つたにあまり答への輕いので、

『若旦那は昨日こ滿んに逢うて色々面白い話が出來ただらう、な。吉三郎。』榮一は別に驚きもしなかつた。吉三郎がお梅に告げた事だと思つたから。

『女中が居らんで奧や吉三郎が困つて居るのは、脇から見たら面白うて小氣味が善いだらうな。「奧様がむつかしいから、その罰じや」とこ滿んが云つて居つただらうな。榮一様。』

『そう云つて居りましたか知らん？』

『小氣味が善いは、そら。お父様や弟様が困るのは。そして私の様な駄性たれ目が困るのも。榮一様、此頃は毎晩毎晩、あの可愛いこ滿んさんと、打ちくつろいで話が出來るだらうな。此頃はこまんさんも奇麗になつたな。』

云はせて置けば勝手に復讐をやつて居る。が榮一は別に齒が無い。

『そうですね。こ滿んは奇麗になりましたね。』

『奇麗になつたから嬉しいだらうな。』

『嬉しう御座りますよ。』

『そら、水仕奉公やして居つたら奇麗な人でも穢うになるはな。宅に使はれて居つたけん小滿んも穢なかつたのじや。ほんまに水仕は毒じや。私が早や七日で手や顏の艶がなくなつてしもうたもの。な吉三郎。そうだらうな。奧様の手のきめを見なはれ、それ、此那に荒れて來た。どうで。』

榮一は心の中でお梅の小さい根性を嘲笑して居た。併し、お梅には足る程悪口を云はさして遣らうと思つたから、小言云はれて甘くも無い飯を出來るだけ落付き拂つて腹一杯食ふと決心して居る。

『な、吉三郎。これから女中が居らん間は皆面面に、自分手に御飯炊いて自分手に食ふことにせんで――自分だけ本讀んで居れば善いと云ふ人があるけん……』

これでも榮一は怒らぬ。

『榮一樣。今日はお辨當が出來まへんでよ。益則さんのが漸う出來兼ねた……。』お梅は益強迫して來た。が榮一は何とも考へて居らぬ。

『ア、、漸う、雜司がすんだ。もうお雜司がいやになつた。榮一樣、私はもう髮を梳き付けんならんけん、そのお膳とお茶碗は自分手にお洗ひなはれよ。ア、急しかつた。』と云うて流しを去つて奥へ這入らうとして、兩手を前掛けで拭いて居る。吉三郎は食事が濟んでお膳の蓋を頂いて居る。お梅は『よろしく』と冷かに笑つた。

榮一も云はれた通り靜かに膳を「流し」に運んだ。お梅は榮一がどうするかと思つて、立つて見て居たが、茶碗を洗ひながら笑つて居る。お梅は心細く、

『可笑しい人!』と低い聲で嘲つたが、榮一の耳には這入ら無かつた。笑ひも止ら無かつた。

『アレ、ほんまに、お可笑しい人じやな』とお梅は再び繰返した。此の嘲弄の聲が今度は少し耳に這入つた。

耳に這入つた時、茶碗を洗ひ終つて桶から取り出す處であつたが、茶碗取り上げた榮一は、粉微塵になれと敷石めがけて投げた。感心に茶碗は砕けた。榮一は

『ア、破壊(こぼ)れた。アハ……。』と夢の様な輕い笑ひを洩した。お梅は、

『吃驚した。危ない。ようまア妾の目にでも缺片(かけ)が飛んで來なかつたものじや。』と云つて奥へ這入つた。

榮一は學校へ急いだが、その日の授業を面白くすまして何處かへ隠れてしまつた。三日計り家に歸ら無かつた。田舎へ歸つたのでも無い。鶴子の處に居たのでも無い。勿論こまんの處にも行かなかつた。

三日目の晩方眞青の生氣の無い痩せた顔をして歸つて來た。歸つて來た時一人の女中はこまんの代りに臺所で忠めに働いて居た。

鶴子は榮一に決して父に反抗してはならぬと勸て居た。然し榮一は鶴子の寛容は、ルーテルのプロテスタンチイズムを帶びた近世的色彩が無いと考へた。そして父の反省を促す爲めに自分が氣狂ひになつても善いと考へて居る。諫めて駄目だとは決して思はぬ。榮一は一々父の反省を促すべき事を數へて『第一反省を促すべきは金その者の價値に就いてである。第二は株式の一攫千金の夢である。第三は市長の價値そのものである。第四には女遊び。第五にお梅と本妻と自分等子供の所置を明瞭に付けて貰ふ事である』と思ひ悩んだ。そして父は必ず自分の樣な心になれると考へた。彼は駄目だとは決して思はぬ。が、父を之等の諸點に就いて納得させるには尋常一樣の手段じや駄目だとも考へた。

海の樣な寛容で、女遊びも蓄妾も、笑つて許して遣りたい氣もした。然しキリストの樣な熱と血の流れて居る多くの聖徒を思ふと、また『否、否。』と反對せねばならぬ樣に思はれた。

一緒に住んで居ると、突然父を捕へて諫めるのも何だか變な氣がするので、延ばし延ばしして三十日も過ぎた。諫めると云ふ事はなか〳〵出來ないものだ。

三日斷食して何處からか知らぬが歸つて來た晩、父とお梅が長火鉢を間に置いて煙草を吸ふて居るのを見付けたので、折もよしと榮一は二人の前に現れた。

『唯今歸りました。色々御心配かけましてすみませんでした。』と榮一は手をついて平氣で謝した。

父は默つて知らぬ顏をして居る。お梅は愕いた顏をして、

『お歸り。宅ではどんなに心配して居つたか知れまへんでよ。榮一樣‥‥何處へ行つて居つたので？』

『いや一寸考へることがありまして――』

父は威張つた目付をして榮一を一寸と顧て、

『榮一、貴樣の樣な不孝者は無いぞ‥‥善く考へてみい。』と冷い落付いた句調で云ふ。一座は暫し身動きもしなかつた。

然し榮一は柔ら顏を上げて、嚴格な犯すべからざる態度を取つた。父は兩臂を長火鉢の端にもたせて、榮一の動作には無頓着を裝つて居る。お梅もそうだ。然し二人とも心の中ではどんなことを榮一が爲出かすか知れぬと思つて心配して居る。

が榮一は中々口を開かぬ。その高慢な王樣氣取りで居る樣な視線を父に浴せかけて居る。

父は自然身が震へて來て恐ろしくなつて來たから、

『榮一、貴樣は氣が狂つたのか？どうしたのじや？己に向つて

その生意氣な態度は一體何ぢや』と叱つた。

お梅も、

『榮一樣の目付き。いやな目付。そんないやな目付き、なさるな』と苦しい笑ひと共に榮一を制止せざるを得なかつた。

榮一は急に柔和な笑をその青白い痩せた頰に浮べて、喜びに充たされて居る樣な瞼の使ひかたをして、

『お父樣』と女の樣に愛らしい聲で低く云つた。そしてまた續けて『お父樣』と父を呼んだが此度の聲は發つて居た。そして、も一度『お父樣』と呼んだ時には泣き聲であつた。然し父は三度が三度まで返事をしなかつた。

榮一は涙をハラ〳〵と流しながら、

『お父樣、一生の御願ひで御座りますから、私の云ふことを御聞き下さい、』と皆云ひ終らぬうちに咽んで語尾を明瞭に云ふことが出來なかつた。お梅はたゞ四日前惡口を云つたのを氣にして榮一の云ひ出すことの遲いのを苛つた。

少し過ぎて榮一は顏を上げる勇氣もなく、

『お父樣、榮一はお父樣の眞の子なのですか？──私は何故か知りませぬが心の底からお父樣を愛する事が出來ないのです。然し心から底から愛する事が出來る樣にと思つて、日に日に泣いて計り居ります。此三日間は大麻山で考へて參りました──どうすればお父樣を眞に愛する事が出來るかと思ひまして。世界に何か人間の心と心を繫ぐ糸筋の樣な者があれば、その不思議な力でお父樣の胸へ私の考へを傳へて呉れと祈つて來たのです…』と云つてしまつて、泣きながら沈默した。然し胸の中では

『諫める？陳腐な眞似をする！重盛時代にはまだ價値もあつたが、二十世紀には父を諫める男は一人も無いぞ。家を出て女と食付くとそれで善いのだ近頃の小說に父を諫めると云ふ樣な陳腐な眞似をする主人公は一人も無いわい。…』と嘲笑の聲が起る。

それをうち消して榮一はまた、

『お父樣…』と呼んで『私はお父樣。どうしても申上げねばならぬ四つ五つのことがあるので御座ります。失禮ですが、お父樣は御自身で此頃の生活を人間の道を渡つて居らつしやるとお思なさいますか？私はどうしてもお父樣の此頃の生活は人間の道を眞直に渡つて居らしやらないと思ふので御座ります。私は之を申上げよう、申上げようと思つて、またお父樣に叱られるのが恐ろしいので、卑怯になつて、申上げる事が出來なかつたので御座ります…』

父は頭を垂れて居るがお梅は知らぬ顔をして煙草を燻して居る。

榮一はまた言葉を繼いで、

『私は田舍へ歸る度毎に、お父樣が田舍のお母樣に對して無慈悲だと思はざるを得ないのです。』

『無慈悲じや？何をぬかすのな』と父は叫んだ。

『そうです、無慈悲です。全く無慈悲です。生きた可愛い女を墓の中へ生き埋めにすると云ふのはお父樣の事です』と榮一は云ひ放つた、然し彼は泣いて居る。が『凡て過去だ。僕は過去に冷かであつた父と本妻の間の關係を現在に溫く甦らそうとして居る。父は既に五十六！そして三十年間も本妻と離れて居るでは無いか。三十年を取り返す事が出來るならばその情と熱も取り返す事が出來るだらう。いや始めから情も熱も無かつたのだらう然し云はずに濟ます事が出來るか？――』と頭を惱ました。

『自分も妾の子の癖に何を云つて居るぞ』と心の中でお梅は嘲弄して居る。今日はいつもの父と違つてよくものを云ふ――

『默れ！榮一。生意氣なことをぬかすと承知せぬぞ。お久にはお久だけの食ふものをあてがつてあるではないか？』

お梅はづいと立つて便所に出て行つた。榮一はその大きな丸髷が醜く見えた。お梅の後ろ姿を見送つて、稍穩當に、

『私はお父樣に叱られても申し上げる事だけは申上げます。少しの間だけ御辛抱して聞いて下さい。もし聞いて下されば私はもう死んでも宜敷う御座ります。お父樣。馬詰のお母樣の御話によればお父樣は此頃非常に株で御損をなされたそうですね。お父樣、私の一生のお願ひで御座ります。何卒投機だけはお止めなして下さい。話によれば馬詰の家屋敷も皆抵當に入つて居るとか‥‥お父樣、これを新見家の先祖に對して何と申譯をなさいます？』榮一は急に儒者になつた樣な氣がした。

『わしがどうしようと勝手ぢやないか？お前等の知つた事では無いわ。生意な子倅が何をぬかすんな。それじや己をどうする積か？勝手にさしてやるわ。もう己も年が寄つて役に立たぬからお前の勝手にさしてやるわ。』と父は云ひ放つた。

『あなたは自分の金で自分が賭博を打つから善いと仰りますか？』と榮一は父に向つて失禮だと思つたが元氣づけて云つた。

『ウム、貴樣等生意氣な書生が何を知るか？貴樣よくも親から今日まで養はれて居て親に向つて、そんな生意氣なことが云は

れるな――』父の額に青筋が立つて居る。父は火鉢によつて俛いて色々と考へて居る――

此那に家庭の亂れるのも皆運命だ。十六の時に養子に行かなければならなかつた。彼は新見家に養子に來無かつたならば唯大津村の酒屋の次男として世を終ら無ければならなかつたのだ。そして新見家が無ければ決して學問も出來なかつたし、選擧運動の金も出來なかつたらう。がお鶴を妾にしたのは抑へる事の出來ぬ情熱からだつた。そしてお梅を入れたのも抑へる事の出來ぬ本能の命令に從つたからであつた。お鶴を入れた時にお久が反對した。お梅を入れるとお鶴の子が反對をするが。皆運命だ。本能が抑へる事が出來たなら此悲劇は起らぬ。が始めからお久の様な十三の小娘に養子にならなかつたら善かつたのだ……運命だ。運命だと思ふと彼は何の責任をも感じない。榮一は續けた。

『それじや、お父様その御自分の金と云ふのを見せて貰ひましようか？　お父様は新見家の財産を片端から使つて置いて何處に自分の金と云ふものがあります！』

然しから激烈に詰めかけられてはたまらぬ。それで、

『云ひたいだけ云へよ。然し新見家の財産は盗んだのでは無いから安心して呉れ。』

盗まぬから善い？』と榮一は反問した。

『何とでもぬかせ。盗賊なら盗賊でも善いわ。賭博うちなら賭博うちでも善い。お前が何程豪ら相に云ふとも斯那大きな家はよう自分手には建てまい。泥棒でも盗人でも善いわ。よ。お前も斯那大きな家に住める様になれえよ。世界には豪い泥棒もあつた者じや。市長の椅子を占める泥棒つて。な。安氣な公平な泥棒じや。警察權を握る事も出來る泥棒じや。――』榮一は沈默さゝれた。然し少しゝてまた勇氣を出して、

『お父様、それじや、私達はどうしてくださるので御座ります？　妹を笑や義敬を……』

『どうならうと己の考へ次第じや。お前に關渉して貰はツ。生かそうと殺そうと己の勝手じや。お前は長男だから口がきけると思つたら眞違つて居るぞ。近い中に益則に相續權を讓つて了ふ積りで居るわ……こちらでは。お前の様な賢い人には盗棒の家を繼ぐ事は出來まい。な。否たらう。また繼がさぬわい。な安心した方が善いだらう。』

『いや私はお金の一文も他人から貰ひたいことはありません。相續權なども勿論益則が相續したければ悦んで讓りませうよ――

ー。』と、云つたもの丶榮一は涙も洒れ、善の標準も無くなり、唯鐵で作つた機械が胸の中に廻轉して居るのでは無いかと感じた。

が、まだ心の中で考へて居る事を皆云つてしまはないので、も少しと、

『お父様。あなたが私のお父様すか？』と忙然した問を發した。また之れだけしか發せられ無かつた。父は榮一が氣違ひの様な變な顔をして此妙な問を發したので、

『己はお前の父じや無いわ。』と云ひ放した。

榮一は頭が變になつて來たのだが、別に自制しようとも思はず、

『ウフア、フア……』と泣きたい様な笑をして、目には涙を湛へて、『お父様』とまた父を呼んでみた。そして立ち上りながら、

『お父様は何故私を可愛がつて被下ぬのだらう。アヽなぜお父様は榮一を可愛がつて被下さらぬのだらう。お父様は何故お母様が死んだ後にすぐ、お梅を引ばり込んだのだらう。』と柱に倚りかゝつて獨り言を云ひ初めた。

榮一は自分手に、氣狂ひの眞似をしてゐる事に氣が付いて居る。妹が折々氣狂の眞似をして田舎の本妻を困らすと云ふ事も思ひ出して居る。然し妹の氣が狂ふと云ふ時の心理狀態は斯那時を云ふのかと思ふと同情する。氣が違ふと云ふのは高熱の心理狀態が普通の人より永く續くのだと想像する。そして此高熱の心理狀態の處が何となしに消々して抑壓したくない程面白く感じられる。

『お父様。私はお父様を愛して居るのです。然しお父様が株式や投機に手を出して、女遊びに身を窶すのが嫌ひです。』と鶴子が急に乗り移つたかと思ふ様な氣がしたので、鶴子の云ふ様な女何調で、優しい聲をして云ふた。

『私は何故お父様に嫌はれるだらう。私が明治學院へ入學したのが惡かつたかしら？ アヽ然し今頃の様な眞違つた世の中で誰が官吏や辯護士になる馬鹿があらう。私が明治學院から歸つたのが惡いのだらうか？ お父様は理由も聞いて下さらずに私をお責めなさる？ 然し私は……そうじや。もう云ふまい。僕は勝手に勉强しよう——』と大きな聲で自問自答した。榮一はこれだけ云へば父に解るかと思つたのである。

父は先きから何を感じたか頭を鐵瓶とすれ／＼に置いて泣いて居る。が、榮一の態度に何か超自然の力がある様に思はれて

恐ろしく感じて居る。

お梅は縁に出て立ち聞きして居たが、二人が沈默したので還入つて來た。すぐと、

『榮一樣は氣が狂つた樣ですわね。』と長火鉢の前に坐つて煙草を入れた箱を膝の上にのせて、長煙管を取り上げながら云ふた。また平氣な調子で吸ひ初める。

榮一はお梅の下品な態度を見て、

『フン』と鼻で嘲つて、家を出た。鶴子を尋ねるのだ。

お梅は旦那が泣いているのを見て、大きな聲で笑つて、

『旦那さん、何をお泣きなはるので？ 馬鹿々々しい。榮一樣の仰る位いの事が何だす。私なぞ爪の汚とも思つて居りやしまへんわ。旦那それじやけんいつも云つて居るでへんか？ 早やう別宮さんを榮一樣に世話してあげなはれつて。別宮さんを側へ付けて置いたら、旦那に一言も仰りはしませんわ。旦那は妾の云ふとうりなさらずに、自分にお困りなさるのですわ——』

と特意になつて論ずるやら、慰めるやらしていた。

父の喜一は唯過去を追想して默つて居る。折々、便所の方の椽側から、お龜の幽靈でも出て來ぬかと見ていた。榮一の顏がお龜の顏に見えて目の先にちらついたからである。

十七

家を出て久し振りに鶴子を訪れた。鶴子は榮一の顏の窶れたのに驚いた。原因を尋ねたが榮一は答へ無かつた。榮一は初めから熱烈なキッスでもせられたなら答へもしたのであらうが、何だか行儀作法の眞似をして居る樣に思つたから云はなかつた。またその瞬間に鶴子は自分に根本の同情を與へ得る女では無い。鶴子は近世的男性と云ふものを知るまい、たゞ田舎者だから、と考へたので、沈默して居た。

榮一は戀人と云ふ者も無意味であると云ふ氣がした。矛盾した世界に何の戀の甘味があると疑つた。然し戀は疑つて益甘味のあるものである。憂ひの戀！ 之程奇しい物は世界に無い。

榮一があまり沈默して居るので鶴子は熱して來た。そしてその手を取つた。然し榮一は戀の興を湧かさうとはしなかつた。今日は戀を嘲笑に來たのだと云ふ氣がして悲痛な情が燃えた。手を握られて大麻山の森の中を思ひ出す……あの天狗が居ると云はれて居る森の中の三日間を。三抱へもある杉の森の中の小さい祠の中で、三日斷食して默想した事……夜更けて杉の梢に風が強く吹き付け、十日頃の青い月が自分の坐つて居る祠堂の中

を覗き込と共瞬間、眼をハッと開いて、淋しい歡喜に充され乍ら月を見上げる時の感想を思ひ起す。その時は世界に戀など云ふ「我」の這入つた劇は演じたく無いと思つた事を回想する。「然し」と考へて人間の濁つた音聲の中にも鶴子の調子の高い會話の中にもあの高い大きな松の杉を渡る風の音の神秘が通つて居ると考へると、頭を傾けて鶴子の顏を見上げたい。鶴子の顏を見上げると眉の間の輝いて居るのは何の爲めであらう。がまた鶴子を抱くのは何だか小供に戀する樣な氣もせぬではない。『あの大麻山の森を渡る嵐を一言葉で靜めた時、靑く光る月を一寸と手を擧げて光を消した、その時、それこそ打寬ろいで戀に結び付いたのではあるまいか？ 空と空の世の中から無を探し出した時それが眞の喜びであるまいか？』と思つたりすると馬鹿らしくて鶴子の側に居られぬ。

榮一は鶴子を抱いて目を閉じた。そして鶴子が立ち所に消えて自分の幻の中に現はれて來るなら之が眞の戀だと考へた。然し幻の中に鶴子も現はれて來無い。たゞ鶴子のつけて居る香水の薫りが匂ふ計りだ。

榮一は想ひから想ひに移つて、全身の血脈が皆幻であるかと疑つた。そしてまた、現實を我腦の夢に、客觀を風で我幻に變へて終ふ積りだと心をきめた。客觀は最早や實在で無い――波に取つては。實在即ち幻で、幻即實在である。客觀は最早や實在で無い。世界は凡そ狂つて終つた。榮一は自分の唇を鶴子に近けて、

『鶴子樣。世界の捻が少し狂つて居るよ。北極星が二十三度半傾き過ぎて居るのですよ……』と低い哀れな聲で云つた。鶴子は何の意味だか充分解ら無かつたので唯默つて居た。が鶴子は榮一が人々に亦自分に對する柔和な親切な愛と同情に云ふに云へぬ氣高い秀でた、普通の基督敎信者より勝れた德を見出して居るので、多分また何か他人の爲めに苦しんで居るのであらうと思つて居た。鶴子はキッスをした。そして憂ひを帶びた低い聲で、

『どうなしたの？』と伏目になつて尋ねた。

『鶴子樣はいつ廣島へ行らつしやるの？』

『私？』と鶴子は顏を斜にして、

『わたしね、廣島へ行きたくないわ――』

『どうしたの？』

『なぜ、あなた、夫では、此頃そんなに悲しそうにして居らしやるの？ 妾はあなたを捨てゝ廣島へ行くのが何だか心元ない

の……』
『私の傍に居てくださる，それじや？　私も鶴子様に別れるのは嫌ひよ。私は鶴子様が廣島へ行くと云つても遣るまい？　鶴子様。私はあなたが行くと云つても遣りませぬよ。』
『ア、私も行きませぬよ。かうして死ぬまで居りましようか？……そらそうと此間は庭を掃除して下さつて、有難う。』
『い〻え。』
『その前は風呂へ水を入れて貰つたりお使に行つて貰つてね。私あなたに、ほんとに、濟みませんね。』
『なぜ？　私、貴女の爲めなら生命でも捨てますよ。』
『それでも妾は、妾の可愛い人を使ひたく無いもの。ね、貴君は私の可愛い人よ。い〻。貴君と私との仲は神様でも切れ無いのよ……』
『それはさうと鶴子様。私はもう近い中にお父様の内を出る積りなのですよ——』と云つたが、鶴子は驚いて、
『どしたの？』
『實はね。怒つちやいきませぬよ。皆云つてしまふから。今またお父様と喧嘩して來たの——』
『喧嘩を？　妾が喧嘩をしなさるなと云ふのに。』鶴子は少し曇つた。
『鶴子様。そう下へ向か無くても善いでしよう。私が理由を話するまで聞いて下さいな。私とお父様との關係は毎度云つた通りでしよう。もうね鶴子様……どうしても近い中には破裂するのですよ。』
『どうしたの？　破裂つてどうしたの？』
『私はもう相續權を取られて了つたの。』
『誰方に？』
『お父様は益則に讓るのですつて。』
『非道いのねお父様も。』
『ね、鶴子様。東京に居つては學資は充分送つて呉れず、歸つて來では、繼子扱ひにせられるつて、ね。』
『眞にね、同情致しますよ。』
『僕は何にも準禁治産者にせられるのはつらくもありませんがね。お父様の僕に爲て居らしやる通り、社會に爲て居らしやるのが悲しくて堪らないのですの。』
『……お父様はそんなに貴君がおいやなの——それじやおうちに居れませんか？』
『此儘居れば父に殺されるより外は無いと思ふのですよ。』

『殺される？　あなたが殺されたらどうしましようね？――それであなたはどうなさるの？』
『近い中に私も何處かへ行うと思ふのですよ。』
『何處へ？』
『さ。あなたのいらしやる處へ附いて行きましようか？』
『廣島へ？　それでは？　そしてなにをなさるの？』
『何でも善いですよ。小僧でも、丁稚でも百姓でも……。』
『百姓？　わたし百姓嫌ひ！』
『エ、貴孃（あなた）。百姓嫌ひ、フム、あなた百姓嫌ひ？　あなたは普通の女學生と違つた處があると思つて居たらあなたも矢張り普通の女學生と同じね……百姓程神聖な者がありますものか？トルストイのシンプル・ライフ主義には眞理が多いですよ。』
『いや、ちよつと、云つて見たのですよ。そんなに眞向ふから攻撃していらしやら無くとも善いでしよう。アモスなども元は百姓ですね。』と云ひ解けしたが榮一は矢張り自分の立場を辨解しようと、
『實際僕は百姓が戀しくて戀しくて堪らぬのですが、安氣な百姓計りが人生じやないと思つて居るから今は小學校など教へて居るのですよ。』
『ほんとに百姓程神聖な生涯はありますまいね。』と今度は鶴子も百姓主義に贊同を表したが、下からお婆樣の聲が、懸つて降りて行かねばならぬようになつた。
榮一は窓を開いて色々と考へた。もう十五日に近い月が庭を照らして柿の葉、蜜柑の葉、桃の葉が光る。近所は極く靜かで何處の家にも光は見えぬ。月の走るのが早い。門口の戸を開いた音がする、鶴子が何處かへ使に行くらしい。榮一はひとり物思ひに沈んだ……
明治學院を捨てた動機と今の無意味な生活を考へ較べると、情なくなる。そして、人生の凋落を痛切に感じる。
が、一方では今度志を立てゝ化學か物理學を研究して大發明でもすれば人生もそう無意味でもあるまいし學校も無意味であるまい。社會改良とか宗教とか云ふ様な空想な事を止めて、一つ工科大學へでも這入（はい）つて大發明でもやれと云ふ聲が心の中に起る。……月が雲から現れた。庭の隅々までよく見える。此實證主義も一種の嘲笑を退けた。此人間が機械の様に働いて機械を發明するのも無意味だ。人間は遊ぶべきだ。科學と云ひ宗教と云ひ道德と云ひ藝術と云ひ人生と云ふのは皆大きな遊び道具だ！藝術は大きな衣服を製造して遊ぶのだし、道德は小さい人

形を、そして宗教は大きな人間を作らへて之も矢張り遊ぶのだ。人生は一種の狂言だ。遊ぶのが人間で、よう遊ばぬのは畜生だ。

現代の人間は遊び方が眞違つて居る。遊びかたを人間に敎へる必要がある。父を諫めるのも、遊び方が眞違つて居るからだ。と反問して自己の今迄取つて來た遊び事の樣な哲學研究を辯護した。

鶴子は思つたより早く歸つて來た。鶴子が二階へ上つて來ても榮一は知らぬ顏して考へて居た。

『あなた、もうあまり考へないのが、およろしいですよ。然し困りましたね。でも神樣は人間がどうして善いか皆知つて居らしやりますわ……』と鶴子はすぐ云つた。

『神樣に皆お任せなさいな。』から云つても默つて居る。鶴子は先ツき自分が百姓が嫌ひだと云つたのを怒つて居るのかと思へて。

『一寸と、あなた御免なさいよ。妾があなたに反對したのが惡かつたのですか。それで御怒りになつたのなら御許しなしてよ。ほんとに、あやまりますから。』と詫びた。

別に榮一は怒つて居るのでは無いが、十分計り一言も言葉を發せ無かつた。鶴子も知らぬ顏して窓の欄干によつて、沈默して居る。然しまた何か泣いて居る樣であつた。鶴子の泣くのを氣にも止めず榮一は胸の中で獨り泣いてみた。が、榮一は少したつて鶴子とよくシエレーの詩でも一緒に讀うかなど云ひ出した。一時頃まで鶴子が『面白かつた』と云ふまで一緒にシエレーを讀んだ。その夜榮一は强られて鶴子の宅で泊つた。鶴子は自分の室に榮一の床を延べたが、鶴子が床を延べる間にシエレーの話から東京の社會主義黨員の活動を話した。鶴子は『愉快ですね』と繰返して居た。

鶴子は机によつて聖書を一章讀んで、下へ降りて行つて寢た。

榮一は床へ這入つたが、夢計りみて寢られなかつた。

法廷に於ける森戸氏の印象

陰晴の氣に充つ法廷の石段は、今日に限つてはれ〳〵した心地で登つて行つた。『その生命を得るものは之を失ひ、我ために生命を失ふものは之を得べし』の一句も久かたぶりに思ひ出した。

問題の人、森戸氏は幾多の眞理の友垣と、辯護士食堂で、午餐の卓についておる。胡麻鹽頭に威容を增した安部磯雄氏、東大の花役者吉野作造氏、態々京都から助太刀のために上京せる佐々木氏、それに、相被告の大内君、勞働問題で謳はれた高野博士の一團は森戸氏を圍んでスプーンを使つておる。佐々木氏といひ、高野氏といひ、安部氏といひ、學界での一流で、そして俠氣を以て鳴つておる御揃ひである。そこで再び義人なるを以つて、その義人を援くるものは、義人の報賞を受くるの眞理に首肯したのであつた。

深き緑の森きの庭に、學問は獨立させやう、思想に制肘を受けまいと強き決心の下に立てる勇士は、勇ましくもあれば、もしくもある。森戸君は微笑を洩らしてパンを千切つておる。憂ひの雲も漂うて居るとは見えぬほど、落着き拂つて、諸博士と應酬しておる。

予も、原嘉道博士、花井卓藏博士との中央で食餉を取つておる。原サンの曰く『今回は我々はもうホンの陪席さ、その筋の專門家によつて、我々の云はんと欲する以上のことは述べられるから、本來から云へば佐々木氏、安部氏、吉野氏なぞのやうに思想に諒解ある先達が判事でなくてはならぬのだがナー』

大内氏は輕快に、調子よく櫛田氏等と語を交はしておるが、森戸君は矢つ張り、微笑の沈默を續けておる。お隣りの食卓では、森戸夫人、大内夫人がフォークを手にしておる。兩被告の視線は一たびも夫思ふ女性の傍側には離れなかつた。午餐がすむと、恩師の身邊に要座せる經濟學部の學生連が正服、正帽で這入つてくる。高野氏や、花井氏が耳語すると森戸氏はニッと油氣のある微笑を洩らす。

予はその横顔を眺めて『まだ收穫の秋は來ない年輩だ、高が一、顧盼とはなるまいが……』と明るい眞理への共鳴と、暗らい同情とが混線する、この暗らい同情を拂拭し得ぬ凡人の悲しさ。しかも予は自らの凡人たるの最を悲むより、眞理への共鳴が出來て、堂々の陣で進まんとする佐々木氏、安部氏が羨ましかつた。

森戸氏は年齡から云へば、大學教授中での最年少者だ、しかし、學徒としての落着振りと、その勇氣に滿てる沈默振りは決して一夜漬ではないと共に、「經濟學研究」に現れたる論文と對比して一種深刻の感を與へた。深みある。腹のある學徒たるの印象を與へた。



自分に云ひ聞かせる言葉

有島武郎

○通人

通人を以て人も許し自分も任じてゐる人がある。一體通人とは自分がたづさはつてゐる道にかけては、完全な理解を有つてゐる人の事だ。大通と人の噂さする人々の中には本當にかうした種類の人がゐるやうだ。その人に取つては研究といふもの丶必要は殘されてゐない。その人が一目見さへすれば、即座に物の眞相、即ち善惡、良否が誤りなく分つてしまう筈なのだ。さういふ人は偉い人にちがひない。

然し私一箇の趣味から云ふと、普通受け取られてゐる意味からの通人なるものには如何しても好意を持つ事が出來ない。例へばこ丶に着道樂の所謂通人があるとする。その人には衣服について一定の趣味があつて、誰れが何んと云つても、自分のその趣味が第一のものだと心得てゐる。而して誰れの前にでも自分の趣味で出來た服裝をして出て、何んの憚る所もないのみか、衣服についてはそれ以上精練された趣味はないと確信してゐる。全く無趣味な人に比べて見ると、それは確かに定見もあり、勇氣もある心構へであり、行爲であると云はなければならない譯だが、私にはそこに何か物足らないものが殘されてゐる心持ちがする。

何がそんな心持ちを起させるのかと思つて見ると、第一その人は自分の趣味が最上のものだと心得てゐる所に物足らなさを感じさせるし、第二自分の趣味を誇示し押賣しようとする所に反感を催させるのではあるまいかと私は思ふ。第

一の點ではその人の趣味性に進歩の餘地が閉されてゐる。實際その人の服裝が變りつゝあるにしても、その人自身はその變化を意識しないで、自分の趣味は一定不變最高のものと思ひ入つてゐる。それ故外部から見てその人の趣味がどれ程變化してあらうとも、その人自身に取つてはその變化が全く機械的であつて、有機的な交渉を有つてゐない。進歩は變化とは違つたものだ。所謂通人と云はれる人にあつては、變化が進歩と云ふ道筋を通つて現はれて來ないで、必す停滯と云ふ形で現はれる結果になる。何故と云へば、自分の趣味性が最高だと思ひ込んでゐるその人に取つては、進歩と云ふ意識なり衝動なりが全然働いてゐないからだ。さう云ふ物事の表はれはそれに接する人に如何にも心許ない思ひを起させる。それだけで濟めば先づ仔細はない。それはその人の一種の癖だとして傍人は看過してゐる事が出來る。けれども所謂通人は自分の最上優越感を無批判に抱いてゐるだけでは滿足しないで、惡い事にはこれを他人に押賣りしようとするものだ。それは最上優越感が當然させねばおかぬ事ではあるが、かうなると事はその人一人の問題ではなくなつて來る。若しその人の趣味の押賣りが私に向けられた場合を想像すると、私は平氣ではゐられなくなつて來る。惡意を持たないまでも、如何しても好意を持ち得ないと云ふ心持ちに支配されてしまう。

私は今まで世の所謂通人といふものに對して、かう云ふ心持ちを捨て去る事が出來ないでゐた。女と遊ぶといふ事に一種の型を作つて、他人眼にはその型が強ち最上のものとも思へぬのに、平氣でそれを珍重し、遇ふ人毎に自分の態度を誇示して、上向加減に顎を撫でるといふやうな人には、私は云ひ知れぬ不快をすら感ずるのだ。進歩とか發達とか云ふ大事なものを取り落しておきながら、無反省にもその境界に大胡座をかいて、己れに見ならへといふ人があつたら、誰れでも不快を感ぜずにはゐられないと私は思ふのだが。

かうした通人型の人は色道とか、酒道とか、音曲とか、骨董いぢりとか、碁將棋とかにあるものだとばかり私は思つて來た。而して實際普通通人と云へば先づさうした種類の事柄に對して、自分免許を振廻はす人を指して呼んだ稱呼であるだらう。所がこの頃私は、上に掲げたやうな道にかけて何等の自信もない私は、動もすると立派な通人になつてゐる

はしないかと云ふ事を考へるやうになつた。氣がついて見ると通人はそこにもここにもゐる。殊に私がなり度くないと思ふのは、道德上、信仰上の通人だ。

ある人の行爲が道德上の問題を惹き起す。さうするとその周圍にはきつと道德上の通人が寄り集つて、銘々の立場からその人の行爲を彼是れと批議する。問題にされた人の遺傳なり、敎養なり、境遇なりが、その通人達のどれもと同じであるかのやうにその人達は天から決めてかゝる。自分ならあの場合あゝはしなかつた。然るにあの人はさういふ事をした。だからあの人のした事は道德的に罪だ。さう云ふ論法が容赦なくさし向けられる。成程そんな場合にも表面的には境遇、敎養その他の事が一わたり考へられないではない。然し道德上の通人達に云はせると、それは一應考へては見たが、結局自分の境遇なり敎養なりとさして違つてはゐない事になるのだ。それであるのに、自分はそんな道德上の失體はしないのにその人はやつてゐる。怪しからん。と簡單に結論してしまうのだ。新聞の三面記事に一度眼をとほすと、さういふ實例は倦きる程毎日現はれて出て來る。『あの人は不道德な生活をしてゐはしないか』、さう頭から他人に質問するやうな人もある。さう云ふ事を云ふ時、質問した當人は、自分の行爲が最も、と云ふ事が出來なければ、より道德的であるといふ物凄ましい大自覺を持つてゐるのだ。而してその自覺を他人の道德的行爲にまで押賣りをしようとしてゐるのだ。自分の事を棚に上げてゐるかも知れないが、私は屢かういつた型の道德家に出遇つて、好意の持てない心苦しさを感ずる。その心苦しさには何所かで出喰はしたやうだとは思ひながら、取りとめもなかつたが、近頃になつて、それがあの所謂通人なるものから受ける心苦しさと同じであるのをはつきり知る事が出來るやうになつた。私が殊にその事を思はせられたのは松井須磨子の自殺が世に傳へられた時だつた。如何に多くの道德上の通人が多士儕々と云ふ勢で輩出した事よ。自分一箇の始末だけで、人は大抵手一杯であらうと思はれるのに、途徹もない大鐵槌であの一人の女性は四方八方から平べつたくなる程たゝきつぶされてしまつた。而かも須磨子に一面の識もなく、その性格についても知る所のない人々が、少しも躊躇なく自由自在に鐵槌を振舞はして、うつかりしてゐる傍觀者にまで遠慮なく側杖

を喰らはした。それは考へて見ると全く私に通人の意氣を思はせる。

『あれは未信者の方（かた）ですから』………これは實際信仰的通人に對する好意の持てなさ加減を覿面に表白した言葉だ。それは神に對する信仰であらうとも、佛に對する信仰であらうとも、皇室に對する信仰であらうとも、國家に對する信仰であらうとも、凡て同じ事だ。自分と同じ信仰を持ち得ないものは、人間ではない、賴みにはならぬ、地獄に行くべきみじめな魂だ。と口に出さないまでも、心の奧底の方で思ふのが彼等の癖だ。だから罪人の集りであるべき教會には罪人は一人もゐないで義人ばかりがゐる。罪人が出ればその罪人は容赦なく退會させられるからだ。かうした通人が澤山ゐればゐる程その團體の基礎は強固になるのかも知れないけれども、而してそれは結構な事なのかも知れないけれども、私には感情として如何も好意が持てない。

吉野博士が何所かで云つて、私は味のある言葉だと思つたが、『大事な事はいゝと思ひこむ事ではない。いゝものでありたいと思ふ事だ』。通人になる事から免れ得る道はたゞこの一つの外にはないやうだ。考へて見ると碁將棋や遊道の通人は實に罪がない。私は如何かしてもつと罪の深い通人にはなりたくない者だと思ふ。通人がゐないと如何なる團體の基礎も強固であり得ないかも知れないが、假りに通人のゐない生活を考へて見るのも一興ではあるまいか。少くとも通人のゐない社會には嘸好意が持てる事だらうと私は考へる。そこでは先づ何よりも銘々が銘々の持ち場に立つて、自分の仕事を後生大事と心懸ける。押賣りはしない。若し他人の事に口を入れる事でも起つたら、その人の行爲よりもその心の有樣を自分のものにして考へて見る。自分の方に最上優越感がないのだから、ぴちり／＼と自分の捉木にあてはめて、神のやうに他人を忖度する譯には行かない。他人に自分以上の事の出來る人があつたら、心から感心してしまう。感心した以上はその人を稽古臺にして自分を煉へ上げる。かうなると私には十分好意が持てさうだ。

けれども通人に云はせるとそんな事をしてゐては、國家に權威がなくなり、社會に秩序がなくなり、道德に規範がなくなり、學問に統一がなくなり、宗教に信仰の對象がなくなり、藝術に批評の餘地がなくなり、人間に勇猛性がなくな

つて、生活は根柢的に覆される結果に終るだらう。さう云はれても私に取つて、矢張りかうした主張に好意を持てないのは同じ事だ。

○上辷り

近頃シベリヤに行つて歸つて來た人が私に物語つて云ふには、向うで退屈まぎれに活動寫眞館にでも這入つて見ると、この頃のシベリヤの事とて、見るも慘めな服裝をした無學らしく見える觀衆が多數を占めてゐて、映畫はまた殘酷とか卑猥とか危險とか、思はず顏を背け聲を放つやうな種類のものばかりであるにもかゝはらず、見物席は靜肅を極めて、こちらは吹き出す程おかしい時でも、笑聲一つ響かせず、見るに見兼ねる卑猥な場面にも妙な懸聲などする者もないのは、つくぐ不思議に思ふ程だとの事だつた。私はそれを聞くと又思ひ合せる事がある。ケレンスキー內閣の末期に、その內閣が王朝內閣と同じ外交方針を取つてゐるのが怪しからぬと云ふので、熱狂した群集が大臣を馘れと犇いて內閣に押寄せた事があつたさうだ。時の外務大臣はその騷擾を見ると自ら二階のバルコニーに姿を現はした。群集はその有樣に益熱狂してその白髮頭を切つて渡せとわめき立てゝ、制止する餘地などはあらうとも見えなかつた。外務大臣は然しその叫喚の中にも僅かに發言の隙を見出してから云つたさうだ、『諸君にして若し否應なしに自分の首を要求すると云ふのなら已むを得ないから自分はそれに從はう。然しその前に一つの事に耳を傾けてはくれまいか。外交は露西亞の外交であつて、ロマノフ家の外交ではない。露國は交戰の當初から英佛その他の聯合國と步調を共にする事を盟つた。縱令ロマノフ家が覆つても、それは露國が覆つたのではない。露國が存立する以上は如何なる危險の前に立たうとも國の義を曲げる事は出來ない。諸君は背信の國として露國の名が歷史の上に殘るのを選むか、それとも重義の國として青史を照すのを望まないか。』この間かの何物をも燒し盡さずにはおかぬやうに見えた群集は段々鳴りを鎭めて、老人の言葉に耳を傾け、演舌が終ると一變した態度になつて、その外務大臣に好意ある挨拶を送つて、無事にその場を解散

したさうだ。これも當時その場にゐ合はした日本の外交官から私が親しく聞いた所だ。その活動寫の觀衆が强い刺戟に慣れてゐて、日本の青年を驚かした映畫の如きは家常茶飯事に過ぎないのだと云へばそれまでだ。又その外務大臣は巧妙な詭辯家で、激昂した群集は容易に詐かれ易い鈍頭の集團に過ぎないといへばそれまでだ。

私の素朴さがさうさせるかは知らないけれども、私にはこの二つの事實はもつと深い意味を有つものらしく考へられる。露國民には實に一面かうした冷靜なものが潜んでゐるのではないか。であればこそ人民は何百年といふ間、他國にはあり得ないやうな專制と强壓の下に忍從する事を敢てしたのだ。數知れぬ程の志士仁人が民衆の爲めに蹶起して、暴戻な國法の下に、あらん限りの辛酸を嘗めたにも係らず、民衆は惰眠でも貪つてゐるかの如くに、いつまでも重い羈絆に呻きながら、彼等の辛酸を對岸の火災とでも思つてゐるやうに見えてゐた。その無感覺とも思はるべき忍耐力は傍眼にももどかしい程のものだ。大概の志士仁人なら呆れてしまつたであらう。然し志士仁人も露人に通有な忍耐力の持主であつたに違ひない。何時の時代にも民衆の爲めの殉教者は交る〲現はれ出た。而してその强い氣魄と濃い血液とが、民衆の體內に充ちるまで傳へ込まれた頃になつて、民衆は徐ろに膝を立てた。

一旦膝を立てた以上は、一旦かうと理屈が分つた以上は、民衆は何物も遂に壓倒する事の出來ない力となつて現はれた。最近の露國の革命はかくの如くして地球の表面に何人も逆賭する事の出來なかつた奇蹟を演じ出したのではなかつたらうか。

二年前にはデモクラシーを民主主義と譯する事さへ憚られた。今日は國會議員の中で最も暗愚な一人を捕へて見ても、恐らくはモットーの如くにこの語を云ひふらすだらう。數年前までは國家に取つて火よりも危險と思はれてゐたマルクスは動もすれば資本家にすら提唱されるやうになつた。今日クロポトキンは二人の大學助教授の職を奪つて、國憲紊亂の汚名を蒙らせようとしてゐる。來年には彼れは恐らく中學校の敎壇から呼びかけられるだらう。專門家でない私はかう云ふ問題については全く知る所がないと云つてゐゝ位正確な智識に乏しいのを自分で覺悟してゐるが、この種の

眼のやうに迅速な氣の利いた變化をたゞ時世の加減とばかりは思つてゐられない不安を感ずるものだ。私は社會主義の思想家實行家が、日本でも長い間隱約の中に主義の宣傳に努力した、その努力を無視しようとするものではない。然し圍外の時勢の變化につれて何の苦もなくから變つて行く日本人の明敏な頭腦を私は讃美していゝのか、恥づべきなのか。恐らくかゝる問題の宣傳に從事した主義者達は餘りのあつけなさに背負投げを喰つたやうに思つてゐるのではあるまいか。

自分の畑に返つて私のたづさはつてゐる文藝の事柄に關して考へて見ても、一つの潮流から他の潮流への推移は餘りに唐突で、不用意で、簡單だ。ユーゴー一人に齒向ふだけのロマンテイストも出ない中に、世の中は自然主義の時代になつてしまつた。フローベル一人に拮抗するナチュラリストも出ない中に、人道主義の時世が來た。トルストイ一人を向うに廻すヒューマニストも出ない中に、ネオロマンティシズムが提唱されようとしてゐる。

一體私達の眞に求めるものは何なのだらう。海外に於ける生活若くは思想の稀薄化と云ふ事なのか。それならある程度まで私達は成功してゐると云はなければならぬ。然しそれが何事に役立つのだらう。濃い水よりも薄い血の方が少しはましだからと云ふのか。濃い水が血の値を有たないなら、私達は濃い血を要求しなければならないのではないか。この場合梃の下の力持ちになる程の事を厭つてはゐられない。幾年かゝつてもいゝから本物を誤たず摑みたいものだと私は願ふ。拾圓と押してあつても似非の金貨は摑みたくないものだ。

その爲めには私達は割引きの購入を愼まなければならぬ。必要なだけの代價を立派に拂つて商標の確かな商品を買ひ取らなければならぬ。電話で註文しないで現物を調べて見なければならぬ。

それは自ら社會の要求といふよりも個性の督促がさせる事だ。社會の要求は往々にして間に合はせもので滿足する。本當の個性の督促はもつと深い處に根ざしを持つ事が出來る筈だ。例へば諸國は——例を前に戻すと——その社會の狀態から云ふならば、もつと早目にもつと皮相な改革をやつてゐたら——國際的關係から云つても、國内の平和から云つ

ても、都合がよかつたかも知れない。然し露國の社會を形成してゐる個性の眞の要求から云ふと、さう云ふ皮相な改革は恐らく益をなすよりも害を醸した事であらう。今まであすこから現はれ出た尊い思想と實行とは——世界中を霑してなほ餘りあるやうなそれは尊さだ——恐らくあの地には哺まれないでしまつたらう。それをなし遂げさせたものは實にあすこの人々の上辷りのしない、落付いた、深酷な箇性が然らしめたと云はなければならぬ。深い所から出た個性の督促に銘々が忠實に從ふ事によつてのみ、本當の生命は生れ出て來る。

　爲政者は外境の如何にばかりくよくよしてゐずに、大膽に、正直に、頑強にその思ふ所を實行して貰ひたいものだ。自信を以て壓迫すべきものは顧慮する所なく壓迫するがいゝ。如何なる方面にまれ權力を使用し得ると感ずるものは躊躇なくその權力の使用を徹底させるがいゝ。而してその下に個性の思想なり實行なりが萎縮してしまつたら、日本の人間は壓迫なく權力の使用なくとも、成長の出來る質の人間ではないのだ。

　兎にも角にも上辷りの境界から私達は去らなければならぬ。私はこの頃になつてその事を感ずる事が深くなり出した。自分を警めるためにもこれだけの事を書き留めておく必要がある。私は意氣地なしで、かゝる言葉を云ふに値しない人間だけれども、必要は私をそこまで連れて行かないとも限らない。恐ろしいその期待が同時に願はしい事だ。

（一九二〇・二月十五日）



田園雜記

正宗白鳥

この記憶に間違ひはないと思ふ。何年か前に中澤臨川氏はある雑誌で、今の日本の青年は維新當時の青年や、支那現在の青年のやうに、ある一つの目的に向つて全力を注いで奮鬪し得られるやうな境遇に置かれてゐないことを歎じてゐた。死に身になつて働けるやうな問題がわれ〳〵の目の前に迫つてゐないことを歎じてゐた。

私は舊臘の大正日日新聞へ連載された氏の情熱の籠つた論文を興味をもつて讀みながら、ふと以前の氏の言葉を思出した。世相は何時の間にか變つて、全力を盡して戰ふだけの價値のある問題が氏等の目の前に現はれて來たのである。尊王攘夷か開國佐幕かといふ維新間際の日本の社會へ現はれたやうな力強い問題が湧いて出て敎養ある人々は云ふまでもなく、新聞の讀めるくらゐな人なら、誰れでも多少それについて意見を述べるやうになつた。

私も月々の雑誌にいやと云ふほどに掲げられてゐる知名の人々の議論を努めて讀んでゐるのであるが、かういふ問題については少しも自分の魂が動かされない。死に身になつて主義のために戰つてゐる人々を羨ましく思ふばかりである。

資本家撲滅とか共産主義とかいふやうな大袈裟な事はさて置き、勞働神聖といふやうな呼聲が盛んになつたのにつき、自分と勞働について考へて見る。土に親しむことは尊いことにされてゐて、私も都會に住んでゐる間は、自分で野菜をつくつたり花卉を培養したりして大地に親んでゐたら、沈滯腐蝕してゐる自分の頭にも新生命が湧いて來るかも知れないと、をり〳〵空想してゐたのであつたが、田舍へ歸つて自由に望み通りに土に親しめる境遇に身を置いて見ると、菜園でも畑でも、家の前後

左右の空地でも勝手に使へるやうになつて見ると、氣無性になつて、裸足で鍬を持つて其方へ進んで行く氣にはなれなくなる。今度ばかりではない。何時だつてさうだ。少年の頃まだ東京を知らない時代に、胃病の治療のために毎日裏の畝を耕したことがあつたが、その時だつて不承々々に鍬を動かしてゐたので、一定の時間を辛うじて經過すると、サツサと泥足を洗つて机の側へ歸つたのであつた。そして、八犬傳とか弓張月とかいふやうな小說あるひは新着の雜誌などを現を拔かして讀耽つた。田舍に生れて、しかも多少畝仕事をした經驗があつても、私はついに土に親しめないで一生を終るかも知れない。日に二時間くらゐの勞働なら誰れでも樂んでやれると、さういふ樂しい世界を招かうとして說いてゐる人もあるが、少くも私だけは一時間でも半時間でも勞働を樂めさうではない。

　この頃も毎日缺かさないで、あるひは山へ登り、あるひは濱邊を散步し、運動は怠らないでゐるが、鍬を持つのは大儀だ。丘の上から內海の島々を見渡して時を過すことはあつても、其處等の薪を集めて背負つて歸つて家の手助けをするやうな勞働的興味は全く起らない。

　私は皆んなが手足を使つて何かしら働いてゐるのを傍觀しながら、懷手してブラ／＼步いてゐる。そして、やがて日本も、自分は懷手してゐながら小作人から收獲の幾分を取上げて生活する地主が撲滅され、自分で勞働しない者は生存して行けなくなる時代が來るかも知れぬと夢のやうに考へてゐる。……人間の世にはあんな時代もありこんな時代もあると考へられたが、一つをもつて他よりも幸福な時代であらうとは私には考へられない。

　懷手して步いてゐるうち、時々通りがゝりの人から話しかけられることもあるし、村の老若男女が互ひに聲高に話合つてゐるのに耳を留めることもあるが、さういふ時にはこの地方の言語音調の舌たるい鈍重なのを厭はしく思ふやうになつた。上方言葉の優雅な調子を失つてゐながら、蠻的な強い調子も加はつてゐない。いつそ九州とか東北とかのやうな言葉だつたら際立つた特色があつて面白いのであらうが、その邊の地方語は何だか煮切らない中途半端な感じがする。

　地方々々の民謠といふものは興味のあるもので、子供の時分には漁夫唄などを面白いと思つて聞いたことがあつたが、この頃、小さい村の中にのみ蟄居してゐて音樂に餓えてゐるため、をり／＼耳に觸れる唄聲に耳を留めてゐると、一つとして記憶

に價するものに接しない。今私が書齋にしてゐる部屋と壁一つ隔てた隣家からは、いろ〳〵な唄を口すさんでゐる若い女の聲が屢々聞えて來るが、聲はいゝのに唄の文句は淺間しいほどに詰らない。「山王のお猿さん」だの「カチューシャ」だのを自己流に唄つてゐるのは、まだしも我慢出來るとして、

「芋々、人參々々、午蒡々々、ゴボゴンボ」と、繰返し〳〵、妙な節をつけて唄つてゐるのだから溜らない。帽子製造か何かの座業をしてゐて、疲勞をまぎらすために唄つてゐるのであらうが、あれでもその役に立つのであらうか。勞働文學とか勞働音樂とかについて私は考へた。

風の音、雀の囀り、鷄の聲、「芋々」の唄の外に、もつと私の全心が動かされて目を醒まさゝれるやうな唄を聞きたい。

私に取つては死の恐れを滅さない限りは、社會がどんな風にならうとも、眞正の幸福は得られないだらうと思はれる。寃罪で死刑に處せられようとも、正義のために犧牲的の死を遂げようとも、あるひは近親知友に看護され名醫の診察投藥を受けた果てに溫かい病床で眠るが如く死なうとも、死はつまり同じだらうと思つてゐる。

人間の煩惱、執着、愛と憎み、生と死、私は懷手して食を得ながら、十年二十年の昔と同じやうに今なほさういふ事を考へては心を暗くしてゐる。當今の喧しい問題でもさういふ人心の現はれとしてのみ私の興味を惹いてゐる。

勞働に興味をもたない私は、田舍にゐても相變らず雜誌を讀んだり古今の雜書を讀んで時を過ごすことが多い。少年時代に愛讀した「國民之友」の綴込みや、馬琴や種彥をも搜出して、昔の記憶を呼起しながら、讀んだりしてゐる。面白いことにはさういふ書籍を持つて來るために、祖先傳來の本箱を開けて見ると、その中には私の初期の愛讀書の馬琴などと並んでダーキンが入つてゐる。「種の起原」の原本と譯本、「航海日記」その他氏の著書の殆んど全部と、浩澣な氏の傳記さへも備へられてゐる。年少な末弟の愛讀書なのだ。私は二十餘年前の自分の心持と末弟の心持とを比較しながら、ダーキンと馬琴とを讀んでゐる。

私の興味はこの偉大なる生物學者の動植物の微細なる研究よりも、ダーキンその人の傳記の方に惹かれる。彼れの日常生活が彼れの子によつて微細に書かれてゐるのが面白い。それから彼れの航海日記を讀むと未開國の風土について懷かしみが覺え

られる。同じ書架にあつたリビングストンの「アフリカ探險」を讀むと、一層異郷の光景が明かに浮んで來る。將來さういふ土地の蠻人が、いろ〳〵な問題に惱されてゐる文明社會を征服するやうになるのぢやないかと思はれたりする。この「探險記」を讀んで見ても、アフリカ人は自分を不幸とは思つてゐない。強烈なる日光の下で、人類墮落以前の生々した生を樂んでゐる彼等に對して、何のための敎化ぞと思はれる。

二十年前の古い「新小說」を讀んだ。硯友社末流の氣取つた小說二三篇の外に、嵯峨の舍主人の「巨漢」といふ飜譯が入つてゐた。アンリーワレッスといふ、今まで聞いたことのない作家の短篇で、譯文も巧みではないが、私の嗜好から云へば、近年これほどの傑れた作品は讀んだことがないと云つていゝ。敎養のある巨漢がふと旅廻りの女藝人に魅せられて、つひに旅から旅を流浪するといふ筋で、極めて自然に描かれながら、骨を抉られるやうなところがある。「卷を掩うて浩歎する」といふ氣持を久振りに經驗させられた。一生女のために少しも虐げられた覺えのない人はこの私を哂へと、巨漢たる主人公が涙を含んで言放つた言葉は、「罪なき者この女を打て」と云つた基督の言葉よりも一層つよく私の胸に響いた。それほどに傑れた作なのである。小說もここまで行けば足れりと私は思つた。

歲を取るにつれて西鶴が面白くなる。「置土產」と「萬の文反古」を私はまた繰返して讀んだ。……私はまだかういふ世相を西鶴のやうに輕く靜かに見過す譯には行かないが。

新年の雜誌の小說も大分讀んだ。谷崎精二氏の「別宴」が今も思出される。作者の狙どころと、私があれを讀んだ時の感じ方とは違ふだらうけれど。（一月五日）



冬空

江口渙

私は今日も軀の工合が好くないので、午後になつても引き續き床を敷き放しにして、横になつてゐた。

外には昨夜から吹き荒んでゐる寒風が、いよいよ強く吹き募つて行くらしく、何か物を引き裂きでもするやうな、鋭い音が頻りに聞える。緣側の硝子戸が、がたがたと不氣味な音を立てゐる。ほうぼうの屋根に殘つてゐる雪が吹き拂はれ、吹き煽られるためか、硝子戸の外には、細な白いものが、一面砂煙のやうに躍つてゐる。その中に、時々紙屑の切れつ端らしいものさへ見える。向ふ側の屋根の彼方に遠くひろがつてゐる空は、透き通るほどに晴れてゐるが、隅から隅まで沁み込んでゐる寒さのために、如何にも鋭く光つてゐる。今年になつて今日が一番の寒さらしい。

私は枕頭の火鉢にかけた鐵瓶の靜かにたぎるのを聞きながら、手あたり次第にいろいろな書物を取つては、讀みあさつた。此間芥川のところから借りて來たローランの The People's Theater の拾ひ讀みをしたり、クロポトキンの「相互扶助論」をところどころ讀み返してみたり、それが飽るとアルチバーシエフの小説を讀んだりした。ローランの民衆劇場に對する意見の可なり徹底してゐるのには感心したが、クロポトキンの動物界に於ける相互扶助の實例に就いては、まだまだ材料の蒐め方が足りないやうな氣がした。以前讀んだ時。無條件で感心したものだが、どうも今度はもの足りない。アルチバーシエフの「勞働者セヰリオフ」は、部分部分に非常に好いところがある。讀んでゐて實際ぐんぐん胸にこたへるところがある。又、

人物のそれぞれの性格も、主人公を除いてゐては好く出てゐる。然し、そのロルがナイジングがどう見ても不十分だ。だから、何となく短編の集合と云ふ氣がする。でも眞劍な革命家であるところのこの主人公が、警官に追ひ詰められて、往來から劇場の廊下へ、廊下からボックスへ逃げ込んだ時、いよいよ生死の界に立つて一轉して怖る可きテロリストに變つた心持は、可なりにはつきりと出てゐる。かう云ふ怖しい絶望、大切な仕事が成し就けられない裡に、そのために自分の生命をむざむざと敵手に渡さなければならないと云ふ怖しい絶望に、魂を烈しく打ち碎かれながら、過去五十年の間、果して何人の露西亜革命家が、その尊い生命を拾したであらう。何千人、何萬人の人々が、自ら進んで尊い自己犧牲を行ひながら、然かも世間に知られず省みられず、落寞たる孤獨の裡に宜しくこの地上から消え去つたことであらう。

露西亜の革命家は、その仕事の必要上、無論、絶對に隱してゐる。殺される時、自分の事を後々に傳へ留めるやうな、何物をも殘してゐない。そして、唯、一塊の骨と肉との集合としてその屍體は行路病者以上の殘酷な取り扱ひを受けながら、殆ど犬猫同様に土の下に埋められて終ふのである。實際、どこで誰が殺されたか、どこで埋められたか、同志の者にさへ知られずに濟むのが多いらしい。それでも彼等は格別後悔をしなかつたらしい。何となれば豫めその覺悟でゐたからである。この點に於いて、新聞記者を見さへすれば無闇に名刺を配つたり、成可く人目に立つやうな服装をしたりする、現在の日本の自稱改造家、殊に普選運動指導者の大部分は、到底露西亜革命家の脚下へも及ばない。否、露西亜の革命家のやうな思ひ詰めた人々を必要としない點に於いて、民衆運動が賣名の手段に使はれたり野球か何かの對校試合と略同程度の興味をもつて取り扱はれたりする點に於いて、日本の社會はまだまだ天下太平である。

こんな事を取り止めもなく考へてゐると、突然上野の動物園の上あたりで、ぽんぽんと花火の裂ける音が聞えた。精養軒で開かれる普選大會の合圖らしい。花火の音は吹く寒風のために一と溜りもなく消されて終つた。後には、がたがたと硝子戸の鳴る音と、枕頭の鐵瓶のたぎる音とが、前と同じく妙なコントラスを示しながら、寂しく私の病床の周圍を包むだけだ。普選の叫びも今消え去つた花火の音と同じやうに、この世の峻烈な寒風に一と溜りもなく吹き飛ばされる時が來るかも知れない。若しも世の中の大地の底から湧き上る叫び聲が、今、硝子戸の

外で吹き荒ぶ寒風と同じ程度に吹き荒ぶやうな時が來たら、普選要求の叫び位は、結局、今消え去つた花火と同度の反響をしか呼ばないだらう。然し、果してそんな時が來るかどうか、私は知らない。

いやしくも社會生活改造の運動に從事するのなら、その人々はその社會が最後の到達すべき究極の理想、社會生活、社會組織の最高の標準を、十分はつきりと頭の中に描き出してゐなければ駄目だ。それなくして民衆を正しく指導する事が、どうして出來るか。

「私達は、私達の子は、私達の孫は、最後の最後に於いて、果して何處へ行くのだらう。」

若しも民衆にから訊ねられたら、現在の社會改造運動の自稱指導者達は、何と答へるつもりだらうか。それを思ふと私は何となく心細い氣持がする。

私は今、病軀を床の上に横へてゐる。掻卷の下から手を出して、書物の頁を繰るのさへたいぎである。私は一日も早く健康になりたい。健康になつて、私の仕事、文學と云ふ私の仕事を思ふまゝにどしどしやつて行きたい。かくして生命をこめた私の仕事が、私自身の生活を、又、私の住んでゐるこの世の中を、私が平生心に描いてゐる最高の標準の方へ、少しでも押し進める事に役立つ、私は苦しいこの世の中へ生れて來た事を少しも悔いない。

私は近く或るところでしだらない文藝講演の腹案を考へながら、床の中でこんな事を、一人とり止めもなく思ひ耽つた。

枕頭の鐵瓶のたぎる音は、いよいよ靜かに冴えて行く。外の寒風の聲にも押し潰されず、硝子戸の音にも壓せられず、更に一層愼しやかに澄み切つた聲を立てゐる。

私は障子にはめた硝子越しに、そして、縁側の硝子戸越しに向ふ側の屋根の彼方にひろがつてゐる凍つたやうな冬空を、床の中から長い間見詰めてゐた。花火はもうそれつきり聞えなかつた。（二月某日）



冠を被つた筆誅

三島章道

偶々、貴族と云ふ肩書を以つた家に生れた娘と、運轉手と云ふ職業を持つた男とが、戀に落ちて駈落ちをして、捕まつたとか捕まらぬとか云つて、都下の新聞が大騷ぎをしますと、今度は色々の雜誌が又騷ぎました。私はより若い人々と、今の世間の人々との差があまりに隔つてゐるのに只あつけにとられるよりは仕方がありません。人間が仕つてゐる人間社會には、又人間がやる自然の行爲は、時々見られる事であつて何も新聞や雜誌や人が大問題の如く騷ぐ程のものではありますまい。若し若い男女が駈落をしたと云ふやうな事を、さも大事件であるが如く、初號活字の題で、寫眞版を入れて新聞が報導しなければならぬとしたら、恐らく都下の新聞紙は毎日數十頁の大新聞を發行しても足りないでせう。そんなことは恐らく時々到る所にある事でせうから、それを新聞が騷いだのは、あれが貴族と云ふ所に好奇心を持つたからで、これは又一般の讀者がそれを望むからでせう。此處に新聞と一般讀者の淺薄さが見えすかれます。我々は貴族の女が戀に落ちて駈落ちをしようとも、それを見る事、近所の子守女が戀に落ちて駈落ちをしたのと同じ位に考へるやうに、もう人間を人間として見る時代だと思つて居たのです。貴族の女とか、子守女とか、そんな概念的な考へに囚はれず、一人の人間を、一人の赤裸々の人間として考へて見て、しかる後にその人間のした行爲について考へてみて、惡かつたら責めるのもいゝでせう。貴族の女だから惡い。子守女だからいゝと云ふ區別はない筈です。

今や我々は、一人の人間として、又よき國民として、又忠實なる人類の一員として、各自は各自の正しき人間として、眞に生くべき道を、お互ひに助け合つて行くべきです。上面な肩書に眼を晦まされたり、概念に囚はれて居る時代は、とうに過ぎた筈です。貴族だと云つて、別の人種だと思つたり、稀有がつたりされた時代は過ぎ去つたと若い人々は思つて居ました。所が今の新聞はどうでせう。新聞には一方にそんな事はかきながら一方に、つまらぬ好奇心に浮かされ、コンヴエンシヨンからも脱せられずに居るのです。

私はこの新聞の騷いだ駈落ち問題の眞相を知りませぬ。だから、一言のもとにいゝとも惡いとも輕々しくは云へません。眞面目なる戀愛を私は惡い事だと思へません。寧ろ美しい事だと私は思ひます。しかし不眞面目なる戀愛は私は非常に憎惡します。眞面目なる戀を讃美するだけ、それだけ、不眞面目なるそれを呪ふのです。

若し今度の駈落問題が、不眞面目なる戀であると假定したら、私は憎惡します。これは、やつた人が貴族の女だと云ふことで、その憎惡が増しも減りもしないのです。惡い事をした人を新聞が筆誅をすると云ふ事に私は贊成は出來ないものですが（何故なら、惡い、善い、と云ふ事はそう輕々しく外面の行動だけで、他人に解るものではありませんから）よし筆誅と云ふ事を假りに認めたとしても、行爲そのものが惡いからと

して筆誅するのはまだ解つて居ますが、『何々の罪に』と云ふ冠りを被つた筆誅は、もう時代後れてです。若し今度の事件が、人間の行爲として罪惡にあたるものであると假定して、それが故に、新聞が、初號活字や寫眞版を用ひて筆誅をしたのなら、まだよろしい。それなら今度、同じやうな行爲をした、子守女、女工、女按摩があつたら、同じやうな仕方によつて筆誅すべきです。

『デモクラシイの聲の盛んなる時、こんな不倫な人間を、貴族の中から出してはいけない』と云ふ人があります。これが一番中ぶらりんと云ふ奴です。本統に徹底したデモクラットなら、もう貴族とか新平民とか、そんな肩書に眼を晦まされず、一人の人間として行爲を、善いか惡いか見るべき筈です。『貴族の中から』なぞと云ふだけそれだけ、徹底したデモクラットになれて居ない證據です。それならよし又ものを概念で見、又單なる肩書で一種の團體とか種族とかを作り、他と區別すると云ふ事を假りに認めるとしても、その中から一人の惡い者を出したが爲に、その全體が崩れるやうな、ことではしかたがないではありませんか。或は又一人の女工が男をたらしたるが故に、女工全體が亡びたり、或は一人の巡査が泥棒をしたとて、巡査と云ふものを全廢しなければならないやうでは、隨分社會は常にいろ〳〵なものを全廢しなければならないぢやないかと云はれませう。もつとものゝ根本から考へてものを云つたらよささうなものです。こんな事をワイワイ世間で云ふのですから新聞が初號や寫眞版で騷ぐのも無理はありません。しかもそのワイワイが、淺薄な好奇心と嫉妬のワイワイの爲のワイワイであるだけそれだけ醜惡です。戀愛はそんなにワイワイ云ふ程珍らしくもあり、惡いものでせうか惡いか良いか、眞相を知らぬ者が輕々しく云へますか。改造々々と口にする人、改造々々と筆誅にする新聞から先づ改造して行つたらどんなものでせう。

三宅雪嶺は美人也

△△子

三宅雪嶺老を七八年前に見たときは、眼の光り方や、對話の砌りに何處かに劍があつたが、二月十四日米戸氏の辯論の爲め出延した博士の態度にはモウすつかり堂に入つたものだ。顏面には流るるがやうに福相が現れて來た、鐵地無紋の附物までが一種の聖賢味を帶びてをる。記者を捉へて「アナタは若くなりましたネー」との挨拶だつたが、僕だつて年は若くなる筈がなく、また生れ落つるときから年寄には生れて來なかつた。まだこれでも三十代の盡くるまでには三萬三千八百七十四時間かゝる。實のところ、博士は大局はよく見る人である、情誼も汲み分け、眞理にも透徹する頭を持つてゐるが、時によつてはアマリ昇ぎ上げられて政治家の批評なぞは案外なことを聞くこともあるが、人に頼らず、正道を堂々と歩き得る人だけに寧ろ愛嬌に見える所もある。六十一と云へばもうソロ〳〵引退の潮が來る時分だが、今日一見した博士はいよ〳〵眼力に超人間的の偉人相を發見した。伊藤公にせよ、桂公にせよチツトは偉人だつたらうが、雀百まで躍るで死の間際まで、政權慾、金權慾、色慾が去らなかつた。顏を見て直ぐ判る、目を見て直ぐわかる、人相見たやうなことを云ふやうだが、博士の眼には濁りがない、人相が純である。伊藤、桂は濁りがあつて不純だつた。ト云へば博士の提灯持ちをするやうだが、僕は自分の信念が動かなくては決して筆はとらぬのだ。また煽て上げておいて原稿でもかいて貰うなぞの野心もない。或時は博士に反對するかも知れぬ。しかし明治、大正の世ですこし頸をひねつて研究せなくてならぬ人があつたら元田永孚先生より、伊藤公より先づ三

宅氏を推さねばなるまい。僕が三四十分間その眼力を試したところによると、この人は藤樹の德と徂徠の學才を併せた人だと思つた。森戸君も三宅氏の如き有力な辯護人を得たことについては人靜まつた夜半泣いてをるだろう。尤も雪嶺氏のことだから森戸氏の爲めに起つた譯ではなく學問の獨立、思想の自由の爲めに毅然踏み出したものだろふが。頑冥の評ある平沼サンや鈴木次官も博士の辯護を聞かれたらいかに感じただろふか。早晩司法部は大改革の時が來るだろう。裁判官はもう少し常識があつて、検事なぞは、峻厳な消極的法理から人を牢にブチ込むことより人情の機微を察して、良民の一人も殖えることを計るのが、帝國發展の礎を固くするものだ。平沼君もすこし溫かい家庭味、ヤンワリした社會味に揉まれる必要がある。ソレから本職の辯護士諸者も、第何條の棚下ろしや、検事との睨み合は大抵にして、眞率に科學的法理、哲學的人性を研究するに努力しなくては世の大波からオイテキボリにされて仕舞ふ。司法官は貴重な人命財產を取扱ふから不成績の法學士のみを拾つて來るやうでは駄目だからドウしても俸給も普通高等官の二倍位はやらなくてはならぬ。三宅サンが一歩〳〵と聖賢道に深入りして、人格的尊敬がまして行くとともに、安部氏は思想界が混亂して行くにつれて義人味の肌合が濃くなつてくる。三宅サン安部氏がストーブを圍んでの態度を見ると、安部氏の頭髪の白きは秋霜の威を思はしめ、三宅サンの愛嬌ある吃り、村長宜しくの疎辯、美人にしても見られぬ美しき眼の玉は孟子を通り越して、孔子の德望を思はしむる位だ。三宅サンは不足だろうが僕は三宅雪嶺傳をかいて見たい氣持になつた。長く逢はんでをれば小人の癖としていろんな妄想が湧いてくるが、逢つて見れば古への聖賢を思ひ出さしむるまでに德望の旺な人だ。一つ岸を代へて上杉クンや平沼サンにも逢つて見たい心地もした。三宅、安部、上杉、森戸、河上、吉野大杉の七君に平沼騏一郎、山縣有朋、それに死んだ三島通庸、品川彌二郎などを召集し、マルクスや、クロポートキン、レーニン、老子、莊子を裁判官にして無政府何とかの討論會でも開いたら木戸錢は千兩でも大入滿員、興行主の「改造座」は一夜にして三菱、三井を凌ぐ成金となるだろう。頓だ横丁に反れて老博士の德を冒瀆して相すみません。

藥屋になつた追憶

――宇野港より――

山川　均

小生本日下記の所へ參りました。宇野は十數年前に埋立てゝ港が築かれ、山陽線と四國との聯絡港となつた所です。小生は大逆事件後の干渉壓迫に殆ど身の置どころなく鐵道の開通したばかりの此地に逃がれて四五年間賣藥屋をやつていました。當時はどちらを見ても埋立てたばかりの赭土の原でありましたが、四五年のうちに赭土の原は草茫々たる野原と化し、飲食店の掛小屋があちこちに出來た位のものでした、ところが戰爭の影響で今は附近に三菱の造船所を初め、幾個の工場が出來、人家も一千戸ほどになり、昔日の赭土の原は今や勞働問題の起る土壤と化して居ります。

今小生の居るのは町とは離れた海邊で、極く靜かです、波打ち際ですが靜かなので波の音も聞えず、終日人の聲を聞かず、郵便は一日に一回半丁の豆腐を買ふにも往復三十丁を歩かねばならぬ所です。久々振りにランプの下で手紙を書くと何だか太古に返つたやうです、尤も太古にランプもなかつたでしようが。（一月五日）

國士の俤ある佐々木博士

森戸問題で、敢然と立つて學問の自由、大學の獨立を高唱した、京都大學の佐々木惣一君は、近代稀に見るの國士的風格を備へた學者である。

小常陸然と、肥つた博士は見るからに嫌味のない、そして和かな感じのする男だが、その勿體ぶらぬ所と、親切な行き方とが氏の德望を大ならしめたもので、京都では法學部以外の學生も途中脫帽して敬意を表する位である。博士が森戸氏を辯護すべく上京する二三日前、本社の一記者に語りたる問答錄は直にその人を見ることが出來るやうな心地がする。

記者『森戸氏は有罪でせうかな、それとも無罪でせうかな』

博士『私は絕體無罪と思ふ、私には少くとも法理上無罪であると云ふ確信がある。法廷で發表するまでは話すことは出來ぬが、確信がなければ辯護などは引受けない、そして眞理を擁護するために立つのだと決心した、私は同僚の位置の爲めに辯護すると云ふやうな情實から起つたのではない。だから、私の事は總て自分に責任を負ふ決心で、だれにも相談しなかつた、たゞ自分の決心は少數の學生のみに話した。東京大學の方で、誰も出ないと聞いて私は愈決心を固めた。學問のため、眞理のため、自己の總てを抛つても起つ時だと。』

記者『波多野先生（精一博士）は先生と同じ考へを持て居られます、あらゆる主義には眞理がある、眞理に同情し、共鳴するのは人間としてなすべきことだ、』と言明されました。

博士『波多野博士の言は、徹底したいい言葉だ、京都大學は實に立派な人格者を得たものだ（暫く波多野氏の平常につき話しました）私は國家主義である。私は自分の公職を尤も名譽とし、此の職に私を置てくれる國家に對し一日も報恩の情を忘れたことはない、私は森戸君の學說には反對する、クロポートキンの主義は排斥する、然しながら森戸君の學說、クロポートキン主義には眞理がある。私はその眞理には反對する事は出來ない。眞理は何處までも尊重しなければならぬ。私の今回の態度が、無政府主義や森戸個人を辯護するのではなく眞理の爲めに戰ふ事を了解して貰ひたい。

記者『河田嗣郎博士も勇敢な、積極的の考へを持つて居られます、御參考として申して見ますと、學問の自由は研究の自由である、研究の自由は發表の自由である、發表するのが惡いやうでは學問の自由は奪はれてしまう、學者は最も大膽に發表すべき使命を有して居る、例へ宣傳で有ても差支へない、宣傳も亦學者の使命である、實際運動に携はらない限りは何の干涉。束縛も受ける必要がない、當局のやり方は學者を侮辱したものだ、一國の文化を阻害するものだ――と云はれました。（實際河田博士は机を叩いて申されました、私が宣傳す[illegible]は惡いと云つたものですから河田博士は殊更に宣傳は差支へないと云はれた

のです」

博士『河田君は流石に大學に於ける一流の少壯學者で、勿論、發表するのが惡ければ考へる事も惡いのだ、只發表の範圍であるが、學術雜誌や程度の高い讀者、智識階級に發表するのは何の差支へもない。私は大に同感だ。』

○

私『森戸氏は年少氣鋭の學者だけに多少穩健を失したと云ふ人もありますが、

博士『穩健とは妥協である、眞理に妥協はない、既に穩健と云ふ目標を立てた學問は不徹底にして眞理に到達する事が出來ないのだ。』

象のやうな温順な博士の舌端が、斯様に火に熱え、霜を凌ぐのだから腔爽の公憤は想像するものゝ自由である。博士は吉野作造君より一年前の大學出身で、伯林では兄弟の如く睦ましくして公法の研究に耽つたのであるが、歸來も人格を以て互に相許しておる。

東京裁判所辯護士控室の煖爐を擁して學問ある明治の佐倉惣吾と稱せらるゝ一種の義人、安部磯雄君と國士の俤ある佐々木君との對立は近比の偉觀であつた。安部氏が『暴力以外、即ち言論でも文章でも發表するには自由でなければならぬ、一體興國同志會の人々もあまり賞めたものではないが、文化學會、新人會等も上杉氏などの個人を對手に排斥するは問題を惡化するもので、これは五月の[redacted]を[redacted]てとるの大[redacted]的、[redacted]的行爲である。上杉氏には上杉氏の言論があるから、それを尊重するのが思想の自由でもあり、學問の獨立でもある』と憤慨したが安部サンは流石着眼が高い。並みおる佐々木君も吉野君も理の當然に敬服した。佐々木君は語を次いで『内務大臣は森戸君のアノ論文によりて危險思想を醸成する可能性を有するものと見たのが、又大學教授職責は新大學令の「大學は學問の研究教授を爲し兼ねて國家思想の涵養を爲すに據るべく前大學令よりも兼ねて」の以下が多いが之は私は「涵養とは消極的意味」であつて「妨げてはいけない」と解し「國家思想」とは「國家の存在を研究する精神」とするが適當と思ふ。謂すれば森戸氏の論文は立派に學問の研究であつて大學教授としては斷じて違反ではない從つて休職すべきでもないと思ふ』と解釋しておいた。博士の説は正宗の名刀の如く曇りがない。クロポートキンの解釋に就ての博士の意見には廣い學界のこと故、異論も多いと思はれるが、その眞摯なる態度、眼中寸毫も私なき冴へ方には天下の人々が擧つて感謝する處であらう。

第六拾六回決算報告

貸借對照表

貸方(負債之部)

株金	一七、四二七、六五〇・〇〇〇
諸積立金	一八、九三八、一九一・〇〇〇
社債	六、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
滿期償還未濟社債	六〇〇・〇〇〇
配當未濟割賦金	五一、四一三・八六五
未拂戰時利得税金	四、〇五一、七五三・〇〇〇
未拂金及買掛金	一〇、〇二〇、四八四・二〇九
諸預リ金	八、二一〇、七二八・六八四
鐘紡同志會預金	九一、八〇三・一九〇
鐘紡共濟組合預リ金	六四〇、四六四・〇一〇
故中上川氏記念奬勵資金	一〇五、五四四・〇〇〇
故朝吹氏記念職工療養基金	一〇三、三〇四・六三〇
職工衛生資金	八六、九二〇・二八〇
使用人病傷老衰退職恩給資金	二、九五〇、四六九・一三〇
職工幸福増進資金	二、二一一、二六二・〇八〇
職工救濟資金	一一二、一七三・三〇六
職工休養院及療養所建設費預金	六四、五二二・二六四
戰時海外商工業視察費預リ金	一三七、五五四・一八〇
從業員子弟教育貸費資金	二〇六、〇〇〇・〇〇〇
前期繰越金	五、二四四、七〇五・二六〇
當期純益金	一〇、三〇一、〇五七・一五四
計	八五、九五六、二〇〇・二四二

借方(資産之部)

拂込未濟株金	一、六四〇、六八〇・〇〇〇
土地	三、〇六七、五〇二・八五〇
建物	六、八九五、一八九・一五四
器械	六、九九七、二二〇・五〇三
防火裝置	一一二、五四三・〇一八
工場用具及什器	五二八、七七六・六〇二
有價證券	三〇二、八八〇・一四〇
各店器械建物増設勘定	一、一八四、九三四・五〇八
預ケ金及現金	三二、七一八、四七八・一一〇
棉花爲替資金三井物産會社其他勘定	七、三〇〇、〇〇〇・〇〇〇
職工立替金及假拂金	四八七、八一七・二六〇
賣掛金及運搬途中製品	一、七四四、〇〇七・〇五〇
小賣店賄所及醫局勘定	一、〇〇五、五八二・一二〇
原料製品仕掛物貯物石炭荷造用品及工場用品	二二、三〇四、〇九〇・八九七
期日未經過火災保險料	一四二、三九七・〇三〇
計	八五、九五六、二〇〇・二四二

損益計算

總收入金	一五、四三〇、一七四・九二二
總支出金	一〇、一二九、一一七・七六八
差引	一四、三〇一、〇五七・一五四
固定資産消却金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
戰時利得税引當	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
再差引 當期純益金	一〇、三〇一、〇五七・一五四
前期繰越金	五、二四四、七〇五・二六〇
計	一五、五四五、七六二・四一四

內

株主配當金(但年二割)	一、五七八、六八七・〇〇〇
臨時株主配當金(但年五割)	三、九四六、七四二・五〇〇
諸種積立金	二、五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人病傷老衰退職恩給資金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
職工幸福増進資金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
從業員子弟教育貸費資金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人職工臨時給與金	三九〇、〇〇〇・〇〇〇
役員賞與金	三〇〇、〇〇〇・〇〇〇
後期繰越金	六、二七〇、三二二・九一四

右報告候也

大正九年一月

東京府南葛飾郡隅田村

鐘淵紡績株式會社

取締役會長 日比谷平左衛門
專務取締役 武藤山治
取締役 藤正純
同 長尾良吉
同 前山久吉
同 山口八左右
同 橋爪捨三郎
同 福原八郎
同 望月榮作

右審査候處相違無之候也

監査役 平賀敏
同 野崎廣太
同 清岡邦之助
同 安田善三郎
同 室田義文

監査役全員任期滿了ノ處再選重任セラレタリ



孔子の歸國（一幕劇）

長與善郎

禁無斷興行

人物

孔子

顔回
子貢 ｝その弟子
子路

宋國の攝政、陽笨沈

衞國の公妃、南　子

衞國の大臣、陳文子

其他部下十數名

時代支那周末春秋時代

森の中の空地。秋。

左手に孔子、粗末な机に凭りかゝりうと〳〵としてゐる。其の傍に大木の幹に瑟と、長い杖とが立てかけてある。

右手には弟子三人、焚き火にあたり乍ら、ひそ〳〵話をしてゐる。孔子は丁度彼等の方へ背を向けてゐる。

子路。（孔子の方を見、囁くやうに子貢に云ふ。）夫子は眠つてゞも居らつしやるのかな。それとも又何か考え込んで居らつしやるのかな。

子貢。（矢張り一寸孔子の方を見て。）左様さ。何方とも分らないね。だが先刻からあの儘でゐらつしやる處を見ると、考えてゐらつしやるのでも、眠つて居らつしやるのでもないかも知れない。大方眠つて居らつしやるのだらう。

子路。さうかな。しかし夫子は時々僕らを安心させる爲めに態と眠つだやうな風をなさるのではないかと僕は思ふ事があるよ。

子貢。はゝ、それは少し君の察しがよ過ぎるのかも知れないね。尤も夫子が僕らをおいたはりになり過ぎるやうに僕らに思へるのは事實だ。例へば夫子は音樂がお好きだ。歌は幸福な冥想を引き出して邪念妄想から吾々を救ひ出すと云つて居らつしやる位だからね。殊に今のやうな災難に遭つてゐる場合には猶ほの事その必要をお感じになると見へて、昨今は又殊の外度々、而も聲高くお歌ひになる事は僕等の氣がついてゐる通りだ。だが、どうも僕はあのお聲を聞くと、腹の底から身命を投げ出し度いやうな一種の勇氣をそゝられもするが、又何とも云へぬ悲壯な、淋しさを感じさせられて涙ぐむやうな心地になつて來る。夫子は御自分や僕らの心を樂しませ、慰め、勵まさうとて、お歌ひになつてゐるのだが、實は御自分の爲めよりは半分以上僕らに對するおいたはりのお心から出てゐる事が分るものだから、ついどうもヘンな氣持ちになつて了ふ。

子路。それもさうだが、僕は又何だか怖ろしいやうな氣もして來るよ。云はゞ僕らの運命の晴雨計同然な夫子があのやうにお歌ひになる事が多くなればなる程それはつまり僕らの運の最期が近づいた事をお告げになつてゐるやうな氣がするのでね。素よりさう云つたとて、夫子に捧げてある自分の身を氣遣ふ譯では決してないが、どうも昨今のやうに度々お歌ひになるのを傍で伺つてゐるのは何となく僕にはつらいのだ。

顏回。はゝ。私にはそんな風には聽こえないがな。吾々の運命の危い事、不安である事は今更夫子にお告げ頂く迄もない事だ。むしろ、吾々の困窮が一日々々と迫つて來れば來る程あの卽興のお歌のいよ〳〵美しくなつて行く事、あのお聲の益々力强くなつて行く事はどうだ。外界と、物質の迫害に對する心靈の靜かな凱歌、人間の邪惡に對する、人間の偉大さの凱歌。不正と、僞りに對する正義と眞との凱歌。私はあの崇高なお歌、あの朗かなお聲を伺ふと、實に云ひやうのない力と、勝利と、喜びとを感じないではゐられない。そしていよ〳〵夫子の前に跪き度くなる。もし吾々の最後が、死が、吾々の前に來たならば夫子のお歌は更に一層美しくなり、一層畏るべきものになるだらう。夫子は有り難い。夫子は畏ろしい。

子路。顏回さん。流石は貴方の言葉だ。僕らは先輩たる貴方の前に恥しく思ひます。もし吾々が皆貴方のやうだつたら夫子はさぞ御幸福で、又お氣强い事だらうに。

顏回。そんな事を云はれると何うやら喧嘩腰な嫌味を云はれてゐるやうな氣がする。そして素よりそんな理由のあらう筈もない君が私に嫉妬でもしてゐるやうに君の言葉を取らなくちやならなくなる。だからかりそめにも吾々の間でそんな烏許がましい冗談は口にしないものさ。夫子から見れば吾々は皆同じ麓の石ころで、どれも違ひはないのは無論の事ではあるが、然し、君は若く、美しく、そして善良な勇氣に充ちてゐるのだ。夫子が每もどんなに君を褒めて、愛してお居でになるか、それは此全身誠と、智慧とに充ちてゐるもう一人の夫子の愛兒、子貢がよく知つてゐる通りだ。だが一人齡甲斐もないのは此私だ。恥しい事に、私は未だ此齡になりながら如何なる場合にも天命を樂しむでゐると云ふ事が出來ない。つまり未だ樂しむには德が足りないのだ。其證據には私は隨分寢不足のくせに、又充分眠る時間もあり乍らどうも心がゆつたりとしないで眠る事が出來ない。

子路。だつてあの何を仕出かすか分らない氣の小さい陳蔡の奴らに取り圍まれてかうして山中に籠城してゐる今の場合に僕らがさう安閑と枕を高くしてゐられる筈もなからうぢやありませんか。之がもし夫子のお伴でなく、吾々丈けの

族だつたら、それや吾々だつて——

子貢。安心さ。賴むだつて誰も取り卷いたり、摑まへたりして吳れ手はないからね。

子路。はゝゝ。まあそんな譯だから聖人の警護の大任に當つてゐる吾々が夫子自らのやうにゆつたりと居眠りをしてゐる譯に行かないのも當然ではありませんか。え、顏回さん。

子貢。それに腹はペコ／＼だし‥‥。

顏回。(笑を含むで制し乍ら)あんまり大きな聲を出しなさるな。折角うと／＼として居らつしやるのだ。

子路。さう／＼。夫子のお寢みを尊重しなければならなかつたな。——どれお風邪でも召さないやうに一つ上被をおかけして來やうか。(立ち上る)

子貢。笈の中には本の外には何もないよ。たつた一つ殘つてゐた上被は此間の乞食に吳れて了つたからね。これをお掛けして來玉へ。(自分の上被を脫がうとする。)

子路。いや。君のよりは僕の上被の方が溫かいよ。物がいゝからね。それに僕が一番若いし、一番丈夫なのだ。僕が上被一枚位脫いだつて何も僕がとりわけ忠義な奴だ抔とお思ひになる筈はないから安心だ。夫子がそんな事で僕らの間にケジメをおつけになるやうだつたら、上被を脫ぐ僕よりはむしろ、僕にさうさせて見てゐる君達の方により多く滿足なさるにちがいない。(自分の上被をぬいで孔子に被せる。)本當にどうやらお睡りになつたらしい。何と云ふ安らかなお顏付きだらうなア。なんぼ吾々が護衞してゐるからとは云ひ乍ら、小人の勢に御運命を握られてゐるも同然な此危險な矢先きに、まるで風の無い月夜の高い雲のやうに悠々と澄みきつて居らつしやる此お寢顏。どうも此寢顏を見ては吾々のさはついた、見共ない心根迄が自づと恥と、誇りとの自覺を取り戾して、安らかに晴々としない譯に行かない。パッチリとお開きになつてゐるお眼が嚴かで、美しく、仁けに充ちて居らつしやるやうに、此お閉じになつたお眼の氣高い床しさも亦格別だ。實に起きて居らつしやる時は吾々に力を與へ、休んでゐらつしやる時は吾々に平安を與へて下さると云ふ

譯だ。

子貢。本當にな。痛快と云ふか、何と云ふか、盜賊の手に身命を任せてゐる夫子は安らかにお眠りになり、夫子の御命を握つてゐる積りの盜賊共は、もしや夫子の仁德に引きつけられてウツカリ自分の役目を裏切りはしないかと云ふ心配の爲めに耳に栓をかつてゐると云ふ始末だ。――だが、子路。力も安らかさも見へないのは君のその腰つきだ。まるで酒にでも醉つてゐるやうぢやないか。どうもそのフラ〳〵した腰つきではどうやら此大任を背負ひ通せ相にも見へないが。

子路。いや、お恥しい譯だが、正直な話、僕は腹が減り切つてゐるんで、之から先き何時迄此絕食生活がつゞくのかと思ふと、つい氣が弱くなつて、腰の邊迄が何となく力が拔けて來るやうでね。

子貢。はゝ。其代り、夜逃げも出來ないから安心だらう。

子路。はゝ。なに、かう見へたつて未だいざと云ふ時になれや案外剛毅な處をお眼にかける自信はあるがね。だが、君は人の事を笑ふが、あの番卒達に賂をつかつて米を仕入れて來た者は君ぢやなかつたかね。

子貢。大きに拙者だ。君との合議の上でね。はゝ。なに、番卒達自身は別段此方に恨みのあらう譯もないのだから、金さへ持つて行きや幾らでも喜んで取り替へてくれるさ。夫子だつて、いくらか吾々に對するお努めの氣味もおありになつたのだらうが、別にその交換を敢てお咎めになるやうな融通の利かない聖人ではないからな。御自分でも二三杯はたつぷりおかへになつた位だ。――どうだね。君の財布は。

子路。何だ、又やる氣なのか。驚くな。

子貢。なに、君の爲めにさ。友達のフラ〳〵してゐる腰つきに同情して自分が發頭人と云ふ役を引いてやらうと云ふ迄だ。――いくらあるね。

子路。一錢位は未だあるかな。

子貢。一錢では少し心細いな。顔回さん。貴方は不賛成ですかね。

顔回。賛成したくも一文なしだ。さう云ふ君自身の財布はどうだね。

子貢。僕と同じだ。減らずにゐるものは口許りだ。

顔回。はゝ、まあ、口が減らずにゐる間は大丈夫だ。口も碌に利けないやうになつたら其時は又其時だが、少しでも辛抱の出來る間はなるべくなら氣持ちのよくない交換は避けやうぢやないか。僕も夫子のお伴として餘り飯の前にガツ々々した見苦しさも見せ度くはないからね。何も外見を飾るのではないが、他の迫害に屈しないのと同じに、胃の腑の迫害にも人一倍の抵抗力を示す事が出來ないのは少し恥辱な話だ。どんな經驗だつて僕らには必要なのだから、飢えと云ふものゝ實際の苦味も人一倍に味つて、明日と云はず今日の食と生存の不安をしみ／＼嘗めて見るのも一つの得だ。つまりそれや僕らの信仰と、精神の强みを表はす何より固い保證にもなる譯だからね。自分により深い經驗がありやどんな不幸者に逢つたつて氣おくれや、遠慮は要らない。どんな場合にも確固たる自信を以てドシヽヽ本當の事を云へるわけだ。親身の間では眞劍の問題にも多少の冗談を交へて語るのが却つて床しくもあるのだが、僕が今急にこんな分りきつた事を鹿爪らしく云つたからつて、君達は別に氣を惡くはしないだらう。と云ふのは事實それが今では或る程度迄眞劍の問題になつて來てゐるのだからね。

子路。何で氣を惡く抔するものですか。僕らは今冗談と眞劍の境であんな事も云つて見たのですが、何、僕だつてまだ二日や三日は確かなもんです。夫子御自身があんなに歌を歌つて元氣よくしてゐらつしやるのにどうして僕らがさうヘコタレてゐられませう。僕は信じますよ。天は夫子を餓死させはしない。人間は聖人を餓死させはしないと。伯夷叔齊は首陽山で餓死しましたがあれは自らそれを潔しとしたのでもあるし、又彼等は決して孔夫子のやうな聖人でもなかつたのです。もし假りに夫子が首陽にお籠りになつたとしたら、僕は固く信じますよ。天は決して夫子を餓死させはしなかつたであらうと。

子貢。子路。僕はむしろ反對にかう云ふね。伯夷叔齊は聖人でなかつたればこそ餓死で濟んだが、孔夫子は聖人だから殺されるかも知れないと。それに第一孔夫子だつたらあんな山にお籠りになる筈はない。何處迄も此世に出やうとなさるだらう。だから人は否でも夫子の存在に知らぬふりをする事が出來ない。つい問題にしなくてはならなくなる。それが厭だから奴等は劍を拔き兼ねない。

顏回。君達の云ふ事は兩方共本當だ。兩方共事實だ。確かに人間は當てにならない。だが人間が當てにならないものだからと云つて、私共は自分の使命を腑甲斐ないものだとは感じない。矢張りそれが此世の役にも立ち、人の望みにも應じてゐるものだと云ふ事を信じてゐるのだ。して見れば私達は矢張り人間を信じてゐると云ふ事にもなるのです。

子貢。それはさうです。しかし餘り人間の馬鹿々々しい腑甲斐なさ許りを見ると、未だ信仰の淺い僕なぞには、今の世の中を相手に何十年こんな命がけの辛苦艱難を致てして遊說して廻つて見た處が結局唯勿體ない無駄な御苦勞だと云ふ氣がどうもして來るのですよ。何しろ餘り懸隔が甚し過ぎるのですからね。一體夫子は吾々が運よく此處から拔け出られたとして、それから先き未だ何處へお入でにならうと云ふおつもりなのでせう。

顏回。未だ宋と衞との二國には一度も足をお踏み入れになつた事が無いと云ふので、此二つの中何方かへ行つて御覽になるおつもりらしい。

子貢。(頭をふる)ふむ。又足の裏のマメを增やす位は厭はないが、又あのお悲しみを濃くする丈けが關の山かと思ふと何だかおいとしくて此方迄悲しくなつて來る。——あゝ、併し僕は疲れた頭を少しつかつた故かどうやら眠むくなつて來た。詰らない事を考えてクヨ〱するより御免を蒙つて横になつた方がよさ相だ。(孔子の方に向つて默禮し、其方に頭をむけて横になる。)

子路。顏回さん。貴方も一休みなすつてはどうです。休める時に休むでおゝきなさい。僕が見張をしてゐますから。

顏回。君に許りそんなに上被をぬがせたり、番をさせたりしちや相濟まない。君こそ休息しちやどうだ。

子路。何、僕はちつとも眠むくないのです。どうせ起きてゐるのですから焚木でも拾つてゐますよ。貴方は齡を取つてゐるんだから少しは體を休めなくてはいけませんよ。

顏回。それぢや濟まないが一寸休ませて貰いませうか。どうせ眠れもしないでせうが。

子路。安心してゆつくりお休みなさい。

顏回も孔子の方を向いて禮拜し、其方を頭に横になる。子路、暫く其邊を歩き落葉や薪を拾ひ、ふと又孔子の寢姿に眼をとめてじつと見てゐる中涙ぐむ。急に跪いて孔子の衣に接吻する。小鳥の聲が聞こえる。子路。立ち上つて暫くその囀りに耳を澄まし。やがて薪を焚き火に加へる。消えかゝつてゐた火が一時燃え上る。それにあたつてゐる中いゝ氣持ちになり、コクリ〳〵居睡りを始めとう〳〵其處に横になつて眠込んで了ふ。焚き火の火再び細そりパラ〳〵と木の葉が散る。小鳥の聲の外には靜寂。孔子眼を覺まし起き上る。三人の弟子の眠つてゐる姿と、自分の上にかけられた子路の上被を見る。その上被を又子路の上にかけてやる、少時物思ひ氣にじつと三人の寢姿を見、それから又薪をとつて火にくべる。火が消えてゐて燃え上らない。それで燧石をとつて音の立たないやうに火を點ずる。しかしその小さな音で顏回は直ぐ眼を覺まし、孔子を見て。起き上る。

以下孔子と顏回との對話の間に火は又燃え上り、落葉と、小鳥の囀りとが折々あり。

孔子。おや、起して了つたか。之は氣の毒な事をしたな。お前には殊に休んで貰い度く思つてゐたのに。

顏回。思はずうたゝねを致しました。何とも申し譯がムりません。私共のうち一人は必ず起きてゐて見張りをする筈でありましたのを一番年長の私が齡甲斐もなく眠りこけて、此上ない大任を怠りました腑甲斐なさ、誠に心苦しふ存じます。

孔子。顏回。お前は子路か子貢からかう云はれたのではないのか。「貴方は齡をとつてゐる吾々の先輩だ。私が起きてゐるから貴方は是非一休みしなくてはいけない」と。處がその番人も引き續いた寢不足やら、疲れや、退屈でつい眠む氣を催してつまり三人共一休みする事になつて了つた。まあそんな譯ではなかつたのかな。

顏回。夫子には何事も包み隱す事は叶いません。被仰る通りでムいます。

孔子。はゝ、何でその要があらう。吾々は既に此上なく忠實な寢ず番をされてゐる身ではないか。吾々を休ませやうとてあの心配性の陳蔡の兵がわざ〳〵あのやうに十分な見張りや、御苦勞な警護をしてゐてくれるのに其上なほ吾々が自分の警戒をするのは天下の經濟にも叶はない事だ。今の中に皆たつぷり安眠しておくがいゝ。わしもよく眠つた。王侯の身とても今の吾々のそれ以上に安全ではあるまい。

顏回。只その番をされて居る者がそれ程かけ替へのない貴重な生命ではなく、此澆季の世に在つては唯一な、永への後世に於ても最大な光りでなく、且つ其番人が盜賊でなかつたら勿論私共も安心して眠る事が出來たでムりませうが。

孔子。だが利の無い事を知つて盜賊になる者はあるまい。わしが千萬の金を持つてゐる旅人でもあつたならなるほどわしの命は危なからう。しかし此一文なしの孔丘を殺して見た處で、あの小利に汲々としてゐる彼等の政府が、その體にどれ丈けの褒美をくれるものか彼等は知つてゐるのだ。利慾は少くとも互に背き合ふ丈けの正直さを持つてゐるものだ。暴力でわしを亡ぼせると思ふのも馬鹿だが、又金をかけずにわしの首を取れると思ふのも馬鹿だ。尤もあの臆病な政府にはわしを殺す事が利益だと云ふ自信もないらしい。唯わしが曾てあの國を通つた時、直ぐ一見して國狀が知れたので、立ち寄りもせずにさつさと通過して了つた。それを多少遺恨にも思つて——

顏回。それ許りでもムりますまい。彼等は他國の善くなり、榮える事に我慢が出來ないのでムいます。彼等の所望は自國を善き國にする事でもなければ、又强ち孔夫子を亡き者にする事でもムいません。唯、世評の高い孔夫子を見す〳〵他國に取られ、そして他國が榮える事が嫌なので、コソ〳〵とその邪魔をする位が望みなのでムいます。

孔子。如何にも小人のしさうな事だ。わしが行つたとて其國の武備が嚴になる譯でもなければ、國庫がさう豐かになるわけでもない事は彼等も薄々は知つてゐやうが、とに角わしを人手に渡し度くはないのだな。一個人の力が如何に一國を變化させ、民衆を動かし、天下を搖がす事が出來るものか、又此孔丘にどれだけの力があるものか、彼等が知つてゐやう筈はない。だが何となく彼等も或る不安を感じるのだ。それでわしをこつそり道に遮切つて、事に依つたら此人

知れぬ山中に葬らうとでも云ふつもりと見へる。わしを葬るも、葬らぬも天のみの知る事であるのも知らずに。

顔回。實に憐れむべき笑止千萬と申しませうか、片腹痛いと申しませうか。かりに吾々が一時此山中に葬られたものと致して、後に到り、天の葬らざるものを人は葬むる事が出來ず、夫子の御生命が光りの如く暗暗たる幾重もの雲を突き破つて、再び此世に輝き出ました時、そして夫子の尊體に加へられた罪が八釜しく天下の口によつて鳴らされます時そのやうな時が假りにあると致しましたら、其時は彼らは又驚くべき厚顔さを以て「知らぬ」「知らぬ」と云ひ張るつもりでムりませう。罪は何時の間にか、何處からともなく裏切られるものである事も知らずに。何故と申せ、彼等は最早現にそろ／＼裏切られつゝあるのでムいます。而も自分等の使つてゐる手足の者によつて。

孔子。と云ふのは。

顔回。番卒でムいます。少しも怪しむには足りません。何の益にもならぬ、アテも、面白味もない此山中の不自由な生活。始めの中は樂なので、喜んでも居りましたらうが、無爲の退屈はやがて樂ではなく、苦になつて參ります。それに食料は一日々々と減じ、それに反して寒さはだん／＼に加はつて參ります。こつそりと屯を拔け出し、賑やかな街の方へと逃げて行く者は昨今少くないやうでムいます。そして一旦ぬけ出た者は再びその故國へ公然と歸るわけにもゆかず、彼方此方と諸方をうろつき歩いては夫子が此山中に閉じ籠められ、御災難に遭つてお居での事をふれちらす事でムいませう。

孔子。しかしその番卒がそのやうにして次第に營を脫け去り、遂には一人も殘らなくなつて了ふとしても、それ迄には未だ數日はかゝるだらうな。

顔回。（一寸孔子の顔を見）それはかゝりませう。

孔子。しかし吾々は其數日の絶食には最早堪える事は出來まい。

顔回。――。しかし――

孔子。顏回。お前はその前に吾々の救い手が來るだらうと思ふか。

顏回。來るやうな氣は致します。否、必ず來るとも思ひます。併しあてには致しません。よし救い手が來たとしてもその勢は陳蔡の番兵に追い拂はれて了はないとも限りません。又たとへ首尾よく彼等陳蔡の勢を打ち拂つて吾々を救ひ出す事が出來ましたとしても、それは狼が去つて代りに虎が來る事に過ぎないかも知れません。

孔子。顏回。それでもお前等は本當に悔む事はないか。わしはお前を信じてはゐるが、あの若い子路や、子貢は、わしを怨み、天を怨むまいか。

顏回。(一寸悲しい思ひあり氣に孔子を見る)今更の其お訊ねは御尤もとは思います。夫子のお眼に、私共が未だ〳〵信仰の充分な者と映り得ない事は致し方ムりません。しかし少くとも私共は何が恥であり、何が名譽であるかを眞に知つては居るのでムいます。勿論目のあたりに成功を見、眞理と正義との捷利の確證を見るよろこびに比すれば、道の爲め、此世の爲めに飽く迄節を持して餓死する誇り、討死する名譽は淋しいものには相違ムりますまい。其時には晴やかな胸にも切ない悲愴を湛えながら私共は眼をつぶらねばなりますまい。又民衆の餘りの盲目さと、破廉恥とに一時は腹も立て絶望的になり、世と人とを怨む事も致しませう。併し〳〵、最初から到底叶はぬ望みと知れてゐる事を諦めました處でそれで私共は天を怨みは致しますまい。信仰と云ふものこそ私共の生命であり、又獻身と云ふ事こそ私共の生活なのでムります。獻身の熱情と云ふものより美しいものがムりませうか。あの愛すべき若者達の美しい寢顏をお眺めやり下さい。丁度サソリがその毒液を吐ききれずに苦しむやうに、彼等はあの若い全身に煮え沸つてゐる獻身の熱情を持て餘して苦しむで居るのでムります。人を脅かす死と云ふ黑雲なぞは彼等の焔のやうな赤い心の上に一點の影をも止める事は出來ません。如何なる勇士と雖も彼等のやうに欣々として道の爲めに火の中に飛び込みは致しますまい。世にも逢ひ難き幸に依りまして、彼等は固く信じて居ります。眞理の不滅なる如く、夫子の永久なる事を。人間は聖人をも餓死させ或は自分が何をしてゐるかも知らずに尊い父親の首を刎ねる事さへするものでムいます。が、それにも拘はらず彼等の

内の何處かに潜む良心は又その自ら埋めた者を墓場から蘇生らせ、永久に生かしめるのでムいます。而して、選ばれたる者の仕事は人間をあてにする事ではなく、却つて彼等をあてに出來るやうなものになす事、又眞に頼りにすべきものを彼等に知らしめる事でムいます。頼るべからざるものゝ如何に頼るべからざるものであるかを知るに從つて、眞に頼るべきものに頼る事の如何に心強く、安らかで、幸福であるかを不肖乍ら私共は感じて居ります。永劫なる無窮の流れのうちに沈んでは浮び上り、絶えむとして又つゞき、徐ろにうねりうねつて生き流れ行くさゝやかにして しかも堅固なる人間の正義、正義の神秘、神秘の大生命を私共は夫子の逢ひ難き御導きにより信じる事が出來ました。もし私共にしてその大生命と共にあるならば、何で私共をして永への世に生かしめ、最後の捷利を必ず獲しむるものを私共は怨む事が出來ませう！

孔子。顔回。流石はお前の言葉だ。お前の云ふ事は一々本當だ。それを聞いてわしはすつかり安心し、滿足した。今迄とてもさうではあつたが、猶ほ更に意を強ふする事が出來た。お前のやうな者をわしの弟子と呼べるのはわしの名譽だ。今のお前の言葉に對してわしは禮を云ひ度い。

顔回。(恐懼して)その勿體ないお言葉では餘りに恐れ入つて羞しさに堪えません。私の申した言葉は凡て淺く、歪にした夫子自らのお言葉に過ぎないのでムいます。

孔子。いや、わしの言葉と云ふよりは誰でも此世に生くる者が耳あれば必ず聽く事の出來る言葉だ。だが、獻身を急いではならない。そは人間にとつての唯一の美しきものであるが故に輕卒にしてはならない。美しいと云ふ事よりはもつと貴とい事がある。天命には從順でなければならない。しかし運命をそれと間違へてはならない。わしは伯夷のやうに自ら求めて死なうとはしない。わしは義人では滿足の出來ない者だ。義人には自殺が出來るが、仁者には自殺は出來ない。聖人に於ては猶更だ。彼等は與へる爲めに此世に生れ來たので、期待し、要求する爲めに生れ來た者ではない。與へきらないうち死は彼等にとつて何處迄も苦痛だ。喜びと云ふ言葉を徒らにつかつてはならない。使命を果し切らな

いうち人の死にはいかに崇高なものであれ何處迄も悲哀がある。わしは運命がわしを此處で殺しても殺さないでも用意は出來てゐる積りだ。だから今死んでもわしは決して只不幸ではない。その不幸より強く、大なるものを掴んでゐるわしは既に生を肯定してゐる者だ。だが幾多の事がわしには最大の幸福の爲めに未だ課され殘つてゐる。今わしが死んだのでは民衆は餘りに據り處が無さ過ぎる。わしの使命は重大である。顏回。お前もさう思はないか。

顏回。（面を伏せ涙ぐむ）誰か眼ある者でさう思はない者が厶りませう。夫子がお隱れになられて誰がその代りに世を照らして呉れませう。

孔子。民衆は馬鹿だ。餘りに無知だ。だが可哀相だ。彼等が無知であり、邪まである事を知れば知る程わしには不思議に彼等を見捨る事が忍びなくなる。そしてわしの運命と天職の深き事を感じないわけにゆかない。さうだ。今の世にわしが起たないで誰がわしの代りを勤めてくれやう。わしは此身を捧げて天命の前に從順である事を希ふ者ではあるが、苟も天命がそれを拒まない限り、わしは飽く迄もわしの行く手を遮切る運命を拂ひのけて、靜かにわしの餘生を天命に獻げきる事を深く强ゐられるのだ。そして、わしの氣持ちでは運命も亦それをわしに許してわしを此の圍みから救ひ出してくれるだらうと云ふ氣がするのだ。いや、必ず救ひ出すだらう。

顏回。いかにも夫子は屹度その救ひ手を呼ばずしてお呼び寄せになる事は確かと思はれます。しかし既に中國のありとあらゆる諸國をかゝる屢々の九死一生の御難儀と、裏切られたる失望のうちに御遊歷なし盡されたる今、何處からその救ひ手が參るで厶いませう。

孔子。宋から來る。さもなくば衞から來る。此鄭重な態度を取つて最後に殘つた二國にはわしは未だ多少の望みを屬し度く思ふ。わしは虛禮僞善の國には實に屢々裏切られたが、しかし亂れてゐても正直な國民には未だ聊かの未練を持たないわけに行かない。わしの豫定だと救い手はその何れかゝら、しかも今明日のうちに來るらしく思へる。

顏回。（少し驚く）今明日のうちに。

孔子。さうだ。少くとも宋の政府は最早わしが此處に圍まれてゐる事を知つたにちがいない。彼等は間もなく大軍を率ひて此山に來り、難なく陳蔡の兵を討ち拂ひ、吾々をとに角救ひ出してくれるだらう。

顔回。さうなるのが當然では厶りますが、夫子が左樣お感じになるのならばいよ〳〵必ずそのやうになるで厶りませう。――いや、人には負け惜しみと聞こえるかも知れませんが、實際の處、私共には何となく此山もなつかしく感じられて參りました。思ひがけない人手によつて行手を塞がれましたお蔭げで、私共は久しぶりに自然の愛に親しむ事が出來ました。人間の邪惡に心が暗くされた時は自然の懷に歸るに限ります。それ程人の心を温め、慰め、洗い清めてくれ、元氣を恢復させてくれるものは厶りません。意地惡い子に泣かされた子がその母に頭を撫でられながらさとされて、再び憎惡と、怨みとを忘れた明るい氣持ちになり、又のこ〳〵外へ出て行く氣になると同樣で厶います。あの小鳥の聲、枯葉のそよぎ、穩やかな落葉、梢の間に見へる青空、凡ては慈愛と、善良に充ちて居ります。丁度病中に美しい夢を見るやうな氣が致します。

孔子、おゝ、夢と云へばわしは今うたゝねのうちに久しぶりに周公に遭つた。何と云ふ不思議な夢を見た事だらう。わしは彼と話しながら歩いてゐる。宋へ行かうと思つてゐるのだ。何でもそれは恐ろしく明るい、廣く、遠く、眞直なしかし淋しい道であつた。だがいくら行つても〳〵道は宋へは出ない。はてどうした事かと思つて周公に訊いて見ると其筈だ。此道は宋に行く道ではなく、魯に歸る道である、と云ふのだ。そして彼は頭をこゞめてわしの手に何かを握らせたかと思ふと、丁寧に一揖して去つて了つた。何かと思つて見ると彼のわしに與れたものは鼎であつた。變な事をするものと思ひ乍らわしは又道を變へて歩き出した。今度は衛に行かうと思つて。處がわしは又道で伯夷と叔齊に出遭つた。わしは喜んで彼等と話しをし乍ら長い事歩いた。だが、不思議な事には、わしは又道にはぐれて了つた。どうしてわし達は衛に出ないのだらうとわしが訊ねると、其筈だ、此道は魯に歸る道である、と彼等は又云ふではないか。そして或る處迄來た時に彼等はわしの前に跪き、一本づゝ箸をわしに與れて何か祝願するやうな眞似をし、そして去らうとし

た。どう云ふ意味かと思つてわしは彼等の名を呼んだ。そして眼を覺ました。

顏回。墨と、筆。――不思議なお夢で厶りますな。どうやら意味の深い暗示のやうにも思はれます。

孔子。はゝ、わしも少し耄碌して、こんな分らぬ夢を見たのかも知れない。體が昔程強健ではなくなつたので、何處かに弱い心が生じ、それがわしの敬愛する人々の姿で却つて逆にわしに注意を與へてくれたのかも知れない。だが、それにしても變な夢を見たものだ。

沈默。焚き火の火再び細そり、落葉切りに落ちる。急に、けたゝましい鬨の聲につゞいて鳥の羽音がする。子路と子貢眼を覺ます。

孔子。何事だらう。

顏回。(起ち上る)夫子の御豫言が早くも中つたらしふ厶ります。救ひ手が參つたので厶りませう。

子路。(飛び起きる)何、救ひ手が來たのですつて?

子貢。(同)いよ／＼、來たのですか。

顏回。まあ／＼慌てなさるな。それよりもちやんと身仕度でもお整へなさい。夫子の前だ。

子路。整へるも整へないも用意の仕様はありませんよ。着のみ着の儘の他には杖一本無いのですからね。

子貢。何だ、見張り番、君も眠つて了つたのだな。

子路。眼丈け一寸休ませたのさ。耳は此通り鳥の羽音も聞きもらさない。さあ、何でもござれだ。

孔子。急に氣が強くなつたな。はゝ。騷ぐほどの大事ぢやない。それより自分の心掛けでも大事にして居るがいゝ。

再び鬨の聲、それから引き續き物騷がしき人の聲、段々近くなり、「此處だ／＼」なぞと云ふ聲聞こえ、やがて宋國の攝政陽朱沈、その部下を引きつれ登場。

部下の甲。孔夫子のお居での場所はこちらで厶りませうな。

子貢。いかにも左様で厶る。

攝政陽笨沈。(孔子の前に進み出て、丁重なお辭儀をする。)私は宋國の攝政陽笨沈(やんぽんちん)と申す者で厶ります。久しく御尊名を欣慕して居りました。先づ〳〵御尊體の恙なき事を知つて喜び此上なき事を御認め下さい。又遲れながら吾等の遠來の甲斐あつて、かの破廉恥の蠻賊共を首尾よく蕩掃致し、御尊體を始め御隨從の方々をめでたく危難より御救ひ申す事が出來ました吾等の無上の喜びと、名譽とを御認め下さり度う存じます。

孔子。御志と、御苦勞に對して深く感謝します。――吾々の此處での災難を何時御承知になりました。

攝政。(一寸まごつく)先日――いや、昨日の夕刻の事で厶いました。町の者が見知らぬ浮浪人から聞き、役人が町の者にその事を告げられ、役人は更にその事を上官に傳へ、それから上官がその浮浪人を捕へさせて審問に附し、彼が陳蔡の番卒であつた事と、孔夫子の御災難に關する一部仔什を告白するに及びまして、その事を私に告げ、かくて、始めて國內を擧げての騷ぎとなり、漸く御救助の軍を整へる運びに到りました。然し、出來る丈け急ぎましたが何分にも種々の準備に手間取り、且つ、朝議が忽ち一決致した時は既に夜半でありました爲め、止むなく今朝迄出發を延引しなければなりませんでした。それに御承知の通り道程は中々に遠く、且つ嶮岨でありますので、特別な强行軍を以てしても半日以上はどうしてもかゝります。それ以上の急ぎ方を兵士に强ゐる時には肝腎な戰ひの時に役に立たなくなります。斯樣なわけで、心ならずも漸く只今に致つて目的を果す事が出來ましたやうな次第、遲參の議はよろしく、御諒察を願ひます。

子路。(旁白)ふむ。功名を鼻にかけていやに頭を下げるわ。安心して飴を食はせて恩を被せて、さて其先きで何をたくらむでゐるんだ。

孔子。わし達は幸運を喜んでゐるのです。そんな事は素よりお氣にかけられるには及びません。そして貴方は吾々を迎えに來て下されたのですか。それとも只吾々の難儀を救助して下されたのですか。

攝政。はゝ。そのお訊ねには恐縮します。餘りに明白な事と存じましたので却つて申し落して了つたのです。孔夫子

の御難儀をお救ひする事は天下の義務――と申すよりはむしろ雪辱であります。吾々は此當然な雪辱の任に自ら進んで當つた事を以て少しも誇りとは感じません。併しながら天下の諸國が皆その不正と、偏狹なる國家的利己心と、臆病と暗愚との爲めに心から夫子を迎え、その正義を容れる事が出來なかつた時、鄭重の態度を執りました爲めに他國より聊か遲れはしましたが、而も禮儀と、誠意とをもちまして夫子を歡迎し、その仁義禮智の敎へを國法と率する國がありましたなら、その國はよし小國ではあらうとも萬國に誇るに足ると信じます。私は國民の熱心を代表致し、特に攝政の身を以て遙々此山中迄御救助旁々御出迎えに罷り出た次第で。――

孔子。王はお幾つかな。

攝政。本年十七歳、いや、十五歳になられます。聰明で、眞卒な御資質をもつてお居でになりますが、何分に未だ若年であらせられるので、先王の遺言に從ひ、彼が廿歳になる迄は不肖乍ら私が後見を致し、且つ攝政の大役を務める事になつて居ります。實は夫子をお迎え容れ致し度いと云ふ宿望を早くより抱きながらそれを實現するに當り、他國より多少の遲れを取りましたのも、左樣な事情からで、――と申すのは、自分自ら王であるのとは違ひ、攝政の身にとりましては何事を爲すにも兎角躊躇や、面倒が附き纒ふもので、いかに善き事であらうともそれが英斷を要するやうな事であればある程煩瑣なる協贊の手續きを經てかゝらなければなりません。さもない時には――有り勝ちな事ですが、――直ぐ專制と云ふ國民の誤解を招きます。さなきだに、周圍の嫉妬、猜疑、卑屈なる野心は兎角私なき治者の晴天白日の心の上にさへも、僻眼を向け、何かと難癖をつけ度がるもので、まるで、人間と云ふものは他人の潔白を好み得ないものゝやうであります。あに圖らん、一個人の意志よりも、萬人の意志を尊び、たとへいかなる桀君が出やうとも專制を働く餘地が無いやうにとて、多少煩瑣ではありますが、自國の律法を造りましたのはかく申す私でありますのに。――

孔子。では内亂が起りかけてゐるのですね。貴方に對して謀叛が企てられてゐるのですね。

攝政。かやうな事が起り兼ねないとは始めから豫期してゐた事でありますが。いやはや、民衆の頼りない事にも呆れるの外はありません。忘恩と云はうか、盲目（めくら）と云はうか。——一寸した佞人の甘言にまんまとのせられて、昨日は私を救ひ主のやうに呼んでおき乍ら、今日ではもう國賊——王位の簒奪者と云つてゐる位なのですから。

孔子。貴方はそれでわしを味方にしやうと云ふお積りで來られたのかな。

攝政、その代り私は先生を御危難からお助けしました。——如何なものでせう。

子貢。（旁白）凡ての巧言令色の腹はこれだ。

孔子。善い處に氣がつかれた。事情によつてはお力にならないとは云いません。わしのやり方で。

攝政。しかし狡猾にも裏切り者は幼少なる王をまるめ込んで、自分達の頭に祭り上げたのです。從つて單に名義上から云へば、彼等に抗する事はとりも直さず、君に對する不忠となるわけなのであります。

孔子。人を怖れて禮を畏れない者はわしに物を請ふのは無用な事だ。これを怖れ、かれを怖れて、右を顧み、左をうかゞひ、一の禮に從ふの勇なき者はわしに物を請ふのは無用な事だ。

攝政。御尤もです。御尤もです。ですが「勇無き者」と云はれては私も聊か不服と申さなければなりません。私が勇なき者であるなら何で自ら進んで此のやうな命がけのお迎えのし方を敢てした事でせう。何、もう少し私を理解して頂けば私は何も辨解するには當りません。只私は政治家であつて、思想家ではないのです。私の關する處、私の直接に聞く事の出來る命令は所謂その大勢と云ふもの丶命令であつて、禮の命令ではありません。禮の命令を直かに聽く事の出來る者は思想家の中でも、夫子のやうな聖人に限るのです。併し又聖賢の道に從ふのは大勢の義務であると私は考えるので——

孔子。又大勢は結局聖賢の道に從ふものです。それが人間の天性で、又惠まれた取り柄なのです。だから永久な大勢に從つて、其生命を永く保たうと願ふ者は聖賢の教えに從はなければならない。政治家であらうと、何であらうと。

攝政。御尤もです。それで實は私は忠と云ふ事を重んぜられる吾々の師に先づその御解決を仰ぎ度く思ふのです。私は不幸にして止むを得ず王には叛くやうにならうとも、國には飽く迄も忠義であるつもりです。國民には何處迄も叛かないつもりです。其私の眞心は此處に据へ居る私の部下にお訊ねになつても分りますが、實に王こそお氣の毒の到りです。巧言令色な奸臣共に體よく率られて、そのいゝ餌食になつた擧げ句はどんな目に遭はれるか見えすいてゐるのですから。

孔子。貴方が內に顧みて疚しい處なく、不忠な處がないならば何處迄も貴方の信ずる道をお進みなさるがよい。內に顧みて疚しい處なく、不忠な處がないのは忠の初めである。其人は少くとも己れの忠に賴つて、何も怖れ、悔む處はない筈だ。己れに忠ならば僞りを怖れず、人に忠ならば人を怖れず、君に忠ならば君を怖れず、民に忠ならば民を怖れず、體に忠ならば病を怖れず、天に忠ならば天を怖れない。凡ての災厄は必ず何かの不忠から生ずるのです。貴方が貴方にとつて最高の忠と思へる忠に凡てを捧げて從つて居られるならば其他の事は貴方の關はり知る處ではない。

攝政。左樣。關はり知る處ではありませんが併し、いかに忠を以てしても一向にそれが通ぜぬ許りか、却つて不忠を以て報ひられるものをどうしませう。此方が忠であればある程、それを不忠にして了ふ者をどうしませう。現代の人心の淺ましさ、浮薄な我利々々主義、埃りつぽい干からびきつた此空氣の冷たさ。忠などゝ云ふ事は全くの死んだ言葉で、實に藥にし度くもないのですから。

孔子。だがわしの忠は既に世に克つたのだ。わしの云ふ事をお聽きなさい。人間は決して忠なしに生きて行ける者ではないのです。それは生物が日光なしに生きて行けないのと同じである。丁度水に潜つた者が息をしに浮び出るのと同じく、人間はその不忠に永く堪え得る者ではない。人々は識らず〳〵の中にも忠の此世にある事を信じ、それを探し求め又それに依つて生きてゐるのです。だが斯くして其人が如何なる忠に出遭ふか、又それに出遭ふか、出遭はないかは一にその人自らの忠の性質に依るのです。恩を知り、それに報ゆるは、恩を知らず恩を忘れるより優つてゐる。しかし自

ら進んで忠なる事は報恩と云ふ事よりは更に優つてゐる。だが單に忠なるのみならず、最も善く天命に叶ふ大なる忠を選んで之に從ふ者はそれよりも猶ほ優つて居り、更に進んでそれに從ふ事を樂しむ者は最上である。か丶る人を運命も人間も亡ぼす事は出來ない。彼は亂の中に在つても治の中に在り、人の愛を報ひられなくとも人知れず天の報ひをうけて樂しむ事が出來るのだ。

攝政。彼仰る通りです。が、しかし夫子は祖國を捨て丶お去りになつたではありませんか。

孔子。さうだ。それがわしの使命であつたからだ。今時の亂世に於て一國に忠なる事は他國に不忠なる事を意味する。わしが自分の愛する故鄕である魯を去つて、他國に道を說き、治を擧げ、その國を榮えさす事はやがて魯にそむき、抗する事と同樣にも見へる。だが貴方が忠なるが爲めに宋國に忠なると同じく、わしは忠なるが爲めには たとへ魯に叛いても諸國に周遊しなければならなかつた。併しわしは此忠を諸國に說いて嘗て彼等の間に不和を起させた事がない。わしは一國を去つて他國に行く時にある淋しさや、ある苛責を感じる事はあつても、嘗て不忠の感を感じた事がない。誰か自分の兄弟の家を訪ねるのに憚る者があらう。一の病家から他の病家へ行くのに何で不義を感ずる醫者があらう。天下の到る處皆祖國であるのに何で一國を去る事が不忠となるであらう。天命の爲めに凡てを擲つて、死に打ち克つてゐる者に何で人間を怖れるいはれがあらう。そして魯も亦わしのその事を知つてゐるから、わしが他國の爲めに如何に忠實に盡さうとて、今では最早わしを謀叛人だとか、賣國奴だとか思ふ者はない。わしはかう云ふ特別な人間だと思つてゐる。そしてわしが久しぶりに國に歸れば彼等はわしを殺さずに、無事に暮らさせて與れるだらうとわしは考えてゐる、わしは自由だ。わしは幸福だ。わしの大手を振つて行けない處は天下の何處にもない。たまに餘計な心配をする者があつて、私を道に遮ぎつても暫くかうして休息して待つてゐれば貴方のやうな見知らぬ友がやつて來て、又その道をあけて與れるのだ。武王が武を以て天下を征服したやうに わしの忠は天下を征服したのだ。わしは只天命に從ひ、禮に從ふ。それがわしの忠だ。

攝政。皆の者、國民一同にお言葉を聽かせてやり度くてなりません。私が覺束ない受け賣りを致したのでは效き目はありますまいが、夫子のお顏を仰ぎながら、夫子のお口から出る潑剌たるお言葉に接すれば如何な腹の黒い奸物とても多少心にこたへない事はありますまい。大なる光りに眼のあたりふれゝば如何な人を化かすの上手な者と雖も、我身のきたなさをいくらか見ない譯には行きません。から云ふ人間も世の中にはあると云ふ事を彼等に見せしめて、少しは恥を知らしてやり度いものです。――お入でを願へるでせうか。

孔子。喜んで。併し迷信を以てわしを迎えてはいけません。わしは神ではない。わしの說く忠は禮の爲めの平和な忠であつて、一方に忠なるが爲めに他方に不和を釀し、敵に向ふの忠ではない。だがわしが只和解と平和を齎らす者と思つてはならない。わしは何處迄も禮に從ふ者と、誠なる者の味方だ。誠にあらずんばわしを力となす事は出來ない。己に克つて禮に從ふ者の上にのみわしは平和を齎らすのだ。己れの利益よりも平和を愛し、平和よりも禮を愛し、禮よりも眞理を愛する者の上にのみわしは力を與へるのだ。

攝政、沈默す。此時何處ともなく角笛の音が聞こえる。再び鳥の羽音。それから次の攝政の台詞の中に馬蹄の音がだん〲近く聞こえて來る。

攝政。（不安な顏つき）おや、思はず喜びの爲めにお話に打ち込んでゐる中に何か邪魔物が來た樣子です。（耳を傾ける）事によると、惡者達からの追手が來たのかも知れません。馬鹿者共が、又何か私の讒言でもして、夫子から私を引き裂からとでもたくらむだものかも知れません。ふむ。何でも自分に化かせない者はないと思つてゐる狐共、一つ夫子を化かして見るがいゝ。おや！これは何だ。

衞の國の公妃、鸞南子、美々しき狩獵の服裝にて左手に鞭を持ち、弓矢を從者に持たせ、大臣陳文子及びいろ〲の武器を持つ其他の從者を從へて登場。

妃。（立ちたる儘傲然と一同を見廻はす。二三歩前に進み、孔子をじつと見る。）孔夫子と被仰るのは貴方？

一座の者互に顏を見合す。

孔子。さうだ。わしは孔丘だ。

妃。矢つ張り妾の思つた通りだつたわ。そして矢つ張り妾の想像してゐた通りの御容子をしてゐらつしやるわ。何から何まで、きつとかう云ふ方にちがひないとかねて思つてゐました。あゝ本當に嬉しいこと。妾の心の眼は間違つてはゐませんでした。貴方こそ本當に麒麟ですわ。妾には貴方のお説教を伺はずとも、貴方を一見した丈けで其事がはつきり分ります。貴方こそ、待ち望まれてゐた方。現はれる事を强ゐられてゐた方。使はされた方。讃美されるべき方。祝福された方。天のいとし子。妾は滿腔のよろこびをさゝげて貴方の前に跪きますわ。（半分跪く）

孔子。お起ちなさい。貴女はどなただ。

妃。（起つ）あゝ妾、自分の名を名乘つた事がないので、それを云ふのを忘れてゐました。妾は衞國の公妃、南子です。

大臣。私は宰相陳文子と申します。

攝政。（表情あり）南子。おゝ貴女があの妃ですか。

妃。貴方は誰。

攝政。（少しまごつく）私は、――私は、宋國の攝政陽笨沈と申す者です。初めてお目にかゝります。宜しくお見知りおき下さい。

妃。あゝ、貴方があの評判な陽笨沈さん。あの謀叛人の――

攝政。（慌てゝ）何謀叛人ですと？（努めて冷靜に）はつは。それや僞が本當と云ふ事になれや本當は僞になるわけです。尤もどうせ一人の具眼者が現はれゝば眞僞の別は立ち處に判然とするのですから、そんな有り來りな誤解をうけたつて私は平氣は平氣ですがね――。

妃。本當にね。

大臣。（そつと公妃にさゝやく）お妃。藪蛇をやつてはいけません。

妃。（無頓着に攝政に向ひ）そして貴方は孔夫子をお迎えに入らしつたのですか。

攝政。孔夫子の御危難をお救ひに參つたのです。兎角眞理の世にはびこる事を喜ばない小人共がこつそり夫子を此山中に幽閉して御難儀に遭はせて居るとの由を聞いたものですから驚いて飛んで來たのでした。然し、まあ幸に夫子の御身にさしたるおさはりの無いうちに首尾よくお救ひする事が出來たと云ふ事はお妃方にも喜んで頂き度いものと思ふのであります。

妃。（一寸いやな顏をする。）本當にお手柄でした事ね。御名譽は永く貴方の黒いお名の上に殘る事でせう。そして貴方はそのお手柄の代りとして、夫子を迎えて、貴方のお國の騷動を鎭めやうと云ふおつもりで？

攝政。いや〳〵。そんな事は——そんな事は、私の念頭には無かつたのです。

子路。失禮ですが、貴方は先刻、直ぐ「その代りに——」と被仰つたではありませんか。

攝政。左樣。それは勿論、さう云ふ事になればそれに越した幸せはありませんからね。しかしそれは要するに第二の事、結果に過ぎなかつたのです。

妃。そして首尾よくお約束をなすつたの？

攝政。（孔子の方を一寸見て）まあ、私の忠誠は漸く偉大なる具眼者に認められる運命に遭遇したと云ふわけです。

妃。（大臣に向ひ）それ御覽な。お前さんがぐず〳〵してゐたものだから折角麒麟をつかまへに來て人に先きに取られて了つたぢやないの。

大臣。（妃に鋭くさゝやく）お妃！私に「お前さん」なんて、そんな言葉づかひをしちや駄目です。「お前」と被仰い。「お前」と。

妃。（大臣を睨む。）妾の腰掛けをお出し。ぼんやりしてゐないで。（大臣、床几を差し出す。妃それに腰をかけ孔子達に向ひ）貴

方々はそれではさぞおひもじかつた事でせうね。一體幾日こんな處にとじこめられて居らしつたの？

子貢。七日七晩。

妃。まあ、七日七晩の間全で絶食しておゐでなすつたの？

孔子。一度飯を食べました。

妃。如何して？お米を持つてゐらつしやいましたの？

孔子。いや、番卒から賣つて貰つたのです。未だそれ丈けの金が其時は殘つてゐたものですから。

妃。まあ、賂をなさつたの？

孔子。見やうによつてはさうも云へる。

妃。流石の聖人も食の前にはさう清廉ではゐらつしやれないものですわね。

孔子。わしのする事は皆善いのだ。清い水は潔白であらうとする事を知らない。わしにもつと持ち金があつたらわしはそれを彼等に賂して此處を拔け出たであらう。俗人は金の爲めに心を賣り、又心を賣らせる。それが賂だ。わしは金の爲めに心を賣りはしない。人間を賣りはしない。却つて金を賣つて彼等の善行を買つてやつたのだ。現代ではいろ〳〵の事が位置を顚倒してゐるので人は兎角分りきつた事を間違へるのだ。わしとわしの弟子達との生命と、使命とをそれで救ふ事を彼等に得させれば金としては手柄過ぎるのだ。孔子は人命の爲めに金を賂したと貴方々は皆に云ひふらすがいゝ。人間の爲めに從順につかはれて居さへすれば金は重寶なものなのだ。別に賤しむに當らない。

妃。あんまり重寶過ぎるので貴いものになり過ぎたのですわね。

孔子。人々は眞に貴いものを知らないのだ。眞に貴いものゝ有り難さを知らないのだ。だから貴くないものを貴び過ぎ、有り難がるのだ。今の世で人は暴君や富者を責める事は出來ない。彼等に今の如き勢力を有らしめるのは人々があのやうな權勢や金錢を何よりも貴んでゐるからの事だ。多數の貴ぶものが勢力を得るのだ。人間の利慾はその名譽心か

ら遠く離れられるものではない。多數の賤しむものを獨りで貪る强慾者はない。彼等は利に脆い如く又名譽の前に弱いのだ。眞に貴いものを知らざる彼等は又眞の名譽と不名譽とを知らない。凡ての災厄が此盲目から生じる。わしは此盲目な價値觀を改める爲めに人々に學を奬め、以てその智能を明かならしめる。そして人々に貴きものを教え、それを尊ぶ事の幸を教え、かくて其知識によつて彼等にあらゆる物の評價を正しくなす事を得さしめる。物の評價が正しく出來るやうになるに從つて、人々は物の價値の順序を知り、自づと守るべき物を守り、捨つべき物を捨てゝ不幸を感じない。且つ又自分の名譽にも幸福にもならないものを奪い合つて、徒らに人を苦しめたり、人を嫉むだりするやうな事はなくなる。かくて、あらゆる物は皆正當の地位に公平に配列せられて、禍を生むやうな事はなくなるのだ。

妃。けれども人間をそんな風に教育して行くとすると、世の中が本當に公平になる前に生意氣になる時代がありはしないでせうかね。正しい理解が來る前には長い誤解があります。本當に善いものが出ると、それにかぶれた耐らなく悪いものが出ると云ふ事は世の中の常です。不正な時代が悪いのは云ふ迄もありませんが、又生囓りの中途半端な時代と云ふものも隨分嫌なものです。頭よりは心を尊び度いものです。頭許りで道徳的になつた心算でゐるよりも、そんな理屈は知らないでも心が質朴で善良である方がどんなに美しい事でせう。熱に浮かされたほてつた頭で、無我夢中でする感情的な行爲も感心は出來ませんが、又氷のやうな心を以て冷やかにせゝら笑ひ乍ら一人で思ひ上がつてゐる僞君子も隨分片腹痛いものです。どうせ自尊心と云ふものは人間の附き物ですから、一滴の道理でも飮むだ者はきつとそれ丈けの誇りを増すのです。その一滴だつて實は人から盜んだものであるくせに、全で自分一人の力で山の奥から掬むで來た珍しい靈水でゞもあるかのやうに、其結果は十層倍の自慢にもなるのです。人間は自慢し度くて堪らない動物です。此病氣の爲めに一滴の良藥は十滴の毒液を呼び寄せて、結局害の方が九滴丈け多い事になるのです。一人の賢人が現はれゝば百萬の僞善者が現はれると云ふのはさう云ふ譯です。なるほど、貴方のお力で人民はえらくもなるでせう。貴いものも知るでせう。しかも、其實誠實からは遠ざかるのです。自然の人情や、謙遜からは遠ざかるのです。上を敬ひ、主

に忠順であると云ふ民の本當の美德からは遠ざかるのです。人を輕蔑する事丈けは達者になつても、本當の禮からは遠ざかるのです。妾は世の中が正しくなる事は心から望みますが、人民が此上反抗的になつて、冷たい自尊心許りを持ち、生意氣になる無禮な、醜い時代を見度くはありません。

孔子。僞善を憎むものが二つある。そは眞なる善と、惡とである。僞善を憎むもの必ずしも善ではない。惡人も亦之を憎む。さかしき僞善者は僞善を責めて、善を愛する事を裝ふ。だがわしは曰ふ。僞善者の多いと云ふ事は亂暴人の多い事よりはとも角も進歩であると。正しき時の來る事を怖れるが故に、その經程の上に來る時代を憎む事を恥じなければならない。水の性質を知るものは一時の混濁を怖れない。民は水に似てゐる。そはたやすく動搖をうけ、又濁る。しかし長い間にはその比重に應じて澄む事を欲してゐるのだ。禮に就く事は民の最上であり、又天性である。水が如何に荒れ狂ふとも、遂に平靜に歸る事を望む如く、民は畢竟禮のうちに安福を求めてゐる者である。貴方々は此事を信じなくとも眞の支配者は反亂が彼等の本性には非る事、いかに虐政に對してすらも彼等が辛棒強く亂暴に出づる事を避け度がるかを知つてゐる。民は自ら禮を望んでゐる事を知らずとも、望むでゐるのと同じである。長い間には次第に自らそれを望んでゐた事、又ゐる事を否應なしに覺るやうになるのだ。河の流れるのは水の知る處ではない。愚人が思ひもよらぬ時勢に遭つて後、周圍の勢で止むを得ずそれに從ふやうになる事に賢者は最初から進んで從つゐる。土龍は日光に浴する者の幸福を知らない。そしてそれを知らないと云ふ事で罰せられる。長い〳〵間人間はその頑冥と無知の爲めに罰せられるであらう。だが結局は導かれる方に導かれるのだ。水は高き方に流れるを得ず、人は己れを造つた者に抗する事は出來ない。

妃。さう云ふ譯だとすると、貴方なんて方もつまりは此世にゐらつしやらなかつたとしても同じ事になるわけですわね。

孔子。同じ事だ。又同じでない事だ。だが其事は何れであれ、生れた者がその義務を盡さなくもよいと云ふ事にはな

らない。義務を盡すと云ふ事は人間の本分であると共に本能である。此本分と本能とが實は調和するやうに出來てゐる處に生れたと云ふ事の深い意義があるのだ。又幸福があるのだ。而して、わしの云ふ事を信じなさい。人間はどうしても此意義なしには生きて行けないやうに造られてゐるのだ。人々は皆暗がりの中に手探りに此生の意義を求め、間違つた物を掴へて本當のものと思つてゐる。誰も自分の生活が無意義なものであると心から信じてゐる者はない。わしが生れ、遣はされたのも即ち此意義を明かにし、正しい本分の道に從ふ事の樂みを示して、此亂世の據り處となり、生れたと云ふ事の意義を人々に成就せしむるに與らんが爲めであるのだ。此事はわしが生れなかつたと云ふ事と同じではない。

妃。貴い御使命ですわね。處が悲しい事には貴方が遣はされて入らしつた處は貴方の命令者が想像なすつたよりも尙ほもつと亂れてゐたので、お氣の毒にも貴方のお言葉に從ふ國は何處にもありませんでしたのね。

孔子。さうだ。わしの聲に答へた者は何處にもなかつた。わしの叩く戶をあけた者は何處にもなかつた。だがわしの聲は消えなかつた。或る者は聞かず、或る者は耳を塞いだが、わしの聲はあらゆる家の隅々迄も響いたのだ。見よ、わしには既に三千の弟子がゐる。味方がゐる。此三千のつはものは三千萬の軍よりも強い。わしのしたゝらす一滴は百萬の毒液を呼ぶとも、しかしわしの一滴はその百萬の毒液よりも強いのだ。

攝政。しかし夫子のお聲に答へる者は何處にもなかつたわけではありません。此處に一人居ります。

妃。おや〳〵、貴方は未だ夫子を引き入れるおつもりなの。此世で一番貴方の味方になりにくい方を味方にするおつもりなの。

攝政。それなら誰が私の味方になつてくれるのです。

妃。妾がなつて上げますわ。それが貴方のやうな賣國奴には一番相應はしい味方ですわ。

攝政。何で私が賣國奴です。

妃。では貴方は屹度御自分の國をお賣りにならないとお誓ひになる事が出來て？

攝政。誓ひますとも。國の爲め、民の爲めには君に叛くと云ふ自分の汚名をさへ被て省みない私です。
妃。しかしそれでも未だ凡てを擲げうつた事にはなりませんよ。
攝政。何だか貴女の被仰る事は私にはよく分りません。しかし貴女が私の味方になつて下さる事が出來ると云ふのはどう云ふ譯です。
妃。貴方と妾とが心を一つにして力を合はせれば二つの國を合併させる事も出來るぢやありませんか。國と國との合意の合併が出來れば侵略した合併よりもどんなに文明的で、有益な事か分りはしません。さうすれば他國の暴力に對してだつてひどい災害をうける事はありますまい。それに貴方の國の國民と妾の國民とは氣質も似通つてゐますからね。
攝政。なる程、それも大きにさうですが——
大臣。お妃。貴女は此處で輕々しくそんな大それた口契約をなさるおつもりですか。飛んでもない盜賊を呼び込んで後で何が無くなつた、かにを取られたと騷いだつて取り返へしはつきませんぞ。
妃。自分が盜賊だもんで。
大臣。何ですつて？ヘン。これだから位置の高い者には盧禮やおべつかが必要になるのだ。正直に國の爲めを思つてうつかり何かに反對すれば直ぐ途徹もない猜疑がかゝるのですからね。
攝政。まつたくです。まつたくです。
妃。おゝ、貴方は誤解されて居らつしやるのですね。お氣の毒な。自分は誤解されてゐる、誤解されてゐる、と云ふのを唯一の楯にして、其陰げで惡事を働く者もありますが、「正義たる事は誤解される事」と云ふ諺もありますからね。
攝政。其通り。其通り。尤も只誤解されてゐる許りでもないのです。實は誤解してゐなくとも、誤解してゐるのと同じ事にして了ふのです。それは私情の問題で、理解するしないの問題ぢやないのですから。
妃。しかしそれが矢張り誤解ですわ。お氣の毒ですわね。妾の國にでも居らつしやれば眞價にはちやんとそれ相應な

安全な場所を與へて上げる事が出來るのに。

大臣。お妃。お妃。口を辷らしちやいけませんよ！

攝政。お妃。貴女樣は本當にお眼の高い方です。貴女樣のやうな君主を戴いてゐる國民は幸です。

妃。（だん〳〵誘惑的に）いゝえ、妾は君主ではありませんの。君主は妾の夫の靈王です。しかし王は永い御病氣で二十年もずつとお床に就きつきりでゐらつしやるので、實際の國政を司つてゐる者は妾なのです。

攝政。えゝ、王は御病氣で、……？　そして今でもずつとお床に就いてゐらつしやるのですか。

妃。（淋しさうに益々誘惑的に）えゝ、今では南の方の氣候のいゝ離宮にずつとお移しゝてあるんですの。妾は、いくら國をよく治めて行き度いと思つても矢つ張り女一人の腕ではね。

攝政。あゝ、それは何ともお氣の毒な。――

妃。貴方が誠實な立派な方と云ふ事は眞理が證明してゐますわ。だつて此不正に與みする筈のない孔夫子が貴方を信用なすつて、貴方に力を添へるお約束をなすつたと云ふぢやありませんか。こんな確かな證明が何處にあるでせう。おゝ貴方のやうな立派な大臣がゐてくれたら……

攝政。（陶然として我を忘れ）おゝ、貴女樣のやうな皇后に仕へてゐられたら……

妃。妾のやうな皇后に仕へてゐられたらどうだと云ふの？　陽朱沈さん。

攝政。（思はず身を乘りだして）おゝ、もしもさうだつたら私は、私は、……身命を擲うつても。

大臣。チヨツ！　何たる事だ！　言葉づかい迄そつくり變つて了ひやがつた。

妃。でもそれはお互に出來ない夢ですわね。お國が違ふのだから。

攝政。どゝ、どうして出來ないのです。國を合併すると被仰つたではありませんか。

妃。（笑つて）あんな事冗談よ。どうしてそんな事が出來るでせう。妾の方で出來たつて、今の境遇にゐる貴方のお力で。

さうでしよ？陽笨沈さん。

攝政。國として出來なくとも私一人でやれない事はありません。何をお笑ひになるのです。どうしてそれがいけないのです。「國道有るに富貴ならざるは恥なり。國道無きに富貴なるは恥なり」とは此處にお居での孔夫子も云はれたお言葉です。昔から無道の國を逃れて有道の國に赴き、その志を全ふした仁人はいくらも例のあるとです。第一此孔夫子を御覽なさい。道に忠なるが爲めに、祖國に對する小さい忠を捨てゝ他國を周遊しておゐでになるではありませんか。

子路。(憤慨して旁白)馬鹿！　道が違ふわ。此奴先刻自分を理解して貰へればとか何とか云つたつけが、此位腹の底迄理解されたら本望だらう。ふむ。何と云ふ態だ。

妃。(溜息を吐く)あゝ、誰か妾のわきにゐて、妾をたすけて力になつて呉れる善い人間がゐてくれたら。妾は本當にさう云ふ忠義な賢い家來がほしいのです。

大臣。私が、私が、ゐるではありませんか。

妃。えゝ、政治の「せ」の字も構はないで夜晝妾の後をつけて廻るより能のない裏切り者がね。

大臣。そして貴女は私の代りに此色魔を不貞な寢所へ引つ張り込まうと云ふのですか！あゝ、畜生！かうなつてはもう破れかぶれだ。何もかもぶちあけて了へ！　おい、攝政。好色狐。まんまと俺達の蹄係にかゝつて脆くも賣國奴になりおつたな。

攝政。何、蹄係だと？ヘン、君は自分が蹄係にかゝつたもんで苦しまぎれにそんな出鱈目を云つて、人をおどかすつもりだな。君こそお拂ひ箱の泥棒狐だ。

大臣。ふむ。顏色が變つたな。不安の餘りにそんな事を云つて此方を化かさうとしたつて、此方は一枚上は手の古狐だ。口惜しけれや、此お妃に訊いて見るがいゝ。化かされたのは君か、僕か、と。

攝政。(立ち上る。)お妃。お妃。お妃！　一體どうだと云ふんです。あゝ、私は貴女樣の前にかうして....(と妃の前に跪く)

大臣。(刀を抜く) さあ、お妃。何とか被仰い。一か八か。俺は此劍で‥‥

妃。([illegible]て大臣を一寸打つ)大臣。陳文于。妾の前です。孔夫子の前です。そんなものを引つ込めてお了ひなさい—(興奮して笑ふ)あゝ、面白い。妾は之で氣がすんだ。

攝政。(顫へながら)何ですと。お妃！ あゝ俺は夢にうなされてゐるのか。それとも死ぬるのか。

妃。(冷やかに)陳文于。妾の可愛い忠臣。心配させて御免なさい。お前さんが苦しまぎれに眼をつぶつて出鱈目に放つた矢は運よく中つてゐたんです。妾は一寸孔夫子に芝居を見せて上げたのよ。聖人が仁けの餘りに買ひ被る人間と云ふものゝ本性は大抵こんなものだつて云ふ事をね。

攝政。(絶望的に冠り物をたゝきつける)畜生。あゝ、お妃！貴女は私をいゝ傀儡にしたのですね。何の恨みがあつて貴女は私にそんな——そんな殘酷な死に恥をかゝせるのです。あゝもし之が本當なら‥‥

妃。お氣の毒ながら本當です。でも妾が貴方に何の恨みもありやしないと云ふ事も本當よ。

子貢。もう澤山だ！芝居は分つた。凡ては孔夫子に對するあばずれ女の恨みに過ぎないのだ。馬鹿々々しい反抗に過ぎないのだ。此妃は自分の芝居に何とか淺薄な理由をこじつけてゐるが、實はそんなわけじやないんだ。只闇の光りに對する生れつきの憎惡に過ぎないのだ。此妃は始めから其つもりでやつて來たのだ。評判な孔夫子と云ふ人物がどんな男か一つ見ておくのも話の種子位ひに思つて。そして一應その人物や何かをためして見た上で、事によつたら一寸引つかけても見、又事によつたら一寸冷やかしてやらう位に思つて來たのだ。併し其事は此大臣には何だか不安だつたので大臣はグズ／＼してゐたのだ。處で孔夫子と云ふ方はどんなによく相手の腹の底迄見ぬいてゐらしつてもあんまりひどい人の醜惡を露骨にあばき出して罵るなんて事のお出來にならない方だ。そんな場合には只一言お叱りになる位が關の山の聖人だ。併し此若い俺にはそれでは我慢が出來ない。大人氣ないやうでも矢つ張り惡意を持つものゝ見えすいた醜さは一寸皮をひんむいてやり度くなる。そして光りに對する智慧は闇に向つても如何に鋭いものかを示してやる必要を

感じるんだ。だから俺は序でにもう一皮むいてやらう。此見榮坊の女は自分が王后の身であり乍ら夫子をこんな遠くの山中迄態々出迎えに來たやうに思はれては業腹なので、態と獵服を着けて狩をしに來て、偶然に遭難中の夫子を見つけ出した體にしやうとしたんだ。そして一つ恩を着せうと思つた處が、一足先きに此攝政が來て了つてゐて、其目錄見をふいにして了つた。おまけに夫子との一應の契約迄濟んだ後だつた。それが第一此女の疳にさはつた。始めに此女がいやに興奮した調子で夫子を崇め奉つたと云ふのも實は妃腹の中にさうした疳が起つてゐたからの事だ。處が其お世辭にも拘はらず、夫子のお言葉は中々嚴しかつた。其傲慢なお世辭も、やり込めるつもりの詭辯も、此夫子には全で齒が立たなかつた許りか、あべこべに腹の底を見拔かれて、ピシ々々と痛いお小言を喰つてゐる氣が此女はしたんだ。それで尊嚴を傷けられた此負けぬ氣の妃はむら／＼と業を煮やして「おのれ憎い孔子奴」と思つたのだ、此お芽出度い攝政を得意な色仕掛けで弄絡しにかゝつてまんまと成功し、夫子から奪ひとつた得意さで、女らしい勝鬨をあげ、「之でせい／＼した」と云つたのはさう云ふわけだ。

妃、憤然として大臣に眼くばせする。大臣劍を拔いて子貢を斬らんとするのを政攝も亦劍を拔いて割つて入り、それを遮切り止む。

子貢は腕を組んで大臣を冷笑する。

攝政。君が亂暴をするなら僕も家來の面前で死に耻をかゝせられた自暴腹だ。今となつては此善人の血を見す／＼君に流させる氣にはなれない。決鬪の相手なら僕がやる。お好みなら軍勢の力に訴へても。

大臣止むなく引っ込む。

顔回。（子貢をなだめる）子貢。もう充分だ。君は少し云い過ぎた位だ。

子路。何で云ひ過ぎたもんですか。僕はもつと腹が立つてゐる。此怪しからぬ冒瀆が許せるものか。

子貢。何、僕はもう此上何も云ひはしないよ。只ちよつと事柄をはつきりとさせれや僕の氣は濟むんだ。こんな馬鹿々々しい騒ぎに夫子を擔ぎ出すのは勿體ない。僕らで澤山だからね。僕が一寸片付けてやつたんだ。

子路。あゝ、色を慕ふやうに德を慕ふものを俺は未だ見た事がない、とお嘆げきになつた夫子のお言葉をしみ〳〵思ひ出す。だが、たはけた芝居のおかげで早く事柄に鬼がついて、餘々遠い未のくんだり迄夫子の御足勞を煩はして貴い御時間をおつぶしにならずに濟んだのは一方此賢女の手柄でもあつた譯さね。

子貢。惡は惡同士お互に成敗して結局善の道を開けさすんだ。うまく出來たものだ。ハツハツハツ。

子路。ハツハツハツ。

攝政。（劍を鞘に收め）あゝ、俺は結局何からも見捨てられて了ふのか。

孔子。攝政。貴方は決して惡い人ではない。よし貴方の云つた事には僞りがあらうとも、又貴方の腹の中には多くの不忠者や、惡企みの野心家がゐやうとも、貴方は惡人ではない。だがわしの名望の前に跪く如く、貴方は又色の前に跪く。わしに會つてゐる時はわしに從ふが、世俗が來て誘ふ時には又わしに背を向ける者をわしは弟子となす事は出來ない。わしの爲めに凡てを擲げ捨てる勇ある者のみわしの弟子となる事が出來るのだ。

攝政。私は貴方をお救ひしたのに貴方は私をお捨てになるのですか。

●

孔子。攝政。貴方が此處でわしを救つて下された恩はわしは忘れない。だがわしは忙がしい。それにわしはもう既に歩き疲れた。口で說く事にも疲れた。わしの力や、勇氣や、熱心は素より少しも衰へはしないが、併しわしの體にはもう既に老衰が來てゐる。わしはもう前のやうに體で充分に働く事が出來ない。わしは之から魯へ歸る。そして之からの餘生を著述に捧げやうと思ふ。

子路。ではお歸りになりますか。

子貢。お筆をお執りになりますか。

孔子。おゝ、わしはさうしやうと定めた。先刻見た夢はわしにその道を示すお告げであつたのだ。わしは之から筆に全力を傾けて先聖の道を世に傳へ、後世の人々に人生の本道を示して、永く世の據り處となす事にわしの餘生を靜かに

捧げやうと思ふ。それが天の御意である事をわしは今感じる。

顔回。それが宜しふムりませう。

妃。ふむ。現代に失望して後世に知己を待たうと云ふお考えですね。御尤もですわ。貴方はその事に任して伯夷叔齊の例に倣はうと被仰るのですね。飽く迄も此現代に踏み止まつて、聖い血を流しながら今現に生きて苦しむでゐる人達に藥を施さうとはなさらないで、安樂なお仕事の中に逃げ、後世の知已なぞと云ふ空漠とした無形の愛人に貴方の愛を注がうと被仰るのですね。おゝそれは何と云ふ幸福な、しかし易しい事でせう。貴方が捨てやうとなさる者こそ、貴方が一番愛想をお盡かしになる者こそ實は最も貴方を要求してゐる重い病人であるのに、貴方はそれを振り捨てゝ、安穩なお書齋に閉じ籠らうと被仰るのですね。なるほど。それは仁者でなければ、本當の聖人でなければ出來ない事ですわね。

孔子。禍なる者よ。呪はれたる者よ。口先き許り巧みにして眞理に緣なき者よ。自ら癒ゆる事を欲しない病人をいかな名醫が治す事が出來るか。眞理を敵とする者にいかなる聖人が物を與ふる事が出來るか。そなたはそなたの一番美しい晴着をそなたの闇の中に着て行かうと思ふか。宴會に着て出やうと思ふか。そなたの化粧した顏を盲人に見せやうと思ふか。眼あきに見せやうと思ふか。誰かそれを知り乍ら唯一つの種子を灰の中に投げ捨てる者があるか。過つて改むる心なき者をわしは如何ともする事は出來ない。改むる心あり乍ら過つ者のみわしは改めさす事が出來るのだ。おゝ幾千幾萬の種子をわしは不毛の地に投げ捨てた事であらう。眞理を見れば敵と思ふ頑なる者にいかに多くの眞理をわしは惜し氣なく叫んだ事であらう。唯わしをへこまさうとして尤もらしき僞りを弄ぶ者にわしはいかに諄々として倦まずわが道を述べ語つた事であらう。おゝ養ない難き者よ。石の如き心持つ者よ。わしはそなた達の上にも平和なれよと望んでゐるのに、そなた達は生きむが爲めに無闇にわしを敵とし、わしを恨む。わしは何の傷をも受けはしない。だがそなた達の國はそなた達の望むがやうになり過ぎるであらう。邪淫の妻は天を暗くし、陰謀と叛亂とは地に相繼いで起り、恨みと呪咀とは國内に漲り、そなた達がそなたの夫を裏切り、苦しめた如く、そなた達を裏切り、苦しめ、そなた

達は罪深き闇の中に弑害の幻影を見ておのゝき、そなた達を賣國奴と呼ぶ暴民の襲來を防ぐ者は無くなり、癩病人の如くそなた達はうめく時が來るであらう。人の事のみ議する者よ。天罰を畏れる事を知るがいゝ。

妃。(ある恐怖を感じておのゝく。前の如く勇氣なき、反抗心を以て)妾は貴方のその聖人らしい呪ひのお言葉に對して、反對に唯から祈ります。貴方の之から骨を折つてお書きになる多くの書物が何時か亂暴人の手で、燒かれて了ふやうな事がないやうに、そして後世に知己を獲やうと云ふ貴方の淋しい お志しが空しく なるやうな事がないやうに、と。

孔子。たとへ人間の惡意がいかにその燒かれる事を望まうとも、又たとへそれの總ては燒かれ、わしの教を奉づる者は生き埋めにせられやうとも、わしの教え、聖人の道は なほ益々生きて行くであらう。何人かゞ死を賭してもわしの書を隱すであらう。もし一冊でもわしの書が此世の何處かの隅に殘るならば、地に生命のある限り、幾度の大雪に蔽はれても春の地からは芽が萌え出るやうに、わしの教えは地の底の底迄も浸み込んで、人の心のある限り、萌え出る事を止めはしない。天に非ればわしの生命に指をも觸れる事は出來ない。天の永久に天なるが如く、わしの道は恒久に人の心とその運命を共にするであらう。六十年の間わしは此心を信じ、此心を天下にあさり歩いた。あゝ、幾百度わしは欺かれた事であらう。だがわしは遂に克つた。わしはわしの確信の正しかつた事、わしの欺かれなかつた事を知つた。わしは人心を摑んでゐる。永遠を摑んでゐる。そしてわしは人生を肯定し、わしの捷利を信じて大空の如く悠々と生きてゐる。天に非ればわしの幸福を滅ぼす事は出來ない。——だが わしは毎も平和を愛する者の味方だ。わしはそな達の上にも等しく平和と、幸福とを望んでゐる。

顏回。早や日は暮れかけて參りました。そろ〳〵お出掛けになつては如何でムりませう。

孔子。おゝ。それでは出掛けるとしやうか。(立ち上り、杖を取る)

三人の弟子。畏まりました。

顏回、子貢、子路、それ〳〵取るべきものを取つて立ち上る。一同の沈默の間に孔子とその弟子達とは徐ろに其處を去る。

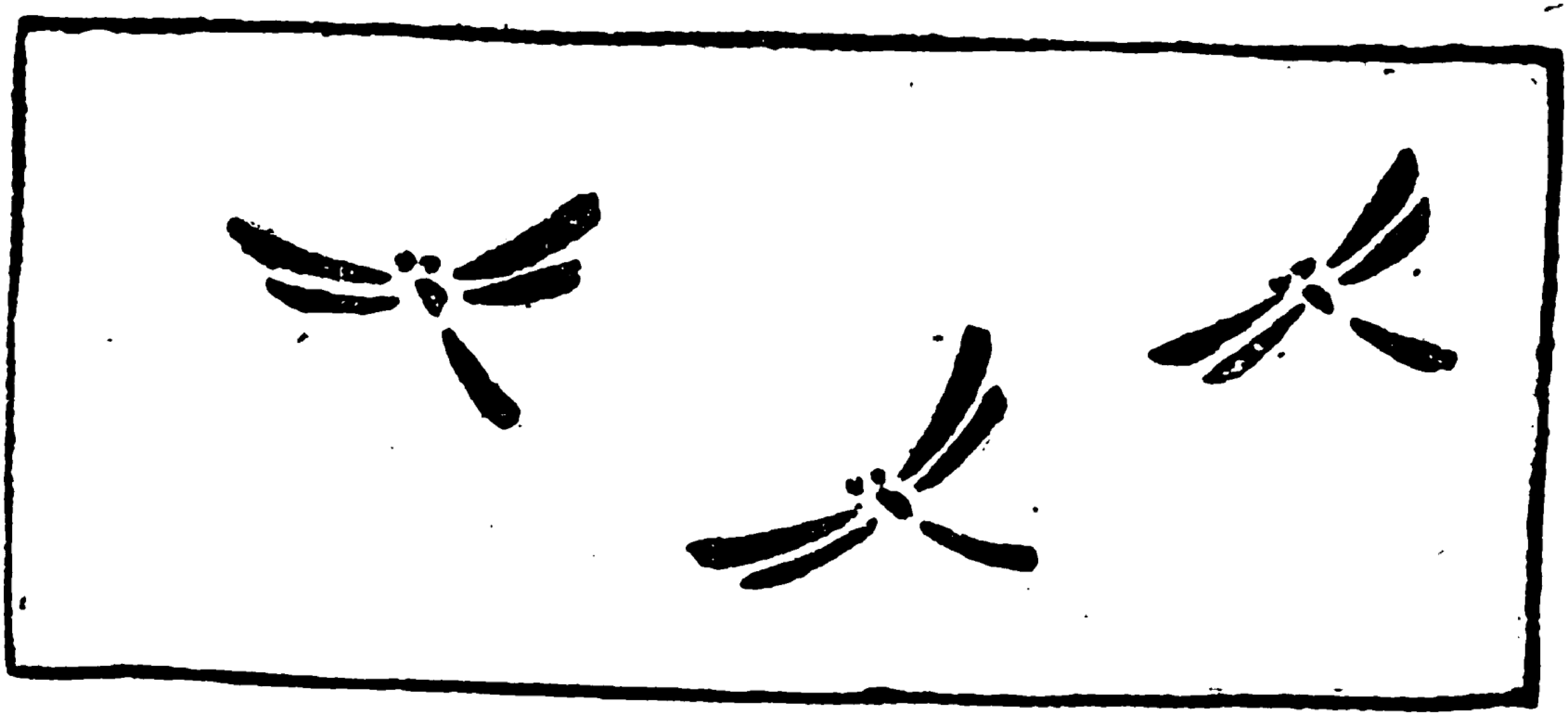
妃は立つた儘孔子を惜く〳〵しげに見送つてゐる。大臣は太息を吐き乍ら彼女の手を取つて同じく孔子を見送り、[illegible]は悄然と俯向いてゐる。

幕

一九二〇年一月二三日

作者附言。

此作は殆ど全部作り物である。孔子が陳蔡に厄に遭つたと云ふ史實はある。孔子が楚に行く時陳と蔡との二國が自分達の國の運命を案じて道に孔子の一行を遮ぎり、七日間苦しめたと云ふ話がある。其間に子貢が野人から米を買ひ入れて來て飯を炊き、顏回がその埃のついた處を人知れず食べた事でそれを竊み見た子貢が、「仁人廉志も窮しては節を改むるか」と孔子に訊ねてさとされた云々の話がある。かくて七日の後楚の太夫闘巣と云ふ者が來て孔子を救つたと云ふ事になつてゐる。又衛國に南子と云ふ妃がゐた。此宋國の女で、宋公子朝と云ふ者と姦通し、蒯聵と云ふ自分の王子に暗殺されかけたりした有名な美人で又、淫奔な妃であつた。此女が孔子を招いた時子路が憤慨して孔子の行く事を反對したが孔子は「彼正を失すと雖も我に於て何ぞや」と云つて構はず出掛けて行つて逢つた。云云の事蹟も記されてゐる。此等の事蹟を自分は勝手に配合し、結び合はせて此脚本を作つた。



おせいの失敗

岩野泡鳴

一

『…………』

おせいはひとりで頑張つて、自分の營業代理を引き受けた中尾（なかを）も出してしまつた。また、そのあとにならうとした堤夫婦も追ひ拂つてしまつた。して見ると、これから自分がもと／＼通り本氣で營業するが當前だらうと、自分でも思はれた。が、失敗であつたにせよ、一旦、人まかせにしたと云ふ、心配中にもあつた氣らくさをおぼえて見ると、そばにお竹さんのやうな手傳ひ人がゐなくなつたのを却つて面倒くさくなつた。そして堤のやうな干渉好きがゐないのを寧ろがつかりした。

自分は下宿屋のをんな主人でありながら、お客に對する三度々々のおかずを心配することなどがいやで、いやで溜らないのであつた。それも、おかねの用意があつてのことなら、まだしもだらう。それを出し手がなくなつて見ると、二日置き、三日置きには、お客さんからちびり／＼借りてゐなければならぬ。借りるにしても、また、客が少いので同じ人をわづらはすのだ。そして相變らず僅かの煮豆や鹽しやけにして置く。

『あんまり智慧がなさ過ぎる』と、堤さんがゐた時によく叱られたけれども、斯う貧乏してゐては別に智慧の出ようもないではないか？　それに、前借りを頼むに一番融通の利いた鶴見さんも、堤夫婦の味かたになつてゐたので堤が出ると間もなく出て行くことになつた。

『あなたもお出になるんですか』と云つて、こちらはそれでも隨分長いあひだゐて呉れたんだから名殘り惜しくないこともなかつた。云つて見れば、堤がこちらの家をまぜくり返さなければ、まだ／＼ゐて呉れた筈だが！。

『ちよツと都合ができまして――』

『…………………』それは、もう、度々誰れからも聽いて聽き飽きてる下宿人どもの最後の挨拶であつた。

考へて見ると、自分はこの家は飽くまで持ちこたへたいが、もう、この氣の拔けた營業はしたくないのであつた。何かしたいと云つてる大川さんが、その紹介する大工の資本家をつれて來るまで、當分のうちでも假りにやつて呉れないか知らんと思ひ付いた。そしてまたかの女のところへ行つて見た。すると、横手に向ひ合つてゐながら、最近にたつた二三度しか話をしてゐない人が、もとは酌婦であつたと云ふだけに、もう、不潔な話なんかをし初めた。

『あなたが田口さんに棄てられたなど、あんまり意久地がないぢやあございませんか？、どうせ棄てられる位なら、その前にこつちもさんざん勝手な眞似をして見せたらよかつたのです、わ。さうしたら、男と云ふものは未練を出して、きつと、こつちへよりを戻して來るものですわ。

『そんなものですか、ねい』と、おせいはにや／＼笑ひながら、とぼけて見せた。自分もそれに似たことを一度やつたのであるが、文子がまだ生きてた時で、子供のくせにわけも分らず憤慨して、それを田口の兄弟のところへ行つてうち明けた。そしてそれが爲めに却つてこちらの望みもしない離婚を早められてしまつた。自分は自分の家を何とかよくして貰ひたい爲めでもあつたが、私かにまた好きな人でもあつた。

『それに、今ぢやア、もう、わたしもをつとを死なせて自由な身ですから、なほ更ら好きなことができます、わ』と云

つて、大川さんは二階に置いてある若い會社員と關係してゐるらしいことを暗に自慢さうにほのめかした。
『…………………』して見ると、こちらへ嫌だと云つたのはうそかも知れないのだ。自分でさへまだ田口を戀しくないこともないのだから、自分よりもまだ五つ六つは年したで、肉づきもよく、毎日うす化粧までしてゐる人だから、生まれつきからの淫亂がまだやまないとでも云ふのだらうか？、こちらは却つてきまりが惡くなつて、『然し、わたしは、もう、色けよりやア喰ひけの身ですから、ね。』
『さう、あなた、そんなだつて老い込んでしまつたちやア駄目です、わ、ね。これから、御一緒に一と仕事しようと云ふんぢやアございませんか？』
『それもさうですが、ね。』さうだ、こちらは大川さんが資本家を紹介して呉れれば、その功勞に報いる條件としてかの女と一緒に營業の方をやることに話をきめてあるのであつた。
『どうせ向ふは大工さんですから、ね、こんな商買を自分でやつてるひまはないのです、わ。わたし達がいい加減に毎月の利益を見積つて、そのうちから月々幾分なりとも返して行きさへすれば、向ふに異存のあらう筈はないぢやアございませんか？、』
『…………………』こちらと同じやうなことを大川もその大工に就いて考へてることが、おせいにも分つたのであつた。『そりやア、さうです、ね。』
『だから、しつかりやりましようよ。わたしがなんでも向ふへうまく云つてゐさへすりやアいいんですから、ねい。』
『なにぶん、よろしくねい』と、こちらはまかせて置いたのだ。その大工は、けふの話では、今請け負つてる工事がここ二三日でおしまひになるので、それがすむと直ぐ一度こちらを見に來ると云ふのだ。もう、二三日のことなら、自分が今云つて見ようとして來た考へも暫らくさし控へて、そのあひだを僅かだから何とか辛抱して置く方がよかつた。
『どうせ、今、だアれもゐませんから、こんな物でもお見せ致しましようか』と云つて、大川さんは何かのとぢ本を出

して來た。それはこちらも亡くなつたおちイさんの遺物の中から發見して、田口にも渡されないでしまひ込んでゐるのと同じやうな繪であつた。

『あなたもお持ちですの、ね』と、つい、きまり惡さに却つて口へ出てしまつた。

『ぢやア、あなたのもお見せなさいよ。』

『わたしやア』と、こちらはそのきまり惡さを取りつくろひながら、うそを以つて答へた、『もう田口の方へ渡してしまひましたが、ね。』

『惜しいぢやアございませんか？』

『…………………』こちらは、然し、折角のおつき合ひに、仕かたがないので、成るべく心を落ち付けて、それでも胸には可なりほこりをおぼえつつ、半ば見ないふりをして頭から、一枚一枚をめくつて行つた。そして自分の心には、田口と一緒になる前に死んだ相思の友秋元の姉に當るお高さんのことが浮んだ。これも苦勞の極、田舍で酌婦をしたこともあると云つたが、亭主の河野さんが上京して、農商務省の官吏になつたと云ふので、珍らしくも十何年ぶりかで尋ねて來た。金時計――それはめつきであることがあとで分つたが――まだ持つてた。そしてそれからは殆ど毎日のやうに遊びに來て、しまひには、こちらの持つてる繪をまで見せるやうになつた。すると、お高さんは意外にもその說明までよく知つてるのであつた。

そのうちに、その亭主の河野さんも獨りで訪問して來るやうになつた。こちらはお高さんのやうすから見ても、少しかねを持つてゐさうであつたので、渠がいろ〳〵變なことを云ひ出すのを柳に風と受け流しつつ、多少の資本を出させようとした。渠は出す、出すと云つてなか〳〵實行しないので、時々はその催促をしに、向ふの家へも行つた。そしてそんな時にお高さんが買ひ物に行つて留守なこともあつた。それがまた意外にもお高さんの燒き持ちの種となつて、こちらとの仲は喧嘩になつてしまつた。そしてその向ふの理由と云ふのは、こちらも繪を以つて樂しんでるほどだから、

どんなことをしたか知れないと云ふのであつた。

お高さんには亭主があつた。そしてこの大川さんには若い男がと思ふと、おせいは自分の離婚された身の、ただ獨りぼッちをいやな氣になつた。そして、

『あなただッて、これからまだいい芽が出て來ますよ』などと云はれたのをも、何だか遠いところに聴いてゐた。そこへ、

『おッ母さん、なにか』と云つて、政直(まさなほ)がそとの井戸端まで來てゐるのであつた。

『…………』うちが明けッ放しだと云ふことに氣が付いた。下の部屋々々は奥までがら明きで、お客さんは二階にたッと二人ッ切りゐるだけだ。これではまるで商買にはならない。然しうッちやつても置けないので、大川さんが。

『まア、およろしいぢやアありませんか』と云ふのをふり切つて、いとまを告げた。そして、そとへ出てから、政直を睨らみ付けて、

『あれだけ留守番をしてゐなと云つたのに！』

『なにか！』渠はこちらに叱られたのも平氣で、その小さいからだを地べたに突ッ立つてゆすつた。

『まるで氣ちがひぢアやないか、ね』と、つい、こちらも自分が田口などに云はれたことを以つてまた子供を叱り付けた

『さう、おッ母さんの云ふことを聴かないと、お前もたイさんのやうにお父(とつ)アんの方へやつてしまうよ！』

『いやだアーなにか！』

『馬鹿だ、ねい！』おせいは子供をわざと返り見ないで、井戸端からとぼつてどぶ板の上をせか／＼と五六歩あるいて、勝手口から自分のがらんどうのやうに感じられる家へ這入つた。これが若し政直でもゐなくなつたら、どんなに自分は寂しからうと思つた。が、

『よう、おツ母さん、なにか、なにか』と云つて、あとをついて來た子があまりにうるさいので、財布から五厘を出して、

『ちやア、これで遊んで來るんですよ』と命じた。そしてかの女は自分で今、私かに大川で刺戟を受けて來た寂しみの味はひを何だかもツと續けてゐたかつたのである。

長火鉢に消えかけてゐた火に炭を添へてやつて、そのふちへ兩の肱を立てて考へて見ると、田口とまだ、ふたりツ切りで、死んでしまつてもいいやうな情愛に落ちてた時が今更らのやうになつかしかつた。おかねも入らなかつた。衣物も欲しくはなかつた。無論、子供の苦勞などは夢にも知らなかつた。ただ、健康なからだと戀とがあればよかつた。さう云ふあまい世界は今では夢になつてしまつた。大川さんなどは產まずめであつたからよかつたものの、こちらは子供ができて苦勞が增した。子供が死んで悲しみが加はつた。そしてその苦勞や悲しみの爲めに年を取つて、意久地がないやうに嫌はれ棄てられてしまつた。たださへ意久地がなかつたものなら、この今の馬鹿々々しいやうな、詰らないやうな位置に在つて、田口の云ふぶしような爲めに子供や自分の犧牲にしらみをわかせた位は――この心持ちを察して呉れれば――殆ど當り前のことではないか？

今や子供の爲めに家を持ちこたへて行くほかには、何を考へてゐられようぞ？　大川さんのやうにあだし男にでも何でも肌を許していいつもりなら、こんなにからだ中をかきむしりの爪あとだらけにして、――田口から子供のことで云はれるまで――氣が付かないでゐるやうなことは、如何に自分だツても、ない筈であつた。然し、斯う云はれて氣が付いて見ると、自分ながら淺ましくもなるので、以後は少し注意して湯にも度々這入り、大川さんに負けないで少しおしろいも附けて見ようかと思はれた。世間で云ふ色はあせたとは云ひながら、まだ〳〵役に立てれば役に立つ女であらうから。と

斯う云ふことを繰り返し、繰り返して考へてると、いつまでも切りがなかつた。が、その考へてるだけでも氣が秋の

やうに澄んで來て、どこか、斯う、枯れ葉のところどころに舞ひ落ちる景色のいい山のふもとへ遠足に行つてゐて、うす暗いやうだが澄みとほつて自然と云ふ物の奥までも見えてるやうだ。そしてさう云ふところであの繪本をこッそりひらいて見たかつた。

『おい、おい』と呼ぶ聲と共に、ひどい手が二階で鳴つた。

『お呼びですか?』何げなく行つて見た。

『斯うおそくまでめしをどうして呉れるんだい?』

『さうでした、ね?』おせいは氣が付いて、俄かにあわてて出した。もう、電氣のいつのまにか來てゐたのに、まだ晩のおかずさへしてなかつたのである。

二

大川さんがつれて來た人は、兎に角資本家だと云ふから、どんなに立派な風つきをしてゐるのかとおせいが思つてたら大工は矢つ張り大工だけに——棟梁とは云へ——下司張つたおやぢであつた。中島と云つて、四十五六歳に見えるのが、家ぢうを調べて見てから、

『こりやア、もう、根つぎからしてかからないぢやア、とても持たない家です』と云つた。

『流しもとも一つ見ていただきたいのですが、ね』と、おせいにはこの方が寧ろ根つぎよりも大切なことのやうに思はれた。毎日、そのくさいにほひを嗅がせられるのが氣になつてゐないでもなかつた。

『…………』棟梁が默つてそこのくさつた板を打ちはづして見たところ、二尺幅に三尺長のどろが一面に少しも見えないほど、うす赤いみみずがうぢやうぢやとしてこんがり合つてゐた。

『あら!』おせいはぎよつとしてしまつたのである。自分は毎日その上へ知らずに水を流してゐたのだが、その流し板

をはがれたので、みみずが直接に浮き世の風に當つて、俄かに寒さをおぼえる爲めか、うへのは下になり、したのは上になりつつ、みんなでむく／＼と浪を打たせてゐる。これを見るとかの女自身も寒けをもよほして、自分や子供のからだにわかせたしらみの氣持ち惡さまでも一ときは思ひ出せた。

『これぢやア溜りません』と、棟梁も云つた。その樣子が呆れたと云はぬばかりなので、若し呆れた爲めにこれッ切りになつてしまはれては困ると思ひながら、向ふの機嫌を取るつもりで笑ひを見せて、

『道理で、いつも秋になると、こゝでみゝずがよく啼くと思ひました、わ。』

『そりやア、啼きましたでしよう。』棟梁もそれを見つめてゐたのが笑つて受けた。」これだけゐるんですから、な。』

『それでどうでしよう』と、おせいはこの時だとして首を少しかしげて、渠を見ながら渠に訴へ込んだ、この家に手を入れて下さるでしようか？』

『そりやア、大川さんのお話もありますことですから――』棟梁はその手のどろでよごれたゆび先きを、後ろのかべにかゝつてる手ぬぐひ掛けの手ぬぐひの一つへこすり付けた。

『…………』おせいはそれを失敬だと見たが、向ふはその腰のたばこ入れをぬき取つて、再び茶のまの長火鉢へ行つたので、こちらもついて行つて、またもとの座に坐わつた。そしてこれも元の急須へ鐵瓶の湯をさしながら、こちらは見えるところだけ少し直せばいゝと考へてたのを、その上にも根つきまでやつて呉れるなら、尚も願つたり叶つたりだと思つた。

『あとから行きますから』と云つた大川さんも丁度そこへやつて來たので、直ぐかれに向つて棟梁の言葉じりを證據の爲めに取つて置くつもりで、

『いよ／＼やつて下さるさうですよ、根つぎをまでも』と、おせいは云つた。斯う云つて置けば、もう、渠もあとになつていやとはへんがへすまい。そしてへんがへがなくば、あとは大川がいゝやうに渠の後ろから渠をおだてゝ呉れるの

にまかせて置けるのであつた。

『ちやア、わたしも紹介甲斐があつて嬉しい、わ。棟梁だッて』と、大川はその見ッともないほど大きな太つた顔に流し目を渠の身へ使つて、『何も商買ぢやアございませんか？　まんざら損になるおかねをつぎ込んぢやアないし。』

『…………………』こちらはうまく云つて呉れると思つた。向ふがつぎ込んだかねを返せるなら、無論、返してもやる。が、若し返せないなら、いつまでも何とか云つてそのまゝにして置くつもりであることは、大川がその初めに『まア、御一緒にこの商買がやれ出せさへすりやア、棟梁の身はどうとも胡麻化して置けます、わ、ね』と云つた言葉に前以つて私かに含まれてゐたのだ。

『それでも二三百圓はかゝりますから』と、今、棟梁は大川さんに答へた。

『それくらゐは、なアに、棟梁の腕なら、ほかで直ぐ儲かります、わ。』

『さうでしよう、ね』と、おせいも自分から合ひ槌を打つた。そしてどうせ無學な男で、字を一つ讀めないさうだから、女の相ひ手としても始末がいゝと高をくゝつてた。

『………………』棟梁の中島はなほぐづ／＼考へてるやうすであつたが、おしまひにはこちら二人に云ひくるめられて、『兎に角、それぢやア、わたくしが引き受けることに致しましよう』と答へた。然し、それには、田口がたとへこの家に對する權利は棄てたにしても、その名義はまだ書き換へられてないのだから、その名義の所有者に會つて異存のないことを確かめてからにしたいとのことであつた。

『それも尤もですから、ぢやア、今からわたしが御案內致します、わ』と云つて見たが、中島さんは存外見識ぶつて、行かうとは云はなかつた。そして、

『田口さんがここまで出て來て下されば、わたくしも折り合ひましよう』とのことであつた。

止むを得ず、おせいはその日自分ひとりで宮仲へ出かけて行つて、田口にあすの十時を期して櫻川町へ中島と會見し

に來て吳れろと賴んだ。
『家の爲め、子供の爲めですから、ね。』
『おりやア面倒だからいやだ』と、田口は答へた。そツけないのはこの人の持ち前だと思つて、こちらは氣にもとめなかつたけれども、『そんなことを子供の爲めとは思はない』と附け加へたので、こちらは
『親としてそんなことがありますか』と叱つて見た。
『親としては、ね、今ひとりの子供をもこツちへ渡せと云つてるのだ。それ以上にお前なんかにかかづり合ひたくねいんだ！』氣まぐれな田口は怒つて、ぷツとその坐をはづしてしまつたので、再び取り付く島がなかつた。
『…………………』おせいはこれも亦止むを得ずにお兼のはうへ賴み込んで、田口を無理にも來させるやうにして貰ふことにして引ツ歸した。そして歸りの電車に乘つてからも考へて見るに。田口は雄作を引き取つたばかりでは滿足せず、政直をもこちらから奪ひ取らうとしてゐるのだ。それならそれで、いツそのこと、こちらをも一緒につれて行けばいいのに、さうは云はずに、こちらばかりをうツちやつて置いて、家のことを心配させようとしてゐる。そして自分ではそんなことア面倒くさいがあんまり虫がよ過ぎるではないか？たとへこちらは別として置いても、家はおぢイさんからの讓り受けで、而もそれが他日は子供の物になるのだから、お互ひにさうおろそかにすべきではない。
その翌日は、それでも、あの朝寢坊の田口が感心にも約束の十時をたツた三十分しか後れないでやつて來た。
おせいはその前からこころ待ちに心配して、大川さんとも相談してゐたのだ。
『どこで會はせたらいいでしよう。ね？』
『さうです、ね』と、大川さんはちよツと考へて、『わたしが兩方を紹介するわけですから、わたしのうちがいいでしよう。』
『それもさうです、ね。おせいは自分としては自分のうちで會ふのが本當だらうにと考へたが、こんな場合だから、わざ

とにも意地は張らなかつた。それに、大川は物好きに一度田口を見たいと云つてると、田口もこちらより少しでも年の若い女のそばの方がいいだらうし。

で、渠が來ると、おせいは自分のうちの玄關へ飛び出し、自分の待ち遠しかつた胸のとどろきを私かに、押し隱しながら、

『お早かつたのですね』と、にが笑ひをして見た。ふたりツ切りでここで向ひ合ふのは近年になかつたことだのに、こちらの心も察しないでか、渠はただこわい顏をしてゐた。尤も、この人は餘ほどの氣六ケし屋で、曾てその目かけのところから四五日ぶりで歸つて來たが、それでも歸つて來たのをこちらが恨みながらも喜んで出迎へ、『お歸りですか』と聲をかけると、

『おれのうちへおれが歸るのがさう不思議かい』と怒つた。

『何も不思議がつてはゐません、わ。』

『なアに、そのつらを見ろ！』

『…………』その時のつらは無論うらみに滿ちてゐただらうが――。『けふは、兎も角、大川さんのうちにすることになつてますから』と云つて、直ぐその方へ案内した。

すると、大川はをかしいほど樣子をそわ〳〵させて渠を立ち迎へ、

『お待ち申してをりました、わ。まア、どうぞ』と云ふが早いか、こちらに向つて、『二階がいいでしよう、ね。』

『さうです、ね。』おせいはかの女の云ふがままに自分らふたりで渠を二階へ案內した。

日曜日ではないので、丁度、この室を占領してゐる大川さんの甥だと云ふ、實は色をとこなる會社員は留守であつた。ここでおせいは大川を田口に改めて紹介した。

『棟梁も、もう來ますから、どうぞ暫らく』と、大川が云つた。

―』

『はア、――はア』とばかり田口は相變らず無愛相で――こちらには、おぢイさんがいつも、『わたしのところへ來た客に對しても茂雄は禮儀を知らないで困る』と云つてたのを思ひ出せた。『おりやア華族の三太夫や海軍大佐ぐらゐにあたまを下げるのはいやだ』とは、田口の云ふお箱であつたけれども―

坐の白けがちなのを取りつくろふつもりで、こちらは立ち上つて窓の障子を明けて見た。そして、『いい二階ぢやアありませんか』と云つた。ここへ上つたのは自分も初めてだが、自分のうちの向きが違ふ二階からのながめとはまた別で、自分らの共同井戸を見おろし、虎の門女學校の森を見渡して、多少の趣きがある。

『ちよツといいでしよう――あなたがたのお二階はまだ存じませんけれども』と、大川さんは答へた。

『…………』――おせいは大川がそのあなたがたと云ふのを、こちらをからかつてゐるのだと受け取つたので、はすにやりと笑つてその方を見た。が、直ぐそれをそらせる爲めに、『うちの二階はこれほど趣きがありません、わ。』

『でも、そとの趣きはなくツても』と、ゆツくりした口調でなほ執念ぶかく出て、『あなたがたのあひだにまた趣きがおありになりさへすりやア、ね。』

『ほ、ほ！そんなことア、もう夢と過ぎてしまひました、わ。』おもてでは斯う大川さんへさばけて見せたが、心ではこれが田口に對する恨みの言葉であつた。

『大工さんが約束通り來ないなら』と、田口はそツけもなく云ひ出した、『僕も歸ります。』

『材梁も、もう來る筈ですから。』大川さんもわがことのやうにあわてた。『まア、一緒におひるをさし上げるつもりですから。』

『僕はひるめしは喰ひません』

『まア、それでも一杯お飮みなさい、な――用意してあるんですもの。』おせいもこの時自分の座へ立ち戻つてゐたが、

このまゝ歸られては、中島があとから來てまたおこつてしまうだらうと思つた。
『然し、向ふが約束通り來ないのだから。』
『きツと來ますよ』と、首まで動かして念を押した。
『來たツて、僕は酒は飮みたくない。』
『いゝえ、これはあの社會の例ですから。』おせいはさきに一度自分の家を抵當がへにする爲めその周旋者を呼んだ時女ひとりと見くびつてか、先づ酒を飮ませろと云はれたことをも思ひ出して、大工にだツてさうして機嫌を取つて行かなければいけないことを自分の獨りぎめで示めしたのである。そして、
『お酒はおきらひですか』と、大川さんが失望らしい顔をこちらへ向けたに答へて。
『なアに、今でも少しやアいけるらしいんです──もとは隨分飮んだのですから。』
『…………………』田口はそれを聽いてゐながら、たゞむツつりして何とも返事をしなかつた。
『もう來ますでしようから』と云つて、大川が下へ行つたかと思ふと、直ぐこちらを呼んだ。で、おせいも下りて行つて見ると、『おこつていらツしやるのだから、何でもかまはず、先づ用意の物を出して置かうぢやアありませんか？ そのあひだに、あなた、棟梁を呼んで來て下さい、な。』
『さうです、ね。ぢやア──』斯う云つて、おせいはそとへ出た。そして大川さんから敎へられた中島のうちへ急ぎながら、みち／＼考へて見ると、斯うして自分を追ひ出して置いて、自分の男を却つて大川ばかりがどうしてゐるか分らなかつた、ねたましい氣もしたので、中島が佐久間町のうちで客と酒を飮みながらゆツくりかまへてゐたのをせき立てて、『どうか直ぐ來て下さいよ、あなたが約束通り來ないのをおこつて歸ると云つてるんですから。』
『歸るなら、歸つてもいいぢやないか？』
『まア、さう云はないで、ね、話はお互ひに丸く行かないぢやアまとまりませんから』と云つて、無理にも渠をつれて

來た。

『棟梁、おそいちやアないの』と、大川さんは下で大きく中島を迎へたかと思ふと、かの女がいくらお酒を飲んだか知れないが、もう、その顔を赤くしてゐた。

『…………………』おせいにはそれを見ると、また妬みのほてりを顔にまでおぼえた。そして中島を案内しながらだが、いそいで二階へあがつて行つて、思はず子供を叱るやうな氣ぶんで訴へた。『もう、大分飲んだのでしよう？』

これには、自分がまだ少しも飲みはしないのにと云ふ不平も手つだつてゐた。梁と別れてから自分は酒を飲めるやうになつたのだから、そしてさう醉はなくなつてるのだから、初めて一度梁と一緒に飲んで、自分は可なりつよいことを見せたくもあつた。

『おりやア、まだ』と、然し、梁は思つたよりも平氣で、『二三杯しか飲みやアしない。』

『さう？』かの女はちよつと不思議であつたが、飲めば直ぐ醉ひが出る筈の田口が少しもその顔を赤くしてゐないので、その云ふ通りが本當であらうと思へた。して見ると、或は、あの大川がこちらに酒をまで買はせて置きながら、こちらの留守に田口のお相ひ手も碌にしないで——まさか、全くうつちやつても置けないから、時々は出て來たらうが——實は、下でこつそり、あんなに醉ふほど盗み飲みをしてゐたのだらう。これちやア、たとへ一緒に營業をし初めることになつても、儲けをいつのまにか飲んでしまはれるかも知れない。なか〳〵油斷はできないのであつた。

三

『早く引き合はせておあげなさいよ。』あとからお膳を一つ持つてあがつて來た大川が云つた。

『…………………』氣が付くと、おせいは自分だけがぼんやりと突つ立つてゐたのである。中島はと見ると、自分の横手に坐はつて大きな四角いその顔をまじめ腐らせてゐる。それで、こちらも直ぐ坐はつて、ゑがほを兩方に見

せながら、田口に、『これが、ね、話の棟梁さんですから。』

『さうですか？　僕が田口です』と、それでも少しはしたでに出て呉れた。

『わたくしは中島と申しまして』と、棟梁は名刺を出してから、『無學なたたき大工ですから、どうかお手やわらかに。』

『…………。』こちらは、中島が醉つてゐてもおのれの名だけは讀めるのだらうと、却つてをかしかつた多少こちらに不利益な證文を書いても、どうせ本人が讀めないのだからと云ふことを田口へ一と言注意して置かうと思つてたのだが、そのひまがなかつたのだ。

『どう致しまして』と、田口も人並みのお愛相を中島に云つた。

『それで、この棟梁が』と、大川さんが口を出して、田口に向ひ、あなたがたのお宅をおかねの慾ッけ抜きにして手を入れてやらうとおッしやるのですが――。』

『慾けがあつてもいいでしよう、若しそれが當前の條件になつてれば。』

『…………。』おせいは今そんなことは云はないでもと云ふ目つきをして見せたが、田口には通じなかつた。

『人間が慾を離れてすると云ふことは、きッと、あとでうそになりますから。』

『そんなことアありません、わ、ねい』と、おせいは笑つてのけた。

『でも、うそが本當になることもございます、ね。』大川さんは中島のお酌をしながら、また變なことを云つた。『今回のお話だッて、ね』と、こちらを見て、『あなたとわたしとで、まア、うそを云ひ合つてたやうなものです、わ。それが斯う本當になつて來たのですから。』

『そりやア、さう云つて見りやア、さうかも知れませんが――。』おせいは自分の目を直ぐまた田口に轉じて、ここをしッかり頼むと云ふ意味を利かせた。この時、中島が口を切つて、

『わたくしも全く、これは幸田さんの爲めに義侠的にするつもりですが、――』

『成るほど！』

『……………』おせいが注意してゐると、田口がにが笑ひをしながら少し向ふを茶化し氣味に、なつてると見たので、『そりやア、棟梁さんの心はわたしが知つてます、わ』と云ひ添へた。

『骨は折る、あなたが御不承知と來ては、わたくしが馬鹿を見ますから、先づ以つてあなたの御意見をうかがつて置くことに致しましたのです。それでけふ、わざ〳〵ここまで御足勞をかけました次第ですが――』

『だから、どうか、ね、棟梁さんに一と言あなたからも頼んで下さいよ。』

『幸田さへ承知のことなら、僕には少しも異存のあらう筈はありません。全體、ここへ僕を引き出すのさへ不必要であつたのですから。』

『でも、名義はまだあなたになつてをりますさうですから。』

『それぢやア、最後の言葉として今度僕が申しますが、幸田さへ承知なら、僕の方には異存がありません。』

『……………』おせいが謹聽してゐると、田口は直ぐにも立ちあがりさうになつたので、『ぢやア、さうお頼みして下だすつた上は、一つ中島さんにおさしなさい、な。』

『棟梁もそれをおほしなすつて、ね』と、大川さんは大川さんで云つた。

雨方のさかづきが三度交換されてから、田口はいとまを告げた。それを玄關まで送つて出てから、

『政直がゐますから、ちよいとうちへ寄つて御覽なさい、な』と云つて見たが、向ふの心は動かなかつた。

『ろくに湯にも入れない兒なんか、見たくもない。』

『この頃アさうでもありません、わ。』こちらの顔を見て御覽なさいと云ひたかつた。大川さんにも刺戟されて、多少は氣を付けるやうになつたのである。

『思つたよりやア堅いの、ね』と、一緒に見送つてた大川が云つた。『わたし、わざと氣を引いて見たけれど、動いて來ません、わ。』

『…………』こちらは、かの女を矢ッ張りそんな氣があつたのかと見て、こちらの思つたことがいつも不思議に當たるのを私かに誇らしかつた。同時に、眞ッ赤に醉ひが出てゐる女を卑しめるつもりで、然しそれとなく、『あなたは隨分飲んだのです、ね。』

『なアに、二三度お酌して貰つたのが嬉しかつたからです、わ。』

『さうですか？』こちらは何を云つてると云つてやりたかつた。

また二階へあがつてから、おせいは自分も――どうせ自分のかねを出して買つた物だから――遠慮なく一緒に飲んで見た。が、今度はまた大川が中島にべたつくのを面白くなかつた。かの女は初めのうち渠と共に都々逸やはやり唄を歌つてゐたが、やがてはこちらがゐるのを忘れてしまつたかのやうに、かた手を突いて渠のそばへにじり寄り、他の手をだらりと突き出して、

『さア、それを飲んで直ぐわたしにおさしなさいよ、手ぎわよく、ね』などと云つた。

『…………』こちらは、かの女がこの手を田口にもして見ようと思つたのなら、田口が初めから相ひ手にしなかつたのは當り前であらうと思へた。田口は、まさか、こんな女に引ッかかるものではない。

『どうして吳れるのよ』と、かの女はおしまひには倒れて行つて、渠の膝につかまつたりした。

『…………』何たるをとこ好きだらう、ましてこんな大工になんかと、おせいは思つた。中島の方は多少こちらに遠慮してか、手を引ッ込めてはゐるが、それでもいい氣になつてるやうすが見えた。こちらも少からず焼けて來たのをただにが笑ひにまぎらして見てゐるのに堪へられなくなつてしまつた。そして自分だけはそこ／＼にして引きあげたが、輪を見せられて自分の押さへてゐるものが刺戟を受けた時のやうに、そのあとまでも、何だか寂しく、氣持ち

が惡かつた。

　こちらを出しにしてただあんな機會を付けてゐるに過ぎないのではないかと云ふ不安があつた。けれども、それからまもなく、中島は七名の手したをつれて來て、工事に取りかかつた。そしておせいも都合の惡いところを一々考へ出しては、すべて自分の云ふ通りに直して貰ふことにした。便所のつきかたが方角にそむいてゐる事を氣になつてゐたのだから、これも別なところへ持つて行つて、そのあとへ押し入れ附き二疊敷きの部屋が一つできることになつた。

　この工事中にも、雄作が學校の歸りをやつて來たので、わが子ながら、おせいは自分のこの一大奔走の結果を自慢しつつ說明して見せた。そして、

『おツ母さんの方は斯うして、思つたことが實現して行くのだから、ね――實現とは分つてゐるか、え、實際にその證據があがつて行くことだよ。だから、お前の方でも約束したことは實行して呉れないぢやア困るよ』と云つた。これはほかでもない、雄作が每日貰つてるに相違ない物。殊に贅澤なお菓子などを、たまにはこツそりこちらへもおすそわけして來いと云ひ付けてあることを意味したのだ。渠が田口の方へ行つてから、もう、かれこれ二週間にはなるが、持つて來たのは、一つの林檎を、而もたツた一度だ。

『餅菓子なんか持つて來ても、途中でなくなつてしまうから』との答へであつた。

『お前が學校でたべてしまうのだらう？』この問ひに對しては、渠がただ笑つて胡麻化してゐたのを見ると、どうもさうらしいのであつた。今、自分の喰ひたいと云ふことは押し隱して、『政ちやんだツて。お前が持つて來るのを待つてるから、ね。』

『然し、こツそり持ち出すことはできにくいから。』

『お前が貰つたものを喰べたふりをして持つて來りやアいいぢやアないの？』

『それもさうだけれど――』

「今度からさうおしよ」と命じた。そして継母のお粂に何かまま子いぢめのやうなことはないかと例の如く聴いて見たのだが。

「別に――何も」と、義作は答へた。

「…………………」おせいは、粂が子供だから、それがあつても氣が付かないのではないか知らんと、もどかしかつた。たとへば、お粂が自分のつれッ兒にはお菓子を澤山やつて、お前には少し呉れるとか、わざと御はんを喰べさせないとか、お前のしないことをしたと云つてお父アんにいッ付けるとかだよとは、まへ〳〵から云つて聽かせてあるのだが――。

工事はばた〳〵と氣持ちよく運んで、それが四日目に濟みかけると、大川さんはその前から向ふの家を解散することにして待ちかまへてゐたのだから、早速その日からこちらへ這入り込んで來た。そして茶のまにつゞく八疊の、炬燵を切つてある部屋がかの女のになり、それと内廊下を一つ隔てて、おぢイさんの代から主人の占領してゐた八疊が應接室として明けて置かれることになつた。そしておせいが自分と自分の政直とで寝起きする部屋はもとの便所のあとにできた二疊の室ときまつた。自分としては、何だか話が、違つて、主客の顛倒してゐるやうに思はれたけれども、殆ど無條件で工事を引き受けた中島の云ふことだから、自分もしぶ〳〵ながら、まア、默つて云はれるままになつた。尤も、大川さんはこちらへ中島を紹介したと云ふ行きがかりから、營業掛りになることは初めから相談づくの上であつたのである。そしてこちらも、さうなれば、第二の堺夫人ができて、餘ほどらくだとは考へてゐた。

「兎に角、けふは工事落成のお祝ひをしなけりやア、ね」と、大川さんは來早々から云つてゐた。

「だッて、そのおかねは？」おせいは斯うかの女に低い聲で注意した。

『棟梁が出します』わ、ね。』大川さんは中島にも聽えるやうに云つて、『どうせ、これも營業のあがり高から返して行けばいいぢやアありませんか？』

『それもさうです、ね。』おせいはこれにも云はれるまゝになつてゐようと考へた。すると、中島もそれは承知かして、皆のものに向つて、

『さア、早くやつてしまへよ、けふは飲めるから』と云つてゐた。

『…………』酒の支度の方は大川さんが頻りに奔走してゐるやうすであつたから、おせいはけふも自分の鼻くそをほじくりながら、大工たちの仕事を見てゐた。渠らが木を切つて、丁度うまい具合ひに當てはめて行くのが、何でもないやうだけれども、見てゐるものには面白かつた。こちらの物を切つてそれがうまくあちらへ這入る。こんなことを一體誰れが初めて考へ付いたのだらう？ 六ケしい天地や人間のことを考へるには、別に哲學とか易學とか云ふものがある。が、無學な大工にでも斯うして何でもなくできるやうに初めて考へ付いたものは、たとへ矢張り大工であつたとしても、その大工はなか〳〵えらい人であつたらう。その仕事がけふ切りでおしまひになるのかと思ふと、何だか名ごり惜しいやうな氣もした。そして、自分のそばにゐるしたッぱ大工の、夜は工手學校へかよつてると云ふのに向つて、突然、『わたし、あなたがたのやつてることになか〳〵道理があると思ひます、わ』と云つて見た。──

『…………』その大工は今奥の緣がはの腐つたところへ新らしい木を切り込んでたのだ。『そりやア、世の中のことにやア一體、道理がないことはございません。』

『だツて』と、おせいは笑ひに受けて、『さう、うまく當てはまるにやア──。』

『矢ッ張り、物の道理に合つてをりますから。』

『さう云ふやうに』と、一層冗談のやうに見せて、『おかね儲けもうまく行くといいが、ね。』

『これにやア、また、當てはづれが多うございます。』

『…………』さうだ、今度のことだツて、中島をうまくだまし込んだつもりであつたが、何だかその當てはづれになつて來さうであるのが心配になつてゐた。直ぐ、おせいは自分の室ときめられた二疊へ引ッ込んで、易を立て

て見ると、けふの落成祝ひが左ほど目出たいことではないのであつた。

明るいうちから酒が初まつて、おせいもその席なる大川さんの部屋へ呼ばれた。

『奥さん』と、それでも中島はこちらを押し立てて呉れて、機嫌がよかつた。『この、けふの御主人として、まア、一杯さします。』

『さうですか？』おせいも微笑を見せて、『ぢやア、お祝ひに一杯いただきましようか、ね。』

『わたしがお酌します、わ』と、大川さんもこちらの機嫌を取るやうであつた。

『…………………』おせいはさかづきをほして中島へ返した。すると、渠はそれを受けてから、

『然し、大工が工事もしたり、祝ひのかねも出したりするのア、開闢以來のことでしよう。』

『ほ、ほ！　そりやア、ね』と、こちらは當らずさわらずにしてゐる方がいいと思つた。

『然し、これも奥さんや田口さんの爲めにわたくしが義俠的にやつたのですから、仕かたがありません。』

『棟梁さんの心は』と、笑つて見せながら、『わたしもよく分つてゐますから。』

歳の暮れに近い日のことであつたから、直きに電氣がついた。そしてやがて皆が揃つて祝ひの手を打つた。『そのしやん／＼、おしやしやんの、しやん』が濟むと、皆と一緒に中島も歸るのかと思ふと、渠だけが殘つて、また二人の女に酌をさせた。そして、そのあひだには、また例の義俠的を云ひ出して、

『このことは田口さんには十分傳へて置いていただきたいものです』などと。

『無論、傳へますとも。』おせいは少しうるさくなつたが、さうは見せないやうに努めてゐた。

『無論』と、こちらの言葉を眞似たのがまだくど／＼と、『傳へていただかなければ――。』

『…………………』おせいも少し醉ひが出て苦しかつた。が、その苦しさのあひだにも、中島が何か云ひたいことがあるのを云へないので同じことを繰り返してゐるのだらうと思はれた。そしてそれが、――若し義俠的にはした

が、そのかねは直ぐ返せとでも云ふのでなくば、——ひよツとすると、いやらしいことではないかと思ひ當つたので、この場を自分よりも醉つてる大川さんにまかせて、早く二疊へ引ツ込んでしまつた。

あとの二人は、云はゞまア、水入らずで、ふざけ合つてるやうすである。そして、時々は、「お前ひとりか、つれ衆はないか、つれしやあとから籠で來る」などゝ歌つてゐる。また、聽いてるのもいやなほどの亂らなはやり唄をも。

夜がふけると共に、その騷ぎはぱたりとやまつたが、中島が大川のところへとまつたやうすだ。工事落成の當日から、斯う、自分のうちが淫賣やどにでもなつたかと思ふと、おせいは廊下と物入れとを隔てたこちらに、政直と共に寢てゐて、人ごとながら、向ふのやうすが氣になつて眠られなかつた。そして、大川の歌つた唄、「…………！ …」をそのきたない意味通りに心で辿つて見たりした。何しろ、たツた二疊のまへ、一つの簞笥やら、二つの行李やら、政直の机やら、身上(しんしやう)のありツたけを持ち込んだうへに、また自分と子供との寢どこを取つたのだから、如何にも窮屈で、これも氣になることの一つであつた。

四

家の所有權と營業權とをこちらが持つてゐさへすればいゝのだから、工事費の辨償は成るべく口約束のまゝにして置きたかつたのだ。が、矢ツ張り、證文にせよと云はれたので、向ふの云ふことを容れて四百圓ときめ、それを毎月營業の利益から二拾圓づゝ返して行くことに書いた。これさへも向ふの本人は讀めないのだが、こちらは自分の書いた證文通りをむな胸算用して見ると。期限はつまり二十ケ月で、二ケ年とかゝらないのであつた。

その方はいゝとしても、おせいは、一緒になつたそもそもから、自分の相ひ手なる大川とは成るべく早く手を切るやうにしなけりやアと云ふことを考へなければならなかつた。

そして、自分の營業を自分でうッちやつて置くのも馬鹿々々しいと思つて、寒さを辛抱しながら、兩手を袖の中へ引ッ込めたまゝ、臺どころの方へ出て行くと、大川は、二階のお客さんなどにはなか〱愛想を云つてるが、こちらに向つてはつけ〱と、

『あなたは、まア、奥さんだから意張つてたらいゝんですよ——さう出しや張つて來ないでも』と云つた。

『さうですか、ね？』おせいは少し勝手が違ふので、にが笑ひをしながら、わざと不滿の意味を曖昧な返事にきかせた。そして暫らくその場に突ッ立つてゐて、それとなく、向ふがどう云ふことをやつてるかと見てゐると、そのたすきがけをしてはき〱働らくやうすは、とても、あのまどろッこしい堤のお竹さんなどの及ぶところではなさゝうであつた。その代り、こちらが斯うしていつまでものけ者になつてゐるのでは自分の家ちうをかの女に自由にされてるのも同樣であらう。そんな約束ではなかつたのだが——。

然し、日常のお小使ひまでをもかの女は中島に出させてゐるので、やッとのことでこの營業ができて行くのを考へると、まア、そッとして置けと云ふ氣にもなるのだ。營業さへうまく行つて、その利益で工事費の埋め合はせがついてしまへば、その時自分は自分の權利を十分に主張し出してもいいのだと思はれた。

『もう、やがて正月のお餅をつかせなけりやア』と、大川さんが云ひ出した頃にも拘らず、中島は殆ど毎晩のやうに飮みに來て、毎晩のやうにとまつて行くのだ。

『……………』おせいはその酒の初め頃にはいつも渠のおつき合ひに呼び出されるので、度々のことをしぶ〱ながら出て行くのだが、出て見ると、渠の機嫌をも取つて置かねばならなかつた。こちらが若しかまかり間違つたことでも云ふと、渠はどんな亂暴を仕出かすかも知れないやうな醉ひざまになつてるからである。それでも、時々は政直の爲めにお菓子や學校の用品などを持つて來て呉れる。そして酒の場へ政直をも呼んで、

『いい兒だから、わたくしもこの兒は可愛がつて育てて上げます』などとも云つた。

『…………』おせいは、それちやア、まるでこちらの亭主氣取りではないかと、滑稽な感じもした。が、さうは見せないで、『どうかよろしくとお云ひなさいよ』と、子供に命じたやうにして笑つた。そして自分はこの時だと思つて、何げない顔つきをして、『一體、棟梁さん、あなたの工事にはおかねが本當のところいくらほどかかつたんでしよう？』

『そりやア、證文通り四百圓かかりました。』棟梁は斯うしか云はないのであつた。

『…………』こちらにも初めを曖昧に出た弱みがあるので、おせいは再びそれ以上に追窮しなかつたけれども、自分の見つもりでは、中島が初めて二三百圓と踏んだのに多少の思ひ違ひがあつたとしても、おそらく、まア、三百圓を出ることはなかつただらう。して見ると、あとの百圓と云ふものはこちらの弱みにつけ込んで贅澤にこちらへ押し付けたのであつた。

それに、工事と云つても、おもに手のかかつたのは根つぎであつたから、もと／＼通り根太を張り、疊を敷いてしまへば、それはおもてには少しも分らない骨折りだ。おもて向きに變つたのは、おもに、便所の位置と流しもとの新らしい溝とである。それにしても、不思議なことには、たツたそれだけのことで今までさう來なかつたお客さんが、斯う歳が押しつまつてからでも、あとからあとからやつて來た。そして大抵の部屋はつまつてしまひ、お客のひとりには珍らしい支那人の目かけなどもできた。

『わたしの腕は見上げたものでしよう』と、大川さんは自分だけの手がらのやうに中島へもこちらへも意張つて見せた。そしてお客から取る前金をすべてかの女自身が預かつてしまつて、帳面さへもこちらへ見せないのであつた。

『…………』おせいはこれちやア不安心だと見て、大川に向つて一度、『せめて帳面だけでもわたしによくお見せなさいよ』と云つた。すると、どうしたことか、大川はぷいとおこつてしまつて、

『わたしは何もずるいことはしてゐませんよ。棟梁の云ふ通りにしてゐるんです！』

『その棟梁だツて、さう勝手にやアできない筈です！』つい、おせいもつもつてる不安を漏らした。こんな具合ひで行けば、たとへ中島へは二十圓づゝは拂へても、そのあとの儲けを大川に勝手にされてしまうかも分らない。今一つ突つて行けば、その二十圓をだツて、大川が自由にして、中島へはわざと拂ひを延ばして行つて、できるだけこの營業をかの女自身の手に殘して置く算段をさせるかも知れない。そんなことをされちやア、こちらは溜つたものではないのだ。中島その人に取つても、決して都合のいゝことではない。

　それを、然し、大川はその晩、どう云ふ風に云ひもじつてか、中島の醉ひに乘じて渠を焚き付けたと見え、渠は突然、

『幸田、どこにうせる？　殺してやる』と叫んだ。

「…………」おせいはこの時、まだ宵であつたから、二階へ行つて、新客の慶應大學生を捉らへて、自分のこの家の內狀を訴へ、これも實は自分を棄てゝ他の女を持つてる田口の薄情がもとになつてゐるのだと云ふことを聽かせてゐたのであつた。自分はこれまでにも例として新客には先づ田口の薄情を語り、それから自分や子供がその爲めにこんな苦勞をしてゐることをうち明け、そしてこれに同情して與れる人をいゝお客とし、これにあまり取り合つて與れないのを信用すべき人ではないとした。今、自分はびツくりしてはしご段を飛び下りるが早いか、直ぐその前の玄關からはだしで逃げ出さうとした。が、政直のことを思ひ出して二疊の方へ行かうとすると、臺どころから中島が出齒庖丁を取り出して來たのを大川のとめてゐるのが廊下からちらと見えた。急いで奥の方へ行く途中で、これも何ごとが起つたかと心配してだらう、政直の出て來たのにぶつかつた。それをも『早く、早く』と、小さい聲で急がせて、一緒に自分らの部屋へ這入つた。そしてできてる炬燵にかじり付いて、小さくなつてゐた。

『およしなさいッてば、あぶないから』などと。大川が中島をとめてるやうすだ。

『かまうもんか、畜生！　殺してしまへ、』

『…………』おせいは、まさか、間をとこ騷ぎぢやアあるまいし、自分があんな無學なものに殺されるわ

けがないと思つたが、あの聲が近づいて來られては溜らないのであつた。
が、無理にも納まつたかして、また大川の部屋で酒がつゞき初めたやうすだ。
『あいつ、失敬なやつだ』と云ふ中島の聲がして、大川が云つてる。これはこちらにも聽えよがしのやうに
『あなたが事をはツきりさせないから行けないんですよ』と、そのあなたにまたわたしは賴まれて、
だ。『おかねを出した以上はそれだけの權利を以つて這入つて來てゐるんですし、
營業のかかりになつたのですもの。それをはツきりと幸田さんへも云つて置いて下さらないぢやア、ね。』
『そんなことア云つてやるまでもない、さ。もう、分つてることだ。』
『…………………』して見ると、たツた三四百圓のことで向ふは、もう、この家を占領した氣でゐるらしい。馬鹿にしてゐるぢやアないか？　あの二人はもとからくツ付き合つて、こちらに對しては初めから相談づくでそんな考へであつたのか知らんと思ふと、こちらにも確かな男がゐて貰ひたかつた氣がして、自分の獨り身をつくづく心ぼそくなつた。こんな場合に雄作がゐて呉れると、まだしもだが、政直ではまだほんの子供で――こちらと一緒にちぢみ上つて、炬燵にかじり付いてるのだもの！

たとへ不平はあつても、あんなことはまだ云はない方がよかつたと後悔しながら、子供と共におせいもこツそり便所へ行つて、こツそり寢に就いてしまつた。

――その翌日であるが、この家が抵當に這入つてる二葉株式會社から來た手紙は、來月十日が期限だから、今度こそはどうしても競賣に附すると云ふ通知であつた。
『こないだの、また今度とは』と、おせいは思ひ返して見たが、現に立て換へさせたまゝになつてしまつたのは――さうだ――家その物のことではない、地代のとどこほりの一部をであつた。今度のは家の抵當流れになる期限が來たのだ。田口からこの家を受け取つて以來、おもての醫者から〇〇銀行へ、それからまた二葉會社へと、抵當の書き換へが

三度もあつた。そして二葉へは利子だけでもどれだけ拂つたか分らない。あすこもまた面白くなくなつたので、抵當換へができるところがあらば、さうしたいのだが、もう、當てもなく、相談相手もなくなつてるのだ。止むを得なければ、また利子だけを拂つて、一とき延ばしにして置けばいゝのだらうが――その利子をあの中島には工面させたくない。そんなことをせれば、この上にもまたこの家を自由にする口實を加へさせるやうなものだ。そしてまた、『殺してやる』など云はれては、ただこちらに對する醉ひまぎれの威し文句であつたとしても、あの無智の分らず屋のことだから、いつどんな拍子で傷を受けさせられるか知れたものではなかつた。

『無盡の通知ですか？』大川がはたから尋ねた。

『まア、そんなものよ』と、おせいはとぼけて見せた。同じ會社の無盡に這入つてることは、そのかけ金を營業のあがりから出さなければならぬので、既に大川にも話をしてあつた。だから、若し實際に無盡のことなら、向ふからいや應なしに財布を開らかなければならないのだが、こちらがそれつ切り云ひ出さないのをしほにしてか、向ふは二度とそのことを問はなかつた。今となつては、こちらもその身のかけ金は別に工面して出さうと思つてるのだ。それでなければ、折角かけて當つても、大川や中島の自由にしてゐる家のものになつてしまつて、こちらがその家を恢復しようとする足しにはならないであらう。

この通知にもおせいはあたまが痛んで溜まらなくなつたので、自分の室に引つ籠つて、何かいい知慧は持ち合はせないかと考へて見た。文子の死んだ時にできた五十圓だらずの貯金は、あの子の記念でもあるので、どうあつても使はないと決心してゐるのだから――。そして田口から毎月貰ふ分をさき取りしてしまつては、政直の學費や小使ひがそれだけ出なくなるのである。さうかと云つてほかに相談して見る人もなかつた。

丁度、そこへ

『もう、學校が休みになつたから』と云つて、雄作が遊びに來た。

『馬鹿だ、ねい、また何も持つて來ないで』と手ぶらで來たことを叱つて見た。が、政直が直ぐゆふべのとを持ち出して

『僕、恐かつたよ――棟梁がおツ母さんを殺すと怒鳴つたりして』と云つたので、つい、其方に引き入れられてしまつた。

『而も出齒庖丁をふりまわして、ね。』

『直ぐ警察へ訴へてやればいいのに』と、雄作はその顏まで赤くしてこツそりと怒つた。

『そりやア、いよ／＼となりやア、また警察へでも、裁判所へでも訴へてやるが、ね、さうすりやア、無論、こツちが勝つにきまつてる、さ。このおツ母さんにやア、いつも、正直の神さまがついてゐるから、ね。然し、今のところはさうも行かないのだよ。向ふだツて大分おかねをかけただらう、それをこツちが返せるやうにならなけりやア、ね。それに』と、また、けふの通知を思ひ出して、『また別なおかねがいるんだよ。二葉會社の方からこの家の抵當流れを知らせて來たので、ね。』

『ちやア、ついでに、それも出して置いて貰へばいいちやアないの？』

『さうは行かないのだよ。たださへいい氣になつてる大川や棟梁がなほ更らいい氣になるちやアないか？』

『お母かアさんはどうするつもり？』

『それを心配してゐるんだが、ね。』斯う云つて、ふと冗談にだが、訴へて見た、じツと渠の顏に見入りながら、にが笑ひをして、『まさか、どろ棒もできまいし、ね、雄ちやんに何かいい智慧はないか、ね？あるなら、借して頂戴よ。』

『…………』雄作はちよツと小くびをかしげて暫らく考へてゐたが、困つたと云ふやうすをして、『お父さんに相談して見たら、どう？』

『さう、ね。』おせいは自分にそんな分り切つた返事を得るつもりでもなかつた。ちかに田口に云へば、またかとただがみ／＼叱られるのが落ちだらうから。然し、子供に云はせるのはかまうまいと、その氣になつて、『どうせ駄目とは思ふが、ね、ちやア、お前の心持ちとしてお前から云つて御覽、な。さうすりやア、おツ母さんがあしたのゆふがた行つて、お父さんが何と返事したかこつそりお前に聽くことにするから。』



ピルロニストのやうに

武林無想庵

なぜ生まれたのか、なぜ生きなければならぬのか、なぜかうやつて生きてゐるのか、さうしてなぜ老い朽ちて、なぜ死なねばならぬのか、私はもう四十だが、さうして多く考へてばかり暮らしてゐる身だが、今もつて分らない。恐らく死ぬまで分るまい。

私はたゞ漠然と生きてゐる。時々金がほしいと思ふ事もある。けれどもそれは美人を見たり、立派な邸宅を見たり、世界漫遊がしたくなつたりする時にかぎる。かうやつて、まづい物をたべて、汚ない着物をきて、本を讀んだり、飜譯をしたり、ゴロリと臥ころんだりしてゐる時は、何にもほしくない。さうして頗る滿足だ。

併し隨分退屈で困る時もある。文章は書く氣にならず、本は讀む氣にならず、ゴロリと臥て見る氣にゝもならず、實際ゐても立つてもゐられなくなるほど、退屈で／＼たまらない事がある。さういふ時には、一番景氣よく新橋か柳橋へ出かけて、大勢美人でもよんで、成金達のやりさうな馬鹿眞似がしたいと思ふ。が、考へて見ると、私にはそんな金のありさうな筈はない。そこで美人は斷念する。友達のとこへでも押しかけて話し込まうかとも思ふ。けれども友達は皆な他人だ。會つて話をして見たところで、お互ひにごく上つ面の事しきや話す筈はない。友達はやめにする。芝居にも寄席にも行く氣はしない。たゞブラ

ブラと散歩するのも下らない。どうしていゝか分らなくなつて、しかもいよ〳〵退屈でしかたがなくなる時がある。矢も楯もたまらなくなると、とりあへず、兎に角外へ出る。歩けば路地に沿うて自然と電車通りへ出る。知らず〳〵停留場の前までゆく。築地兩國が來る。九段兩國が來る。淺草が來る。上野が來る。三四臺やりすごすうちに、自然と出かける方向がきまる。大抵は淺草へゆかうと思ふ。新聞廣告で見たキネマ倶樂部か電氣館か帝國館かへ行つて見る氣になるのである。さうしてその三館を皆見て了つたやうな時には、銀座へゆかうと思ふ。銀座はたゞブラつくだけだ。歸ると大抵十一時すぎになつてゐる。婆さんの敷いて置いてくれた寢床の中へすぐにもぐり込む。さうしていろ〳〵な夢を見て、翌朝目がさめると、この退屈が生ずるまで、まづい物をたべ、汚い着物をき、書を讀み、翻譯を續けるといふ、甚だ平凡な、しかも甚だ滿足な日程に這入る。

＊＊

――人は希望に生き、滿足に死す。といふやうな諺をば子供の時耳にした事があつた。考へて見ると、私には今全く希望といふものがない。さうしてたゞ現在の滿足だけが殘つてゐる。諺の言葉に準ずると、私は死んだ人間と云はなければならぬ。

＊＊

財布の中に金がなくなると、同時に私には世の中がなくなつて了ふ。たとへば友人と會食する約束をしたとする。友人は私の財布にも相當の金があるものと信じてその約束を守る。然るにその當日となつて私の財布に一文の金がなくなつてゐる場合には、私は約束した會食の場處へ行く事が出來ない。葉書も買へない時がある。心ならずも私は友人に待ぼけを食はせるやうになる。從つて友人は私を信用しなくなる。友人に信用がない事は『世の中のない』最も有力なる證據である。

いつぞや、活動で、Beggars on horseback といふ文字を見た事があつた。さうして自分も亦馬上の乞食の一人だと

思つた。

＊＊＊

この世智辛い世の中に、何事もたゞ金ばかりで解決が出來さうに見えてゐる世の中に、私は悠々閑々として生息してゐる。即ち金になりさうな事には全く頭も手も使はずに生きてゐる。自分ながら隨分愚かな人間だと思ふ。隨分無能を極めた人間だと思ふ。でも仕方がないと思つてゐる。かういふ風な傾向を持つて生まれて來たのだから止むを得ないと思つてゐる。奮發といふ事をしなければ、努力といふ事をしなければ、人生は果して過してゆけないところだらうか？それが爲に若し人間が必ず自滅する筈に出來てゐる人生なら、私は晏如として自滅するより仕方がない。昔は從容として死に就く事を士の本分だと心得てゐた。犬死でも何でもかまはない。金をとる努力をしなかつた爲に、私は從容として死に就かう。さう覺悟して私は生きてゐる。

＊＊＊

私のやうな人間が多くなれば、その社會は必ず墮落する。その國家は必ず滅亡する。私は社會主義者の敵である。私は國家主義者の黴菌である。けれども生物學上の見地からすると、一主義者の敵も、一國家の黴菌も、それ自身としては、必ず潑剌たる一箇の生物である事は忘れてはならない。

＊＊＊

私の兩親は私に失望して死んだ。私の妻は私に虐待されて去つた。私の友人は私と行動を共にする事を厭うて遠ざかつた。又いろいろの處女は私に弄ばれたさうである。又人妻で私の爲に身を誤つた女もあると云ふ。けれども私は彼等の誰もに對して決して罪惡を犯かすなどゝは思つてゐない。私はたゞかく生まれたにすぎない。さうしてたゞかく外界と接觸して來たにすぎない。正とか善とか稱せらるゝ一箇の幻影があつて、そこにはじめて罪惡とか不正とかいふアトリビユートが生ずる。私には幻影がない。隨つて正邪の觀念がない。善惡の差別が分らない。私は恐らく道德上の色盲

患者なのであらう。

日の經つてゆくのが恐ろしいやうな氣がする。勿體ないやうな氣もする。怠惰といふ事に對する因襲的の觀念が無意識に働いて、さうした氣を私の心に起させるのはよく分つてゐる。怠惰と戰つて何かするのも、怠惰のまゝにうち任せて暮らすも、結果から見ると同じ事なのだが、結果といふものに重き置く觀念がやつぱり因襲的のそれに外ならない。私は怠ける事も出來ぬ。又勿論働く氣も起らない。さうして日は經つてゆく。どし／＼と經つてゆく。

＊＊＊

明らかに私は穀潰しである。社會にとつて有害無益な人間である。けれどもそれに對して私は責任を持つ事が出來ぬ。私は勝手に生まれたのではない。生まれたくて生まれたのではない。私の父母も私のやうなものを生みたくはなかつたであらう。それゆゑ父母にも責任はない。生まれて見ると、私が斯く穀潰しであつたにすぎない。これは誰にもどうする事は出來ない。一日も早く私の有害無益なる生存が社會から消滅する日を待つより外に仕方がない。但しそれは社會といふものを標準にした場合にかぎる。私には社會を無視する事が出來る。利己の外何事をも考へないでゐる事が出來る。自己以外の一切を持つて、恐くたゞ自己の生存の材料であると考へる事が出來る。さう考へると、私は決して穀潰しではない。宇宙は皆私自身の生存を享樂させる爲に存在してゐるのだから、享樂の出來得るかぎり彼等を享樂して死ねばいゝわけである。社會中心か自己中心か、而も私はそのどちらをも信用が出來ない。元來中心のない宇宙に、そのどちらも强ひて假設の中心を置いて考へた事だからである。然らば假設の中心を置かずに、人は何事かを考へる事が出來るか。それは出來ない。出來なければ中心を置いて考へるより外に仕方がないではないか。けれども人は必ずしも考へる爲ばかりで生きてゐるわけではない。假設の中心を置いて强ひて考へるにも及ばない。考へたい人は考へるがいゝ。併しどの考もすべて皆假設の上に立たざるを得ない。さうして人には一切の假設を信用しない自由がある。私はたゞ一

切の考を信用しないやうな傾向を持つて生まれ出た人間であるにすぎない。

＊＊

友人が來る。飲みに出る。梯子をやる。自働車へ乘る。よからぬところへ足を踏入れる。四十圓や五十圓は忽ち飛んで了ふ。私の收入は月に百圓しきやない。友人が二三回やつて來ると、家賃も拂ふ事が出來なくなる。私には友人は禁物だ。或友人は私の收入は少くとも三百圓位あるだらうと云つてゐる。して見ると、私の生活の外形は二百圓がた虛僞が含まれてゐるわけだ。さうして相互の友情は多くその虛僞の上に成立つてゐるから面白い。友人と遊び步いたあとで、私はいつも不快を感じない事は少い。

＊＊

それは酒をのむからだ。それは性慾を充たしたくなるからだ。尙一步進めて云ふと、女なしに生活してるからだ。云ひ換へれば、幸福なしに生活してるからだ。働かずに生活してるからだ。働らかないから退屈する。幸福を感じないから生きてる甲斐がないやうに思ふ。心から愛し合ふ女がゐないから幸福が感じられない。そこで酒でごまかす。そこで遊女を抱いて一時の慾を遂げる。ます〳〵不快となる。ます〳〵得られぬ幸福を憧憬する。ます〳〵捨鉢な了見が起る……私はなぜこんな生活ばかり續けてゐなければならぬのか？

＊＊

私の心はまた混亂しはじめた。やりかけた飜譯も續ける勇氣がなくなつて了つた。書物などはもう二十日間まるで手にさへした事がない。起きると机へ向つてすぐ手紙を書くのだ。どこへ？どこへと考へてもいやになる。どうした心の加減か知らぬが、私は急に或女を戀しはじめたのだ。それは人の奧さんだからいやになる。どうせ遂げぬ戀とは承知しながら、何の因果かどうしても諦められぬ。そこでその苦しさを筆に愬へる。それが手紙となる。出したつて仕方がないと思ひながら、封筒の上書をかく。切手を貼る。ポストへ抛り込む。今度は返事が待遠しい。一日に何度となく郵便

受函を覗いて見る。その奥さんは勿論おやさしい方だから、可哀さうだと思はれて、三度に一度は返事を下さる。それゆゑなほ戀が募る。ねてもさめても目先にチラつくお顏が實際に見たくなる。顏を見たらそれでいゝのか。話しが出來たらそれでいいのか。何といふ私は馬鹿者なのであらう？

＊＊

家にゐても何一つ手につかない。外へ出る。酒をのむ。よからむところへ足を向ける。湯だるほど飲んで飲んでからだをこはす。一文なしになつて、死んだやうになつて、立歸るとすぐ寢床の中へ横たはる。さうして奥さんの事ばかり思ふ。たまらなくなると、机へ這ひよつて手紙を書く。さうして足を曳ずるやうにして出しにゆく。たま〳〵返事でもくると、蘇つたやうに終日その手紙を讀み直してゐる。私は氣が狂つたのかも知れぬ。奥さんは決して私のやうな無法な戀を受入れるやうなお方ではない。それはよく分つてゐる。分つてゐるくせに諦めかねてゐるのだ。諦めるどころか、いよ〳〵戀しくてたまらなくなるのだ。馬鹿な、馬鹿な、どうしたらこの戀を思ひきる事が出來るだらう？

＊＊

家財道具を叩き賣つて了ふ事にきめた。書物はもうみんな賣つて了つた。私は鞄一つになる。さうして日本中を放浪する。札幌にある私の地面が賣れるまでは日本の外へは出られない。併しそれも賣る筈になつてゐる。さうしてそれが若し賣れた時には、私は日本を立去る筈になつてゐる。何の爲に鞄一つになる氣なのか、何の爲に外國へ行く氣になつたのか、自分でもわからない。その外遊について或友人はこんな手紙をくれた。

——君が求めてゐるものは、「仕事」とそれから「愛」の二つではないでせうか。それが得られない爲に、君は始終自己に對してむごたらしい反逆を企てゝゐるのではないのでせうか。この二つのものを把握しさへすれば、君は聰明な善良な同時に幸福な人として生きる事が出來るのではないでせうか。僕にはどうしてもさうとしか思はれないのです。

——この二つのものは外國に求めるよりも寧ろ日本に於いて求むべきだと思ひます。また日本でなければ求められな

いかとも思はれます。

手紙はまだ長いものだが、主意はこれだけのものである。私に果して「仕事」を求めてゐるのか知らん。また「愛」を求めてゐるのか知らん。よし求めてゐるとして、それが求め得られるものか知らん。私には妻がない。職業がない。なぜ私に妻がないのか知らん。なぜ私に職業がないのか知らん。なぜ私はその二つのものを求めようとはしないのか知らん。さうして私は鞄一つになるのだ。さうしてその一つの鞄を棄てゝ了ふ日もさう遠い事ではなからう。さうしてそれは恐らく私のこの世を去る時であらう。

**

――私は死ぬのは平氣ですよ。と奥さんが云つた。

――あなたは？　と訊かれて、私は返事に困つた。

私は別に今死にたくはない。併し死が目前に迫つたところで私は決して恐れもしない。が、さういふ死はいつ私の目前に迫るであらう。

**

放浪をはじめてけふでもう五日目になる。爰は靜かだ。十疊間の天井が高い。取替へたばかりの疊が清新な匂ひを放つ。波の音が遙かに轟いてゐる。廣い庭に松ばかりある。松を越えて海が見える。海のかなたには島も見える。ゆふべはその島にチラチラあかりなども見えてゐた。

私はどうしてこんなところへ來たのだらう？　爰は谷崎君が時々見える宿屋ださうな。又昔し山本君も長らく滯在してゐた事があるとかきいた。なるほど兩君の氣に入りさうな家だ。金のある間は私もかういふ家にゐたいと思ふ。

――お一人ではお淋しうムいませう。と、どの女中もどの女中も同じ事を云ふ。

――奥さんをお呼びになつたらいかゞでムいます？　と云つてくれる者もある。

呼びたいのは山々だが、人の奥さんでは致し方もない。

＊＊＊

放浪をはじめた日から、私の頭の中にはあの奥さんの姿ばかり執拗にコビリついてゐる。その奥さんの顔が見たくて、手が握りたくて、唇に接したくて、たゞそれだけの爲に、忠實な婆さんを棄て、愛する猫をすて、家財道具の一切を棄て、書物を棄て、東京の生活全部を後にして、フラフラとかうして出て來たやうな氣がしてたまらない。

家を出る時には、婆さんはまだ殘つた品物に未練らしく取りついてゐた。辻君が賴んで來てくれた俥に乘つて、私は東京驛へ赴いた。さうして鞄を一時預けにして、食堂へ這入つた。二三杯引きかけたウヰスキイの元氣で、私はそれからお名殘りに銀座を散歩した。

その四五日前、私は辻君と二人で銀座をブラついたが、その時辻君はこんな事を云つた。

――僕は銀座へ來ると、自分がエトランゼのやうな氣がする。

私は心の中でかう思つた。

――俺はこの世の中にゐるなと考へる時、いつでも自分がエトランゼのやうな氣がする。廣い天地に俺は死ぬまでひとりぼツちでゐなければならぬのだ。

辻君はプロレタリアを以つて自ら任じてゐる人だ。それゆゑに仲間がある。さうしてその仲間は世界中に擴がつてゐる。私には仲間といふものがない。私の頭には國家もない。社會もない世界すらもない。たゞ奥さんの姿ばかりがある。

さうしてその姿が私の頭から消ゆる時は……

＊＊＊

――香風園まで。

――宿屋ですね。

――さう。

山本君のところへ立寄り、水島君の家へ一泊して、私は雨の東京を去つた。さうして三浦半島の唯ある停車場で降りた。

香風園といふのは、小綺麗な温泉旅館で、廣い美しい庭園の中に、貸別莊がいくつか建つたところだときいてゐたが、車夫の挽き込んだ家は、小汚ない下宿屋見たやうな家であつた。あんまり不思議なのできいて見ると、

――あすこはこの六月に成金さんに買はれて了ひましたので一時廢業致しましたが、先月から又こゝで始めましたのでムいます。と、たつた一人しきやゐない女中が答へた。

雨は降る。夜にはなる。止むを得ず一泊する事にきめた。ヤケ氣味で、藝者なンどよびよせ、大酒を呷つてねた。それが放浪の第二日目。

＊＊＊

三日目はいゝ天氣であつた。

前日にこりたので、晝飯は小町園で認める事にした。隣りは婆さんの信心する日朝様だ。その寺の屋根が見えて、目前に擴がつた廣い庭の一隅には、菊などが造られてあつた。

酒をのみながら奥さんへ手紙を書いた。すぐ返事があつて、七時頃まで待つてゝくれといふ命令だ。所在なさに、またきのふの杏のやうな顔した藝者をよんで、トランプなどして他愛もなく遊んだ。

藝者を返すと、間もなく奥様が見えた。

逢つたら、いろんな話をするつもりだつたが、顔を見ると、何にも話す事はない。

――そんなもの見なくたつてよござんす。と、奥様は私の手にあつた旅行案内を奪つて、食卓の下へ押し込んだ。

――では、どうしたらいゝでせう？と、私は酔ばらつた眼を強ひて見張つてきゝ返した。

——遠くへ行つちやいやよ。と、奥様は媚びるやうに答へた。私はその媚びるやうな眼に征服された。

⁂

一寸先は暗だ。私はとにかく小町園へ荷物をあづけて、而も勘定をすまして、手拭までもらつて、奥様と手をつないで歩いた。暗い町を歩いた。どこまでもどこまでもと歩いた。私はどこをどう歩いてゐるか知らない。が、奥様はよく知つてゐるのだ。御自分の家へお歸りになる道を歩いてゐられる事を知つてゐるのだ。私と奥様とはそれだけ地位が違ふ。道がわるかつたので、二人は時々手を放さなければならなかつた。けれども星は美しい夜だつた。

⁂

四日目には奥様へ電報などかけた。どうせ來ては下さるまいと思つてゐると、
——御婦人のお客様でムいます。と、翌日の午後、女中が物靜かに襖をあけて案内した。私はハツと嬉しかつた。が坐るか坐らぬのに、
——けふはすぐ歸ります。あしたまた來ます。と、奥様は意地の惡い事を仰しやるのだ。
——それぢや、お歸りなさい。もう來なくたつてよござんす。と、癪に觸つたので、私は心にもない事を云つた。
——憤つちや駄目よ。けふはよつぽど止さうかと思つたの。都合のわるい事もあつたし、それに雨も降つてゐたので‥
それでも奥様は夕食に箸をつけてから歸られた。
暗い、道のわるい、方角のさつぱりわからぬ松原の道を、さんざんに迷ひ迷つて、二人は又手をつなぎながら歩いた。かうして歩いて下さる奥様のお志しのほどを思ふと、私はもうこのまゝ死んでもいゝやうな心持になつた。

⁂

翌日も曇つたり降つたりした。
けふこそはもう來て下さるまいと思つて、別れの手紙など認め夕飯の膳に向つて、チビリチビリ酒をのみはじめてゐる

と、案外にも奥樣は又來て下さつた。

＊＊＊

ゆふべは思ひがけなく奥樣が來て下さつた嬉しまぎれか、或は一本よけに飲んだ爲か、ひどく神經が興奮して、さん／＼子供のやうに駄々をこねた揚句、奥樣の歸られたあとで、妙に胸が一杯になつて、ポロポロ涙さへとめどなく流した。

その涙の顔を女中に見られたのが小愧かしくて、妾の家にゐるのが一刻もいやになつた。それに天氣がばかによくなつた。とにかくジツとしてゐられなくなつたので、朝飯をすますと、すぐ勘定して出かける事にした。

——大さうお早いのですね。これからどちらへお出でになります。と、女中が云つた。

——さア、とにかく藤澤まで出よう。

——それでは車屋さんにさう申して置きませう。

＊＊＊

あんなに駄々をこねたまんまで、永久に遠いところへ行つて了ふのも、何だか寢覚がわるいやうな氣がしたので、藤澤の方へゆく電車に乘る事は見合はした。

＊＊＊

鞄を一時預けにして置いて、心地よく朝日の輝いた松林の道を通つて、鳥居を潜つて、橋をわたつて、畦道をぬけて、もう決してまたぐまいと思つた家の玄關へかゝつた。

玄關には男の下駄が一足脱いであつた。それを見ると急にいやアな氣がしたので、よつぽど引返さうかと思つたが、そのうち女中が出て來て、

——どうかお上り下さい。と云つたので、心弱くも、やつぱり又例の立派やかな玄關へ通る事になつて了つた。

やがて奥様は出て來られた。非常に蒼白い顏をして……

——誰か來てゐるのですか。

——いゝえ。なぜ？

——でも男の下駄があつたから。

——さう？　と云つて奥様はニツコリせられた。さうして俯向いて、頻りと火鉢の中へ火箸で字を書いてゐられたが、思ひ出したやうに、もう一度ニツコリして、チラリと私の顏を竊覗るやうにしながら。

——駄々つ兒！　と、叱るやうに、小さな聲で云はれた。

私は嬉しかつた。

——すまないと思つて來たの？　あんなに來るのをいやがつてゐた家へ……ゆふべは本當に困つたわよ、あんまり駄々ばかりこねるんだもの……でも、本當に可愛いゝと思つたの……と、奥様は言葉を續けられた。さうして一寸恥しさうに火鉢へかぢりつかれた。

私は顏が赤くなるやうな氣がした。

——だからお詫びに來たのです。惡かつたから許して下さい。私はどんな事をしても、人にあやまる事は嫌ひだけれど、あなたにだけはあやまります。すぐ上方へ行つて了はうかと思つたけれど、何だかあやまらずには行かれないやうな氣がしたので、思ひきつて來たのです。ね、どうか許して下さい。惡かつたから……。

——いゝわよ。あやまらなくたつて……でも、あなたはさういふしほらしいところもあるのね……

——串戯ぢやない。まア、お詫びがかなつたら、早速お暇としませう。これからすぐ汽車へのつて上方へゆきます。

さう云つて私は立ちかゝつた。奥様は少しばかり慌てたやうに。

——そんなに忙いで行かなくちやならないの？　と、引留めるやうな眼つきをせられた。その眼を見ると、私はまた

グニヤグニヤになつて了つた。

——忙ぐわけぢやないけれど……と口籠りながら……ぢや、けふは天氣がいゝから、二人でどこか散歩しませう。夜まで……どうせ汽車へ乘るのは夜の方がいゝんだから……

——でも、けふは駄目よ。

——下駄の一件で？

——そんな事はないけれど、今晩どこか近所で泊まつてくれない？　あした朝早くゆくから……

——そりやかまはないけれど……ぢや、今晩はあすこで泊りませう……私はまだ一度も行つた事はないけれど、私の妹がいつぞや新婚の晩泊まつた家……知つてるでせう？

——知つてるわ……ずつと昔し一度行つた事があつたわ……景色のいゝ家よ。

——出來るだけ早くいらつしやい。

——寢込みに踏んごんであげるわ。

——きつと？

——それでもよければ……

——いゝどこぢやない……

⁂

停車場まで歸る途中で、駱駝の肌衣だの猿又などを買つた。

——襟卷はいかゞです、これは本年の流行で……と、番頭は黑天鵞絨の襟卷を出して見せた。

ボヘミアンに流行は何だかをかしいやうな氣がした。けれども餘程買はうかと思つた。

辻君は私の事をエレガント・ボヘミアンだと云つた。或は盍し適評かも知れない。

＊＊＊

次の停車場で降りて、自働車にのつて、前荘地をすぎて、大杉榮君が市子に傷けられた家の前をすぎて、御用邸の前をすぎて、近所に全く人家のない唯ある海角で自働車から降りた。

——御晝飯でムいますか。と女中が訊いた。

——泊つちやいけないのかい。

——お泊りでムいますか。

——さア、まア。とにかく晝飯をたべてから……

＊＊＊

——フム、この部屋かい。

私は盃を手にしながら、妹がはじめて亭主と寝たといふ座敷を見廻した。

あんまり上等な座敷でもない。それでも、襖の代りに厚い板戸などがはまつた、極めて森閑とした二間つゞきだ。縁側の隅には鏡や洗面臺が取着けてある。朝起きた時などは至極具合がよさゝうだ。坐つてゐて外の見えるのは縁側の方ばかりで、一方の側は高窓になつてゐる。さうしてその縁側の方から見えるのは、前の芝生と、芝生を越した海と、それから海の上の富士ばかりだ。

——なるほど、新婚旅行などには持つて來いといふ部屋だね。これでこの部屋専用の温泉でもあつたら申分はない。

——左様でムいますと女中はニコリともせず、恐る〳〵酌をした。

＊＊＊

その晩は氣がイライラして寝つかれなかつた。晝食と夕食と兩方で八合ばかり飲んだ酒が、妙に胸から頭へ停滯してゐて、少しも酔が發散しないばかりでなく、却つて神經を病的に興奮させしきりに感傷的の精神狀態に陷つて、右往左

往に心が亂れた。

私は死にたくなつた……

＊＊＊

たべたくもない朝飯をそこ〳〵にすまして、縹渺と朝日のあたつた海波の上へ、幻のやうにボンヤリと浮んでゐる富士の姿を眺めながら、私は寐不足の頭を强ひて机の方へ押向けつゝ、書きさしの隨筆を續けて見た。

書物は殘らず賣つて了つた。ノートや原稿は皆燒きすてゝ了つた。さうしてこの書きさしの隨筆だけを携へて、私は放浪の旅をはじめたのだ。

この隨筆は私に殘つた唯一の友だ。これから先の私の生活は荒凉たる人生の曠野に、たつた一人でさまよひ歩く私の生活は、恐らくこの隨筆の外に、この隨筆を續ける事の出來得る時の外に、私に對して生の意義をも慰めをも與へる事はないであらう。

私にとつては、この人生は全く無意義だ。又全く無價値だ。けれどもその無意義なる無價値なる人生との接觸から生まれて來る、このはかない、貧弱な、空疎な、とりとめのない、同時に氣まぐれになる私の隨筆は、私にとつては決して無意義でも無價値でもない。

これから先の私は、何だかこの隨筆を續ける爲に生きてゆくやうな氣がする。この隨筆をも續ける勇氣のなくなつた時は、同時に私のこの世を去る時であらう。この隨筆はこの隨筆を入れた鞄と同樣に死ぬまで私には必要だ。

＊＊＊

寢込みには踏込んでは下さらなかつたが、約の如く奥樣は見えた。

——またこんなものを見てゐて……と、机の上にあつた汽車の時間表を見つけて、たしなめるやうに、先づ口を開かれた。

――もつと早く來るんだつたけれど、店の番頭に私があべこべに寢込みに踏込まれてしまつたんで‥‥い〻加減にあしらつて追返すと、今度はまた停車場で出つくはして了つたの‥‥一寸面喰つたわ‥‥どちらへと云ふから、つひそこまでと誤魔化して來たの‥‥と言葉をつゞけて、嬉しさうにニッコリ微笑まれた。

――ゆふべは寢られなくてね‥‥と私が云ひ出すと、

――私だつてちつとも寢やしない‥‥と奥樣はホッと溜息をつかれた。

――でもけふは大層血色がい〻。

――そりやあなたの顏を見たからサ。

――ばかにしてる‥‥併しあなたがさういふ健康さうな顏をしてると私は嬉しい‥‥きのふの朝の顏色つたら無かつたからネ。

大騷ぎをやつて見たところで、二人はこんなはかない會話をとりかはすだけなのだ。云ひたい事は胸一杯に充ち溢れてゐるのだが、どういふものだか、顏を見ると、こんな言葉より外に口へ出て來ない。

二人は〇〇〇つた。さうして長い〳〵〇〇をした。私は氣が遠くなつた。

――あなたは泣く女は嫌ひだと仰しやつたわね‥‥でも私は泣くわ‥‥と、奥樣は〇〇から離れると、涙聲でさう云ひながら、机の上へ突伏して、暫くその華奢な後姿をば、やさしくブルブルと打顫はせてゐた。

私は身を切られるやうな思ひがした。

＊＊＊

午餐をすますと、

――サア、早く、その着物とお著かへなさい‥‥と奥樣はせき立てた。

私は褞袍をぬぎすて、女中がゆふべ疊んで置いてくれた自分の着物をきた。

硝子戸をあけると、宿の下駄が二三足揃へてあつた。二人はそれを穿いて芝生へ出た。

――いゝお天氣ね……嬉しいわ。と奥様はいかにも晴々としたやうに、滴るやうな空や海を眺めながら云つた。

黄いろく枯れはてた草土手を下りて、波打際の砂濱へ出た。右手には御用邸の大きな一廓を越して、遠くの方に色々の形ちをした別莊地の家々が、小さく〳〵畫のやうに見える。左にはすぐ田の前に松などの生へた岩つゞきの細長い海角が突出てゐる。海は極めてのどかだ。沖には心持よさゝうに漁船が漂つてゐる。さうして恰もこの地上から解脱でもしたやうに、空と海との間に夢のやうな富士が浮ぶ。

――あの鼻の端へ行つて見ませうか。と私は左手の海角を指さした。

――えゝ。と、奥様は何だか行かれさうもないところだといふ眼つきをして、私の指さす方を見やつた。人氣がないので、二人は手をつなぎ合つて歩いた。

砂濱の盡きたところに絶壁が聳えてゐる。さうしてその絶壁が即ち海角の根方なのだ。とても傳はつて行けるやうな岩ではない。

――こりや駄目だ……あの後ろへ廻つて見ませう。と、私は草土手の小徑について登りはじめた。

――それ御覧なさい。といふやうな顏をして、奥様も後れじと跡につゞいた。

登り終ると街道へ出た。坂の上から荷車が一臺下りて來た。それをやりすごして二人はその小さな坂を登つた。と、そこは丁度道路の曲角になつてゐた。突當に柵があつて、道は柵について左へ折れてゐる。柵の外は絶壁で、向側の海が際涯なく見える。右手は岩組だ。即ち海角と陸地とが接合した結目だ。

私はその結目の岩組へつかまつて攀ぢ上つて見た。が、やつぱり海角の尖端へ出られさうな徑はなかつた。

――およしなさいよ。どうせ行かれる氣遣ひはありやしないから……お降りなさいッてば……と、岩組の下で奥様が云つた。さうして困つた坊やだといふ顏つきをした。

仕方なしに私は降りた。

それから二人は寄添つたり離れたり、手をつないだり放したりしながら、爪先下りの街道に沿うて、ブラリブラリと歩いた。暖い日光を心ゆくばかりに浴びながら、際涯を知らぬ大洋をいつまでもと見はるかしながら‥‥

小さな橋をわたつて、ゆく手の道端に、十本ばかりの木立が海を遮つたところがある。その木蔭にベンチなどが置いてあつた。さうしてそのベンチの上には人がゐた。

その側までゆくと、二人は云ひ合はせたやうに、ピタリと立どまつた。さうして顔を見合はして、同時にニッコリした。

——下へ降りて見ませうか。

——えゝ。

草土手について砂濱まで降りる小徑がある。二人はその小徑を下がつた。途中に一寸した平地があつた。

——休みませうか。と、先へ立つたが私が云ふと、

奥様はやつぱり簡單に、

——えゝ。と答へて、さうしてもう一度ニッコリして見せた。

私も又思はずニッコリして枯草の上へ腰を卸した。さうして巻煙草を出してマッチをすつた。

——羽織を脱いで敷いてあげるところだけれど、私は何だかウオルタア・ラレエでもなさゝうだからネ‥‥

——私こそエリザベス女王ぢやないわ。と、奥様も腰を卸して横倒しに草の上へ座つた。

——何だか新婚旅行のやうですネ。

——さうなのかも知れない。と云つて、奥様は一寸下を向いてクスクス笑つた。

——新婚旅行は新婚旅行でも、悪くすると、勘彌と菊枝の新婚旅行になりさうだ。

――でも、あなたは勘彌ぢやないわ。

――勿論、あなたゞつて菊枝ぢやないけれど……併し、さう云へば、何だかこの下の砂濱を男子のお婆さんが通りさうですネ。

――情愛の水を持つて……

――その情愛の水を今頃宗之助があなたの家へ忍込んで、萬年筆のインキでいたづらしてるかもわからない。

――よしませうよ、もう、そんな下らない喜劇のしやれなんて……

⁂

二人はいゝ心持で宿へ歸つた。

よほど傾いた夕日が、緣側から部屋の中へかけて、やんわりとさし込んでゐた。と、そこへ今迄濱邊で遊んでゐたらしい漁村の子が二三人、てんでんに介殼を手の平へ盛りあげて、緣の前まで來て、物ほしそうな眼つきをしながら、その手の平を私等の方へ突出した。

――お茶屋の旦那さん、辻占を買つて下さい。と云はれたやうな氣がして、私はいやな氣持がした。

小錢をやつて小供等を追返すと、私は障子を閉めて了つた。

⁂

――さア、いつまでかうしても居られない……そろ〳〵仕度にとりかゝらうか。と、私は奥様から離れて、原稿紙やいろんな物をバスケットへ詰めはじめた。

鏡の前で髮を直してゐた奥様は、いかにも無器用な私の手つきを横目で見て、

――私が今チャンと入れてあげるから、お風呂へでも這入つていらつしやい。と叱るやうに云つた。

私は云はれるまゝに手拭をブラさげて風呂場へ行つた。歸ると電燈がついた。さうして夕飯になつた。

何から何まで鯛づくめの食卓に向つて、私は元氣よく酒をのんだ。さうして元氣よく喋つた。

夕飯がすむと間もなく自働車が來たといふ知らせがあつた。

――ぢやア、行きませう……

――えゝ……

二人はお別れに又長い〳〵○○をした。

部屋を出る時、ふと氣がくつと、バスケツト一つだけの筈なのに、丈の高い風呂敷包が殖ゑてゐた。

――こりや何です。

――ウヰスキイよ。あなたは私よりこの方が可愛いゝんでせう？これと心中なさい。と、奥樣は口早に云つて、恰度そこへ來た女中にそれをわたした。

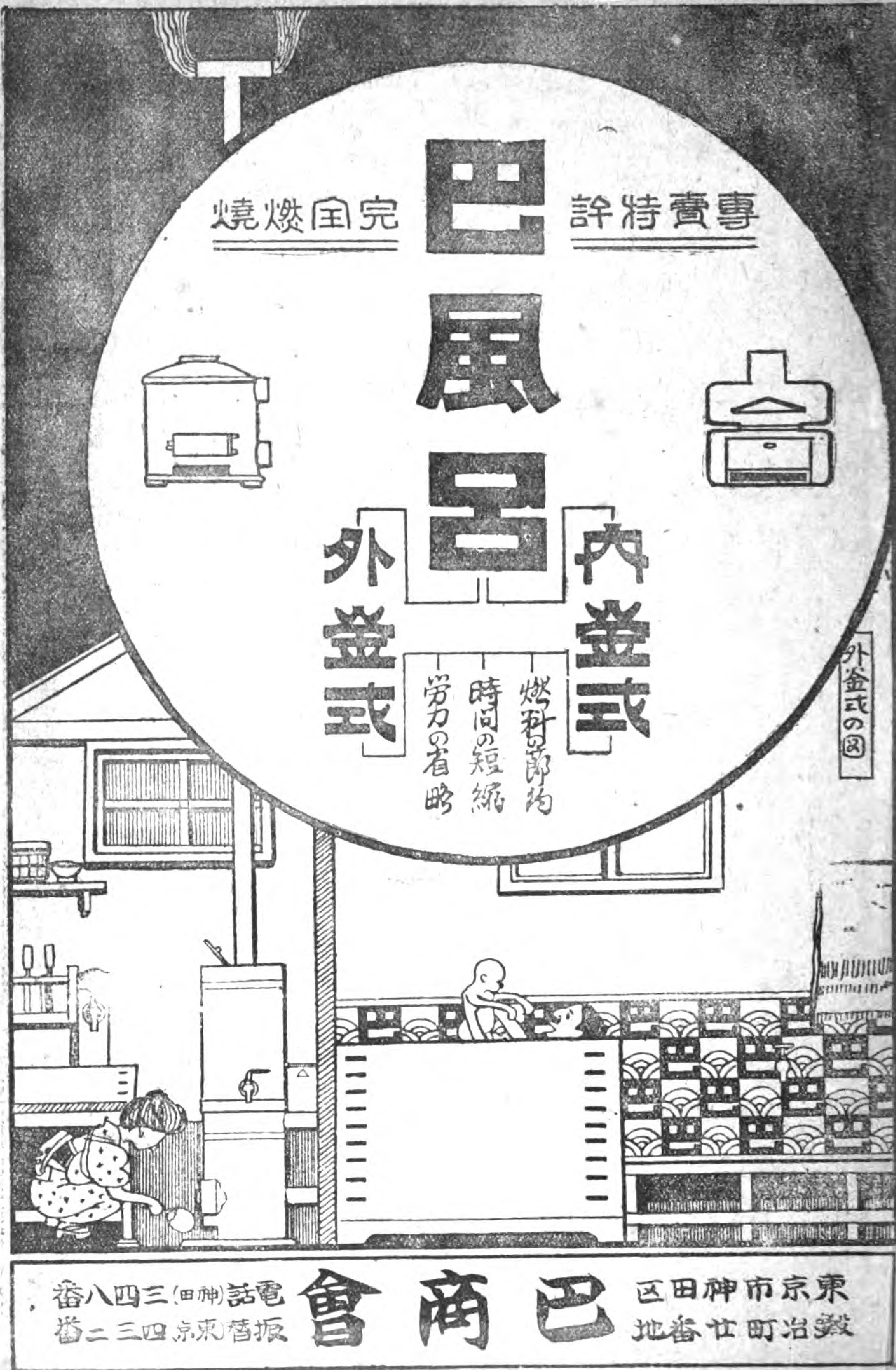
＊＊＊

三浦半島に別れを告げて、東海道線の列車へ乘換へると、私の醉は一時に發して來た。空氣枕にあてた頭が、車輪の音と呼應してガンガン鳴つた。そうしてどこからともなく大風の吹きすぎるやうな悲壯な聲がして。

――虛無だ。虛無だ。一切が虛無だ……

――破壞、破壞……破壞の外に人間のなすべき事はない……と、しきりに絕叫して、絕叫して、絕叫しつゞけてゐるやうにきこえて來た。

夢を見てゐるのか、目がさめてゐるのか、私にはわからなかつた……


專賣特許
完全燃燒
巴風呂
外釜式
內釜式
燃料の節約
時間の短縮
勞力の省略
外釜式の図
東京市神田区
鍛冶町廿番地
巴商會
電話(神田)三四八番
振替(東京)四三二番


赤帽印
スリップ
滑ネクタイ
十人が十人
千人が千人とも
愛好する……
東京
大阪
南商店